萬のエロはしその香り

工口郷（こうこうごう）

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
萬のエロはしその香り

【Ｎコード】
Ｎ６７７１Ｐ

【作者名】
工口郷（こうこうごう）

【あらすじ】
高校３年生の千乃工口（ちのくぐち）は、下校中のバスの中でちょっとエッチ女の子に出会い、煩悩に酔いしれている間に半ば強引にＡＶ界と言う異世界にスカウトされてしまう。何とその女の子は”スカウターラミア様”と呼ばれるＡＶ界では特別な存在であったのだ。
そして、この連れて来られたＡＶ界が、一風変わった世界であり、人間の能力判断を毎週行われる”ＡＶ撮影大会”の成績で決めると言うのである。
千乃工口も否応なしにその大会に参加することになってしまう

のだが、工口（くぐち）は、ここで元の世界で隠し持っていたエロ知識が開花することになり、大技使いとして急激に有名になっていくのである。
だが、有名になるにつれ、この世界の様々な事件に巻き込まれて行くことになるのであった。
実はこの奇妙なＡＶ界と言う異世界の歴史は９５年と浅く、何故かそれ以前のことについては皆知らないのである。それは、ある作為の中で誕生した世界だからなのであった。
一体、このＡＶ界と言う世界が出来た理由、工口（くぐち）がＡＶ界にスカウトされた理由、更にはエロの成す理由とは何なのであろうか・・・。

バスは高タンパクの宝庫（前書き）

この物語はフィクションであり、実在の人物及び団体とは一切関係ありません
ちょっと、お下劣な内容となっております。低俗なものを読んでも、心の平静に自信がある方のみ先にお進み頂ければと思います。

バスは高タンパクの宝庫

エロの花が咲く

薄っすらピンクのエロの花
赤くて黒いエロの花

全てのエロの花は心を惑わす魅惑の色を持つ
そして人は、その色に溺れる

エロの花が匂う

酸味を含んだエロの花
杉の花粉の匂いのエロの花

どの花の匂いも、期待と言うエッセンスが含まれている
そして人はその匂いに魅了される

エロは特別な花ではなくて
ごく自然に、何処にでも咲く花

ネオン街や病院、職場に学校
バスの中やビデオショップ。
最近はネットカフェ。

何処でも咲いてしまう安易な花だ

しかし、それは真のエロの花ではない
偶像に過ぎない

本当のエロの花には色が無い
想像のままに色をなす

本当のエロの花に匂いはない
周囲の匂いが花の香りだ

僕はそれを探し出す
そして、種を取り、僕はエロの花で新しい世界を創りだす

”僕はその世界の創造主となった”

☆★　萬のエロは♂　☆★
★☆　♀しその香り　☆★

「ハーハーはー」
息を切らして、駅の階段を3か月振りに猛然とダッシュしている
俺は、今、最高潮に怒っている。

（金返せ、このくそ電車！1分も遅れやがって！！）
横目で睨んでも鉄の塊からはびた一文も出て来ない。

一文？

この平成の世に、簡単に一文と言う金を出せる人間が居るのなら、是非会って見たい。なんてことは、聞き流して欲しい。

（遅れるだろうが、頭来んなー！）

ただ怒りに任せて、難癖を付けているだけである。

綱渡りの乗り継ぎを予定していた俺は、珍しく電車が遅れた為に荒い息をたてる破目になっているのだ。

この走っている場面から始めると言うのはよくあるパターンだが、この先、次第に下方向に進んでいく。

かなりお下劣である。

俺が走る先にあるのは、北郷営業所行きのバス停だ。

何のことはない。家に帰るバスに乗ろうとしているだけである。

事実を端的に述べると、ただそれだけの事になるのだが、絶対にこのバスに乗らなければならないと言う俺の心理を読み取ることが出来るのならば、そんなに安いものではないことは理解して貰えることだろうと想像する。

俺はここ数日、この綱渡りの乗り継ぎで家に帰るのが日課になっていた。

それと言うのも、次のバスまでの間隔は２０分。

俺としては、”受験前の貴重な時間”を僅かでも無駄にはしたくないのだ！

僅かな時間も惜しんで受験勉強がしたい。

なんて事が理由であるのならば、誰も俺の心理など理解はたくはないだろう。もちろん、この俺がそんな理由で懸命に走る訳がない。

本当の理由は、もちろん別に存在するのである。

実はこの時間のバスに、俺はちょっとした楽しみを発見してしまっていたのだ。

いや、今の俺に取っては、先にも申し上げた通り、ちょっと何て安いものでは無いのである。

健全な高校生を持続させる為にな不可欠な、若き血潮の加乗な栄養素放出の為の、種が、このバスには存在するのである。

それは、何にも替え難い。

遅れましたが、俺の名は千乃工口。

誤解しないで欲しい。名前にカタカナは含まれてはいない。四文字共、全て漢字である。

俺は、先月１８歳になったばかりの某公立高校に通う3年生。Ｒ１８もＯＫである。

家族は４人。公務員で無口な大人しい親父、千乃史吾樹に、デパ地下でパート勤めをしている外出好きのお袋。千乃顔出。

それに、中学1年生の妹の少毛だ。

５つ下の妹、少毛には、生意気にも！彼氏がいて、既に初キッス済みなのだそうだ。

余計なことに兄ちゃんっ子の妹は、先日俺の前にニタニタしながら、聞きたくもない報告をしに来やがった。

それには兄の甲斐性として、一応余裕の表情で聞いてやるのが務

めである。

俺は羨みと妄想の中、必至に面の皮の硬直と若干の”俺の僕”の硬直を宥めながら聞いてやること３０分。

そこまでであれば、俺も耐えるに忍びないのであるが、何と、少毛は余計なことに俺の初キッスの話を詮索して来やがった。

それには、俺も動揺を隠しきれない。

何故か？と言えば、・・・そうです。

その通りです。

未経験な俺には答えようがないのでございます。

キスが早いか遅いかで引け目を感じること自体に間違いがあるのだが、俺の羨む行為を先に行っている相手に対して、幾ら論理で勝っていても気持ちで負けてしまうのが必然だ。

そこは、論理で未経験を正当化するよりも、ここは回避するに限る。

俺が直ぐに高速で思考を巡らすと、迂闊にも出してしまった動揺は、妹に野暮な詮索をされない程度の僅かな時間で、平静を取り戻すことに成功した。

流石に受験生だけのことはある。

日々使っている頭は回復、いや回転が速い。直ぐに解決策を見出したのだ。

自分で言うのも何だが、子供の頃に余りにも可愛かった俺は、たぶん冗談だったと信じたいが、近所の小母さんに、唇を舐められたことがある。

その衝撃的な出来事を瞬時に記憶回路から抽出して、年齢を少しばかりさば読んで、少毛に聞かせてやったのである。

部分的な経験値は俺より上でも、所詮は中学1年生である。高校3年とは人生を乗り越えた数量が少し違う。

俺の現状打開のアドリブ能力に、少毛は尊敬の眼差しを惜しげもなく向けてくれ、食入る様に話を聞いてくれた。

どうも、唇を舐めるキスは、中学1年生の女の子にはかなり刺激的であったようだ。

お陰で俺の少毛に対する威厳は、後半年は自動更新されることは、間違いなさそうだ。

何か空しい気もしたが、決して、うしろめたい気持ちは感じていない。

決して100%嘘をついた訳ではない。肝心な行為は本当であるのだから。

今になって心から思う。変体小母さん”有り難う”。

何事も経験だ。

余計な話になってしまったが、ご想像の通り、俺は生を受けて18年間と言うもの彼女と言う存在を賞味したことが無い。

自分で言うのも何だが、容姿はそれほど悪くは無い。小母さんに唇を舐められた位である。

むしろ良い。

宜しい。

恵まれている。

もちろん自意識過剰などでは無い。

人間ウォッチング（一部の女性に限られるが）を趣味としている俺は、客観的に自分を見つめる能力は人並み以上に備えているつもりである。

とは言っても、彼女と言うものは容姿だけで出来る訳ではないのだ。

そんな安易な夢からは、既に二年前に覚醒している。

だが、如何せん解決策を見つけるには未だに至っていないのが現実だ。

それでも、世の中にはマニアという珍重な御趣味の方もいらっしゃるはずなのだが、運がないのか、未だにお目にかかれていない。

それは、タマタマだろうか？

”タマタマ”おっと、イントネーションを間違えてしまった。

こっちの”偶々”であった。

もしかすると、これが拙いのかもしれない・・・。

そんなことで黙って放っておくと、高校生の健全極まりない体内中にたっぷり流れるもんもんとする若き血潮には、余分な栄養素（タンパク）が累積していくばかりなのである。

これは定期的に吐き出さないと、煩悩と相まって、俺を誤った道へと駆り立てることになりかねない。

ここは、定期的にありきたりの、ごく一般的な自己解決策を選択するしか道は無いのである。

本当は、高校生活最後のあがきとして、派手にそこから打開したいところではあるのだが、それも2か月後に大学受験を控えている身としては、残念ながら全ては終わってからの短期間にかけるしかないのだ。

俺の通学時間は片道約1時間。学校から最寄の駅まで徒歩10分、そこから電車で約25分。乗り換え時間がダッシュで5分にバスが15分。そいでもって、バス停から我が家までが徒歩5分である。

健全な高校生を持続させる為の余分な栄養素の放出には、呼び水ならぬ、上質の呼び栄養素が必要である。

人は見逃しがちだが、この1時間には上質の栄養素生成の為のあらゆる副食物(おかず)を発見することが、時としてあるのだ。

朝食のホテルのバイキング等と比較するのは、全くを持っておこがましい。

今日も、きっと目の前のバスの中には黒毛和牛のサーロインステーキが俺の、俺の切れ味鋭い視線のナイフを待っているはずである。

「よし、ぎりぎり間に合った」

俺は、ここ以外では滅多に食することの出来ない黒毛ちゃんを眺める為に、バスに飛び乗ろうと、地面を強く蹴ろうと・・・蹴ろうとしたが、

「何だ?何で、今日はこんなに混んでんだ?」

いつもなら、座れることの方が多いバスなのにだ。

「おかしい？」
と、窓から良く見ると、いつもより混んでいるとは言え、中の方は空いている。
老人達が入口付近に固まっているのである。

「詰めろよ、老人達！」と、心で思うが決して口に出して言う勇気は無い。
きっと、彼等はそこまで頭が回ってないんだ。それもしょうがない、長い時の悪戯のせいだ。
俺は自分に言い聞かせることにした。

しかし、これでは、お目当ての”超ミニスカ牛”の油の乗った”黒毛ちゃん”を見つけることが出来ない。無念だ。

それでも、せっかくダッシュまでしたんだ。ここで、一本バスを見送るのはもったいない。
次のバスに、都合よく黒毛ちゃんがいるとは思えない。それに２０分待つには、外は案外寒い。

俺は何んとか足の踏み場を見つけ、体を反転させると背中でいたわりながら老人達を中に押し込み、バスに乗り込んだ。
背中越しには老人達の”若い兄ちゃんが、良いだの、何たらだの”と言う、俺への賛辞が渦巻いている。

悪い気はしないが、特にメリットも感じられない。
俺はそれに完全無視を決め込み、ホッとひと安心していること、

束の間・・・。

電光石火の勢いで現れると、足の踏み場の無いバスに飛び込んで

来た紺色の塊があった。

そいつは、無理やり一方の足で俺の右足横にスペースをこじ開け、もう一方の足を俺の両足の間に開いた僅かなスペースに滑り込ませて来た。

（な、何だこいつ！）

そう思ったが、老人達の以外にも大きな圧力に身動きが出来ない。俺は強引な接触を受け止めるしかなかった。

そいつは外に飛び出ない様に、抱きつく様に俺にピッタリと体を押し寄せてくる。

「うっ・・・」

突然の不愉快さに最初は面食らっていた俺だったが、遅まきながら数秒の時を経て、間違った感情であったことに気づいてしまった。

『に、匂いが違う！！』

＜つづく＞

バスは高タンパクの宝庫（後書き）

Ｒ１５に抑える為、今後文字にモザイクが入ることがあるかもしれません。

攻防も筆を誤る（前書き）

工口（くぐち）が乗った満員バスに飛び乗って来たのは・・・。

攻防も筆を誤る

匂いが違う！！

その香りは、バスの扉が閉まると同時に、俺の嗅覚を刺激した。

☆★　♂　第　２　話　♀　☆★
★☆　攻防も筆を誤る　★☆

密室に漂う、シャンプーとフェロモンのコラボレーション。
図らずも顔を埋めたくなるような芳しい香りの発信源が、俺の左肩に埋もれている。

ちょっと待て！
と、言うことは・・・？

その瞬間、ドキ、ドキ、ドキ・・・・土器。

俺のハートは急激に鼓動を増して行った。

触覚の感度を上げなくてもその心地良さは、衣服を通して伝わってくる。

当りが柔らかい・・・。

体が吸い寄せられる様な未体験のフィット感の中にも、適度な歯ごたえのありそうな反発力。

今、俺に密着、密着、密着、みっちゃく?しているのは考えるまでもく、女性である。少なくても新半々《ニューハーフ》位であることは間違いない。

俺の”僕＝触手”が更なる密着を深めようと、前方上方に進路を向けようと、早々な決意表明を示しているのだから。

一瞬の出来事で冷静に状況を理解出来なかった俺であったが、視覚、嗅覚、触覚からの正確な情報が、”触手”の反応に遅ればせながらも、次々に俺の頭脳にも集約されて行き、この出来事への歓喜度の分析を開始した。

今、目の前に、いや目の下にへばり付いている黒い塊は、洗い呼吸を俺の胸に吐きかけている。

身長は俺よりも２０ｃｍ位低い１５２～３ｃｍ程度。

濃紺の制服に、俺の脚に当たる感覚で行けば、かなり短めなスカートだ。

それに、耳が隠れる程度の黒髪で、少し厚めのショートヘアー。

使用しているシャンプーは、恐らく、３ｍ離れても香りの虜にしてしまうと言う、某メーカーのフィットレスシャンプーに違いない。

匂いフェチとしては当然の知識だ。

もう既にお解りのことと思うが、どう捕らえても今、俺に密着している黒い塊は紛れもない、女子高生である。

顔までは確認出来ないが、既に現時点で俺の必要十分条件は満たされている。

充分な分析の済んだ俺は、”僕”に遅れること約５秒。流木に脳天を打たれた位の衝撃を受けた。

これは、空想の世界か・・・

健全な男子高校生であれば、夜な夜な、いや時々昼でさえも想像に溺れてしまう状況が、今、現実に起こっているのである。

こんな時、もったいないことだが、ビギナーな俺には敏速に全ての感覚を味わえるような器用な真似が出来る訳がない。

俺の神経系統が、まず最も刺激を有する一点に集中していくのは、自然の道理。

神経の電位は粗間に食い込む柔肌に思わず集中発生し、若き血潮は”男の神秘”と言う法則に従い、収束を始めて行った。

拙い！

喜んでばかりはいられない事態が、急激に俺を襲って来た。

俺の”僕”の決意表明は、何処かの政治家様とは違うのだ。

”僕”は瞬時に、表明の実行を開始し、急激に勢力をズボンの外へと向けようとしているであった。

いくら栄養を急激にいただいたとはいえ、こんなところで事を起こしては拙いのだ。

人として、彼女の柔肌を押し返す行為があってはならないのだ。

そうだ、この状況は奇跡がもたらした”ごちそうさま現象”であって、決して、お互いの意志が通じ合った結果に起こった、同意による行為ではないのである。

きっと、押し返した、つまり作用と反作用の均衡がくずれた時点で、違う力が働いていることがばれてしまうのは必至だ。

最悪は”お叫び”を上げられてしまう可能性だってあるわけだ。

俺の頭は幸いなことに、まだ冷静な判断が可能であったが、”僕”の頭の制御が思う様に行かない。

”僕”の頭は彼女を抱きしめて、思う存分押し返すことを望んでいるのだ。

俺の二重構造に働く上下の頭脳が、今世紀最大に葛藤していた。

内乱である。

工口(くぐち)よ、どうする！

叫ばれる行為を回避しつつも、悦楽の継続を得るにはどうすればいいんだ・・・。

いや、ちょっと待て。

この状況は俺が選んだのではない。行きがかり上、止むを得なかったんだ。彼女が自ら選んだ体制なのだ。

至って俺は何もしていない。神にだって誓える。

今だって、彼女はこの状態を変えようと何一つ体を動かそうとはしていないではないか。

扉が閉まった今は、彼女の後ろには支えがある。強引にでも足を抜いてしまうことは可能なはずだ。

今俺にとって大切なことは何だ?

的確な行動を選択するのだ。良く考えろ工口(くぐち)！

俺はなにひとつとして、自分の意思でこの状況を手に入れた、いや、陥った訳ではない。後ろめたいことは何もしていないんだ。

考えろ！

いやいや、俺よりも先に”僕”の頭が答えを出している。

重んずるのは”この状況の継続だ！”

行動を選択する必要はない。行動をしないことだ。

とにかく俺は自ら動かず、僕も押し返さず。平然と立っていればいいんだ。いや、立ってはならない。

平然？

工口（くぐち）よ、お前にそれが出来るのか・・・？

ここで、出来ずして・・・

と決意しようとしたのも束の間、それは、やりばのない余計な思考に終わってしまった。

何と、俺を周囲を取り巻いていたご老体のアシスト、いや押し圧が緩み、若干の隙間が出来てしまったのだ。

ここで、このまま密着していることの不自然さは、俺の脳裏の監視カメラが客観的に移し出している。

俺はその不本意にも出来てしまった隙間を、前後に均等になるように自分の位置をとった。

その上、鞄を持っていない自由になった左手を彼女が持たれているバスの扉につき、彼女との間隔を保持する行為で、我が身の安全さをアピールしてしまった。

これが、道徳心溢れる青少年に身に付いている、一連の流れの動作である。

残念だが、これが人として取るべき姿なのである。

儚い夢であった・・・。

良く考えると、俺は周りのお婆さんとも密着していたことになるのだ。

だが、だから、どうのと語ることは、文字数の関係で差し控えたい。

ただ、彼女との間に僅かに出来たその隙間は、物理的以上に、心理的には一歩も二歩も後退した状態であったのだが、その後、かえって俺の心を強く刺激していくことになって行った。

バス外では、行き交う人々が晩秋の寒空に、肩に力を入れて歩いている。

それに比べこの俺は、今、いただいた栄養を持て余すかの様に体の芯から火照っている。

これだけでも幸せと感じざるを得まい。

そう、自分を納得させながら、扉に付いている左手に力を込める。

何か、この姿勢は反省ザルの様?にも見える。

ちょっと待て、反省する様なことは至っていない・・はずだ。

この時、過剰な程に滑らかな舗装道路上を安定走行していたバスが、車線変更を行った。

それに伴いバスが揺れ、俺のズボンの布地と彼女のスカートの布地の衣擦れが起こる。
さらに、右折。

この程度の触れではあるが、一旦、大人しくなった神経を意外にも逆撫でる。
俺の若き血潮が到る所で眠りから覚め始めた。

さらに、初めは、余りに意識が下部に偏っていた為、重視していなかったのだが、柔らかさを感じた一番の要因が、今一番俺との距離が近い。

バスの右折は彼女を俺に近づけ、胸が制服越しとは言え、俺の胸にその柔らかい肉感を掠める様にお披露させた。

いかん、この程度のことで・・・。

と思うのだが、意識すればするほど、微妙な衣ずれと微かな肉感が”僕”に不可解な刺激を与えてくる。

俺は変態だろうか？

いや、そんなことはないはずだ。この１８年誰からも指摘されたことはない。
想像力大勢なだけだ。

彼女の髪が、頬を撫でる。芳しい・・・。
衣擦れが・・・。
そして、胸が・・・。

だめ、だめだ！
静まれ、俺の若き血潮よ！
工口（くぐち）よ、力を抜くのだ。局部的に距離を縮めてしまうではないか。
リラックスしろ。現況を悟られてはならぬのだ。

恐らくは、俺と彼女の現況は、上から下まで距離にしてアベレージで３０ｍｍ程度であろうか。
俺の触覚はそう判断した。

自分との戦い、”僕”の小康状態。
３０ｍｍの攻防がバスの中で続けられる。

俺は不本意にも左手で、彼女との接触を妨げようとする。

だが、その後細い道に入ったバスは、揺れる、曲がる、止まる、捻（ひね）る。捻りはしない。
戦いはいつ再発してもおかしくないのだ。

俺は必死に姿勢を整えていたが、この姿勢に疲れた俺は、僕からの神経伝達も相まって、新たな思考を巡らした。

ちょっと待て、ここまで拒絶したかのような頑張りが必要なのだろうか？

もしも、もしも相手が男だったらここまで踏ん張るだろうか？

いや、そんなことはない。はずだ。

であれば、そこまでは・・・。

このちょっとの心の迷いが、約３０ミリの静かな攻防を埋めて余りがあった。

ムニュ。

あからさまの感覚。

いかん・・・手の力を緩めてしまった！

彼女に叫ばれたら！　どうしよう・・・。

一瞬の恐怖が俺を襲ったが、彼女は何も行動を起こさなかった。

良かった～。

俺は心の中で叫んだ。

色んな汗が背中をミックスする。

俺は慌てて、疲れた左手で距離の確保に努めると、再びの小康状態が続いた。

これでいいんだ、これで・・・。

俺は自分に言い聞かせる。

ところがだ。

大きな事件が起こってしまった。バスが右折したのである。これは大事件だ。

遠心力と言う慣性の力が働き、その瞬間、俺が世間体で扉に付い

ていた左手では、到底支えきれない大きなパワーが、俺の後ろのご老体から与えられてしまった。

＜つづく＞

まほまほ？（前書き）

ついに彼女が言葉発してしまった。えっ？”まほまほ”って？

まほまほ？

大学受験を2か月後に控える、俺”千乃工口（くぐち）”が学校からの帰宅の為に乗り込んだバスは、何の集会があったのか、いつになく老人達で超満員であった。

俺はひしめく老体を奥へと押しやり、やっとの思いでその超満員のバスの中に体を押し込むと、辛うじて乗車に成功を納めることが出来た。

だが、ホッとしたのも束の間、さらに俺の後から超満員のバスを目掛けて飛び込んで来た、濃紺の制服の奴がいた。

外を向いてバスに乗り込んだ俺は、なんとそいつと向い合わせで、全身が密着状態。

もちろん、その瞬間は、不快な気持ちに襲われたのであったが、そいつが発する芳しい香りから、俺はそいつが女子高生であることに気付いてしまった。（・・・ごちそうさま）

俺の心理的状況は一転し、俺は全身で幸運を勝ち取る喜びに震え、若き血潮が一点に収束するのを感じたのは当然のことである。

だが、そんな状態が長く続く訳もなく、微妙な距離が彼女との間に出来てしまったのだ。

俺はその隙間と欲望の狭間で心理戦を繰り広げていたのだったが、そこで新たな事象が勃発してしまったのだ。

バスの右折である。

それをきっかけに・・・、再び・・・。

☆★　第　３　話　♂　☆★
★☆　♀　まほまほ？　★☆

人に存在する相対する二つの心、正義と悪。道理と無理。真実と虚偽。常識と非常識・・・。
今、俺の心身は道徳と背徳の狭間で、部分的な偏りを見せていた。
だが、所詮、体は一繋がりであるのだ。

バスが右折する。
それにより、働いた遠心力が俺の体を彼女の方へと引き寄せていく。

ここで、俺の煩悩を彼女に触れさせる訳にはいかない。
俺は、道徳心に忠実な左手と両足に力を込め、彼女との距離を必死に保とうと頑張った。

だが、この手足に込めた力が、当然そこだけに収まる訳がない。
それに繋がる部位にも力が入ってしまうのは当たり前の話だ。
そうだ、握った拳の薬指を伸ばすと、小指も一緒に伸びてしまう様にである。

その力は、目の前の彼女と小康状態を保っていた、俺の最も背徳の部位にも力が入ってしまったのである。
１８年と言う人生の経験値からは、気付いて然るべしなのだが、今はそんな冷静な状況でない。

やばい！

と思うが、バスはそのまま右折を続ける。

込めた力が、俺の全身に何とも言えない心地良さを与えて行く。

め、目覚めてしまう。

も、もう・・・だめだ。

走り出したこの現象は、理性が届く範囲のものではない。

ついに、俺の”僕”が”覚醒”の時を迎えた。

バスは、そのまま俺の状態を知ってか知らずか、容赦なく右折と言う大きな遠心力を乗客に与えて行った。

俺の後ろに居たご老体達は、それに同調して俺の背中に物凄い圧力を加えていく。

俺と彼女の距離が、次第に縮まっていく。

よし！

いや、違う、拙いだった・・・

ついに、願望が成就して、ではなかった。図らずも、俺は覚醒を始めた状態で彼女に惹きつけられる様に、再び全接触（密着）してしまった。

彼女の右足は、図らずも覚醒を迎えた俺の”僕”との押し相撲になる。

そして、俺の右足は彼女の間にすっぽりとジグソーパズルの様に吸い込まれていく。

覚醒をしてしまった”僕”は、小康状態の間に備蓄してしまっていた栄養によって、瞬時に５０％の状態にまで成長を成し遂げていた。

そして、更に今の密着で出力は７０％に達してしまった。

７０％・・・、それは所謂　”解・放！”　である。

ついに、俺は1回目の能力解放の時を迎えたのである。

”解放”状態の俺は、同時に複数箇所の快楽も貪るマルチ機能が可能となり、瞬時に身体の隅々の神経の活躍が、俺の頭に伝達されていった。

最も刺激を吸収する解放された”僕”を初め、彼女の隙間に紛れ込んだ俺の右大腿部。それに、彼女の柔らか胸の膨らみも右胸に熱く伝わってきた。

ちょっと待て、これは、夢にまで見た三所攻めではないか。

んっ？違う一箇所は俺が攻められているのか。

この際そんな理屈はどうでもいい。

いかん！叫ばれてしまっても、しかたのない状況だ・・・。

背筋には熱い汗と冷たい汗が交差する。

まずい・・・。

拙いが、今の俺には”解放”を抑止するだけの要素が足りない・・・。

完全に彼女の魅惑に溺れてしまっている。

”僕”の”解放”が、彼女の右太腿へ過剰な圧力を加えている。

その感触が、反作用として手に取る様に伝わって来る。

そして、”僕”の支点が、その反作用の感触を当然の様に楽しんでいる。

”僕”よ、やめてくれ。それを俺の大脳に伝えてくるな。俺が完全支配されてしまう・・・。

事故とは言え、俺と彼女の間の相対性理論から言えば、俺からのアクションが原因と言うことになってしまうであろう。
この７０％の状態を知られては、いつ叫ばれても弁解のしようがない。

いかん・・・！

このままでは・・・ただの好色高校生だ。

なす術が無い・・・。

俺は、ただ彼女のご好意を願うしかなかった。

だが、そんな状況下で、追い打ちを掛ける様な事件が、更に起こってしまったのである。
バスのブレーキと共に俺の右足が図らずも動いてしまったのである。

図らずも？
多分、図らずもだ
図らずもであってくれ・・・頼む。
・・・ｍａｙｂｅ

これは、非常にまずい！

し、しまった！痴漢扱いされてしまったら・・・

背中に冷たい汗が流れる。
俺の体の表裏の温度差は、恐らく耐熱住宅並の差違があるかもしれない。

心臓が、ドキドキと高鳴る。
もしかすると、この心音を彼女に感じられてしまっただろうか。
興奮と取られてしまったかもしれない・・・やばい。

今は、ただ、彼女の過剰な言動が無いことを祈るしかない。
俺は自分の未来を彼女の言動に乗せた・・・。

長い時間が祈り続けた様に感じられた。しかし、ほんの数秒であったかもしれない。
俺の願望に反して、ついに彼女が唇を動かしてしまったのだ。

まずい、うわぁぁぁ～！
俺は心の中で叫んだ。

一瞬にして、体全身が凍てついた。
密着バスと言う宇宙空間に”耐熱住宅”は無意味であった。
俺の未来の灯火が消えて行く。

だが、その瞬間、彼女の発した声は、囁く程度の小さいものだった。

「ま、まほまほ」

んっ？

今なんて言ったんだろう?
た、多分”まほまほ”?

何だ?
聞き間違いだろうか?
俺は耳を疑った。

少女は、先程よりも息を荒めて、頬を染めている。

んっ、これで終わりだろうか?
終わりであってくれ、頼む!
俺は心の中で彼女に手を合わせた。

通じたのだろうか?
俺は幸いにも、彼女に叫ばれる様な事態には陥らなかった。

良かった!
本当に良かった。しかし、先程の言葉は何だったのだろうか?
いや、何て言ったかなど、この際どうでもいいではないか。
そんなことよりも、良かった・・・。

ホント、本当に良かった!!

暗くなりかけた俺の未来が再び点灯を始め、安心した俺はもう一度脚を動かしてみたい衝動にかられた。
が、故意に行ってはいけない。

それだけは、絶対に行ってはならないのだ!

何を考えているのだ！
工口（くぐち）よ、今、安心したばかりではないか。

と、戒めながらも、バスよ・・・再び左折を・・・。
完全に、願っている俺がいる。全く懲りない・・・。

そんな、よこしまな俺の心を見透かしてか、前方の降り口が開き、数人の乗客が降りて行く。
今のブレーキは、バスが停止する為のものであった。

すっかり彼女に気を取られていた俺は、”降りますボタン”の音に全く気付いていなかった。

喉元を過ぎた俺は、すっかり落胆の気持ちに支配されていた。
気持ち的には、結構な人数が降りてしまった気がする。

失望の溜息が出そうになるのを、辛うじて飲み込んだ。
次に起こる事象は当然・・・決まっている。

バスの中は次第にゆとりが出来てしまった。

このまま向い合っている分にはいかない・・・。
俺の脳裏に客観的に移る映像が、俺にそう語りかけてくる。

出力７０％の解放如きでは、俺を完全に支配等することは出来はしないのだ。
この映像は、僕の”解放”を抑える為の充分な、”抑制力”となった。

当然、俺は、倫理心溢れる好青年として離れるべきである。

そう、今までのことが不可抗力であるかのように。

ちょっと、待とう。

俺は何を言ってるんだ。不可抗力ではないか。至って俺は・・・。

多分・・・ｐｅｒｈａｐｓ。

俺は、無念を噛み締めながら、彼女とのに距離を取ろうとしたのだが、安易に離れられない訳が別にあることに気付いた。

身体の表面が、通常のほぼ、なだらかな直線ではないのである。

例え、彼女の大腿部が”僕”の押し圧を感じていたとしても、彼女を直接の目撃者にする分にはいかないのだ！

どうする、工口（くぐち）！

なんて、未練がましい言い訳を考えている自分が、せつない。

簡単であるのだ。対策は一つである。

こんな時の基本である。

俺は止む無く体を離すや否や、鞄を前方中央部に当てると、彼女に横を向けた。

これだけのことだ。

背を向けなかったのは俺のみれんであることは、認めるしかない。

これ位は問題ないだろう。

今まで近すぎて良く見えなかったが、少し離れて見ると、彼女の顔立ちがはっきりと分った。

俺は、その映像をそれをインプットしていく。

これは、家に帰ってからのイマジネーションには大切なのだ。

横目で見た彼女は、大きな黒い瞳に、白い透きとおる様な肌、全体的には細面にも関らず、少しだけふっくらとした頬。

か、可愛い・・・。

つい先程までの出来事に、俺はうっすらピンクのエロの花を満開に咲かせてしまった。

先程までのドキュメントが走馬灯の様に蘇る。

離れたことが返って、記憶の美化により出力状態を上げてしまった。

自分の得たものの大きさに気がついてしまった。

もはや９５％だ。

俺は、若干のエネルギーの垂れ流しに冷たい感触を覚えた。

余剰の栄養が出ているのだ。これは危険信号である。

これ以上の出力上昇は、二回目の解放を行ってしまう。

もし、”〇〇砲”の乱射と言う事態になれば、民間人への被害が出てしまう。

俺の今後もだいなしだ。

思考の制御をしなければ、バス内紛争にもなりかねない。

どうする、工口（くぐち）！

俺はそれに備える必要に迫られた。

＜つづく＞

まほまほ！（前書き）

”まほまほ”とは、いったい？

俺”千乃　工口（くぐち）”は、高校の帰宅中に乗り込んだバスで、思いもよらず女子高生との二度の身体的な接触を味わってしまった。

暫しバス中で、理性と煩悩との戦いを繰り広げていたのだったが、乗客の降車により、止む無く彼女との距離を取らざるを得なくなってしまった。

だが、この距離をとった事が、返って俺を目覚めさせてしまったのだ。

俺が彼女の容姿に気付いてしまったのだ。

彼女の可愛さは俺の二度の接触の価値を高め、ついに俺はその記憶の回顧で、若さの暴発を限界点に近づけてしまったのだ。

どうする、工口（くぐち）！

☆★　第　４　話　♂　☆★
★☆　♀　まほまほ！　★☆

逃げると言う行為。

人はこれを卑怯な行為と扱うことが多い。しかし、相手次第によっては、賛同して頂きたいものである。　（ｂｙ　工口（くぐち））

そうだ、こんな時は物理だ。苦手な物理の公式を唱えるんだ。
こんな時は、一番力を発揮出来ない宿敵に気持ちを移すんだ。
俺は、頭の中の欲望、煩悩、夢見心地と言う雑念からの”解放”

を、嫌悪の極みである”物理の公式”で包み込み、そこから逃避をする計画を企てた。

工口(くぐち)よ、公式を恐れよ！

俺は必無我夢中で、必至に公式を唱えた。

Ｆ＝－ｋｘ、Ｆ＝μＮ・・・

いかん、これは弾性力と摩擦力の公式だ。煩悩が残っている。これではだめだ。

Ｖ＝ｋｑ／ｒ・・・俺は必死に唱えた。すると、

俺の頭の中で、好色色(ピンクいろ)の雑念に、嫌悪色(あまちゃいろ)の”物理の公式”の二つが混ざり込む。

次第に頭の中では、その二つの区別がつかなくなっていく。そして、面倒になった俺は、二つから逃避癖を図ろうとする。

そうだ、そのまま逃げ込むんだ。

いいぞ、いいぞ、逃げてしまえ。

いつの間にか頭の中全てをがボ～ッとして行き、次第に収束していた若き血潮が体内で分散していくのを感じていった。

出力が急激に落ちて行く。

今や、俺の”僕”は５０％前後、半○ち状態である。

これは、解放状態が解けたことを意味する。

これで、ホッとひと安心だ。

バスの中はには危機を切り抜けた平穏な空気が蘇った。
野鳥のさえずりが聞こえてきそうだ。

清々しい、一仕事した後は何て清々しいんだ。
人ゴミのバスの空気が、山の朝の様に美味しい。

俺は大きく深呼吸をした。

暫くの平穏は俺に安寧の時を与え、このまま一時の夢は醒めるかと思われた。

だが・・・バスは侮れない。

バスはそれから二つの停留所を過ぎ、三つ目のバス停で止まると言う行為に出たのだ！
バス停に二人のお客がバスを待っていたから、当然のことである。

俺の”僕”はこれに反応した。
”僕”の頭はこの状況に瞬時に反応し、心拍数を上げていく。
俺の上の頭も、既に混雑したとは言えないバスの中ではあるが、微かな期待をしている。

いかん、まだ、解放が完全に解けていなかったようだ。
一度上がった出力は、再浮上し易いのか？
勉強になる・・・。

もちろん、バス停で待っていた二人は、当然の如くこのバスに乗車して来た。

背中に全神経を集中させている俺がいる。

悲しい性(さが)だ。

しかし、そんな悠長なことを言っている場合でないのである。
出力がＭＡＸ時より下がったとは言え、この性(さが)と言う備畜タンクに蓄えられる栄養は、既に満タン寸前なのである。
これ以上、栄養が与えられることは、体内での保持量を超えてしまい、危険な状態は免れまい。

その危険状態から己の心身を守るには、出力を再び自ら上げ、二回目の解放をするしかないのである。
それは、〇〇砲に繋がることになることを意味する。

危険である。
つい先程回避したことが無意味になってしまう。
そんなリスクは背負いたくない。

俺が初めて覚醒を迎えてからの数年、過去の経験値から言って、満タン寸前はまず間違いないだろう。
あと、どれだけ持つことか・・・。

だが、俺の不安を他所(よそ)に、聞きわけの無い奴がいる。
これでも望むのか、俺の性よ、俺の”僕”よ!

とは思うものの、７０％は妄想であり、実のところ、そこまで心配をしていなかった。

現実のこのバス内の人口密度からでは、欲望で終わることは確実。
再接触をするには非常に無理があるのだ。まず、危険は免れるだろう。

内心、客観的に安心をしていた。
そう、只の儚い夢と・・・。

しかし、予想に反した危機が俺を待っていたのであった。

彼女は二人の乗車を妨げる位置に敢えて、己の座標をずらし、自ら背中に押し圧を受けたのであった。ホンの軽い圧力であったように見えた。
しかし、彼女は愛くるしい顔を赤くし、臭い芝居でよろめきながら、不自然にも俺に迫って来たのだ。

明らかに彼女の意思である。
と、言うことは一連の接触も紛れもない彼女の意思であると予想される。

彼女は自分の意志で俺の左側面に食らいついた。

来た〜！

と、正直思ったのだが、彼女の意思で来たことに素直に喜べない俺がいた。
俺の脳裏でプロテクターが働いたのである。
これは重要なことである。

”不可解？”なのだ。

幾ら何でも、ここまで来ると、彼女の行動は不可解以外の何物でもない。
人間ウォッチングを趣味としている俺としては、疑いを持ってしまうのである。

俺は考えた。
この彼女の行動は、何かの罠ではないだろうか？
ドッキリか？
いや、この俺にドッキリを仕掛けて何の意味がある。俺は芸能人ではない。

もしかして、彼女のお遊びか？
俺の脳裏をそんな疑いが過っていく。

自分から寄って来て、カモの男を痴漢扱いをして楽しむ女子高生がいると言う話を聞いたことがある。
罠かもしれない。先程までの一連の行為は撒き餌だったのかもしれない。

悲観的な境遇で育った俺は、身を交わそうと言う気持ちが脳裏に浮かんだ。

左側面にへばり付く彼女を引き?がそうと・・・。
だが、だが駄目だった。

身体が動かない！

すっかり、俺はあの感触を知ってしまっている。
彼女の行動を避ける術を、今の俺は持ち合わせてはいなかったのだ。

こうなったら、仕方ない。
叫ばれたら叫ばれた時だ。

男に危険は付き物だ。それを覚悟で受け止めるのが男の性と言うもの。
為されるがままだ。

彼女は俺の脚を見事に挟み付けて行く。

急速な栄養補給に、俺の血潮は急激に一点に収束を始めた。
可愛いと言う付加価値を知ってしまった以上、その加速度は大きい。
限界への挑戦だ！

俺は、さらに迫りくる彼女を敢然と受け止めたのだ。鉄の棒の様に。

すると、俺に全身を預けて来た彼女が俺の耳元で、真っ赤な顔で唇を震わした。

「ま、ま、まほまほ～・・・・」

や、やっぱり、”まほまほ”って言っている。
間違いない。

しかしだ、何なんだ”まほまほ”って？

だが、それを確かめる程の余裕は俺には残されていなかった。
俺の鉄棒の出力はすでに１１０％は有に超えている。二回目の解放、すなわち〇〇砲発射まで後１０％もない。

げ、限界がやってきた。

拙い、拙い、拙いぞ～、こ、こんなところで。

どうする、どうする、どうするんだ～！

立ちあがるんだ、正義の心よ。今お前の為すべきことの為に。

そうだ、思い出せ。

こんなところで、この先の人生を狂わすわけにはいかない、俺には受験がまっているんだ。

その先の女子大生との合コンも控えている。

こんな、こんなところで、俺の人生を終わらせてた、たまるか～！！

うぉ～ぉ～ぉ～！！！

俺は、頭部、膝頭、鼻の頭、”僕”の頭の穏健派の部分、全ての理性と道徳、それに、未来への妄想を振り絞り左手を”降りますボタン”に手を伸ばした。

そして、苦しみの中、本来降りるバス停の二つ手前ではあるが、そのボタンを押すことに成功した。

最後の一歩は、バスの揺れではあったが。

・・・。

バスが、停車した。

”ピンポン”と”降ります音”を鳴らして、降りない勇気など俺にはない。バスのボタンのプレッシャーは何より強い。

俺は鞄で前を抑えながら、そろり、そろりと、足音を立てない様に、降車口へと向かった。

頼む、ここで変な叫びを上げないでくれ！
俺を弄(もてあそ)んだのではありません様に！

頼む、頼む、一生のお願いだー！！

そう彼女に願ながら・・・。

・・・。

バスを降りた俺は、まだドキドキと、心臓の高鳴りを抑えきれないでいた。

一応、何事もなかった。だが、この場を早く離れなれた方が安全だ。

俺はバスが発車するエンジン音を確認するまで、何事も無かったかの様に帰路を進んだ。
すると、バスは、間もなくエンジン音を通りに響かせた。

「発車した」
俺が発射しなくて良かった・・・。
「終わった」

立ち止まった俺を、先程まで俺が乗っていたバスが俺を追い抜いて行く。安心した。
俺はそれを確認し、大きく深呼吸をした。

空気が旨い！

そして、再び、歩き出す。明日に向って。

よかった、ホンと良かった。

次からは、自ら危険は避けることにしよう・・・。

俺は未だ喉元にある後悔に反省しながらも、今後、2～3か月分の栄養は充分に頂いたてしまった喜びに、爽快勘が満ちていた。

早く家に帰り、陣地で〇〇砲の射撃訓練をするのだ！

既に、後悔は喉元に僅かに引っ掛かっているだけの様だ。

まあ、いい。結果オーライだ、早く帰ろう。

楽しみはまだ残っている。

しかし、この鞄で前を抑える姿は、いかにも不自然極まりない。

いかにもだ。

見る人が見れば一目でばれてしまう。

俺は直ぐに高速で思考を巡らした。もちろん、この不自然な状況を自然に帰す方法をだ。

流石に受験生だけのことはある。直ぐに名案に辿り着いた。

さすが、日々使っている頭は回復、いや回転が速い。

俺は、早速左のポケットに手を突っ込むと、”僕”の首根っこを人差し指と中指の二本で押さえつけてやった。

どうだ！

だが、この状態は客観的な目線で、一度確認する必要がある。

俺は”僕”と二本の指の膨らみの繋がりが、外見で認識出来ないことを確かめ様と、通りを渡った数件先のコンビニに移動した。

そして、ガラスに己の姿を映して気が付いた！

「あぁぁ～っ、うそだろ～」

何と後には、

「”まほまほ”が！」

まさか・・・。

＜つづく＞

隣の屋根に立つ影は（前書き）

見られてしまった？

註）大変申し訳ございません。一部、自主規制致しました。

隣の屋根に立つ影は

帰宅中のバス中で、俺、千乃　工口（くぐち）は幸運にも女子高生との密着状態を得てしまった。

なんと、その彼女は見かけとは裏腹に、俺に大胆な行動を投げかけて来るではないか。

俺はその真意に疑問を抱いたのではあったが、憂いに惑いながらも、その場の勢いで満喫を味わってしまった。

もちろん、そんなことに不慣れな俺は、一部位への若き血潮の収束が即座に始まり、簡単に抑えきれない状態へと達してしまう。

その結果、俺は余儀なくバスを降りる判断を下す破目になってしまった。

俺は彼女の密着が罠でないことを祈りながらも、慎重且つ繊細に歩を進めると、見事無事にバスからの降車に成功を納めたのであった。

だが、ホッとしたのも束の間、バス停近くのコンビニのガラスに映した自分の姿の後ろには、彼女の姿が映しだされていたのだった。

通りの反対側、左後方約１５ｍ。

やばいのか？・・・。

☆★　第　５　話　☆★
★☆　隣の屋根に♀　★☆
☆★　♂立つ影は　☆★

”えっ、まほまほ？”

ガラスに映るまほまほは、行儀良く脚を揃えて立ち、こちらを凝視している。おぼろげではあるが、そんな気がする。

距離を置いてみると、地味目の濃紺の制服が清楚感を感じさせるだけに、アンバランスなマイクロチックに仕立て上げられたミニスカートが妙にエロく感じられる。

ブラウスの胸元のボタンは、火照った体を冷やすかの様に、二つ開いている。あの開き方は二つのはずだ。さっきは一つだった気がする・・・。

細面な顔にも関わらず、あどけなさが残る若干の頬の丸み。ガラスに映る姿も魅力的だ。おぼろげではあるが・・・。

だが、目付きに決意の程が伺われる。これは俺の感覚である・・・。

間違いない、”まほまほ”だ。

今でもその温もりが残っている。

俺の中では、彼女は既に”まほまほ”と言う名前が、いつのまにか定着していた。

「この状況は、やっぱ拙い・・・のか？」

俺は彼女の視線の意味に思考をめぐらせた。

俺の恐れていた、俺への何らかの抗議をする為だろうか？

それとも偶然、降りる所が一緒だったのか？

いや、俺に対する好意的な？

それとも、脅すために・・・。

俺の脚は、ガクガクと小刻みの震動を始めている。
どうやら体は既に結論を出している様である。だが、俺の頭は体を否定するかの様に、瞬時に最悪のシナリオから逃げようと、あらゆる可能性の模索を始めるのであった。

彼女は完全に俺に視線を向けている。
コンビニに張ってあるコンサートの張り紙が見える距離ではない。
その意味は？
やはり、何らかの抗議であろうか？

いや、しかし、ここで抗議をすることに意味はないはずだ。少なくても最後の接触は意図的な彼女の行為である。
ここで抗議が出来る位であれば、バスの中で何らかのアピールが有ってしかるべしだ。

では、偶然同じバス停で降りただけとか？
それでは、何故俺の後方でこちらを見ているんだ。俺の周りには誰もいないぞ。

も、もしかして、俺に好意でも？
それこそ、自分を買い被り過ぎというものだろう。
そんなことがある位ならば、１８年の人生に彼女の一人、いや、告白の一回位は有ってもいいものだ。

や、やはり、俺を脅すつもりだろうか？
まさか、あんな華奢な体に、可愛い顔で？

いや、最近の女性格闘家は、結構奇麗でスタイルもいいぞ。それ

に着痩せするタイプかもしれない。
そうなのか、そう考えるのが自然なのか？

ちょっと、待て。そうとは決まっていなぞ！

気のせいと言う可能性だってあるではないか。
バス中の俺の記憶全てが錯覚だったとか。

取り敢えず、この場を早く立ち去ろう。それが無難だ。
結論に達した俺は再び帰路に付こうと、向きを変え様とした。その瞬間だった。

俺の肩を叩く人がいた。
それに、俺は凍りつく。

ガラスに映った人影は、紛れもない”まほまほ”である。
俺が驚きで体をビクつかせると、それに、何と彼女の体も一緒に反応し、ビックと動いた。

彼女の口元が動いた。

「ごめんなさいれす」

あ、あ～～あ？謝られた。
驚いたことに彼女が謝ってきた。

この時点で、最悪のシナリオの可能性が消えた。
しかし、安心はするものの、意外な展開に即座に対応が出来ない。
俺は体を反転させ、彼女と向き合った。

「な、何で？」
と応えるのが精一杯であった。予想外の展開と、純真無垢な瞳が俺の脳天を一撃したからである。

「驚(おろろか)してしまって、ごめんなさいれす」
頬を真っ赤にする彼女。あ～、愛苦しい。

俺は何か言いたい衝動に駆られるが、話す言葉が全く見つからない。
頭の中は、漂白剤にさらされた真っ白なハンカチ状態だ。

彼女は、もじもじとしていたが、俺に向かって右手を差し出した。
手中には見覚えのある物が・・・。

「これ、落としましたれす」
か、可愛い過ぎる幼い言葉遣い。

「あ、ありがとう（れす）」
思わず言葉尻を真似るところであったのを必死に押さえ、俺は台本通りの様に、ありきたりの動作で、それを受け取った。芸がない。

な、何か話したい。何かを・・・
と気は急くのであるが、こんな時の言葉のストックが何もない。

そう思っている間に彼女は真っ赤な顔で踵を返すと、猛ダッシュで去っていってしまった。

追いかけたい。追いかけたいと思うのだが、その必然性が見つからない。
嘘でした。それは、後付けでしかない。

情けないことに、金縛りにあった様に全く身動きが出来なかったのである。

「速いな」

俺は彼女が去って行くのをを呆然と見送るだけであった。行ってしまった。

しかし、いつの間に後ろに近づいたのだろうか。謎が残る。だが、そんなことより何も出来なかった自分が悔やまれる。

何か非常に大きなものを逃がしてしまった虚脱感に襲われる。

しかし、過ぎてしまったことだ。これも俺の人生と諦めるしかない。

合理的に考えるのは得意な方だ。今まで、そうやって、自分を慰めて来たではないか。

それよりも、何の問題も起こらなくて良かったではないか。

それに、充分過ぎる程の栄養の貯蓄が出来たのだ。

後ろ向きな思考を、一見前向きに見せるのも得意な方だ。

帰ってから、色々楽しめるではないか・・・。

俺は自分に言い聞かせる様に呟きながら、再び帰路に付いた。空想は得意な方だ。

その後、俺は帰り道で、何度か誰かに付けられている気がした。

その度に振り向くのだが誰もいないのである。

おかしい、俺の感覚器がおかしいのだろうか？

きっと、まほまほが付いて来ないかなんて思っているから、錯覚をするのだろうか。

そうも思った俺は、余りにも気になるので、急に道を曲がると電柱の影に隠れて様子を伺ってみた。

俺が急に道をを曲がったのが意外だったのか、直ぐに足音が駆け足で近づいて来た。

やっぱり付けられていたのか！

俺の心臓は期待と不安の相乗効果で、頭の芯まで響いて来る。

もしか、通り魔的な者であったどうしよう。

しかし、まほまほであったら・・・。

俺は一部の望みに期待を込め、攻防の二つを瞬時に切り替えられるように、頭と体をニュートラル状態に移行した。逃げ脚には自信がある。

来た！

一瞬チラッと、黒っぽい人影が曲がり角の塀の影から現れたのだ。

だが、俺の存在に気づいたのか、直ぐに引き返して行ってしまった。

誰だ？

俺はその影を確認しようと、交差点に飛び出したが、その時既には影も形も無くなっていた。

そんなに早く隠れられる場所は、見当たらない。

誰だろう？

と言うより、誰かであって欲しい。

そんな希望に変わっていった。

今日は当たり日かもしれない。
変なものにあたらない内に早く帰ろう。
逃げた者について深く考えるのは止め、俺は急いで帰ることにした。

家に帰る頃には、すっかり俺の頭は切り替わっていた。ではない。元に戻っていた。

行う気満々な俺は、まず玄関で妹、少毛（しょうも）の靴が無いことを確認した。
「よし、大丈夫だ」
俺は自然と握った拳に力を込める。

「ただいま～」
俺の声に反応するのは、
「お帰り、今日も早いのね」
お袋だけだ。絶好の環境だ。

応えるのが面倒な俺は、
「ああ」
無視も出来ないので、一応返事だけは返しておく。

俺は帰ったらまず、手を洗う。子供の頃からの習慣だ。衛生的である。

俺は洗面所から出ると、二階の自分の部屋に駆け上った。

二階は6畳二間で、俺の部屋と、妹の少毛（しょうも）の部屋だ。
少毛は、未だ自分部屋と俺の部屋の区別が付いていない。いつ俺の部屋に飛び込んで来るか分らないのである。

しかし、今、少毛はいない。お袋が二階に上がって来る理由はないはずだ。
当面、二階に居るのは俺だけだ。この機会を逃すわけにはいかない。
今であればリラックスして射撃訓練をすることが出来るのだ。

まず、俺は座椅子に腰を掛けた。
このポジションが、言わば俺の”それの”定位置と言うやつである。

何故ならば、ここであればカーテンを閉めなくても良いのである。
この角度で窓から見えるのは、通りを挟んだ隣の屋根位である。
という事は、隣の家の窓からは絶対に俺の姿は見えないはずなのだ。
存分にフリータイムを楽しむことが出来る。

俺は、右手の先にティシューがあることを確認すると、そそくさと手を・・・・。

その前に壁に据付の洋服ダンスの天井裏に潜ませている、取って置きの絵本を用意しようか？
いや、今日の俺には必要は無い。
想像の方が色が濃い。

俺は一旦止めた手を再び・・・

＊＊＊

僕が少し汗ばんでいる。
わかるぜその気持ち。熱いよな。俺の体も全開に・・・

＊＊＊

誰だ？

と思っている暇は無い。

見られてしまった。完全に見られてしまったか。

いや夕暮れ如きの明るさでは、詳細までは・・・。

とにかく、ここは途中でもお片付けだ。

何て、焦りでおどおどしている間に影が

「飛んだ～！」

トタン屋根を大きく蹴ったミニスカートは、脚を肩幅程度に広げ、両手は体に揃え掌で風を受けながら、華麗な前傾姿勢で飛び出した。

「あ～～」

俺はこの先の惨状に目を背けようと、背けようとしたのだったが、だが少しばかり重力が弱い気がする。

気のせいかミニスカートは、俺にまっしぐらに向かって来ている気がする。いや、間違いなく向っていた。

なんだー！

あぶないっ！

窓ガラスにぶつかるー！

んっ、あれ？

まほまほ？

いったい、どうなってんだ？

＜つづく＞

隣の屋根に立つ影は（後書き）

自主規制前後の意味は通じているでしょうか。

「スカウト」と書いて「旅立ち」（前書き）

えっ？俺がＡＶ男優に？

「スカウト」と書いて「旅立ち」

帰宅中のバス中で、俺、千乃　工口（くぐち）は幸運にも女子高生とそのば限りのお知り合いになってしまった。

俺は彼女との快楽に酔いしれている最中に、止むを得ない事情が起こってしまい、バスを降りることとことを余儀なくされた。

これで、彼女とのお別れと思っていたのだったが、なんと、俺の落とした定期券を拾い追いかけて来たのであった。

彼女も俺の後にバスを降りていたのだった。

俺は定期券を受け取ると、それをきっかけに何とかお知り合いに、と思ったのだったが、そんな場数に恵まれていない俺は、そのチャンスをいとも簡単に逃してしまった。

俺は帰宅後自室にて、彼女とのバス中での色々な想い出を肴に、事を起こしていた。

当然のことである。

しかし、何と俺の行為を隣の屋根上から、覗く奴がいたのだ。

俺は不覚にも見られてしまったのである。

そいつは俺の方を眺めながら、逆行を浴びてミニスカートのシルエットを揺らしている。

ところが、事件はそれでは治まらなかった。

なんと、そいつは、俺の部屋目掛けて飛び降りたのである。

なんだ〜！

あぶないっ！
窓にぶつかるー！

何で、そんな時にアヒル口なんだ！！

☆★　第　５　話　☆★
＊「スカウト」と書いて＊
☆★♀「旅立ち」♂☆★

俺は顔から血の気を引くのを感じ、思わず目を閉じていた。
多分、真っ青な顔で大きな口を開けていたことだろう。

俺の頭はこれから起こる惨事からの回避方法を、大脳の自動検索機能で探っていた。
だが、

おやっ？

想像していた音が、いつまで経っても耳に届いて来ないのだ。

何が起こったのか？

俺の脳内は疑問で膨張してしていく。
それを喰いとめるには、目を開け事実を認識するしかない。

怖い！

怖いが俺は、前へ進まなければならない。
俺は恐る恐る目を開けた。
すると？

「どぉぉぉーー！！！」

俺は、仰け反るところを、座椅子の背もたれに喰い留められた。
距離にして2メートル弱。窓を背にして、ミニスカート姿のもじもじした少女が一人立っているのだ。
逆光でもこれだけ近ければ、俺の視覚機能でもはっきりと捉える事が出来る。

今、俺の目の前のミニスカートは、シルエットの時のスカート丈と、寸分の狂いもなく一致している。

「う、う、うそだろ～」

俺は慌てて窓を確認する為に視線を移すが、決して窓は開いてはいない。それどころか鍵まで掛かっている。

ガラスが外れているのか？

俺の部屋の窓は汚れている。一目でわかる。
ドアの開いた音もしなかった。そんなに早くドアから入って来れるはずもない。

認めるしかなさそうだ、目の前の現実を！

どう言う物理現象が起きたのか、彼女は俺の部屋の窓をすり抜けたのだ。
それが現実だ！

現実を受け入れた俺に、遅ればせながら記憶の抽出と言う機能が

働いた。
目の前の彼女と結びつく記憶が、なんと俺に存在しているのだ。
それも、極最近のことだ。

んっ、あれ？
何処かで見たことのある顔だ・・・。

耳が隠れる程度の黒髪で、少し厚めのショートヘアー。
大きな黒い瞳に、今は真っ赤に染めているが白い透きとおる様な肌、全体的には細面にも関らず、少しだけふっくらとした頬。

漂う香りは、某メーカーのフィットレスシャンプーに違いない。

清楚な地味目の濃紺の制服、アンバランスなマイクロチックに仕立て上げられたミニスカート
ブラウスの胸元のボタンは、火照った体を冷やすかの様に、三つ開いている。
さっきは二つだったはずだ。

間違いない。
円らな瞳で小首を傾げる姿が愛らしい・・・まほまほ・・・だ。
たった今使わせて頂いたまほまほが目の前におられる。

「ま、まほまほ！」

俺は、叫んでいた。

いったい、一体、どうなってんだ？

俺は目を疑ったが同時に間に合ったと思った。本人の目の前であ

ればどれだけの快楽が・・・！
いや、何て後ろ向きな。本人と直接・・・。
ちょっと、待て。いかん、いかん。

今はそこではない。
何者かも分らないのに、簡単に催すな。

まほまほは、そんな浅ましい俺に向って口を開いた。

「そ、そんな言葉叫んではいけないれす。私(わらひ)はそんな、お下劣な名前ではないれす！」
言葉としては怒っていると取れるが、口調は愛らしい。

２m先のまほまほ、いや、彼女は俺に向って口を膨らませている。
怒ってるのか？

顔は既に真っ赤なので、口の形で判断するしかない。

多分怒っている！

俺は何で怒っているの変わらなかったが、女性には取り敢えず誤った方が無難だ。
考えるのは、それからだ。

「ご、ごめんなさい」

俺は素直に謝った。

「何でそんな言葉を簡単に口にするかなぁ～」

彼女は両手を腰にあて、俺を睨みるつける。
と言われても、バスの中で口走っていたのは他ならぬ目の前のまほま・・、いや彼女である。

「わかった、わかったから」

と宥めるのも間違っている気もする。不法侵入されているのは俺である。が、既に俺が全身で歓迎しているのは間違いない。

「まあ、今回は多めに見ることにするれす。もう、全く・・・」

彼女がぶつぶつ言っているので、俺は彼女に対して下手に出た。

「あの～、俺に何か、用があるのではないかと・・・？」

「そう、そうでしたのれす。
私(わらひ)の名前は、”ララカー・ミラミ・アポストロ　”と言います。
”ラミア”と呼ぶれす。千乃工口(ちのくぐち)、あなたをスカウトに来ましたれす」

彼女は、初めて凛々しい態度を取り、右腕を真直ぐに伸ばすと、俺に向って指さした。
目的を達したのか、安心した表情に変わった彼女の顔は、次第に持ち前の白い肌を取り戻していく。

「ちょっと、待ってくれ、スカウトってなんのことだ、？」
「私(わらひ)は、あなたを選びました。きっと、ＡＶ界で大成功を収めます・・・。ん～、多分、きっと・・・」

出だしは意外と威勢が良かったが、次第にトーンが下がっていく。
自信満々に話すならまだ説得力もあるのだが、可愛いだけに・・・。だが、そんな弱気に言われてはお人好しでも乗りはしない。

「ＡＶ界って、俺をＡＶ男優にでもしたいのか？」
「は、はいれす、いや、ＡＶ男優と言っても、この世界の・・・」

また、もじもじとし出した。
俺には、語尾がはっきりと聞き取れなかった。

「あいにくだが、ＡＶ男優になれと言われても、俺はまだ高校生だ。大学だって受験するし」

それに、バリバリの日本人顔で、名前が何んとか？って言う横文字なんて、胡散臭さ過ぎる。それに、何で、ラミア何だ！
名前との結びつきが全く分らん。可愛いが・・・。

もしかすると、外で怖いにいちゃんが待っているのかもしれない。
俺は真剣な顔で断った。

「だめ、・・・れ、す、か」
彼女は座っている俺に対して、泣きそうな顔で上目使いをして来た。

工口（くぐち）よ、ここで負けるな。女の泣き顔を信じるな。
ほら、涙が出ているか？

出ているかもしれない気がする。だが、ここは帰ってもらうのが無難と言うものだ。惜しい。

「惜しいが、いや、残念だが・・・他をあたって・・・」

そう言い放った言葉を途中で遮る様に、彼女は俺に飛び掛かって来た。そして、覆いかぶさって来ると、俺の言葉を唇で止めた。

俺の決意の牙城が、一気にくずれ落ちる。

唇って柔らかいんだ・・・。

彼女の重みが心地よい。全身が酔いしれていく。

俺は柔らかい体に溺れる様に、無意識に彼女の腰に手を回していた。

時間よ、一生止まれ！

その時、俺は彼女の可愛さに気を取られ、彼女が窓ガラスをすり抜けて来た事など、すっかり忘れていた。

そうだ、舌を入れることさえ、すっかり忘れていた。

＜つづく＞

無実の紙屑（前書き）

昇る。

無実の紙屑

高校からの帰宅後、俺、千乃工口（ちのくぐち）は自室にて一人、快楽を楽しんでいた。

だが、俺は事もあろうかその姿を隣の家の屋根から覗かれると言う、大失態を冒してしまったのである。

でも、そこまでであれば俺の数日のショックで済んだのであるが、事態はそれでは終わらなかった。

どう言う訳かそいつは、驚いたことに隣の屋根から飛び降り、俺の部屋の窓をすり抜け、部屋の中に飛び込んで来たのである。

しかも、そいつの正体は、バス中で色々とあった行きずりの女子高生”まほまほ”であった。

彼女はいきなり、俺をＡＶ男優にスカウトすると言いだす始末で、俺が断ろうとすると、俺の口を塞いでくるのであった。

なんと、自分の口を遣ってだ。

どうする工口（くぐち）！

☆★　第　７　話　♂　☆★

★☆　♀　無実の紙屑　★☆

彼女は、すっかりとろけてしまった俺から、唇を離すと一言告げた。

「ラミアじゃだめれすか？」

そして、彼女は俺の首にしがみ付いて来た。

俺の首筋に彼女の頬が触れる。俺はこの時初めて首筋に性感帯があることを知った。

しかし、最大の性感帯には遠く及ばない。

俺の”秘密兵器”は、いつにない生に押し当てられる感触を味わい、素早く俺の脳に伝達してくれた。

俺はまだお片づけの途中であった！

外出中である。

しかし、ここまで来るとさほど恥ずかしいと言う気持ちは失せてしまう。

それよりも、むしろ彼女はそれをずっと見て、何のリアクションもしなかった方が返って不思議である。

あんなに何度も顔を赤くしていたのに・・・。

俺は自分の思考で手一杯で、彼女の質問に答えるのを忘れていた。

何も答えない、いや、答えれない俺に再度彼女は尋ねてきた。

「ラミアと行ってくらさい」

吐息が俺の首筋を攻撃する。

俺はその言葉に、一通りの意味しか見つけられなかった。

「い、いきたい（れす）」

生まれて初めて、生唾を呑むと言う感覚を味わっていた俺は、受け取った意味に素直に答えた。

全身の血潮が音をたてて湧き立つのを感じる。

俺の意思はもうロックオンされているのだ。

彼女は、そんな俺をリードしていく。

「例ので、いいれすか」

「例って？」

どうやら、俺には選択肢があるようだ。

「いつものでいいれすか？」

いつものってなんだ？

俺の想像していたのは、一本道だ。まさか。そんなことも要求可能なのだろうか？

いや、まほまほから「いつもの」と言ってるんだ。

確実に事をこなすには、彼女の案に乗るのが間違いない。その先は、次の課題と言うことで、ここは無難に・・・。

「じゃあ、いつもの巻末の・・・」

「巻末？」

「ほら、押入れの天上裏の雑誌の巻末のあれ！

あれじゃないのれすか？　いつも座椅子に座って、それで・・・」

「うわぁー、それ以上は言わなくていい」

俺は彼女の声を遮った。血潮が顔に分散され、熱くなってきた。

俺はいつから覗かれていたんだろうか？

俺の戸惑う姿を見て彼女にも余裕が出来たのか、俺に突っ込みを

入れて来た。

「顔が赤いれす。ハハハ」

ちょっと腹が立つが、まほまほの笑った顔は初めてみた。

か・わ・い・い。凄く可愛い。食べてしまいたい位に・・・。

ここまで来れば、見られていた過去など小さなことだ。

「それで結構なんで、お願いします」

俺は既に素直である。

まほまほは俺を座椅子から押し倒し、床に寝かせると、俺の膝の上に跨り、体を擦らせながら、上へ上へと上って来る。

確かに巻末の形に近づいている。

俺の血潮は急激に出力を上げて行く。あっと言う間に出力は７０%だ。

まほまほは、さらに登頂を目指す。

その戦術は、三歩進んで二歩下がると言う、久しく国会でもお目にかかっていない牛歩戦術だ。

俺は5合目まで征服された頃には、出力状態は約１００%。ほぼ飽和状態に達していた。

まほまほは、5合目のひっか掛かりにぶつかると、既に予想していたかの様にそこで止まり、状態を倒して俺に抱きついてきた。

アレンジか?

ちょっと、体制が手本通りではにが、それはそれで良い感じだ。

まほまほは、左手を俺の首に回し、右手を下へと伸ばして行く。

若き血潮が一極集中し、出力は１１０％に。大気状態を超え、圧縮状態に入った。

すっかり、彼女のペースだ。

「では、行くのれす」

いっくて、確かにもう・・・ではあるが、そんな命令されても・・・。

だが、それが彼女の方式なのだろう。

俺は素直なんだ。

「心の準備はいいれすか」

「うん」

いつでもウエルカムだ。

「急に体が浮き上がりますが、安心して下さい」

なに、そんな感覚を得れるのか！

「私に捕まって決して放してはいけないのれす。体がぽよ～んと、遠くに吸い込まれて行ってしまいます」

「んっ？」

「大丈夫れす。あっと言う間に着きますから」

「着く」
「はいれす。直ぐに着きますれす」

それは、いきたいのやまやまだが、何か”いく”の意味が違っている気がする。
俺は、一応確認してみた。

「あの～”いく”と言うのは、どう言った意味のいくでしょうか？」
「えっ、行かないのれすか」

彼女は急に悲しそうな顔を俺に向けて来た。体が震えている。
そう思ったら、俺の顔に冷たいものが落ちてきた。

泣いてる・・・。
泣かせた・・・。
泣いている顔も可愛い・・・。

「こうなれば何処でも行ってやる！」
俺は覚悟を決めた。

まほまほは、俺の肩の上に顔を乗せ、俺の首に回していた左手を強く引き寄せた。
そして、既に下方ある右手を・・・

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
＜自主規制　５１文字程度＞
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「ぐっ」

俺は感覚のみの〇〇砲発射と共に、体が軽くなって行く。
周りの景色が、自分の位置関係を教えてくれた。

宙に浮いているのだ。

まほまほに抱きかかえられたまま、緩やかに垂直上昇している。
見下ろすと、緩やかなスピードにも関らず、竜の様に残像現象の様な尾を引いている。
俺は体が浮いていること気を取られていたが、良く見ると俺の部屋で俺が寝むっているではないか？

ま、まさか俺は、余りの気持ち良さに本当に昇天してしまったのか？
俺の心臓が、頭の先を尽き抜けそうな大きさで鼓動を打っている。
だが、俺が一番気になったことは、そこではなかった
俺は、即座に自身のある一部分を確認した。

「よかった」

俺は呟いた。

そこで、まほまほが俺の心配事が分ったのか、

「大丈夫れす。ちゃんとお片づけは済ませたれすよ」

どうやら、まほまほが”僕”を元の鞘に納めてくれたようだ。

しかし、安心したのも束の間。もう一つ大切なことが残されていたのだ。

床の上で仰向けになって眠っている俺とその隣にはティシュー箱あった。
そこまではいい。
だが、その横には乱雑に取り出した、使用したかの様な未だ無実のティシューが散っていた。

俺はすかさず叫んだ。

「頼む、責めてティシューを片付けさせてくれ～」

しかし、叫ぶ俺の唇をまほまほが、優しく舐めた。

まあ、どうでもいいか・・・。

図らずも、妹への話は事実となった。
前後の関係にずれはあるが。この際いいだろう・・・。

＜つづく＞

入口は3つ（前書き）

工口（くぐち）よ！お前は、どの入口がお好き？
そうか、やっぱり真中か。それが男の本能と言うものだ！

入口は3つ

隣の家の屋根の上。そこから窓ガラスをすり抜け、俺、千乃工口（ちのくぐち）の部屋に侵入して来たのは、下校中のバスで妙な形で知り合った女子高生”まほまほ”であった。

”まほまほ”と言うのは俺が勝手に付けた愛称で、彼女の名前は”ララカー・ミラミ・アポストロ　”。本人の要求する愛称は”ラミア”である。

ラミアの侵入目的は、なんとこの俺をＡＶ界にスカウトとすることであった。

受験生の俺がそれを安易に受け入れられる訳がない。興味はあるのだが・・・。

もちろん最初は俺なりの抵抗を試みたのである。だが、ラミアに抱きつかれた俺はちょっとした勘違いと彼女の魅力の元に、思わず承諾をしてしまった。

そして、俺はラミアに抱きつかれたまま彼女の巧みなテクニックの基に、あっと言う間に昇天と呼ばれる快楽に到達してしまったのだ。本当に宙を浮いている。

今、俺は自分の実態（からだ）を部屋に残したまま、精神はラミアの胸に抱かれて天に向って上昇中である。

いったい、俺は生きているのだろうか？

☆★　第　８　話　♂　☆★
★☆♀　入り口は三つ★☆

良く考えろ、工口(くぐち)よ。
俺の心臓はこんなに高らかに鼓動を打っているではないか。
これは生きている証ではないのか？

じゃあ、俺は幽体離脱と言うものを実体験しているのだろうか？
もしかすると今感じている鼓動は、あそこでバカ口を開けてティシューの横で寝た振りをこいている、あいつの心臓音ではないのだろうか？

少なくてもこの仮説は、俺の知識内での想像であり、全く確からしくはない。
こんな重大な問題を抱えたまま、未知の場所に連れて行かれてしまっては、不安でしょうがない。

よし、聞いてみよう。まほまほに！

俺は悩むより聞くことを選択した。だが、この選択が悲劇を生むことになるのだ。

「まほまほ、聞きたいことがあるんだけど？」

その時、俺はついうっかり彼女を”まほまほ”と呼んでしまった。
”まほまほ”と言う言葉の裏に何かが隠れていると気付いていたのにだ。
学習能力の低い、受験生だった・・・。

俺が彼女をそう呼んだ瞬間から、彼女の鼓動は急に激しくなり、

それと同時にブラウスから肌蹴た胸が赤味を帯びていった。体温の上昇も感じる。

それは、幸運にも彼女の胸の狭間に位置していた俺の右頬には、自分の身体の変化の様に伝わって来た。

幸運が一瞬にして不運へと移行する。

しまった！

と、思った時には既に遅かった。

「いけませ～ん！！」

彼女は叫びと共に、全身が震え出し。俺の首に回していた手に力を込めてきたのだ。

「うぐっ、　うっ、手、手を・・・」

まほまほの絞め技は、見掛けによらず強烈であった。

上昇している最中では、彼女の腰に回している手を離す訳にもいかない。

俺は何の防御も出来ずに、一瞬にして落とされてしまったのだ。

そのまま。暫く意識を失ってしまった。

・・・それからどれ位の時間が経ったのかさっぱり分らない・・・。

気が付いた時には、まほまほが、口に唾を貯めながら一生懸命に独り言を言っていた。

ボッとしている俺には、良く聞き取れない。

進行方向には、雲を突き抜けた山の頂が見えている。
相当標高の高そうな山だ。ここはヒマラヤだろうか？
そう思った。

まほまほは、そのまま山の方に進んで行くと、頂きの少し下にある洞窟の中に降り立った。

「・・・と、言うことなのれす」
まほまほの独り言も、到着と共に図った様に終わった。

「ぁ、ぁの～」
聞きたいことは山程あるのだが、目覚の悪い俺は頭の機能が上手く働かない。
当然だ。普通に眠ったわけではない。落とされていたのだ。

しかし、そんな俺にまほまほは気付いていない。

「大丈夫れす。あとは来る途中説明した通りなのです。先に行って待ってるのれす」
マイペースに事を運んで行く。

まほまほの言葉から想像すると、どうやら俺が落ちていた間に何らかの説明をしてくれていたのは明白である。
決して、独り言を言っていたのではなっかようだ。

「も、も～」

もう一度説明をして貰わねばと思うのだが、上手く言葉にならない。

身体に異常がある時は強い意志が頼みなのだが、ボッとしていては強い意志も現れない。

工口(くぐち)よ、気持ちを入れろ！

「もう～」

俺はリトライした。だが、

「牛さんみたいになっれますね～。そんなに不安にならなくても大丈夫れすよ。ラミアを信じてくらさい」

出鼻をくじかれてしまった。

まほまほは俺を安心させようと飛びっきりの笑顔を俺に向けて来た。俺が上手く喋れないのを不安がっているせいと勘違いしている様だ。

「ぁ、ぁの～、も～う・・・」

もう・・・いいか。

もう一度説明をしてもらはなければならないとは、理屈では分っているのだが・・・、何か少しずつどうでも良くなってくる。

まほまほは、あどけない顔で続ける。

「ＡＶと言う扉を開けてくらさいね。牛さん！宜しくお願いしますれす」

まほまほの俺を信じ切った嬉しそうな目付きには、俺の弱い意志などではどうにもならない。

「待ってるれすね！！！」

まほまほは、綺麗に脚を揃えて小首を傾げる。

可愛い・・・。

俺はまほまほの可愛さと、女の子に待たれると言う興奮に惑わされ、ついに心まで落とされてしまった。

俺は行き当たりばったりで、何んとかなる様な気持ちになってしまい、

「ぅん・・・」

頷いてしまった。

まほまほは俺の応えに目を輝かせ、深々と頭を下げると、直ぐに鼻歌交じりに飛び立ってしまった。

あっと言う間に消えていく・・・。

俺は一人洞窟の中に残されてしまった。

まだ、頭が良く回らない。

「ここは、何処なんだ?」

常識的な場所でないことは残念ながら分ってしまう。

俺は少し休んでから、辺りをうろうろと歩き始めた。

洞窟の入口から外を見ると、眼下には一面の雲海が広がっている。

とっても歩いて降りられる様な所ではなさそうだ。

仮に降りれたとしても何処に行きつくか全く不明だ。

頭が現状を把握していくにつれて、俺に不安が襲って来る。

この状況を打開したいと思った俺は、前向きに夢である事に期待

を始める。

「そうだ！　きっと、夢なんだ！」

俺は夢であることを願った。

しかし、理論がそれを許さない。

夢の中で絞め技に落とされてしまう何て事があるだろうか？

それは、俺の人生１８年の夢経験からはとっても考えにくい。

それにこれが夢なら、俺は目が覚めた時に久々の不快な湿気を一部位に感じ、頭を痛めることに違いない。

それに、洗濯をどうするかが問題だ！

いやいや、そうではない。現実逃避から、余計なことを考えてしまった。

この状況を打破出来るのであれば、そんなことは小さな問題である。

俺の頭は既に完全復活をしていた。良く働いている。

それでも、夢であってくれと、漫画の世界の様に自分の頬をつねってみた。

いたい！この痛さは夢ではなさそうだ。

受け止めなければならない。

仮に夢だとしても今、俺のするべきことは、現状を把握すること以外に優先されることはないはずだ。

俺は再び辺りの確認を始めようと気持ちを切り替えようとした。

だが、こんな状況でもだ若い性（さが）と言うものは恐ろしいものだ。他の事象を優先しようとする。

いつの間にか”俺&僕”の”W頭”は仲良く、まほまほのあらゆる感触を回想している。

快楽が俺を誘惑する。

うん？　まただ。現実逃避しようとしている。

俺はぐっと下腹に力を込めて、理性で性を抑えながら再びうろうろと辺りの様子の確認を始めた。

洞窟の奥行きは４０～５０メートルと言ったところだろうか。

こんな訳の分からないところにあるのに、何故が洞窟内は蝋燭の光に照らされている。

突き当りには教室位のスペースがあり、岩壁には3つの木製のドアがある。

ドアは重厚に出来ていて。重々しさが感じられる。

この扉を開けることの重大さが伝わってくる。

ドアの横にはそれぞれ何語であるのか見当もつかないが、古臭い黒ずんだ木製の板に奇妙な文字が長々と書かれている。

当然、読もうにも読むことが出来ない。

ただ、扉の上にあるプレートだけが俺にも読むことが可能であった。

そのプレートだけが、妙に新しいアクリル製なのである。

とってつけた様に見えて、胡散臭い。

だが、この先の俺の判断はこの文字意外に頼れるものはなさそうだ。

右の扉のプレートは白いプレートに黒マジックで”ＲＴ”と書かれおり、左の扉には、青いプレートに”ＮＶ”と書かれている。そして真ん中のプレートには”ＡＶ”と書かれている。

「まほまほの言ってたのは、このことか？」

やはり、俺はまほまほと呼んでしまっている。

まほまほの言っていた”ＡＶ”の扉とは、恐らくこの扉のことであろう。

他に文字らしきものは、洞窟内には見当たらない。

しかし、まほまほはここに来る途中に、他に何かを説明していたのかもしれない。

それが分らないまま、この扉を開けてもいいものだろうか？

今更遅いが、しがみ付いてでももう一度説明をしてもらうべきだった。

後悔が俺を襲う。

俺は暫く考えていた。だが、結論が出ない。当然である。

ふと見ると蝋燭はかなり短くなっている。

蝋燭が短くなるにつれて、外も暗くなっていっている気がする。

「この蝋燭の灯が消える前に結論を出せと言うことだろうか？」

此処は恐らく高所にあるのだろうが、寒さを感じないことは救いであった。だが、いつまでも此処に居る訳にはいかない。
食べ物もなければ、明かりも消えかけているのだ。

こうなったら、初志貫徹、星一徹だ！
初心に頑固に従おう。心情的にも真ん中に入りたい。これが男の性と言うものだ！！

俺は”ＡＶ”と書かれた扉のノブに手を掛け、固唾を飲んだ。

そして・・・思い切って！
ゆっくりと開けた。

扉の中は洞窟の様に真っ暗である。だが、良く見ると遥か彼方に点の様な光が感じられる。
ひんやりとした空気が当たるかと思いきや、結構気持ち良く温かい。

あそこまで行けということだろうか？
そう思った時だった。

「なに！」
急激な引力を感じた。

「うぉー」
俺は掃除機に吸い込まれる様に中に引き込まれた。

「助けてくれー！」

唯一助けてくれそうな、まほまほはいない。
それでも、俺の脳裏にはまほまほが浮かんでた。

洞窟の先は水平にみえるのだが、真っ逆様に落ちている間隔だ。
次第に加速していく。

「あ～～～～」

俺は、またしても意識を失ってしまった。

・・・そして・・・

やけに音がうるさい。
俺は気持ち良い眠りを妨げられることに不快を感じながら、ゆっくりと目を開け・・・。
目を開けかけたところに、いきなり飛びこんで来た視覚に驚いた。

俺は即座に大きな目をパチリと開いた。

群集が俺の上を駆け抜けているのだ。

「うぉ～！！」

俺は踏まれないように慌てて起き上がった。

「なんだこれは！」

戦争なのか、バーゲンなのか俺の周りは数百、いや数千の男女が

入り乱れて行き来をしている。

興奮の表情に、血走った目。

体が震えている奴もいる。

駄目だ、眩暈がしそうだ。

「考えられねぇ～！」

しかし、俺の叫びは雑踏に消えていく。

＜つづく＞

千逗里緒（前書き）

ここは何処だ？
何で怒ってるの？

千逗里緒

高校から帰宅中、バスの中で仮初めの出会いと思っていた極上の少女は、実はこの俺、千乃工口≪ちのくぐち≫をＡＶ界に勧誘することを目的に接近して来たスカウトであった。

彼女の名前は”ララカー・ミラミ・アポストロ　”。本人の要求する愛称は”ラミア”である。

ただ、本人は何故か嫌っているのだが、俺の中では既に”まほまほ”と言う名前で落ち着いている。

俺と彼女の間には、初めて会ったバス中から自分の部屋の中に至るまで、色々な出来事があったのだが、結局俺は彼女の胸に抱かれ、ＡＶ界を目指し天に向かって登る破目になってしまった。

そんな訳の分からない最中である。

俺は不覚にも、不注意によりあっさりと気を失ってしまったのだ。

俺が連れて来られたのは、雲を突き抜ける高い山の山頂近くの洞窟。

気を失った俺は、彼女から肝心な説明を何も聞けずじまい。

しかし、彼女は充分に説明をしたつもりで、俺を置いてけぼりにして満足げに去って行ってしまった。

独り残された俺が洞窟内を探索すると、中にあるのは３つの扉だけ。

どうやら、その一つを選択しなければ、一生そこから抜け出せないようである。

そこで、俺は何の予備知識もないまま彼女が別れ際に残した言葉のみを信じ、”ＡＶ”と言う扉を思いきって開けてみたのだ。

すると、どうだろう。

扉の中からは突然と物凄い吸引力が発生したのである。

俺は当然、物凄い勢いで吸い込まれてしまう始末で、なんとこの日二度目となる気を失ってしまったのだ。

そして、俺が目が覚めたところは・・・。

★☆　第２章　★☆

☆★　第１話　☆★

★☆　♂千逗里緒♀　★☆

人、人、人・・・。

俺は人間に対する恐怖を生まれて初めて感じていた。

テレビで観た事があるイナゴの大群な中に一人飛び込んだ様な感覚である。

どんな事があると、こんな大勢の人が血相を変えた表情で走り回る事になるのだろうか。

戦争か内乱か？

しかし、それを思わせるには物理的要件が俺の感覚器には伝わってこない。

何かの災害でも起こったのだろうか？

いや、それも上記と同じ理由で却下だ。

じゃあ、本当に前代未聞のバーゲンセールだろうか？

それにしては、動く方向がランダムではないか。

俺は不覚にも一瞬の叫び声を上げてしまったその後は、身動きを取ることが出来ずに、暫くその場で思考のみを働かせていた。

すると、急速に人口密度が低くなっていく。

よく見ると、男女が組みを成し、去っていくではないか。

次第に霧が晴れて来たように見晴らしが良くなり、辺りの様子が分かってくる。

外壁は石に煉瓦、それにカラフルな塗り壁。屋根は素焼の瓦の三角屋根。どこかヨーロッパを思わせる街並。その並を二つに仕切るかの様に縦長に存在する石畳の広場。

広場と言うよりも果てしなく長い直線の道路と言った方が正確かもしれない。

幅は１００m程度だが、長さの一方は少し先にある、山の様に雲を突き抜けた真っ白な近代的な塔までで。しかし、もう一方は地平線と”T”の字を作っている。遥か彼方だ。

この、恐らくは道路。

今は歩行者天国なのか、初めから道路ではなかったのか、道路と言う使われ方はしていない。

イナゴの大群の住みかだ。

本当に俺は何処に来てしまったのだろうか。

そんなことを茫然と考えている間にも、血眼の男女が対になって掃けて行く。

しかし、残された人々の目付きは、一層鋭さを増している。

恐ろしい。本当に恐ろしい顔付きだ。

絶対関わりたくない。
そう思っていた時であった。

「あの～すみません。わ、私と組んで下さい！お願いします」
多少噛んではいるが、はきはきとした大きな声である。

俺はその声に振り向くと、声の主は下げていた頭を上げた。

目の前に立っているのは、俺と同じ年齢位の女の子であった。
利発そうで清楚な顔立ちに、細身ではあるが陸上競技をやっていそうな引き締まった体躯。

本来活発なのであろうが、今は顔から首まで素肌の出ているところ全てが真っ赤で、極度の緊張状態が伺える。

服装は、行き交う人達の色目かしい格好から比べると、至って質素である。
年齢も周りの人達よりも少し若く見える。と、言うことは俺もこの場では俺も若い部類になる。

そして、目付はこの場に全くそぐわない。おどおどしており完全に踊ってしまっている。

俺は彼女を見た瞬間から、俺の不安はたちまちの内に何処かに飛んでいった。

それは、スケベ心からではない。
彼女のその緊張感が俺の不安を遥かに上回っていたからである。

「お、お願いします」

再び、低姿勢に俺に向って頭を下げて来た。

ナンパか？

いや、ナンパにしたら見た目も行動も気持ちが良い位に硬派である。

それに、追い詰められた様な行動にも見える。

「お願いって、な、何をでしょうか？」

俺は彼女の姿勢が姿勢なだけに、自然と腰が低くなり、丁重に彼女に訪ねてみた。

この質問が可也まずかったようだ。彼女は赤い顔をさらに赤くして、

「な、何をって、ふざけてんの！」

先程までの低姿勢も何処へやら、一転、俺に向って怒りだした。

・・・ど、どう言うことだろうか？

俺をからかっているのだろうか？

いや、この真面目一途そうなタイプの人間が、そんな器用なことが出来るとはとっても思えない。

「そんな、ことはないです」

俺は両手を正面に出し、手を振りながら一応否定をしてみた。

「わ、私が初めてだからってからかってるのね！あんただって、そう変わらないでしょう」

「い、いや別に、そんな訳では」

次第に強まる彼女の剣幕に俺は気圧されていく。

・・・拙い。何かの誤解が生まれている。だが、解決するにも原因を見つけられない。

どうする、工口(くぐち)。

その時だった、俺は彼女の首から赤い紐でぶら下げられているクリアケースが目に入った。

中には写真付きの名札入れてある。

・・・そう言えば、みんなぶら下げているではないか。

ぶら下げていないのは俺だけである。

俺はそこに誤解の種が埋まっているのではないかと閃いた。

そして、俺は彼女の名札を読もうと目を凝らした。

「２２４卯年度　第一回　無差別オープン大会　登録許可書　い－１０５６番

女優コード　０１９１９１１４　千逗里緒(せんずりお)」

と書かれている。

俺の頭に引っ掛かったのは、その中の”女優”と言う二文字である。

・・・女優？

取り敢えず俺は、自分の体にぶら下がっているべく名札の辺りに手をあてて見た。

彼女の名札に視線を置いたままである。

これはいい勘であった。
彼女は”これ以上驚きようがない”と言う顔を俺に見せてきた。

途端、彼女はもじもじとし出し、怒っていた態度も恥ずかしそうな態度に瞬時に変わってしまう。
怒りの赤さが引いて行き、若干の恥ずかしさの赤さに納まり始める。

「えっ、出場者じゃないの・・・」

彼女はそう呟くと、途端、肩を落とし落胆の姿を見せている。次第に顔が青くなっていく。

・・・出場者って、一体何のだろうか。
ここで血相を変えて走り回っていたのは、何かの競技だったのだろうか？

俺は急遽色んなアンテナを張り巡らすが、何も捉える事が出来ない。
いや、唯一感じられたことがあった。
意外に目の前の女の子がスレンダーで可愛いことである。

しかし、この状況で仲良くなれるとは全く思えない。でも、敵は少ない方が良い。

こんな時は状況が掴めなくても取り敢えず、慰めることだ。
そう思い、

「そんな、気を落とさずに、きっと良い事もあるから」

励ましたつもりだ。
つもりだった。それが、彼女の何かに着火してしまった様だ。
何かに気が付いた様な表情で、再び怒り出した。どうやら気が短い様だ。

「何で、出場者じゃないのに、こんなところでウロウロしているのよ」

「ウロウロって・・・」
そんなことと言われても俺も好きでここに居る訳では無い。

「見てよ、もう目惜しい人なんていなくなっちゃったじゃないの。あんあたのせいで！」

凄い剣幕だ。
それには、俺も腹が立つ。
こっちとしては訳も分からずに一方的に引いているわけだ。それに、慰めようとまでしたのだ。

それを、何て言う言い方だ。俺の何処が悪い！
と心では思いながら、

「そ、そんな俺はここに立っていただけで、勝手に声を掛けて来たのは・・・」
控え目に言ってみた。

すると、

「私が悪いって言うの！もういい！」

一応自分にも否があると認めたのだろうか？
ぶつぶつ言っている。

そして、彼女は素早く踵を返すと、
「何でこんなところに居るのよ。普通いないでしょ。参加しない人が・・・・」
抑えきれない怒りを小言に変えて、立ち去って行った。

その頃には、先ほどまでの賑やかさは無かった事の様に、空っ風が石畳の上の砂埃を巻き上げていた。

まばらに通り過ぎて行くのは、僅か数分前まで、血相を変えて血走った目付きであった人々とは対照的な、落胆の目付きの元気のない人々である。

辺りはすっかりに静かになっていた。

それで、俺は我に返った。
そうだ、ここは・・・何処なんだ？

あっ、そうだ。
もしかして、ここがＡＶ界？

まさか・・・。
みんな服を着ているし・・・。

＜つづく＞

つままれて、つままれたのか（前書き）

俺は騙されたのか？
取り敢えず何か・・・。

つままれて、つままれたのか

高校から帰宅中、バスの中で仮初めの出会いと思っていた極上の少女は、実はこの俺、千乃工口（ちのくぐち）をＡＶ界に勧誘することを目的に接近して来た”ララカー・ミラミ・アポストロ　（ラミア）”と言うスカウトであった。

ただ、俺は勝手に”まほまほ”と呼んでいる。

俺は自分の弱さと若き血潮の後押しにより、思わず彼女の勧誘に乗ってしまい、いきなり天へ向かって昇る破目になってしまった。

そして、その途中であった。

俺とまほまほの間で、ちょっとした事故（いきちがい）が起こってしまうのだ。

”その結果？”なのか”騙された？”のかは不明であるが、俺は一人で見ず知らずの世界に来てしまったのだ。

どうしよう・・・。

★☆　第　２　話　★☆

☆★♂つままれて♀☆★

★☆つままれたのか★☆

静まり返る街、空気、石畳。

兵（つわもの）どもが夢の跡・・・

仙谷の世は去った。いや、戦国の世は去った。

一体、あの騒ぎは何であったのか？

いや、そんなこと今となってはどうでもいい。これからどうする

かだ。

この何とも言えない静けさが、俺の後悔を後押しする。

って言うか、そもそも此処は何処だ？

俺が何で此処に居るんだ？

・？

その答えは１秒で出た。

そうだ、まほまほだ！

まほまほを探さねばだ！

彼女は確かに先に行って、俺を待ってると言ったのだ。

ついでに、信じれとも言っていた。

説明は殆ど聞けなかったにせよ、俺は言われた通り「ＡＶと言う扉」を開けたんだ。

違う扉を開けなかったか？

いや、そんなことは無い。

それ位のことが出来ないで、マークシートの試験に対応が出来るか！

と、言うことはだ。

ここがＡＶ界と考えるのが素直と言うものだ、と俺は思う。

しかし、どう考えてもこのＡＶ界が、アダルトビデオ界とは思えない。

ＡＶ界＝アダルトビデオ界と言うのは、俺の勝手な思い込みなのだろうか？

確かに、まほまほに連れて行かれる時に幽体離脱の様な体験を俺はしている。

アダルトビデオ界で活躍するのに、幽体離脱は必要ない。
むしろ、実体がなければ活躍が出来ない。

いや、だが今の俺には実体がある。

俺は自分の頬をあり来たりにつねってみた。
痛い・・・。

つねってから気付いた。

俺は既に、扉を開ける前に一度頬をつねっていた。
つねるだけでは信用が出来ない。

次に俺は、道路標識らしき三角看板にチョップをかましてみた。

・・・手が痺れる位に痛い。

次に電柱らしきものにぶつかってみた。

・・・額をぶつけるべきではなかった。

間違いない。ふらふらする。
俺は物理的に存在している。

と言うことは幽体離脱は気のせいで、ここは本当に俺が先月の誕生日で１８歳になった”Ｒ１８記念”で、お世話になろうとしていたアダルトビデオ界の撮影現場の可能性も・・・？

いや、今までのいきさつと、この広大な景色から、それは残念ながらなさそうだ。

と言うことは・・・？

幽体であった俺が実態を持っているのはどう言うことだ？

俺は天を見上げた。特に意味はない。

これが異世界と言うやつなのだろうか！

理屈で納得いかないことは、そう考えた方が納得し易い。

この場所が、何の範疇に属するかは分らないが、最低でもこの世界は俺の住んでいた世界とは違うのは間違いなさそうだ。

そうであれば、とにかくまほまほを探して、一旦、元の世界に戻してもらおう。

そして、もう一度、まほまほと話し合おう。

一時の気の迷いだったと謝ろう。きっと分ってくれる・・・？

そう、信じよう・・・。

そうだ、最低でも大学卒業までは待ってくれと嘘をいてうやむやにすると言う、大人的な解決策もある。

それから、俺はまほまほを探してこの奇妙な街中を歩き回った。

此処が本当にＡＶ界と言う何処かの世界なのだろうか？と思いながら・・・。

まだ、日は高い。南中を少し越えたところである。
夜になるまでには時間がある。

そう言えば、俺が自分の部屋から宙に浮いたのは日が暮れる寸前であったのだが・・・。
やはり、異世界と言うところなのか？
もしかすると、地球を６０度位西移動したのかもしれない。
それはそれで、同じ位奇妙なことで恐ろしい。

俺は暫くまほまほを探して歩いていると、この世界が街のデザインが古めかしいこと以外はそんなに、俺の住んでいた世界と大差ない様に思えてきた。

出だしが悪かっただけに、イメージが悪かったのだが、冷静に見ると奇麗な街並だ。
普通に人間の俺が住めそうな世界である。

ただ、ひしめき合って建てられている建物の数の割には、何故か人通りが少ない。
それに、通り過ぎる人が年配の人が多いところも気になるところだ。

行き交う人々は、肌の色は日本人そのものなのだが、目と髪の色がアニメチックと言う、お宅には堪らない容姿であるのも目を奪われる。

お宅系ではない俺には、初め多少違和感もあったのだが、見慣れると意外と爽やかに見えて好感が持てる。

それに、数は少ないが若い女の子は、みんなキュートだ。可愛い。

それこそ、アニメのキャラクターそのものと言っても過言ではない。
俺もアニメお宅の気持ちが、かなり勢いで理解し始めていた。

しかし、そんなことを考えられたのも、陽の明るい内であった。
陽の明るい内は俺も希望を持って、街の様子を多少は眺める余裕もあったのだが、さすがに陽が陰ってくると次第に焦りが出てくる。

このままでは、食事をとれる見込みもなければ、今夜寝る所もないのだ。
そう、俺にはお金が一円も無いのである。
しかし、仮に百万円あったせよ、ここで日本円が使えるとはとっても思えない。

どうすればいいんだ・・・。

・・・どうにもならない。

頼みのまほまほは此処にもいないのだ。

最悪だ・・・。

キツネにつままれたのだろうか？
いや、俺はキツネよりたちの悪い”まほまほ”に、つままれたのだ。
きっと・・・。

つままれて気持ち良くなってしまったせいで、つままれたのだ。
気持ち良くなって、前後の見境が付かなくなってしまった愚か者だ・・・。

この訳の分らないところで、一体どうすればいいんだ・・・。

俺は襲って来る恐怖を飲み込み、一生懸命この場を凌ぐ事に気持ちを集中させようとするのだが、この世界に閉じ込められた感はそう簡単に拭い去ることは出来ない。

夕暮れが漬物石の様に重く俺に圧し掛かる。
このまま、この世界に漬かってしまうのか・・・。
漬かれるのなら、まだしもだ。

俺は微かな望みになってしまったが、それでも尚、まほまほを探し続けた。
そして、疲れと空腹感が俺を襲って行った。

人間こんな切羽詰った時でも腹は減るのだ。
しかし、この空腹が恐怖から気持ちを逸らすのに一役買うことになった。
お腹を満たして、今を凌ぐ事に気持ちが移り変わって行った。

何んとか、食べ物を・・・。

俺はこう言う場面で力を発揮する人々を地下や川っぷちで見たことがある。

真似てみようか？

俺は新入りとして同朋を探してみた。
しかし、辺りを見回しても浮浪様（ぷーさま）は見当たらない。
俺はこの世界で”初”の浮浪様かもしれない。この世界で浮浪様

は成り立つのだろうか・・・。

取り敢えず俺は、無暗に歩きまわることを止め、小川に掛かれた石橋にある歩道に腰を掛けることにした。
そして、疲れた脚を休ませながら、空腹を満たすことに思考を巡らせた。

何か食事を取る方法はないか？

大道芸をやってみるか？
いや無芸大食だ。

弾き語り？
楽器が無い。あっても出来る楽器もリコーダー位のものだ。

通り掛かりの人に恵んでもらうか？
そんな度胸はない。

交番みたいなところを探すか？
そもそも此処のシステムも分らないのに、大丈夫か？

では、食い逃げか、盗人になるか・・・。
まだ、そこまでは追い詰められていない・・・。

そんな、全ての可能性を否定した、絶望を感じている時だった・・・。

「い～しや～きいも～、いも。ほっかほかだよ～」
と、言う声がいきなり俺の耳に届いた。

普通、遠くの方から徐々に聞こえてくるだろう、って言うか石焼き芋屋が存在するんだ・・・。
思いもよらぬ存在に俺はその声のする方に目を奪われた。
声と共に匂いも空気を媒介に伝達されて来る。
堪らない香りだ・・・。
そして、香りと共に、石焼き芋屋は小川の前の集合住宅らしき建物に挟まれた細い道から姿を現した。
その姿は時代を思わせる手引きの二輪車に煙突付きの鉄窯。
俺は初めて見るリヤカーとか言う荷物車子式の焼き芋屋にホンの少しの感動と、香ばしい匂いに大きく誘惑されながら目が釘付けになっていた。ＬＯＣＫ　ＯＮ！
石焼芋屋は、次第に俺の方に近づいて来る。
口の中は唾液の洪水で、唇と言う防波堤から溢れ出そうである。
俺はその横に並ぶ二輪車の速度に合わせて、滑らかに首を動かした。
すると、その姿を見られてしまったのかどうかは分らないが、石焼芋リヤカーの動力源は俺の前で停止したのだ。
それで、初めて俺は石焼き芋屋のリヤカーは、人が引いていることに気が付いた。
石焼き芋屋は、ヨレヨレの綿のパンツに、紺の毛糸のカーデガンで、白いタオルで頭から被り顎の下で結んでいる。
てっきりおっさんだと思っていたが、以外にも俺の予想を裏切って身のこなしが若い。

少しだけ見える髪の毛は街灯に照らされて、青みがかって見える。
そのおっさん兄ちゃんが、俺に向って俯(うつむ)いていた顔を披露した。
俺の次に良い男である。

「どうしたんかね～少年、そんなとこ座って」

と、笑顔を見せて来た。
これを俺は「敵意が無いですよ～」と言う、意志表示と受け止めた。

「はい、腹の底まで染み渡ります」
意味が食い違っていることは重々分っているのだが、俺の今の気持ちが全面に出てしまっていた。

◆その頃◆
まほまほは？　と言えば・・・。
工口(くぐち)と約束をしたはずの役場の前を、泣きそうな顔で一人うろうろしとしていた。

「来ないれす。
どうしてなのれすか。
約束したれす・・・」

役場の入口の扉は既に閉まっている。
まほまほは仕方なく外で待つ破目になってしまったのだ。

「やっと、27人目で初めてスカウト出来たのに・・・。
良い人だと思ったのに・・・

もしかして、
ＡＶの扉を開けずに、ＲＴの扉を開けて帰っちゃたのれすかぁ～」
と叫ぶが帰る度胸もなく、この後もまほまほはずっと、工口（くぐち）を待ち続けるのであった。
＜つづく＞

すごいじゃないか（前書き）

やっぱり、ここは異世界。そして俺は・・・。

すごいじゃないか

俺、千乃工口（ちのくぐち）は、　大学受験を間近に迎えた高校三年生。

そんな大切な身でありながら、学校帰りのバス中で、まんまと”ララカー・ミラミ・アポストロ　”と名乗る女の子（俺は”まほまほ”と呼んでいるが彼女は”ラミア”と呼べと言う）のエロ仕掛けに乗ってしまい、ＡＶ界へのスカウトを受け入れてしまった。

そして、俺は彼女のなされるがままに、ＡＶ界へと連れて行かれてしまうのだ。

だが、俺はすんなりとＡＶ界には辿りつけなかった。移動途中に、ちょっとした行き違いで気を失ってしまったのである。

俺が目を覚ますと、「先に行って待つれす」と、微笑んで言った彼女の姿（まほまほ）は何処にもなかった。

それどころか、俺の目の覚めたところは見知らぬ雑踏の中なのだ。

そこは、俺が予想していた人並み程度に知っているＡＶ界（＝アダルトビデオ界）と言う世界ではなく、どうやら未知の世界、恐らくは異世界と言うことろの様である。

俺はたった一人で、見ず知らずの世界に来てしまったのだ。

この先、俺はどうしたら良いのだろうか？

今夜泊まる所もなければ、食べるものもない。

せめて、空腹だけでも何んとかしたい。

途方に暮れていたそんな時だった。
目の前を石焼き芋屋のリヤカーを引いた兄ちゃんが通り掛かり、

「どうしたんかね～少年、そんなとこ座って」
と、俺に話しかけてきた。

それに、俺は
「はい、腹の底まで染み渡ります」
意味が食い違っているが、俺の今の気持ちを全面に出してみた・・・。

★☆　第３話　★☆
☆★　すごいじゃ♂　☆★
★☆　♀　ないか　★☆

「そうかい、いい匂いだろう。この匂いの素晴らしさが分るとは嬉しいね」

と言いながら、石焼き芋屋のおっさん兄ちゃんは、俺の顔をしげしげと覗きこんで来た。
そして、少し目を細めたかと思うと、何かに気づい様な顔で俺に向って、更に好意的な眼差しを向けてきた。

「そうか～、君も”あいかた”を見つけれなかったんだね」
そう言って来る言葉には仲間意識が感じられる。

”あいかた”？

”あいかた”とはどう言うことだろうか。

俺にはさっぱり意味が分らないのだが、彼が好意的なのは間違いなさそうである。

取り敢えず俺は立ち上がり、道路の反対側に存在する焼き芋に近づいた。違った、焼き芋屋のおっさんぽい兄ちゃんに近づいた。

この空腹な中、食べ物を豊富に持った人が好意的に屋って来た訳だ。このチャンスを逃す訳にはいかない。

後、一歩で焼き芋に手が届く距離である。

「えっ、”あいかた”ですか？」

「あれ？君はさっき、競技中に”お見合い大通り広場”で、倒れていた少年じゃないのかい？」

んっ、”競技中に”お見合い大通り広場”で、倒れていた少年”？

その人物に俺が該当するのだろうか。

ここは該当した方が、俺にとっては幸福なのは間違いない。

俺は好意的にその質問の答えに自分を当てはめてみた。

”倒れていた少年”と言う部分は、確かに俺はこの世界に来た時に石畳の広い通りで倒れていたのだ。

と、言うことは”倒れていた少年”と言うのは該当する。

それに、もしあの石畳の通りが”大通り広場”と言うところであれば、これも該当する。

確かに、広い通りであった。

あの通りには”お見合い”と言う冠が付くのだろうか？

そう言えば、男女がペアになって掃けて行った。

後は”競技中”と言う部分だが、あの血眼の形相で走り回っていた人達は競技中だったと言うことなのだろうか？
確かに、戦争やバーゲンよりも意味は通じそうだ。

そこで、俺は焼き芋屋の兄ちゃんに訪ねてみた。

「あの～、”大通り広場”の人ゴミは何かの競技だったのですか？」

「あれ～っ、君は競技の参加者じゃなかったんだ？
てっきり僕と一緒で、相方が見つからなくて、一人で気落ちしてるのかと思ったんだがな～、違ってたかな？」

「競技に参加するも何も、目が覚めると人ゴミの中で寝ていて、僕にもどう言うことなのかさっぱり分らないんです」

・・・さっぱりと言うのは、ウソになるが、この際この人にすがってみるしかない。途方に暮れている状況を最大限伝えてみよう。
俺はそう思った。

「それは、どう言うことなんだい？」
おっさんに兄ちゃんは、そう聞いて来た。
いい展開だ。

「実は・・・」
俺は今まで起こったこと、下校中から今現在に至るまで、一部不都合な行為の部分を包み隠して話して見た。
もちろん、何かの手掛りが掴める様に、まほまほのことは本名いや、本名は覚えていないので略称の”ラミア”と告げた。

そして、そのついでに今空腹状態で、今日、泊まるところがないことも、もちろん告げた。

すると、

「すごいじゃないかー、君！！」

いきなり、焼き芋屋のおっさん兄ちゃんは、感動を言葉にして、俺の肩を両手で掴んだ。

そして、慌てて後ろを振り向くと、ホカホカの特大の焼き芋を1個取り出した。

「お近づきのしるし」

そう言って、新聞と思われる紙にくるんで俺に差し出して来たのである。

この散々な状況のどこが凄いのか全く意味が分からなかったが、取り敢えず俺の願望は超短編の最寄の自伝を伝えただけで、簡単に叶ってしまった。結果オーライだ。

「ありがとうございます」

俺は、彼が何で驚いたのかは非常に気になるのだが、そんなことよりも気の変わらない内にと思い、慌てて焼き芋の皮をむいて食べ始めた。

すると、

「そんなに、慌てると喉が詰まるよ。大丈夫さ、気が変わって返せなんて言わないから」

そんな事を言って来た。

「んっぐ、ゴホン」

俺の気持ちを読んでいるかの様な発言に、思わず喉を詰まらせるところであった。

そのせいもあるのかもしれないが、彼はちょっと不思議な感じがする人である。

ただ、”僕”と言う言葉を、”私”の謙譲語と信じている俺にとっては、自分のことを”僕”と言う彼に親しみを感じたのは事実である。

俺が咳払いしながらも焼き芋を頬張っている姿を、焼き芋屋のにいちゃんはニコニコとしながら、見つめていたが、俺が一息ついたのを見ると、焼き芋屋のにいちゃんはこの世界について、語り始めた。

「君は、間違い無くこの世界の”スカウター”によって、男優にスカウトされたんだよ。ラミアと言ったよね。

彼女は、”ララカー・ミラミ・アポストロ”と言う名で、５人の内最高のスカウターと言われているんだ。

特殊な世界、恐らく君たちの世界を指すと思うのだが、唯一君達の世界にも行って、男優をスカウトを行っているスカウターなんだ」

”最高の・・・？”それには、いとも簡単に騙された俺でも疑問に思うところであった。

とっても、まほまほがそんなに優秀とは思えない。

と言うことは騙された俺はもっと程度が低いことになってしまうのだが・・・でも事実だ。

しかし、さすがは”まほまほ”。やっぱり落ちはあった。

「ただ、僕の記憶では、まだ君達の世界での成果は上がっていないようだったのだが・・・、
そうか！と言うことは、君が、彼女が君の世界から連れて来た一人目の男優になるのか・・・」

焼き芋の屋のおっさん兄ちゃんはそう声を上げた。

彼とまほまほがグルであるとは思えない。偶然過ぎる。
と、言うことは、

や、やっぱり本当だったんだ。彼女の言っていたことは・・・。
俺はそう思った。

彼女がウソ付きで無かったことには何故かホッとしたのだが、それとは裏腹に、目の前に事実を突き付けられたことは、全く嬉しくは無い。

微かにこれが何かの間違いであれば・・・。
と言う望みが、完全ではないが、ほとんど断たれた気がする。

さらに、俺が一人目と言うことは、俺と同じ世界から来ているのは俺意外には誰もいないことになってしまう。不安は一気に増して行く。

ただ、おっさん兄ちゃんの次の言葉が俺の心に期待の灯火となった。

「ああ、そうだ。契約金はもらってないのかい？」
と言ってきたのだ。

「契約金？」
その意味は、俺には全く分らなかった。
すると、おっさん兄ちゃんは、思い出した様に、
「ああ、そうか。
君は食べ物にも困っている無一文だって言ってたんだったね。
でも、君が気付いていないだけで、何処かに契約金があるかもしれないよ。恐らく貰っているはずなんだが・・・。
もしかして、ポッケトの中にでも入ってないかい」
そう言ってきた。

「いや、入っていないと・・・」
そんな訳がない、そんな感触が体の何処からもしてはいない、だいたい貰った記憶もない。
そう思いながらも、恩人の言うことは無碍に出来ない。俺は一応、ズボンのポケットに手を入れて見た。
すると・・・。

右のポケットに紙切れの束の感触がある。
俺はそれを引き出してみた。
ポケットから、１００枚はあろうかと言う、いや１００枚であろう。帯が付いている。

「いつの間に・・・」

俺も驚いたが、俺以上の驚きをおっさん兄ちゃんは見せて来た。

「すごいじゃないか！！　１００万ペンスあるじゃないか」

どうやら、ここのお金の単位はペンスと言うらしい。

彼の驚き方からいくと、きっとそこそこの期間の生活が出来そうな金額の様な気がする。

僅かな光が俺の明日を照らしている。

俺は慌てて聞いてみた。

「す、すみません。このお金はどれ位なんですか！」

「そうか、君の世界のお金とは違うんだね」

「はい」

「それも当然と言うことか。そうだな～」

おっさん兄ちゃんは、少し考えて分り易い回答を俺に示してくれた。

「さっき君の食べた石焼芋１個が１００ペンスだよ。

あっ、決してお金を請求している訳じゃないんだ。本当にお近づきの記しだから。ハハハ」

「ハハハ、ありがとうございます」

ここは笑って流すのが無難だ。

「そうか、いきなり中央にスカウトで、１００万ペンスの契約金か。きっと、君は凄く期待されているんだね。男優としてうだつの上がらない俺なんかは、焼き芋屋との掛け持ちさ」

そう言って、恥ずかしそうに笑って言った。

良く見ると、俺よりもいい男の様な気もする。こんないい男で男優として駄目なら、俺なんかがとってやっていけそうな気がしない。

このお金の存在は、飛びあがる位に嬉しかった。
しかし、取りあえずまほまほを見つけるまでは、このお金を極力減らさない様にしなければならない。
これが契約金であるならば、元の世界に戻る為には、恐らく返す必要があるだろう。
それに、本当に自分のお金なのかの疑いもある。

そこで、
「焼き芋屋さん、もう少し、ここの世界のことを教えて下さい！」
俺は、すがる様に言った。本当にすがっていた。
まず、その男優の意味が俺の想像通りであるかが知りたいところだ。

すると、彼は焼き芋を指さし、
「ほら、俺もこれを売らないと生活ができないから」
そう、言って来た。

しかし、ここで彼を逃す訳にはいかない。
いつまでになるかは分からないが、ここで暮す為には彼の力が必要だ。

そこで、俺はこの焼き芋全部買って、暫くの間彼を拘束しようと考えた。
「幾つあるんですか？」
「今日は、３０個位かな」
「だったら、俺が全部買います」

そうだ、３，０００ペンスでご教授願えるのであれば安いものだ。
ここで、３，０００ペンスを惜しんでは、後で返って高くつく。俺

には、返すつもりのお金とは言え、１００万ペンスと言う大金があるのだ。

「いや、それは申し訳ないな。どうだろう、一緒にリヤカーを押して手伝ってくれないか。道すがら話すと言うのでは」

「本当ですか、有難うございます」

この世界も満更、悪い人ばかりではなさそうだ。

俺はそう思いながら、生まれて初めてリヤカーと言う二輪車を後ろから押すことになった。

＜つづく＞

ＡＶ界（前書き）

このＡＶ界の仕組みとは・・・。

ＡＶ界

俺、千乃工口（ちのくぐち）は、大学受験を間近に迎えた高校三年生。

そんな大切な身でありながら、俺は学校帰りのバスの中で、”ララカー・ミラミ・アポストロ　”と名乗る女の子（俺は”まほまほ”と呼んでいるが彼女は”ラミア”と呼べと言う）のエロ仕掛けに、まんまと乗ってしまい、ＡＶ界に行く破目になってしまった。

いや、本当は心の”あそこ”では期待をしていたのかもしれない。

しかし、このＡＶ界は一般に言う”アダルトビデオ界”と言う業界ではなく、不運なことにＡＶ界と言う名前の異世界であったのだ。

そして、悲劇は後追いに膨らんでいく。

何と！”まほまほ”とそこへ向っている途中に、ちょっとした食い違いが彼女との間に発生し、俺は彼女の腕の中で気絶をしてしまったのである。

そのせいで俺は、彼女とは逸れてしまったのだ。

見知らね世界で、今夜泊まる所もなければ、食べるものもない。

俺は途方に暮れるしかなかった。

しかし、そんな俺にも救いの手が現れたのだ。

石焼き芋屋のリヤカーを引いた一見、おっさん臭い兄ちゃんである。

彼がくれた焼き芋と情報は、沈んでいた俺の心に多少の希望を持

たせるものであった。
・・・そして。

★☆　第４話　★☆
☆★　♀　ＡＶ界　♂　☆★

俺は何よりもまず初めに聞きたいのは、当然、まほまほの居場所についてだ。

「あの～、早速なんでが、僕をスカウトした”ラミア”というスカウトには何処に行けば会えますか？直ぐにでも会いたいんですが」

迷い始めた俺の道を軌道に戻すのは、まず、そこからだ。

すると、焼き芋屋のおっさん兄ちゃんは、
「その前に名前を教えてもらえないかい？　時間はあるのだろ」

そう、聞いて来た。

確かに時間は・・・、
あると言えば幾らでもある。しかし、無いと言えば無いような気もする。

この自分の状況に、感覚が少しづつ麻痺して来ているのだろうか。
明らかに落ち付きを取り戻して来ているのが自分でも分る。
それは、きっと焼き芋を食べたことの満足感だったのだろう。

俺は、
「はい、まあ」
と、肯定した。

そうだ、このお方は俺の恩人なのだ。そして、これから先も・・かもしれない。
失礼があってはいけない。

すると、焼き芋屋のおっさん兄ちゃんは、爽やかに
「僕の名前は”一持握（いちもつにぎる）”、君の名前はなんだい？」

ちょと軽い感じもするのだが、そんな口調も何故か落ち着いて聞こえてくる。

その口調につられ、俺も完全にいつもの自分に戻っていった。

戻って見るとこの一持握と言う人間が、結構若いことに気付いた。
二十代半ば位に見える。
兄ちゃんだったか・・・。

「僕は、工口（くぐち）、千乃工口（ちのくぐち）と言います」
「工口（くぐち）君か、いい名前だ！」
一持兄さんは感嘆した。

いい名前？
俺の手短過ぎる自己紹介に思いもかけない言葉が返って来た。
はっきり言って、俺は生まれて初めていい名前と言われた。

ただ、それは音で聞いているからであって、文字で書いたらきっと、撤回されることは間違いない。
せっかく褒めてくれているのである。俺は敢えて文字の説明をして、彼の言葉を否定する様な行動は慎むべきと判断した。

彼は後ろでリヤカーを押している俺を振り返りもしないで、前を見つめたままで、さらに話を続けた。

「君の世界のことが全く分からないので、当たり前のことを言うかもしれないし、知らないことを知っていると思いこんで説明するかもしれないから、その時は遠慮無く言ってくれていいよ。工口(くぐち)君」

「はい、有難うございます。一持さん」

そうだ。見た目から、既にこの世界が俺の世界と大差がないと思っていた。

思い込みは、思いがけない事で失敗するか分らない。

思い込んではいけないんだ。

彼はさらに話しを続ける。

「正直言って、彼女が住んでいる所は僕にも分からないんだ。彼女は”スカウター”だからね。常に世界を飛び回っているはずさ。信じられないだろうが、本当に飛べるんだ」

”飛べる?”俺には、非常に現実的な話で何の不思議もない。なにせ、実体験をしているのだから・・・。

「唯一分るのは、あの空まで続いて見える高い塔の上の方に、出入りをしていると言うこと。ただ、残念ながら一般人はあの塔には入ることができないんだ。

数少ない入れる人間でも、彼女の所まで行くことは出来ないんだよ」

彼は暗闇に光る真っ白な山のように高い塔を指差した。

「何故ですか？」

「あの塔の頂上にはね、この世界の神、自然神が住んでいると云われているんだ。
今やこの世界の絶対になった神がね。
そして、自然神を筆頭に上から順に、この世界を統治する階級順に並んでいて、その階級でなければ、出入りが出来ないんだ。
あの最下位の階級も、庶民からは雲の上の存在さ。」

何か、不満げな言い方に俺には聞こえた。
それに、”今や”と言うのもきなるところだ。

「あの塔な何とい言う塔なんですか？」
「ミンジュ塔と言う名前だ。まだ、出来て９５年目らしいんだが、もう何百年も経っている存在感がある・・・」

そこは俺の世界の何がしかと言う政党とは・・・多くは語るまい。

「その前は、違った世界だったんですか？」
「そうらしいが、俺の生まれる前のことだし、それを学校でも教えたりはしない。両親も教えてはくれない。そう言う教育を受けているんだ。
だから、祖父母世代の人から聞いた、僅かなことだけでしか分からないんだ。
それに、今ではみんな余り興味を抱かない。
おかしな位に・・・」

そこで、自分の話に自ら合いの手を入れる様に、
「い～しや～きいも～、いも。ほっかほかだよ～」

と掛け声を発した。

俺に説明をしながらでも商売を忘れない彼に、俺は関心してしまった。

これが仕事というものなか・・・、と。

俺が返事もしないまま、話は次に進んでしまった。本当はまだ、聞いてみたいことがあったんだが・・・。まあ、いいか。

「まず、塔に入れるのはＡＶ界で高い業績を残した者だけ。と言うことが大前提だ。

塔の入り口では門番が２４時間体制で警備をしている。

下の階層から行くと、現在、現役の俳優では６人のみなんだ。

男優では３人。彼らを、世間では御三家と呼んでいる。

そして、女優も３人。世間では３人娘と呼んでいる。

彼らが許されているのは、棟の地上１０階までだ。そこから先は、厳重な自動人相認識装置”誰なんだね君”により扉の開閉が制御されている。

仮に、入出可能な人と一緒に入ろうとしても、至る所にある認識装置のセンサーが働き、排除されてしまう」

「”排除”って、どういうことですか」

排除と言う言葉はちょっと危険な香りがする。

「まあ、生きて帰れないってことかな」

俺は背中にひんやりとするものが走った。

やっぱり何でも聞いておくべきだ。
俺はそれを聞いて、塔の半径１００ｍには近づくまいと決心した。

「そして、その認識装置”誰なんだね君”に通過を許されているのは、”レジェンド”と呼ばれる過去にＡＶ界で高い業績を残している人たち以上なんだ。

余談だが、過去と言っても今日の様な、１８歳以上であれば登録のみで出場出来るオープン参加の大会には出場可能だ。もちろん、参加しようと思えばだが」

ここで、俺は自分が勝手な思い込みをしているのかもしれないことに気がついた。
男優、女優と言うのを、自分の世界のドラマや映画、舞台を主な仕事としている人達と思っていたが、
危険な思い違いなのかもしれない・・・。

本当にそれで正しいのだろうか？

それに、まさかとは思うが、聞いている限りでは俳優としての業績で地位が決まるような気もする。

もしかして、
ここはＡＶ界だ。エッチな俳優なんだろうか？
エッチな業績で出世するのだろうか？

いや、この世界名の”ＡＶ界”と言う名前は、俺の世界の業界名の”ＡＶ界”の意味とは違っていると考えるのが必然。
世界全体がエッチな訳がない・・・。

俺は話の腰を折っていまうが、この疑問を先に解決するべきと判断した。

「あの～すみません。お話の途中聞いてもいいでしょうか・・・」

「ああ、なんだい？」

「男優、女優とは何をする人達で、業績は何をすると上がるんでしょうか？

俺の質問に一持兄さんは、笑いだした。どうも、彼には当然過ぎる話であった様だ。

「ハハハ、そこかい。悪かった、それを知らないと意味が分からないよね。しかし、スカウトは何も教えてくれなかったんだね」

「気を失っていたんで、聞けなかっただけかも・・・」

「ああ、確か、首を絞められて・・・ハハハ」

そこは、俺には余り可笑しくないところだ。

彼は俺に”ＡＶ界のしくみ”について懇切丁寧に説明を始めた。

ＡＶ界とは次の様なしくみであった。

ＡＶ界には、国と言う概念がないらしい。

ＡＶ界は、一国と考えて良いようだ。地球連邦みたいな・・・。

この世界の主な産業がＡＶ放映とのことで、その運営は”ＪＲＡＶ会”と言う組織が行っている。

このＪＲＡＶ会は、ＡＶ界直営（国と言う概念がない国営ではな

く、界営となる）の組織で、ほぼ毎週主催する大会を開いているとのことだ。

因みに、地方には独自の”ＪＲＡＶ会地”と言うのが存在し、中央の”ＪＲＡＶ会”と提携をしているらしい。

男優、女優と言う俳優達は、このＪＲＡＶ会の主催するＡＶ撮影大会の参加者とのことだ。

そして、その大会で撮影したビデオのアクセス数、お気に入りの登録数がＪＲＡＶ会での業績となり、且つ収入になる。

さらに驚いた事には、これが本当に、イコールＡＶ界の業績となることだ。

まさかとは思っていたが、本当であった。

衝撃的ではあるが、大会と言うのがきっと権威のあるもに違いない。俺はそう睨んだ・・・。

大会に出るには、事前登録が必要で、どの大会に誰でもが出場できる訳ではない。

クラス訳があるらしい。

実績が上がると、クラスが上がって行くシステムなのだ。

ＪＲＡＶのクラスは、下から、新人⇒１００万下⇒３００万下⇒５００万下⇒☆（一つ星）⇒☆☆（二つ星）⇒☆☆☆（三ツ星）

基本、地方のＪＲＡＶ地も同じクラス分けだが、断然アクセス数は中央の方が稼げる。地方から中央へ移籍するには、５００万下で且つ、お気に入りユーザーが１００人以上必要とのことだ。

因みに、これを百人切りと言うらしい。

また、☆からはグレード大会に出場が可能。
☆はＧ３（グレード3大会）、☆☆はＧ２（グレード2大会）、☆☆☆はＧ１（グレード1大会）だ。

そして、Ｇ1クラスで、素晴らしい成績を収めると入塔（にゅうとう）が許可され、乳首を・・・いや、政治に参加することが出来る。

この最下位が先程の、現役の御三家と三人娘であるのだ。

その上に存在するレジェンドは塔内の投票により決定され、そのさらなる上は神の領域となる。
塔内で人間が入ることの出来るのは、レジェンドクラスまで。それから先は、塔の構造から立ち入りが出来ない。

神には下からプロデューサ神と、映倫神。さらにその上がＡＶ神となる。そして、頂点が自然神と言われているらしいが、もちろん、誰もこの神々を見たことがないとのことである。

レジェンドのトップになると、お目見え出来るのではないかとの噂はあるが、定かでは無い。

ただ、スカウターはＡＶ神の直轄なので、唯一神との接点になると言うことだが、スカウターと会うことが奇跡に近いと言うことだ。

俺にはスカウターと言う存在がこの世界の天使みたいな感じがして来た。
確かに俺の世界で天使に会ったとい言う人を見たことが無い。
と、言うことは俺はこの世界で奇跡を起こしたことになる。

つまり彼の話を要約すると、「ＪＲＡＶ会と言うＡＶ撮影で業績

を残すと、この世界を動かすことが出来る」と言うことになる・・・。

彼の説明が一通り終わったので、俺は待っていましたとばかりに質問をした。

聞きたいことは山ほある。

「政治に参加って、俳優の活躍次第でですか」

「そう。この世界では俳優で成功出来る能力があれば、政治の能力があると考えられている。俺はどうかと・・・」

そこで、彼は話を止めた。

何か、言ってはならないことを言ってしまったと言うようなそぶりに見える。

「この世界では、俳優が最も尊敬される職であり、生まれた人間の殆どが、俳優（男優、女優）を目指すんだよ。

そして、この世界はある一定の成績を収めた俳優によって、実際、統治されているんだ」

それは、俺の世界で言う、内閣、国会、裁判所、各国家公務員は全て俳優としての成績で就くことが出来るらしい。

そして、この道を反れたものが、結婚して違う職業に就くことになるらしい。

結婚や、子供が生まれると、引退になる。離婚すれば一度だけ復帰できるが、子供が生まれると、一生復帰できないとのことだ。

本当に、ＡＶ撮影と言うもので世界が動いているのだ。

しかし、俺は今まで”この”言葉を当たり前の様に流していたが・・・、

「ＡＶ撮影とはどんな撮影なんですか」

確認してみた。

それに、彼は物凄い驚きを見せ、リヤカーを引く手を止めた。

「どんなって？」

「例えば、探偵者とか、恋愛ものとか刑事もの、ファンタジーとかの撮影とか・・・」

「工口君（くぐちくん）の世界では、そんな撮影があるのかい？」

「違うんですか？」

「ここでは、もちろん。そんなの撮影をしても誰も見やしないよ。撮影と言えば、男女の絡みに決まっているじゃないか」

「か・ら・み！」

俺は、その言葉に釘付けだ。

もちろん、こぼれた水が低い方に流れる様に、俺の血潮の低い位置の頭の方に若干流れだす。

「そう、からみだ！基本は男女”すっぽんぽん”の肉体の絡みだよ。最近は着衣のままと言うのもフェチの中で人気が出て来ているんだが・・・」

俺の胸中を無視するかの様に、彼は続ける。

「お昼の競技は、”お願いします”と言って、競演する相方探しさ」
「あ・い・か・た・さ・が・し？」
あの血走った眼差しは、そういうことだったのだ。
しかし、”お願いします”と言う名前はいかにもそのままである。

結局、ＡＶ界と言う世界は、やはり文字の通りに受け取って良かったのだ。

俺はもしかすると此処が、俺の世界のＡＶ業界の”企画物”の撮影現場ではないだろうか？
そんな錯覚さえもしてくる。

ＡＶ界は、やはり何処へ行ってもＡＶ界なのだ。
ただ、一部の業界ではなく、”世界全てが”ではあるが・・・。

説明しながらの焼き芋販売はこの後、２時間続いた。
お客は５人しか来なく、売上総額は２，０００ペンスと言う結果だった。だが、それでもいつもこの程度の売り上げだと言う。

一持兄さんは、今日は残った焼き芋を夕食に食べると言うので、俺はお礼に晩御飯を誘ってみた。
それは、何処に行って、どのように食べていいのか全く分からなかったと言うのもある。

俺が素直にそう話すと、彼は喜んで行きつけの小さな食堂に連れて行ってくれた。

彼はその途中、何を考えていたのか、
「いや、絡み以外も面白いかもしれないなぁ～」
そう、呟いた・・・。
＜つづく＞

ＡＶ界（後書き）

しばらく、この話の要である”下”から遠ざかっておりますが、もう少ししたらその場面が続きます。

少しだけ角のある縁（前書き）

一持握（いちもつにぎる）の行き付けの食堂で・・・。

少しだけ角のある縁

俺、千乃工口（ちのくぐち）は、大学受験を間近に迎えた高校三年生。

そんな大切な身でありながら、俺は色々とあって、不本意にもＡＶ界に来る破目になってしまったのである。

いや、正直言うと確かに俺の体の一部には、それを好意的に後押しする”むずむず感”があったのは否めない。

だが、俺の来てしまったＡＶ界とは予想とは全く（？）違っていたのだ。

一般に言うアダルトビデオ界と言う”業界”ではなく、不運なことにＡＶ界と言う名前の”異世界”であったのである。

俺はこの見ず知らずの世界に、成り行きとは言え体一つで来てしまったのだ。

当然の如く次第に俺の心に不安と恐怖が襲い掛かって来る。

陽も暮れ、その不安と恐怖が、絶望に変わって行こうとしている時である。

そんな俺に救いの手を差し伸べてくれたのは、焼き芋屋を副業としている、このＡＶ界の男優”一持握（いちもつにぎる）”であった。

彼はこの途方に暮れていた俺に、親切にも売り物の焼き芋を与えてくれ、更にこの世界について詳しく説明をしてくれたのである。

俺は次第に彼の言葉に希望を抱き始め、暫くこの世界でやって行けそうな勇気が出て来た。

そして、そのお礼にと、俺は一持兄さんを遅い夕食に誘い、今、

古びた小さな食堂の前に来ている。

既に俺は彼を心の中で”一持兄さん”と呼び、心の拠り所になりつつある・・・。

★☆　第　５　話　★☆
☆★　少しだけ　♂　☆★
☆★　♀角のある縁　☆★

一持兄さんが連れて来てくれた食堂は、裏通りの人通りの少ない所に有った。

食堂は二階建であり、見た目からは一階の大半が店舗で、二階が住居であると思われる。

外見は洋風の塗り壁に素焼の瓦屋根と言った只の古い建物であるが、木製に曇りガラスを嵌めこんだ分厚そうな扉だけは、古くはあるが際立って立派な物である。

そして、横からその扉を照らしているのは、骨董品のようなお洒落なランプ調の玄関灯である。

玄関灯は、眩しい位に煌々と輝いている。

雰囲気は良さ気(げ)である。

だが、それよりも俺はその入口の上にある看板に目を惹かれた。

”Ｇ３☆食堂”

「何て読むんですか？」

看板を見ながら俺がそう尋ねると、一持兄さんも看板に視線を合

わせて応えてくれた。

「読んでの”字”の通りさ。だから字でない”☆”は読まないでくれ」

「”じいさんしょくどう”・・・ですか?」

ちょっとふざけたつもりであったが、

「その通り!」

そう言って、彼は自分の体をリヤカーの引く手から抜くと、食堂の扉の中へと入って行った。

俺はその後につづく。

「いらっしゃい、今日は遅かったね。今、閉めようと思ってたところさ」

入ると同時に、中から年老いた声が聞こえてきた。さすがは”じーさん食堂”だけのことはある。

「すみません。いいですか?」

一持兄さんの声は親しげであった。

「もちろんさ・・・、ところで、後のお若い方はお連れさんかい?」

そして、店主は直ぐに、一持兄さんに続いて入って来た俺に目を向けた。

「ええ、さっき知り合ったばかりの将来有望な男優さん・・・、になる予定の若者ですよ」

「そうかい、それは楽しみだね」

本当に、楽しみだと思っている様に聞こえる。
それに、俺も何か男優としてやっていけそうな気になってしまう。

店内は、その老人一人のみである。どうやら、店主一人でやっている店の様だ。

店主はいかにも洋食屋の調理人と言った格好で、白いエプロンに白い丈の長い帽子が似合い過ぎる位に似合っている。
見た限りでは腕は確かそうだ。

客席はカウンターに6席と、4人掛けのテーブルが二つのみだ。
閉店間際とあって、他に客は誰もいない。

一持兄さんは、俺にメニューを見せてくれたが、はっきり言って良く分らない名前ばかりだ。
そこで、俺は彼のセンスで自分のお腹を満たすことにした。

「お任せします」
それだけで、彼は俺の心を理解してくれたようだ。

「”スーパー精力アップ2”を二つ」

「おや?今日は”ツー”でいいのかい」
「ええ、”3（スリー）”は好みがあるから、今日は”2（ツー）”にしときますよ。

店主は、俺の顔を見て納得したようだった。

しかし、店の名前は”3”を”さん”と読んだはずだが・・・。

やっぱり、”じいさん”と掛けているのだろうか？
意外とお茶目なのかもしれない。

店主は手早く調理をしながら、ゆったりとはしているが、はきはきとした口調で話し掛けて来た。
とっても、顔以外は老人とは思えない。いや、仕事を始めると、顔も若くなったように見える。

「一持さん、彼を紹介してくれないかい」

やはり、一持兄さんはかなりの常連さんらしい。
すると、一持兄さんは俺の顔に視線を向けて来た。俺が頷くと、店主に説明を始めた。

「彼は・・・」
と言い掛けて、そこで一持兄さん貯めを作った。
何の為の”間”だろうかと思っていると、その”間”で、店主は手を止めてこちらに視線を向けて来た。

「驚いて腰を抜かさないでくれよ、この若者はスカウターにスカウトされて、異世界からやって来たんだ」

それを聞いた店主は驚きの顔を見せ、固まっている。

すこし間があった。

やはり、本当にスカウターとは異質な存在のようだ。

そして、
「ホントかい、それは凄いじゃないか！」

店主の顔がパッと、明るく輝いた。年齢がさらに2～3歳は若くなった気がするが、2～3歳は彼にとって誤差の範囲可もしれない。

「いつ来たんだね？」

完全に店主の手は止まっている。

「はい、今日来ました」

俺は応えた。

「そーかい、じゃあデビューはまだだね。楽しみにしてるよ。」

何か、凄い喜び様で、驚いてしまう。

すると、

「ここのマスターも昔、結構有名な男優で、G3、一つ星まで行ったんだよ。ねえ店主（マスター）」

そう、一持兄さんがタイミング良く説明してくれた。

それに店主は、

「私なんかは、その他大勢のG3さ。それより、亡くなった私の息子夫妻は結婚直前には、二人揃ってG2目前まで行ってたんだ」

過去を振り帰る店主は、一瞬老人の仕草に戻って見えた。過ぎた年月を感じてしまう。

「亡くなられたんですか？」

「ああ、もう5年も前になるかね～。今、その娘、孫が女優を目指しているんだよ」

こんな時になんだが、その娘さんに、ちょっと期待してしまう俺がいる。

もしかしたら、これが縁でここの娘さんと異世界の恋・・・なんて。

そこで一持兄さんが、

「そう言えば、里緒ちゃん今日がデビューの”相方探し”だったんじゃ・・・」

「それなんだが・・・、帰って来てからずっと機嫌が悪いんだよ。聞いてみても、何があったのか話もしてくれないのさ。少し前にやっと機嫌が良くなったところさ。大方、会い方が見つからなかったんだろうよ。初めての参加じゃ無理もないさ」

店主の肩も、心なしか話しながら下がった様な気がする。ここの世界の人達のＡＶ撮影に対する真剣さが俺にも伝わって来る。

その時だった。店内の話声が聞こえたらしく、奥から声がした。

「おじいちゃん、お客さんなの？」

そう言って、ト・ト・ト、と階段を小気味よく降りてくる音がした。

その音は次第に大きくなってくる。そして、ドアが開いた。

「あっ、いらっしゃい」

と、開いた扉から見えた姿はスレンダーな若い女の子であった。

待望のお孫さんである。

彼女はお客である俺と一持兄さんに、そう声を掛けると、こちらに背を向けて2つのグラスに水を注ぎ始めた。
もちろん、こちらに持ってくる水であるのは間違いなさそうだ。
近くで見れそうだ・・・。

そう期待している俺と、何故かその後ろ姿に声を掛けようとしてしまった自分がいる。
あれ？　何処かで会ったことがあるだろうか。

いや、そんな訳がない。
ここは異世界だ。

彼女は水をそそぎ終えると、お盆の上グラスを乗せ、零れない様に俯き加減でグラスを見ながら近づいてくる。

俯いているので良くは見えないが、年齢は俺と同じ位で、見る限り活発で利発そうだ。
それでもって、顔立は清楚で、俺好みに見える。
ちょっと新しい息吹が、俺の下の方で目覚め始める。

そして、彼女の身のこなしは、陸上競技をやっていそうにバネがある。

おや？　やっぱり、初めて会った気がしない。
どこかで見た様な気がする・・・。

そして、テーブルの前まで来て、彼女は顔を上げた。

そして、

「「あっ～！～～！！」」

彼女の声と、俺の声が見事に重なった。

彼女の顔が、見事に一瞬にして真っ赤に色を変える。

きっと、俺の顔は青くなっていると思う。

「せんず　り・・・」

髪を後ろで一つに束ねていて直ぐに気付かなかったが、間違いない千逗里緒（せんずりお）だ。あの”大通り広場”と言われる石畳の通りで怒鳴られた、あの彼女だ。

目の前の彼女も驚いている。間違いない。

俺は思わずフルネームを叫んだが、途中で彼女の声に消された。

「ちょっと、あんた！苗字を呼ばないでよね、嫌いなんだから！嫌いなんだから・・・。

元気の出る豆みたいな名前でさ・・・何でこんな・・・」

俺はそれよりも、フルネーム（せんずり王みたいな）の方が普通気になるだろうと思うのだが、どうやら名前は気に入ってるらしい。

彼女はさらに続ける。

「ど、どうしてあんたが此処にいるのよ！あんたの・・・あんたせいで、明日学校で何て言ったらいいか・・・」

俺も何でそこまで言われなければならないのか、全く分からない。

少なくても今は客である。言い返してやろうかとも思ったのだが、意外にも次第に下がって行くトーンに何も言えなくなってしまった。

そこに、一持兄さんが間に入ってくれた。

＜つづく＞

遅い居そうろう（前書き）

異世界初の食と住は、千逗里緒（せんずりお）と・・・？

遅い居そうろう

俺、千乃工口（ちのくぐち）は、大学受験を間近に迎えた高校三年生。

俺にとって人生の最初の節目になるはずの大切な受験は目前だ。

当然、それまでは穏やかな日々を送るつもりであったのだが、何処を気に入られてしまったのか、略して”ラミア”（今、俺は”まほまほ”と呼んでいる）と名乗る女の子のエロ攻撃を突然に受けてしまい、俺は早々に沈没してしまった。

彼女の目的はこの俺をその気にさせて、ＡＶ界にスカウトすることであったのだ。

まんまとその罠に馬乗りになってしまった俺が連れて行かれた所は、一般に言う単なるアダルトビデオ界と言う”ＡＶ業界”ではなく、ＡＶ界と言う名前の”異世界”であった。

このＡＶ界と言う世界は一見我が世界と大差がないのであるが、実は世の中の理（ことわり）を決める重要な役目を、ＪＲＡＶ会と言うビデオ業界が担っていると言う奇妙な世界であった。

一時は、この訳の分らない世界に一人っきりで来てしまったことに対し、悲観していたのであったのだが、一持握（いちもつにぎる）と言う男性の助けを得ることによって希望を持った俺は、スカウトされた”まほまほ”を見付けるまでの間、何んとかこのＡＶ界と言う全く異質の世界に馴染んで見ようと決意をするのであった。

つづく・・・

★☆　第６話　★☆
☆★　遅い　居　♂　☆★
☆★　♀そうろう　☆★

「おや～？二人はもうお知り合いだったりするのかな～、ヒューヒューだね。これが運命ってものだろうか、ねえ店主（マスター）」

と、やらしく死語を言う一持兄さんの視線はカウンターをとび越え、店主の方へ同意を求めている。

それに、店主も穏やかな笑いを浮かべ賛同しようとするのだったが、その言葉を遮り、千頭里緒（せんずりお）は、口を尖らせて意地の否定を披露した。

「そ、そんなんじゃ・・・だいたい、私の好みは」

それに、一持兄さんも店主も苦笑に変わる。

俺も、そこまで否定する必要がどこにあるのか？愛想笑いの一つも出来ないのか？

そう思い、

「だいたい俺を相方に誘ったのはだれなんだ！」

と主張しようと思ったが、あっさり飲み込んで、二人と一緒に苦笑いをするに留まった。

こんな知り合いのいない不安な状況で、人に逆らうなんてとっても出来やしない。やっぱり仲間は心の支えになるのだ。

「ごめん、工口君（くぐちくん）実は僕も里緒ちゃんには余り良い印象を持たれていないんだよ」

そう言う一持兄さんは、横目で千逗里緒の顔色を楽しんでいる。
一持兄さんの懐は結構深いのかもしれない。俺はそう思った。

「別に、そんなことは全然・・・」
千逗里緒の嘴は、ドナルドティックに尖っている。

それに、店主は困り顔になる。
「里緒、一持さんは大切な常連さんで、この工口君は将来有望な好青年だ。なんたって、スカウターにスカウトされて異世界から来たんだ、仲よく・・・」

そう言い聞かせようとしたのだが、話が終わらない内に彼女は声を張り上げて食いついてきた。

「うそ～！スカウターに！！」

彼女が細く開けていた眼がパッチリと開いた。
本当は結構大きな可愛い目をしているみたいだ・・・。

「でも、逸れてしまって、一人あの会場に残されていたのさ」
店主が余計な一言を言う。

「じゃあ、それであそこに・・・。
ばっかじゃないの、せっかくスカウトされて、どんくさい・・・」

聞こえない様に不満を言ったつもりなのだろうが、俺の耳にはしっかり届いている。
言われなくたって、「自覚してます」って言うんだ。
偉そうに言えないが・・・。

店主も千逗里緒の言葉が聞こえていた様だった。

「ごめんよ、里緒は今回学校の推薦で一人だけ特別に出場出来たんだよ。初めてで、とっても張り切っていたんだ・・・」

彼女を弁解する為にその気持ちを代弁したのだが、

「そんなこと言わなくていい！」

彼女の怒りに返って火を注ぐ結果になってしまった。

彼女の顔は恥ずかしさで真っ赤である。

すっかり彼女が来てから、穏やかな店内が一気に気まずい雰囲気になってしまった。

一持兄さんでさえ言葉が出て来ない。

俺は出来れば何処かに行って欲しいと思うのだが、そんな機嫌の悪い状態でも彼女は一行にこの場を去ろうとはしない。

暫く会話が途絶え、店内は店主のフライパンを振る音だけが続くのみだ。変な緊張で落ち着かない。

しかし、その音も数分で止まった。

どうやら、いかにもＡＶ界らしい名前の”スーパー精力アップ２”と言う食べ物をご賞味出来る時間が出来たようだ。

これで食べることに集中すれば、少しは気まずい時間を和らげることができそうだ。

「さて、里緒これをお客様に運んでおくれ」

流石は肉親である。機嫌の悪い彼女にも仕事を言いつける。

それに、
「う・・・うん」
赤い顔を膨らませてはいるが、彼女も最低限の仕事をする意志はあるようだ。

里緒はそっけなく、”スーパー精力アップ2”を二つ運んで来ると、淡々とテーブルの上に置き、さっさとカウンターの中に戻って行った。

それでも、店から出ていかないところを見ると、もしかして片付けまでいるのかもしれない。
俺が代わりに片付けたい気持ちになってくる・・・。

話は戻るが、先程この彼女が驚いたところを見ると、スカウトされたと言うのはそんなに凄いことなのだろうか？
俺には理解できないが、”まほまほ”は、この世界では相当力がある存在なのかもしれない。

それに、学校の推薦と言う言葉も気になる。
ビデオと言うのは裸の絡みと一持兄さんは言っていた。
幾らこの世界がＡＶ界だからと言って、そんなことを学校が推薦するのだろうか。

この世界の新人としては、考えるよりも聞く方が早くて正確だ。
俺にとっての知恵袋が目の前にいらっしゃるのだ。

俺は困った時の一持頼みで、一持兄さんに謎の解読を依頼することにした。もちろん、千逗里緒に聞こえない様に小さな声で聞いてみた。

「食べながらですみません。推薦とはどう言うことでしょうか」

俺の小声の意思をくみ取って、一持兄さんも小声で教えてくれた。

「ああ、学校の推薦かい。法律上では１８歳以上であれば、クラスに合った大会に出場が可能なんだが、生徒は学校の推薦が必要なんだよ。誰でもが出場すると、悪戯に質が下がるからね」

理由はそこかい？と、俺は思わず突っ込みそうになったが、世界が違う。話は最後まで聞こう。

「学校ではこの推薦者を決める為の手段として、学校行事を行っているんだよ。

その中で行われる全ての催し物で生徒個人の採点がされるんだが、推薦されるには、この点数に普段の成績を加味することになるんだ。君の世界では違っているのかい」

当たり前、と心で突っ込みながら、

「はい、かなり」

と応えた。

「そうなのかい！　それは驚きだ。

彼女が今回学校に推薦をされたと言うことは、学校が実力を認めて出場しても恥ずかしくないと、認めたからなんだ。まあ、言ってみれば学校代表と言うことになるね。

みんなが期待している。それに、周りは自分の仲間がどこまでやれるのか興味があるから注目をする。

それが、出演まで行かなかったんだ。

気落ちすることは君にも分るだろう」

なるほど。

要は全国大会出場も夢では無いと見られていた１００m走の選手が、地区予選でフライングで失格になった様なものだ。

それは辛いに違いない。

しかし、その矛先が俺と言うのは、どうなんだろう。

「彼女と君の間に何があったんだい？」

今度は、一持兄さんが俺に質問をして来た。

「はい・・・、実は昼の相方探しの時に彼女に声を掛けられて。恐らく相方と言うのに申し込まれたのかと思うんですが・・・」

「おお、さすが里緒ちゃんだ。見る目は確かだ」

一持兄さんは関心しきりだ。

しかし、俺はそんなに凄いのだろうか？買い被りもいい所の気がする。

それでも、男として悪い気はしない。

一持兄さんはカウンターの陰になっている千逗里緒を横目で気にしながら、さらに続けた。

「それはそうと、ああ見えても里緒ちゃんは真面目で恥ずかしがり屋な性格なんだ。

きっと、思い切って君に声をかけたんだと思うよ。

そうか、里緒ちゃん・・・可哀相に・・・」

褒めてくれたのかと思っていたが、責められている気がする。
確かに、あの時の彼女の様子は、一持兄さんの言う言葉が当てはまっている。

そらに一持兄さんは付け加える。

「それに、あの時あの場所は一般の立ち入り禁止なんだ。彼女は、参加資格の無い者がいるとは思っていなかったんだろう」

「そうなんですか！」
うそ～！完全に責められている。

「もちろん法律ではなく、暗黙の了解でだから罪ではないんだが」
良かった～無実だ！俺は胸を撫で下ろした。こんな世界で捕まるのはご免だ。

「でも、まあ君には事情があることだし、きっと、今は彼女も分ってくれていると思うよ」

その時、俺は気が付いた。

考えてみると、そうだ。

そうなんだ。

俺がもう少し早くこの世界に来ていれば、彼女とすっぽんぽんの肉体的な絡みをしていたことになる。
そうなると、今のこの気まずい関係にはなっていなくて、甘い関係になっていたのかもしれない・・・。

いや、だからと言って彼女と上手く交渉成立になるともあまり思えない気もする。
仮に成立したとしても、あんなに気が強いんだ、きっと只の演技と割り切るに違いない。

しかし、しかしだ、一度だけの演技とは言え何らかの絡みは出来るのだ。
そんな美味しい話はない。目と耳と口と鼻を塞げば性格など関係ない。いや、でも目だけは開けておこう。彼女のビジュアルは見て見たい。それに、口も開けるタイミングの時は・・・。

俺の体は正直だ。すっかり、先走っている。
放出エネルギーが発砲先っちょに収束していく。

それにしても、一体、絡みとはどこまでなんだろうか？
いかん、夢想の花が開きそうだ。
抑えられん・・・。

５次元軸に沿って平行移動した俺の雑念は、新たな４次元空間でも夢想に包まれていく・・・。
暫しおれの世界に浸り込むこととする。

・・・・・。
俺、工口（くぐち）は次元と言う法則の壁を乗り越え、一人異世界に来てしまった。
途方に暮れる工口（くぐち）。

そこに、一人の女性が現れるのだ。体（スタイル）は良い。

二人は石畳の大通りで出会う、そして、運命に導びかれた様に惹かれあう。

彼女に引かれるままに着いたところは食堂であった。そこが彼女の家である。

食堂の二階が彼女の部屋。そこに招かれた工口（くぐち）。

決して交わる筈のない次元を超えた愛を確かめる二人。

何一つ身に付けない生まれたままの姿で、ベッドに皺ひとつなく敷かれたシーツが剥ぎ取られる位に激しく絡みあう。

そして、二人は理性を超える肉体の欲望に浸っていった・・・。

なんて・・・・・・。

何てことに?

ちょっと待て。あの、つんけんした女に屈するのか、男として!
工口（くぐち）よ、お前はそんなにあの女と寝たいのか?

寝たい?
寝むい、寝むる、寝る。
”寝る”＝”泊まる”
いや、待て、そんなことの前に今日の寝場所を確保せねばならない!

「そうだ!一持さん。今日の宿泊先なんですが、何処かご存じでしょうか?」

「Ｏｈ～そうだ、そうだった。忘れていた。
どこがいいかな～？

んっ、ああそうだ。リーズナブルで便利な所と言えば、”ホテルせんずりーハイアット”がいいかな」

ホテルと言う言葉は同じようだ。
多分、数は少ないが今までの経験上、そのホテルのシステムも俺の世界となんら変わらないと思われる。
しかし、先入感は良くない。
一応、基本システムは確認しておくべきだ。

「ありがとうございます。じゃあそこにします。場所とチェックインの仕方を教えてもらえませんか？」
「そうか、君の世界とシステムが違うかもしれないからね。まず・・・」

俺と一持兄さんの会話を聞いていた店主が、一持兄さんの言葉を遮って建設的な提案をしてくれた。

「それだったら、どうだろう。良かったら、今日はうちに泊まっては？」

「そうだ、それがいいよ工口（くぐち）君」
それに、一持兄さんも、両手を叩いて納得する。

「ちょっと、待ってよ。お祖父ちゃん泊まるって、どの部屋に泊まるのよ」
「お前の部屋の隣が空いてるだろう」

千逗里緒の隣の部屋に俺が・・・

＜つづく＞

空を斬る夢花（前書き）

千乃工口（ちのくぐち）のＡＶ界初日の締めは、千逗里緒の家での宿泊となった。

空を斬る夢花

俺、千乃工口（ちのくぐち）は、大学受験を間近に迎えた高校三年生。

今日、俺の前に突然ＡＶ界からやって来たと言う”ラミア”（今、俺は”まほまほ”と呼んでいる）と名乗る女の子が現れたのである。

そして、俺はまんまとその子に淡い男心をもてあそばれてしまい、半同意の元に誘拐されてしまった。

彼女の誘拐目的は、この俺をＡＶ界に就職させることであった。

俺はてっきり、一般に言う単なるアダルトビデオ界と言う”ＡＶ業界”だと思っていたのだが、彼女の言うＡＶ界とは、”ＡＶ界”言う名前の”異世界”であった。

あっさりとＡＶ界に連れて行かれ、一人戸惑う俺を救ってくれたのは、一持握（いちもつにぎる）と言う超美形の焼き芋屋の男性であった。

そして、彼のお陰でこの俺も何とかこのＡＶ界でやっていけそうな雰囲気になりつつあった。

まずはちょっとしたトラブルのあった、一夜の宿をお世話になりそうな”Ｇ３食道（ジーサンショクドウ）”。その娘、”千逗里緒（せんずりお）”とは、穏便に行きたいものである。

それでは本編へ・・・。

★☆　第７話　★☆
☆★　空を斬る♂　☆★
★☆　♀夢花　☆★

結局俺は”G3食道”の二階、千逗里緒の隣の部屋で、今宵一晩お世話になることになってしまった。

見知らぬ世界のホテルと言う宿泊施設に一人泊まることも緊張するのだが、幾ら人が良いご主人様とはいえ、孫娘の千逗里緒との経緯(いきさつ)が経緯なだけに、彼女の隣の部屋に泊まることだけは出来れば避けた方が良いような気がした。

しかし、一方ならぬお世話になった一持兄さんの勧めを無視する訳にはいかない。

それに、千逗里緒が思った程の抵抗を見せなかったことは、俺に確かな手応えを与えた。

もっとも、手応えと言っても今番が無難に過ごせると言う手応えであり、残念ながら色恋ごとのことではない。

一持兄さんとは、明日この世界に住む為の手続きをしに、一緒に役場に行ってもらえると言う約束を取り交わし、安心して今宵の別れを告げるに至った。

兄さん曰く、まほまほ（ラミア）が”スカウト届書”と言う書類を提出しているはずとのことである。

しかし、本当に大丈夫なのだろうか？

逸れてしまったことに対しては俺にも責任の一端はあるのだが、それを差し引いてもお世辞にもしっかりしているとは言えない。

もし、届け出が済んでいなかった場合、俺はどうなるのだろうか。

元の世界に返してもらえるならばいいが、抹殺でもされてしまったらどうしよう・・・。

安全を考えるならば、窓の外で燦然と輝く一等星に向かい届け出が無事済んでいることを願うことだ。

但し、願えば叶う世界であることが前提だが・・・。

まあ、色々考えても何の対策を取ることも出来ないのが現状だ。
取り敢えず、全ては明日だ。
そう。自分を納得させるしかない・・・。

何て思っても俺の緊張は解れはしない。

こんな時はどうするか？
気を紛らす為にテレビでも観ることだ。幸い目の前にテレビらしきモニタがある。

本当にテレビなのだろうか？

まさか、電源を入れても爆発すること等はあるまい。
俺は部屋にあるモニターのリモコンらしき物に手を伸ばした。

「電源」と書かれたボタンを取り敢えず押して見た。
すると、どうだろう。

確かに映像が映し出され、それに合わせて音声も流れてくるのだが・・・。

んっ？

俺はいきなり映し出された映像に俺は思わず生唾を飲み込んだ。

取りあえず音量を絞り、条件反射で部屋の扉に視線を向けた。

誰もいない・・・。

大丈夫だ。今、この部屋はプライベート空間だ。

俺はモニタの至近距離に位置を移動した。モニタまでの距離は1m余り。

今、俺の為に映し出されている映像は一対の男女である。

そして、その姿はこの世界に思う存分マッチしている。

本当にギンギラギンにマッチしている。

思わず俺はモニタの中の男女の動作に目を細めて注視してしまう。

部分的にファジーな映像を観る時の癖ではない。

むしろ、イケない位に各部位がはっきりと映っている。

そうだ、裸体なのだ。

だが、それだけでは無い。

何故か?

と言えば見るからに、我々の知っている裸の行動とは、ちょっとばかし違っているのである。

どう違うかというと、確かに振幅運動は行っている。しかも、かなりの高速運動だ。そうではあるのだが、その動作が”組み体操”っぽいのである。

俺は、その異様さに返ってマニアックな企画物の様相を感じ取ってしまう。

だが、それはそれで見様によっては良いものだ。新鮮で変にグッと感じるものがある。

俺の必要十分条件は過不足なく満たしている。

「いけてる・・・」

俺は呟いていた。

これは一体何と言う番組何だろうか？

何とかこの番組の名前を調べなくては・・・。

しかし、知る手段がない。

取り敢えず、曜日と時間は記憶しておこう。今日は何曜日なのだろうか？

これから当面の間、毎週お世話になることになりそうだ。

そんなことを考えて独り思考を慌ただしくいると、トントンと小気味良い階段を昇る音が聞こえて来た。

誰かが階段を上って来る音だ。

大概、こう言う時に限って邪魔が入るものである。

俺の家でもそうだ。

そんな時に限ってお袋や、妹の少毛（しょうも）がやってくるのだ。

今、階段を上って来ているのが誰かは、俺にも判っている。千逗

里緒だ。
既に音だけで判別がついてしまう。まあ、俺の他には二人しかいないので、５０％の確率と非常に高くはある。

彼女にこの状況を見られるのは、非常に不味い。
やっと友好？いや、通常関係に近付いているところなのだ。

といってもいきなり扉が開くことはないだろう。
だが、音が漏れて聞かれるのは拙い。今のところ不思議と、らしくない声ではあるが、いつ”行くだの行かない”だのと叫ばれるか分らない。

そう思い、俺は取りあえず音声は一時消すこととした。
これで安心だ！

だが、俺の甘い考えはこの世界では通用しなかった。
いきなり扉が開く。

どうやらこの世界はそう言う世界らしい。或いは、この千逗里緒に常識がないかである。

「お風呂入るでしょ」

千逗里緒はいきなりそう言いながら部屋の中に、俺のプライベートに土足で、いや裸足で侵入して来た。
フランクな女だ・・・。

俺は見事な条件反射で、下方に伸ばし掛けていた右手をさっと無難な位置に戻すが、電源を切る余裕までは無かった。

しかし、せめてもの救いは、何の行為もしていなかったことだ。人の家で迂闊にやっては行けない。それが原則だ。きっと、この世界にも法律はなくても、それくらいの道徳はあることだろう。

だが、どこかの国の老人顔の総理も似たようなことを言ったかもしれないが、情況的にＷＯＲＳＴではないが、確実にＷＯＲＳＥではある。

俺は恥ずかしさで、怒に似た感情が込み上げて来る。

怒りと恥ずかしさで、顔が熱い。熱いのに冷汗まで出てくる。

ところが・・・。

「ああ、見てたの。あれ、音出てないわね」

千逗里緒は、こんな、この程度の矮小な俺に対して感心した様な顔を見せ、俺の手にしているリモコンに彼女の手の重みが加わると、音声が耳に伝わった。

マラソンでもしている様な息遣いがスピーカーから聞こえてくる。

どういうことなんだ？

てっきり、また怒鳴られるとばかり思っていた。

それなのに・・・さらに、

「でもそれ、昔のよ。無料チャンネルは昔の名作しかやらないのよ。だから、あんまり参考にならないわよ」

と、解説まで付けてきた。

俺の怒りと冷汗は、いつの間にか好意と安らぎに変わっている。

どうやら、黙って部屋に入るのが当たり前であれば、この手のビデオを観ることも当たり前に感心される事のようだ。

ＡＶ界恐るべし！

俺はホッとすると同時に、ある事が頭を過っていった。

と、言うことは・・・。

これがその大会と言うことになるのだ。

こ、これが大会なのか・・・。

俺はこんな大会に出場するのか、それも真っ裸（パ）で。

しかし、ここで恥ずかしがっては、俺が勉強の為にビデオを観たことにはならない。

咄嗟に、

「そーか、これは、昔のなんだ・・・・」

適当に思いついた言葉を吐いてみる。

それに彼女は、俺の弁解も聞かずに、

「ああ、でもこれ懐かしい、１０年前のＧ１ねぇ～」

と、懐かしがっている。

ちらっと見ただけで、分るとは相当の競馬通？ではない、絡み通だ。

それに、
「G1って、これが最高の絡みなんだ・・・」
俺は素朴な独り言を言ったつもりであったのだが、千逗里緒は親切に解説をしてくれた。
「そうよ、10年前ではね、今じゃこの程度では全然話にならないのよ」
何か誇らしげだ。
外国人に理解の出来ない日本のお国自慢をしているのと同じ様に俺には聞こえてくる。
「ちょっと貸して」
そう言って、俺が手にしているリモコンを取ろうと、俺の背中越しに手を伸ばして来た。
彼女の洗いざらしの髪が俺の頬を掠めた。微かに体が触れ合う。
甘く、心を潤わす香りが俺の鼻から「股間《五感》」に伝わる。
湯上りの彼女の体はジューシーだ。
たちまちの内に俺の全神経が彼女に支配される。
千逗里緒はジャージ姿で、格好事態には何の色香もないのだが、なんだろう、この感じ・・・。
今まで味わったことのない心臓の鼓動。
まほまほとの接触でも感じなかった、このドキドキ感。

彼女はそんな俺にも気付かずに、俺の前に出て自分の一番感動したと言うところにビデオを早送りする。
どうやら、これは無料配信ビデオで、ダウンロードしたものをセーブすることが出来る仕組みらしい。その場面を探しだすと、

「ここ、凄いでしょ。１０年前のビデオとはとっても思えないわよね」

そう、自慢げに言って来た。

彼女の見せてくれた演技は、不思議にも”事”を済ませた、いやあれはフェイクだから、済ませた演技の後の他愛もない男が女の頬を撫でた動作であった。

男にとっては、何の感情も入っていないただの女性へのサービス行為である。

そんなとこに感動するのかぁ・・・。
とも思ったが、それよりも俺は彼女から漂う香りの方に心は奪われてしまっている。

彼女の後姿が美しい。例えジャージ姿でも・・・。俺の目にはジャージがシースルーに見える。
上着のウエストの生地の余り方で、その締まった腰が認識出来る。

すると、その腰を目掛けて俺の両手が自動運転の様に動き出す。

出来れば、できれば彼女の体をこの両の手で抱きしめたい。
もしかしたら、このＡＶ界であれば、そんな行動は普通の事かもしれない。

しかし、もしその行為が、俺の世界と同じ解釈であれば俺の未来は、この場で消えて無くなることだろう。

ここは、ここは我慢だ。

無難に生きるのが俺の信条なのだ！

俺は、伸ばし掛けた両手を渾身の力でゆっくりと戻そうとした。
その時であった。彼女が振り向いたのだ。

俺は慌てて両手を自分の陣地へと引き戻した。
きっと、俺は驚の余り大きな口を開けていたに違いない。

「どうしたの、そんな顔して？Ｇ１が凄くてビックリしちゃった？１０年前のので驚いてたら駄目ね。それより、先にお風呂入っちゃってよ」

彼女は異世界から来た俺に対して、またしてもお国自慢である。
良かった・・・。

「は、はい」

ホント良かった。バレなかった・・・・。
俺はまたしても冷汗を背中に流し、上ずった返事を返した。

この後、俺は彼女に案内されて、この世界初のお風呂で冷汗を流すのであった。
ちょっと期待したのだが、流石のＡＶ界でも彼女が背中を流してくれることは無かった。

＜つづく＞

空を斬る夢花（後書き）

お粗末でした。

糠（ナイ）喜び？（前書き）

千逗里緒（せんずりお）との関係も修復してきた。

よし！

糠（ナイ）喜び？

俺、千乃工口（ちのくぐち）は、大学受験を間近に迎えた高校三年生。

最近、俺の頭の中には大脳をも凌ぐ、煩悩と言う名の脳（悩）みそが何処かで育っているらしいのだ。

と言うのも、俺の座右の銘「無難な人生」を掲げた俺の大脳が、呆気なく煩悩によって支配されてしまうことが多いのだ。

あげくの果てに、ついに今日”ＡＶ界”と言う世界に身を置くはめになってしまったのである。

さらに、このＡＶ界とは一般に言う単なるアダルトビデオ界と言う”ＡＶ業界”ではなく、”ＡＶ界”言う名前の本物の異世界であったのだ。

さあ大変だ！俺の希望に満ちた将来が窮地に追い込まれてしまった。それも目先のだ。

だが、そこでこの俺に救いの手を差し伸べる人物がいた。

救世主、一持握（いちもつにぎる）と言う焼き芋屋の兄様である。

彼はこの俺に、絶品美味の”焼き芋”と、有り難い”ＡＶ界のお導き”を与てくれ、更に今夜の宿までも紹介してくれたのである。

お陰で、俺は何とかこの世界でやって行けそうな希望を感じるに至った。

だが、慣れない世界だ。

これから何が待ち受けているかわからない。

まずは、慎重に行動する事を心がけよう・・・。

★☆　第８話　★☆
☆★　糠［ナイ］♂　☆★
★☆　♀喜び？　★☆

「この世界の人達も湯船に浸かるんだ・・・」

千逗里緒に案内された、千逗家のお風呂は、０．７５坪タイプのユニットバスだ。

我が家のお風呂と同じ大きさであれば、色も形も良く似ている。
家は古いが風呂は新しい。

「改築したんだ・・・」

何て思っていると、３年前の我が家の水回りの改装を思い出す。
ここ数年の千乃家の一番のイベントであった。

「お袋、心配してるだろうな～。少毛（しょうも）、勝手に俺の部屋の中いじってないだろうな・・・」
（因みに、少毛とは中学１年生の妹である）

こんな時、親父に対して何の気持ちも出て来ないのは、俺だけではないだろう。

「親父って、寂しいもんだなぁ・・・」
そう思う。

しかし、こんなノスタルジックな思考も直ぐに吹き飛んだ。
もし、彼女達二人に部屋に入られたなら、いや確実に入るはずだ。
部屋から俺が出て来ないのだから。

その時、”イベント”の途中で残して来てしまった”無実のティシュー”に対する彼女達の反応を考えると、俺に家に戻る勇気が湧いて来ない。
即座のいい訳すらしようがないのだ。

そんな気持ちが返って、この場所で生きて行く力となるのは皮肉なものだ。

「よし、当面はここで生きて行こう！」

これも、逃避の一つかもしれない。
だが、発生源は何であれ、これも生きて行く為には必要な合理的思考である。

それにしても、生きて行く為には、まずは”あの大会”に出場して安定した生活をしなければならない。
収入が必要なのだ。

そうか！
ここに来て、やっと親父の存在意義が分っ来た気がする。親父のありがたみが・・・。

とにかく、全ては明日、一持（いちもつ）兄さんと役場に行って、この世界で生活する手続きをしてからである。

俺はこの世界のスカウターと言う存在、”まほまほ”によって、スカウトされたのだ。

と、言うことは俺は学校で言えば特待生みたいなもので、プロ野球で言えば助っ人外国人みたいなものである。

「凄い待遇が待っているのだろうか・・・？」

いや、止めよう。

期待に裏切られた時の落ち込みが大きいだけだ。

それ以前に”まほまほ”が、滞りなく手続きをしたのかが心配である。

取り敢えず今は、明日、無事手続きが住むことだけを祈ろう。

それさえ済めば、少なくても契約金はあるんだ。当面は何とかなる。その間に、大会に出てお金を稼ぐ方法を研究すればいいんだ！

俺はなんと言っても助っ人外国人なんだ！

きっといい仕事が出来るに違いない！

俺は”まほまほ”を早く見つけ、契約金を変換して元の世界に戻ろうと思っていた気持ちから、可也気持ちが大きく成って来ている。

これも合理的思考の影響かもしれない。それに、千逗里緒の態度の変わり様だ。

それとも俺の若さだろうか？

大きな不安に対して結論が出てしまうと、ぽっかりと無思考の空間が出来てしまう。

すると、そこに第三にして今や俺の体内で一番能力の高い煩悩と

言う脳（悩）が活発にその空間を埋めようと進出を始めて来た。

そうだ！　明日への結論が「出ても」、本日未だ「出ていない」”もの”があるのだ。

その要求（欲求）が、湧水の様に下から湧き上がって来るのである。

そうなのだ。今日の収支が合っていない。

沢山のモノを得たにも関わらず、全く利用が出来ていない。今や俺の”うんたら袋”は億マン長者である。

始まりは”まほまほ”の肉体的感触。

そして、直近で言えば、あの、俺の心を掴んで放さない千逗里緒の香りと、頬に触れた時の彼女の髪の感触。

それらが、エナジーとなって俺の中でたっぷりと貯蓄されているのである。そして、今や高利率で運用されている。

このまま放っておいて、俺の愛すべき道徳的行動が取れるのか？

「そうだろう？」

俺が頭（こうべ）を下げると、下（しも）では頭（こうべ）を上げている。

もしかすると”悩ミソ”が詰まっている頭は・・・なのかもしれない。

暫し俺は、風呂から上がることを躊躇い、生まれたままの姿で思考を廻らせてみる。

ここは他人の家だ。だが、この０．７５坪の空間は何なのだ？
俺はまっ裸ではないか。
と言うことは完全なるプライベート空間とは違うのか？

そうだ、お風呂とトイレの個室は完全なプライベート空間なのだ。
他人の家にも関わらず、あらぬものを出すことが出来るのだ。

と言うことはだ。ここで事を起こしても問題がないのではないのだろうか？

道徳に反することはなのでは無いか？

しかもだ。ここであれば、紙屑一つ残さないで済むのだ。
何せ、あの排水口に全て流れ去ってしまうのである。完璧だ！

するか、しないか？
やるか、やらないか？
　やったら、すっきりするぞ！

でも、やったら、流れるぞ？

俺の俯く視線の先”煩悩くん”のその先には、暗い排水口が見える。

「こ、ここに流して、人として正しい道なのか・・・」

そうだ。こんな暗い所に一瞬の、”かげろう”よりも儚い生（精）を流してしまって、本当にいいのだろうか。
儚い人生とは言え、俺の”半息子”たちだ。娘かもしれない。

空しい、何か空しく感じられる。

そうだ。きっと、すっきりしないに違いない。

俺は、俺は・・・。

端的に言って、俺は内面から溢れるパワーもそのままに浴室から出てきた。

それなのに、何故か清々しい。

心地良い気持ちに包まれる。

森の”朝の目覚め”と言うのだろうか。

浴室の湿気を含んだ空気が”森の吐息”に感じられ、脱衣場の照明が”木漏れ日”の様に俺の体を優しく包み込む。

俺は人として正しい事をした喜びに満足しながら、着替えを始めていた。

すると、その時を待っていたかの様に、タイミング良く声がした。

俺に語りかけて来たその声は、５０％の確率と高確率であるにも関らず、期待に反して、この家のご主人の声だった。

脱衣場の扉の向こうで足音がする。

言い方が悪かったが、誤解しないでほしい。

期待はしていなかったが、心から”有り難く”思っている。本当だ！

「お風呂から上ったかい？」

ご主人の声は温かい。

「あっ、はい。今、出ました」
そう答えながらもご主人の温かい声を聞くと、しつこいが本当に浴室を”森”に例えることが出来て良かったと思う。

「飲み物を置いとくから、部屋で飲むといいよ」
そう、温かいおもてなしの言葉をくれた。

そして、独り言の様に、
「おやっ里緒も工口(くぐち)君に刺激されて、やってるな・・・」
そう、満足そうに囁くと足音が去っていく。

俺は取り敢えず、
「ありがとうございます」
ご主人に聞こえる様に、爽やかに少し大きめの声を出した。

それにしても、ご主人の言った”刺激”に”やってる”と、言う二語がちょっと気になるところではある。

脱衣場を出ると、オレンジジュース色をした、小瓶が2本置いてある。
多分、この世界にもオレンジジュースがあるのだろう。何せ、焼き芋がある位だから。

しかし、2本？
ちょっと、不思議な数だ。気前がいいだけだろうか？

そう思っていると、
「ハァー、ハァー、ンッ、クッ、ハァー、ハァー・・・」
今度は2階から声がする。

声と言うよりも。荒い息遣いだ。

そして、ご主人の言うとおり、ドタバタと言う震動が2階から伝わってくる。

「何をしてるんだろう?」

そう言えば、確か俺をお風呂場に案内する時に、確か、これから自主練をするとか言っていた。

「これが自主練の音なのか?」

その時は気にしなかったが、そもそも、自主練って何の練習何だろうか?

まあ、確かに彼女の絞まった身体であれば、学校の体育系の部活に所属しているのは間違いなさそうだ。

筋トレでもしているのかもしれない。

「そうか、このジュースを一本持って行ってくれと言うことか・・・」

それで、やっと俺にもご主人の気持ちが理解出来た。

つまり、ご主人は遠まわしに、孫の”千逗里緒”と仲良くやってくれと言っているのだ。

きっと、ご主人の心遣いなのだ。

そうと分かれば、俺も彼女の自主練にも興味がある。

本当は自主練はどうでもいいのだが・・・。

きっと、風呂上りの寝巻き姿と言うすべすべ感溢れる姿で、いや、既に薄っすらと汗をかいているかもしれない。

が、どちらでも俺には問題ない。

ついに、俺にも来るべき時が来たのかもしれない・・・。

ここに来て、彼女と俺の関係はかなり接近を始めてるのだ。

俺は2本のジュースと、”ドキドキ、ワクワク”を持って2階への階段を上り始めた。

＜つづく＞

糠（ナイ）喜び？（前書き）

千逗家の階段で工口（くぐち）独り芝居をする。

糠（ナイ）喜び？

俺、千乃工口（ちのくぐち）は、大学受験を間近に控えた高校三年生。

まだまだ未熟な俺は、肝心な所で己の心を抑制することが出来ず、その挙げ句”ＡＶ界”と言う世界に身を置くと言う不本意な結果をもたらしてしまった。

さらに、このＡＶ界とは一般に言う単なるアダルトビデオ界と言う”ＡＶ業界”ではなく、”ＡＶ界”言う名前の本物の異世界であったのだ。

見知らぬ世界に簡単に馴染めるものではない。時間が経つにつれ、俺は不安と孤独感に押し潰されそうになっていった。

だが、そんな時である。俺は”一持握（いちもつにぎる）”と言う、とても親切な焼き芋屋の兄様に出会ったのだ。

彼のお陰で色々と有りながらも希望を取り戻し、何とか”Ｇ３食道”と言う定食屋さんの二階で一夜の御世話になることにが出来たのであった。

そして、この世界で初めて会話が出来た相手にも関わらず、出会いの不味さから仲違いをしていた、この食堂の娘”千逗里緒（せんずりお）”ともいい感じになって来た。

今宵は何かが起こりそう、そんな予感がするのである・・・。

★☆　第９話　★☆
☆★　糠［ナイ］♂　☆★
★☆　♀喜び？　★☆

心臓の高鳴りに反して、以外にも俺の煩悩くんは均衡状態を保っている。
彼は、俺の期待と不安の深層心理を的確に表現してくれている。

確かに、こんな時に布越しからでも明らかな自己主調をしてしまえば、自ずから非常警報を鳴らしているようなものである。俺にとっては幸いと言っていいのかもしれない。

だが、肝心な時には存分に日頃の練習の成果を発揮して頂きたいものだ。
俺は期待を込めて彼に視線を落とすが、素知らぬ顔、いや、素知らぬあ〇まだ。つれない・・・。

十数段の階段だ。二階までは”あっ”と言うまでである。
しかし、俺は”ぁ”ぐらいの所で、躊躇いを感じて2本の脚だけを止めてしまった。

気後れと言う圧力に推進力が出ない。何せ、こんな状況は未経験なのだ。無風な室内の空気圧でさえも行く手を遮るのだ。

そうなのだ。つまり煩悩くんは、俺のこの心理を表現していたのである。

心拍数は確実に上昇している。俺の血潮が活発に動いてる証拠ではないのか？

だが、身体に力が入らない。
それは興奮だけのものでは無いからだ。

心が弱ると、生まれてくる思考は前へ前へとバックする。

もしかして、俺の大いなる勘違いとか・・・。
水平線に手が届く訳がない。脚だって五十歩百歩だ。
それに、この先の行動も全くのノープランなのだ。
目眩がしそうだ。

そんな時に、彼女の部屋から、物音が聞こえて来た。

「んっ？」
俺の心のベクトルが向うべき方向を誤ったことに気付き、瞬時に修正をする。

だからと言って、ここで大人しく引き下がっていいのか？
此処のご主人が与えてくれたチャンスを無にする訳にはいかない。
無にしたくはない。

本当の俺は熱い。特に人の優しさは絶対に裏切れない！

きっと、彼女に彼氏が出来ない事を心配しているんだ。　想像だが・・・。
この俺は認められているに違いない。　これも想像だが・・・。

それに、それに３０分程前の湯上りの彼女と僅かに掠めた感触に、心を潤す彼女の香りを体がしっかり覚えてしまっている。これは事実だ・・・。

行きたい、行きたい２階の竜宮城に行ってみたい。
考えよう！

そうだ、考えよう。彼女は自ら俺に接近して来たのだ。ｐｅｒｈ

ａｐｓ・・・。

少し良い雰囲気であったではないか。ｍａｙｂｅ・・・。

あれは、あれは、少しは俺へのアピールが含まれていたのではないのか？ｐｏｓｓｉｂｌｙ・・・。

いかん、また気遅れしてきてしまった。

僅かではあるがまだ時間はある。

予習をするんだ、”考エロ！”

俺は階段を三歩上っては、二歩下る、行きつ戻りつおっとっと。

無駄な行動で故意に時間を作り出す。

よし、まずは掴みの言葉からだ。

彼女はきっと今何かの練習中なのは、彼女の言葉からも、先ほどのご主人からの言葉からもほぼ間違いないだろう。

「練習、お疲れさま！」

と言って、このジュースを出すと言うのはどうだろうか？

しかし、元々千逗家からの頂き物である。何かおかしい。あつかましい。

人のふんどしで相撲をとって、無事な可能性はどれ位だろうか。

痒くなる位の覚悟は最低限必要だ。

それでは、

「あっ、部屋間違った。ごめん・・・」

と真摯に誤りつつ、

「へー、○○可愛いね～」

なんて、彼女の持ち物を褒め部屋に侵入していく。

そして、彼女が気を良くして話し掛けてくる。

そこから、二人は盛り上がり、時を忘れる・・・。

駄目だ、これでは三度奇跡が必要だ・・・。

何とか極自然に部屋に入る方法は無いものだろうか？

いつの間にか僅かな前向きな心も全く姿を消し、プレッシャーのみになってしまった。

プレッシャーに押しつぶされそうで、階段から転げ落ちそうだ。

やっぱり、部屋に行くのはやめて、大人しく一人で2本飲むのも良いかもしれない。

俺は、俺は、草食系でもいい・・・。

そう思った時だった。

またもや彼女の部屋からは吐息が漏れてくる。前よりも激しくセクシーだ！

まさか、この甘い吐息は、”もなか”だったりする？

いや、ここはＡＶ界だ。それも”練習”の一つかもしれない。

練習？

そうだ、重大なことを忘れていた。ここはＡＶ界なのだ！

殆どの人達が”あの大会”を目指し練習に励むと言う世界なんだ！

俺の後ろ向きな姿勢も、一気に欲望へと生まれ変わる。

そうだ。元の世界であればともかく、そんな奥ゆかしいことでは、このＡＶ界では生き残れはしないだろう。

彼女も同じ人間なのだ。きっとエロさは持っている。

大丈夫だ、工口（くぐち）、恐れるな！

例え練習ではなく”もなか”であっても、いや、最中だからこそ受け入れてくれることだってあるかもしれない。ここは何んといってもＡＶ界なんだ。

そうだ、こんなのはどうだろうか。

真面目な顔で、

「ＡＶ大会のことを教えて欲しいんだけど？」

疑問形で攻めれば、きっと思わず回答を返してしまうだろう。

彼女は俺がビデオを見ていたことに感心していたではないか。今は、もうコミュニケーション位取れる関係にあるはずだ。

そうだ。その流れで、「一緒に実践練習を」なんてことになるかもしれない。

うん、これは良いかもしれない。まずは、候補として取っておこう・・・。

そんなことを考えている間にあっと言う間に千逗里緒の部屋の前

に来てしまっていた。
そこで俺は気づいたのだ。

そうだ、忘れていた・・・。

切っ掛けの言葉を言う前にどうやって部屋に入ればいいのだろうか？

ノックをすればいいのか？
ノックをして「今晩は」とでも言うのか？
そんなんで、その後の行動に繋がるのだろうか。ジュースを渡すことすら出来ないのではないか？

ここは、少し軽いノリ行くべきではないだろうか・・・。

そうだ、彼女だってさっき俺の部屋に、いや、俺の御厄介になっている部屋とは言え、ノックもせずにいきなり入って来たではないか。

この世界にはノックをするという風習がないかもしれないのだ。
ノックと言う風習のないところで、ノックをするのは返って危険かもしれない。
どんな誤解があるか分からない。

そうだ！

ここは、慣れない行動を取ってみるとしよう。そう体育館だと思えばいいんだ。
体育館に入るのに誰もノックはしない。

気楽に体育館の扉を開けてみよう。

先程の彼女の様に。

それが一番無難かもしれない・・・。

俺は彼女の部屋の取っ手に手を掛けた。相変わらず、千逗里緒の荒い息遣いが絶え間なく続いている。

それにちょっと興奮してしまう、俺。

大丈夫だ、俺ならやれる！　やりたい！　やられたい！

大丈夫だ、余り好まないが少しだけチャラチャラといってみよう。

大丈夫・・・。

「ゴクリ」

俺は口の中に溜まりに溜まった唾液を飲み干した。そして、

「カシャ」

三度めに自分に励ましの言葉を掛けようとした時、俺は何を血迷ったのか、心の準備が出来る前に取っ手を回してしまっていた。

頭と体が、緊張のあまりに同期が取れていないのだ。

既にこの音は彼女に聞こえているはずだ。ここで、逃げてはストーカーだ。

ここまで来たら、当然の様に扉を開けるしかない・・・。

俺はそのまま取っ手を引いた。

「ンッ、ウンッ・・・」
彼女の踏ん張る声が、扉が開いてからピタリと止んだ。
もしかしたら、取っ手を廻した音は聞こえて無かったのかもしれない・・・。

俺は、
早まったか・・・。

そう思ってしまった。心の遅れを取ってしまったのだ。

そのままの流れの中で一歩、前へと進むと、彼女のあらぬ姿が目に飛び込んで来た。
その姿に驚き、見とれ、声が出て来ない。
先程予習した言葉が、何処かに飛んで真っ白だ。

ただ、そんな中、景色だけは壮観だ。

彼女は上下に一枚ずつ極少の布を纏い、こちらに向って無防備に脚を広げてエビ反りになっている。
簡単に言えば、ブリッジと言う格好だ。

幅の狭い布は巧みに彼女の美の源を隠し、なだらかな美しい曲線の丘を新雪の様に白い布で巧みに表現していている。
俺の頭の中と等しく白い。

俺の頭の中でＢＧＭが響く。

♪丘～を越～え行こうよ　口笛吹きつつ♪・・・・
♪ラララヤギさんも　メェェェェ♪・・・

駄目だ・・。
頭が完全に現実から逃げている。
打開策が浮かばない。

きっと、俺は開いた扉の前で左手にジュースを2本下げ、”○本木ヒルズ”を建設していたに違いない。

突然の俺の出現に、彼女の体は茹でたエビの様に急激に赤くなって行き、綺麗にアーチを描いていた橋（ブリッジ）は、

「ドスン」

平たくなった。
そして、上体を起こした彼女の眼力が俺を正確に捉えた。

「出てけ～、へんた～い！」

彼女は頭の下にあった、コミカルなアヒル型の、恐らくは枕であろう。それを俺に向って投げつけた。
それを俺は胸でキャッチする。アヒル口が可愛い・・・。

ま、拙い！と思うが、この誤解をどう解けばいいんだ。
このまま出て行ってしまえば、屈辱の変態のままで幕を閉じる。
そう思うと、安易に動きも取れず声も出ない。

「何つったってんのよ、バカ」
バカは酷い、酷いが・・・。

「ノックもしないで、勝手に入って来ないでよ・・・も～」
えっ？ノックの習慣・・・あるんだ・・・。

俺は彼女の以外な言葉に目が点だ。

上体を起こした彼女は女の子座りになり、内股に力を込め綺麗に両足を閉じている。

両手は腕を組む様に胸を隠し、顔はこれ以上ない位に真赤になっている。

こんな時なんだが、ちょっと可愛い。

でも、そんなことよりもこの誤解を解かなければ。

何だ！　何て言えばいいんだ～。

そこで出て来た言葉が、

「ごめん、栓抜きを借りようと思って・・・」

俺は咄嗟にジュースの瓶を自分の顔の前に出していた。

この言い訳はどうだっただろうか、俺は首を竦めて彼女の反応を待つ。

「バカじゃないの、手で回せばいいのよ。そんなのも知らないの？」

「えっ、手で？」

どう見ても栓抜きで開ける栓である。王冠の様に等感覚に切り込んだギザギザが綺麗だ。

が、試しに廻して見ると。

開いた・・・。

「あっ、ホントだ・・・。ごめん」

俺はその音をスタートのピストルの合図とし、そそくさと彼女の部屋を出て自分の部屋に戻った。
彼女の怒りの視線が俺の背中を追って来るが、決して振り向くことはせず、何とか部屋に逃げ込んだ。

「そうか、この栓はそうやって開けるのか・・・」
そう言えば思い出した。外国のビールの栓でそんなのがあると聞いた気がする。てか、そんなことはどうでもいいのだ。
自分までごまかす必要はなかった。

しかし、良く考えると・・・、彼女が真っ赤になっていた理由は何だったのだろうか？
下着姿が恥ずかしくてはスッポンポンの大会など、とっても出れないはずだが・・・。

まあ、それはいい。そんなことより、果たしてあのいい訳で少しは何とかなったのだろうか・・・。

俺はオレンジジュースを飲みながら、明日の朝に起こるであろう出来事に恐怖を感じるのであった。

やっぱり、これ、オレンジジュースだったのか・・・。

＜つづく＞

糠（ナイ）喜び？（後書き）

たったお一方でも催促があれば頑張っちゃいます。

併性ヘノ路学園高等学校（通称〝へ高〟）（前書き）

工口（くぐち）は学校好き。

併性ヘノ路学園高等学校（通称”へ高”）

なんの因果か才能か、俺、千乃工口（ちのくぐち）は”ラミア（俺は、まほまほと呼ぶ）”と名乗るちょっとエッチな空飛ぶ女の子に、ＡＶ界にスカウトされてしまった。

俺がラミアに連れて来られたこのＡＶ界と言う世界は、何と一般に言う単なるアダルトビデオ界と言う”ＡＶ業界”ではなく、”ＡＶ界”と言う名前の本物の異世界であった。

そこは、意味不明な異種の世界。
もちろん俺は、孤独と絶望に押し潰されそうになっていく。

しかし、そんな訳の分からない世界でも人の心は変わらなかった。
何とか心温かい方々の助けを借りて、色濃い初日を無事クリアすることが出来たのである。

さーて、二日目はどうなることやら・・・。

★☆　第１０話　★☆
☆★併性ヘノ路学園☆★
★☆　♂高等学校♀　★☆
☆★（通称”へ高”）☆★

通称”へ高”と呼ぶ。

小高い丘の頂上を、やや下った斜面に４階建ての校舎がある。

そして、その丘の頂上には、スイーツのプリンのテッペンみたい

に平たく馴らした、そのグランドがある。
きっと、そこから眺めるＡＶ界の街並は、観光名所並の景色なことだろう。と、俺は想像する。

”併性ヘノ路学園高等学校（へいせいへのじがくえんこうとうがっこう）”、通称”へ高”。
そう呼ばれるのは、この学校の校舎の先端は左に１２０度折れ曲がっているからである。

それは、丘の地形に合わせてのものらしいのだが、その校舎の形状が、丘の後方にある小高い山の頂きからみると、丁度平仮名の”へ”の字に見えるらしいのである。

その真意の程は、俺の目の前で頭髪を気にしながら学校長が、自慢げにそう言うのだから間違いないであろう。

では何故、俺がいきなり此処にいるのか？

それは、これから順を追って話すことにする。
時間は、遡って今朝のことである・・・。

・・・千逗家の二階（千逗里緒の隣の部屋）で目を覚ました俺は、昨日の出来事に、頭を悩ませながら階段を降りた。もちろん、昨日気まずい状態で終わった千逗里緒と、どの様に接したら良いかである。

ところが、そーっと居間の扉を開けてみたが、千逗里緒の”緒”の字も見当たらない。
そこで、此処のご主人。千逗里緒の祖父に当たるのだが、彼に尋ねてみることにした。
すると、今日は珍しく朝練があるとかで、かなり早くに家を出た

とのことであった。

その行動が気になった俺は、昨日のことを包み隠さずご主人に話すと（と、言っても心の奥に秘めた思惑は秘めたままではあるが）、ご主人は苦笑いをしながら、「練習を見られたのが恥ずかしかったんだろう」と、そう言う見解であった。

下着姿でブリッジ姿を見られたことではなく、練習を見られた方なのか？

俺は「そっちかよ！」と突っ込みを入れたい処であるが、何分、此処はＡＶ界である。そんなものなのかしれない。

それに、そう思われた方が俺としても後味が美味しい。

今日、この家を出てしまえば、もう彼女の本心は分らないのだ。そう解釈した方が、胃薬を持ち合わせていない俺には好都合と言える。

意外かもしれないが、この俺は結構”人の評価”に弱いのである。

安心した俺は、ご主人特性のスタミナ朝食を朝から腹一杯ご馳走になり、およそ一生の半分に当たる感謝の意を込めご主人にお礼を告げた。

そして、迎えに来てくれた、俺にとって初日一番のヒーロー”一持兄さん（一持握（いちもつにぎる））”と、千逗家を後にした。

昨日この世界で暮らす為に必要な”移転届”を提出する為に、役場に連れて行ってもらう約束をしていたのである。

いよいよ始まる、この世界での生活。

俺は期待と不安と興奮に、若干の便意を感じながら千逗家から外

に出ると、俺のＡＶ界移転を祝うかの様に快晴と、素晴らしい天気である。

清々しい朝である！

震えが起こる。

震えが起きたのは便意の為ではなく、俺を迎入れた爽やかな風のせい？

それとも、今になって千逗里緒を一瞬思い出したせいだろうか。

里緒に対する武者震いかもしれない。

とにかく、新しい門出にふさわしい気分と言うことにする。

だが、気になることが一つだけ発生したのだ。

それは、小さな虫が沢時折、群れをなして青空を舞っているのである。

確か昨日までは、見なかった気がする。

朝だけ元気の良い虫なのだろうか・・・。

朝だけ元気が良いのは分らないでもないが、しかし虫が沢山舞うには、それなりの意味があるはずだ。

特に悪臭が漂っている訳ではない。まだ、便意までなのだ。おかしい・・・。

俺が鼻をくんくんとしながら不思議そうに上空を眺めていると、すかさず、一持兄さんがそのベストアンサーを返してくれた。

「飛んでいるも物が不思議なのかい？」

流石だ。

「何ですか、あの虫は」

「あれは虫ではなくて、”カメムシくん”と言う小型カメラなのさ」

そう言った後で、

「そうか、気が付かなかったよ、ハハハ。言われてみれば、”ムシ”には違いないいうか、ハハハ、なるほど～・・・」

一体、彼の笑いのツボが何処なのだろうか？

兄さんは暫くつまらないことで喜んでいたが、元来説明好きなのか、またもや俺に詳しく説明をしてくれた。

「ほら、昨日”お願いします”と言う、競演する”相方探し”があっただろう。

実は昨日のイベントは、あれだけで終わりなんだ。

本番のＡＶ撮影は、翌日の今日に行うんだよ。

見事カップルが成立して出演登録を完了した二人は、その間にネタを練っり、衣装を考えたりするわけさ。

そして、今日このカメラを呼んで撮影を行うことになるんだよ。

これで呼ぶんだ」

そう言って、いつのまにか手にしているスマートフォンのようなものを指さした。

「へー、無線でこのカメラを呼ぶんですか？」

凄い！以外にもハイテクではないか。

ＡＶ界恐るべしだ。

しかし、と言うことは、

「今、僕達も撮影されているんですか？」

気になるところだ。

そうなると、下手なところで下手なことが出来ないことになる。

多分しないが・・・。

すると、一持兄さんはまたもや詳しく説明をしてくれた。ホント説明好きな人だ。

きっと、いいニュース解説者になれると俺は思う。

「いい質問だね。だけど、それは無いから安心していいよ。

今この”カメムシくん”は待機中なのさ。

昨日の”相方探し”でカップル登録をした二人が、”撮影開始宣告”をすることよって、初めて二人の元に駆け付け、否、飛んで行き、撮影をすると言う制御になっているんだ。

撮影を始めると青く光りだすから、今は青く光ってないから待機中ってことなんだ」

兄さんは、再度、スマートフォンのようなものの”ＡＶ撮影開始メニュー”を見せてくれた。

現物を見せながらの説明は解り易い。

「へ～、凄いシステムだ！」

理系思考の俺は、初めてこの世界のことに感動を覚えた。

カメムシくんは渡り鳥の様にＶ字を描いて縦横無尽に飛び回っている。

それは、偵察をしている様にも見える。

俺はカメムシくんが待機中とは分ってはいても、見られている様でつい緊張してしまう。

俺は極力余計な所に手を触れない様気をつけながら役場へと向った。

千逗家から２０分程度歩くと、目指す役場が現れた。約１．５Ｋｍ位と言ったところだろうか。

大通りの一本中に入った裏通りである。

入口には“第２７部　そ地区羊　役場”と書かれてある。

”羊？”本当に人間が対象の役場なのだろうか？

保健所を思わせるネーミングだ。

役場の建物は２階建てで余り大きな建物でない。ネーミングからも、恐らくＡＶ界を細分化して地区毎に設けてあるものと思われる。

俺の鋭い勘では此処にはあの雲の上までそびえる“ミンジュ塔”があるのだ。ここは、恐らくこの世界の中心に間違いないだろう。

本来、もっと大きな役所に纏められていてもいいはずなのだが・・・。

まあ、どうでもいいのか・・・。

この役場の窓口は、小さな町の役場と同じと思ってもらって殆ど問題がない。

俺は兄さんの後に続き、役場のサインに従って”住民課”と言うところに向かった。

住民課の記入用テーブルに付くと、一持兄さんが備え付けの”移転届け”用紙を1枚取り、俺に渡してくれた。

「これに記入して、そこの窓口に提出すれば晴れてこの世界の住人さ」

それで終わり？

簡単過ぎないか？

俺はこの世界では、まだ不審人物では無いのか？

そうも思うが、簡単に越したことはない。余計な事を口にするのは止めよう。

しかし、それにしても、紫色の用紙と言うのは如何なものだろうか。

読みにくいと思うのだが・・・。

そう、思いながらも俺は、記入を進めて行く。

すると、驚いたことに、その用紙の”移転元”記入欄に”異世界名”と言う欄があることだ。

この移転届けで、唯一記入出来なかったのが、この異世界名である。

恥ずかしながら、俺には自分の住んでいた世界名が分らない。

いや、恐らく誰も分らないであろう。

世界は一つ人類は兄弟と教わって来たのだから、誰もが世界は一つだと思っている。

名前を付ける必要がない。

強いて言えば”世界”と言うのが異世界名になるのかもしれない。

しかし、それではふざけていると思われるだろう。それは無難な行動ではない。

そこで、”世界は一つ”と教わって来ていないはずの一持兄さんに恥を忍んで聞いてみた。

遠まわしに・・・。

「此処に、異世界名ってあるんですけど、異世界からＡＶ界に移転する人は多いんですか？」

それには、兄さんも驚いていた。

「工口（くぐち）君の世界では、違う世界との交流はないのかい？」

兄さんは切れ長の目をまん丸にした。

「ええ、まあ。恐らくその存在自体誰も知らないと思います・・・。僕も異世界があることを、今回実体験して初めて知ったので・・・」

「へ～、そうなんだ！そんな世界があるんだね。世界は広い！」

俺には、この世界の方がよっぽど驚きだが・・・。ホント世界は広い。

兄さんは暫し驚いた後に、やはり詳しい説明をしてくれた。ホント説明を苦にしない人だ。

もしかして、ホントにニュース解説をやっているのではないのだろうか？

そんな疑問が湧いて来る。

兄さんの説明を端折って解説すると、現在、大小合わせて１５の

世界が判っているそうだ。
その１５の世界のことは、このＡＶ界では一般的に”地方”と呼んでいるそうだ。

自己中的（じせかいちゅうてき）に聞こえるが、それはＪＲＡＶ会と言うＡＶ撮影の組織から見て、この世界が中央であるからしいのだ。
よって、この”１５の地方”のことが、昨日説明してくれた”ＪＲＡＶ会地”と言うことになるのだ。

もちろん、全ての世界がＡＶ撮影を行っている訳ではないのであるが、少なくても視聴位はしているらしい。

ただ、交流はあっても、この世界間の移動は誰でもが簡単に出来る訳ではなく、自由に行き来できるのは、”神”と、まほまほの様な”スカウター”、それに”ジャッジーさん”という裁判官的な仕事をしている人?だけらしいのだ。
羊の様な名前だが、決してジャッジーさんは羊ではないらしい。

兄さんによると、一般の人はこの”スカウター”や、”ジャッジーさん”に山の上に連れて行かれて、長いトンネルをくぐることにより移動が可能とのことである。

といっても、これは、聞くまでも無い。
実際、俺はこれを体験しているのだから・・・。

あれ?
すると・・・って、ことは・・・。
ちょっと待て、確か昨日、ＪＲＡＶ地から移籍してくるには”百人切り”が必要と言っていた筈だが・・・。
おかしいぞ。この俺は百人ところか、たった一人も（機能は残念

であったが）・・・。
一体どう言うことだ？

やはり俺はエリートなのか？
それとも”まほまほ”が人違いをしたのだろうか？
俺は、少し汗ばむ。

「で、僕の世界名を此処に書けばいいんですね」
と言いながら、ペンを止めていると、兄さんは俺の困惑に気付いてくれた様だ。

「工口（くぐち）君の世界は、最近見つかった世界で、この１５世界には入っていないんだ。だから、君が名前を付けるといいよ」

そう言ってはくれたが、そんな勝手に名目を付けて大丈夫なのだろうか？

”まほまほ”が提出済みと願いたい、”スカウト届書”と不一致は起こらないのだろうか？
そんな疑問が起こる。
しかし、彼女の書いたこと等、想像するのは不可能だ。

ここは俺の住んでいた世界の”世界名”に当たる一番それっぽい名前を付けるしかない。

しかし、そこまでハードルを下げても全く名前が全く思いつかない。

そこで、しょうがないので一か八か”ブラジル”と書いてみた。

そして、更に一か八かでこの”移転届け”を住民課の窓口に出してみる。
頼みは、スカウター名に”ララカー・ミラミ・アポストロ（ラミア）”と書いた”まほまほ”の本名の一点だ。
兄さんも、それさえ書けば大丈夫だと言ってくれた。

しかし、”まほまほ”は、そんなに凄いのだろうか？
ぶ厚く疑問だ・・・。

俺の書いた”移転届”を受け取った住民課の女性は、暫くパソコンの様なもの（多分パソコンだが）で確認していた様だったが、案の定？妙な顔をして、移転届けを持って席を立った。
そして、彼女の後ろで少し大きめな机を与えられている、少し偉そうな中年男性に相談を始めた。

なんだ？
何か拙いのか？
俺はどうなるんだ？

＜つづく＞

併性ヘノ路学園高等学校（通称〝へ高〟）（後書き）

今回はお二人もの催促を頂きました。
誠に嬉しく存じます。

早く目標の「第４章　ＶＳ　ダンディー摩擦熱（予定）」を書かなければ・・・。

”へ高”へ歩行（前書き）

ＡＶ界は役場も楽しい処。

”へ高”へ歩行

俺、千乃工口がＡＶ界なる世界に来て、今日で2日目。

この世界、ネーミングからして妙な世界なのだが、その仕組みも妙である。

黙って座っていても何かが起こる。そんな世界だ。

もちろん、初日から盛り沢山の出来事が俺を待っていたのだったが、それも何とか消化することが出来た。と思う。

そして、二日目。

今日も穏やかな時間が淡々と過ぎていくとは、とっても思えない。

既に、それなりに事は起こっているのである。

この後どうなるのかは全く予想がつかない。

こうなれば、後はナスがままに・・・。

★☆　第　１１　話　★☆

☆★　”へ高”へ　☆★

★☆　♂　歩　行　♀　★☆

なんだ？

何か拙いのか？

やっぱりか！

時折、住民課のお役人二人が俺の顔に視線向けてくる。

その目が冷ややかで、その度毎に俺の体は、冷や汗の気化熱で冷

たくなって行く。
やはり、”まほまほ”は”スカウト届書”を出していないのではないのだろうか？

いや、その前に”まほまほ”自体が怪しい。あやし過ぎる！
俺はこのまま不審者で捕まってしまうのではないのか？

つま先まで冷たくなっている俺の御御足は、靴下に苔が生えそうな位に適度に湿っている。
冷や汗とは、足の裏からも出るものなのか・・・。

いかん！またしても・・・思考が逃げてしまった。
この思考の逃避愚は直さなければ。
感心している場合ではないのだ。
次の一手が俺のこの先を大きく左右するかもしれないのだ。

逃げようか？
それとも戦うか？
俺のミラクルビームは、まだ未完成だぞ・・・。

そ、その前に・・・、は、腹の調子が悪い。きっと、緊張のせいだ。
ここに来た時から様子がおかしかったのだ。
俺は子供の頃からそうだ。良きにすれ、悪しきにせれここ一番と言う時になると、穴門（けつもん）が広く世間に開放しようとする。便秘の時以外に良きことはないか・・・。

だめだ・・・。
この状況では何の手も打てない。

世界は違えど、世の中で何より優先するのがこの便意からの腹痛の解決だ・・・。

それを止められるのは、勇者や魔王、それに精霊にだって不可能に違いない。

先ずは戦いの前にトイレで腹痛を戒めるしのが定石と言うものだ・・・。

俺は当然それに従うことにした。

「一持さん、ちょっとお腹の調子が悪いので、トイレに行って来ます。呼ばれたらお願いします」

俺が危機的状況を悟られまいと、極力平静を装ってそう言うと、俺の緊張とは裏腹に兄さんはニタニタと笑いながら、

「昨日つまみ食いしたんじゃないだろうね」

意味深なジョークを飛ばしてくる。

いや、本当にジョークだろうか？

もしかして、本音ではないだろうか？

昨日摘み食いをしていたら、本当にお腹を壊したのではないか？

壊してもおかしくない気もする。何せ、あの千逗里緒なのだから・・・。

どっちにしても、俺の運命はここで腹痛に悩むということになっているのだろう。

と言うか、冷静に分析している場合では無い。

俺はおもいっきり、穴門から空気を吸うかの様に、大腸出口最端で真空を作り、トイレに一時撤退を余儀なくする。きっと顔面蒼白に違いない。

余裕は無かったのだが、トイレの扉を開ける前に俺の慣性の法則が働いた。

俺独自の自然の法則では、無意識に気になっていた方に力が流れるのだ。

俺の首は自然と、住民課窓口の方に向きを変えて行く。

「あれ？」

一持兄さんが、窓口の中に入って窓口の女性の肩を抱いている様に見える？

まさか、役場で軟派か？

それとも、見間違いだろうか？

少しだけ偉そうな中年の男性が、少しも偉そうに見えなかったのも気のせいだろうか？

そう思いながらも腰から下に急かされ、俺はそのまま個室に入り用を足す。

足しながらも、もう5秒見ておくのだったと悔やまれる。

しかし、この5秒が微妙であることは言うまでもない。

間に合わなかった時のことを考える・・・のは止そう。

俺の内部的事情は、パステルアイボリー色（色番：#ＳＣ１）の陶器への容赦のない開放により一気に解決へと進み、今まで冷汗いを掻いていた外部的事情も何処へやら。

気分爽快にトイレから出てみると、一持兄さんは窓口の外で、頭を下げながらお歳暮程の白い箱を一つ受け取っている。

そうだった。思い出した。一持兄さんの不思議な行動・・・。

しかし、先ほどの奇妙な光景は腹痛からくる幻覚だったのかもしれない。

先程の光景と今の光景が繋がらない。

そうだ！どう考えても、勤務中の役人相手に軟派など行うはずがない。

そんな非常識な訳がない。

一持兄さんは、窓口の外で受付の女性に礼儀正しく接している。

中年の男性も黙々と書類を片付けている。

「やっぱり、気のせいか・・・」

そう思いながら窓口に近づくと、窓口の女性に違和感を覚える。

トイレに行く前まで不振そうに見開いていた目つきが、今では半分の細さになっている。

その細さは、絹の様に優しい。

そうだ、もう一つあったのだ。重大な問題が・・・。

そういえば、俺の腹痛は住民課からのプレッシャーだったのだ。

俺は目の前に迫らんとるす、有事のに対する対策中だったのだ。

俺はこの状況が正確に読めず、“半分マン”となり、どっちつかずの顔をしていると、一持兄さんが俺に微笑みながら俺にお歳暮の様な白い箱を渡して来た。

「手続きが終わったよ」

何事も無かったかの如く当然の面持ちだ。

そんな、落ち着いて言い放てるような雰囲気では無かった気がするのだが、これも俺の気のせいだったのだろうか？

若干の疑問もあるのだが、無事に越したことはない。俺はその箱を丁重に受け取った。

箱の蓋にはのし紙の様な紙が添えられている。

俺はその文字に軽く驚き、思わずそこに書かれた文字を音読してしまった。

「”贈呈　ＡＶ界必需７つ道具”・・・？」　なんだこれは・・・。

この不思議な白箱に対する疑問には、窓口の住民課の女性がとても親しげに説明をしてくれた。

因みに中に入っていたものは、

１：「身分証明書」　俳優名を決めて、３ｃｍ×４ｃｍの写真と合わせて役場まで持ってくる様に言われた。

２：「首から掛ける名詞ホルダー」、千逗里緒が昨日、”お願いいます”で首から掛けていたものと同じである。

3：「スマートフォンのような携帯電話」、一持兄さんの持っていたものと色違いだ。

4：「キャッシュカードのようなもの」、契約金を銀行で入金するようにとのことだ。

5：アパートの鍵の引換券、3日後に鍵を取りに来るようにとのことだ。それまでは、ホテル住まいになる。

6：「AVの書」日常必要なことが書かれているハンドブックだ。

それに、

7：そこそこの厚みのある2冊の本”生活の心得”と”JRAV会大会規約”だ。これは熟読する様に言われた。

この贈呈された”AV界必需7つ道具”の他にも色々と聞かされたが、一つを除くと大したことでなかった。様な気がする。どちらにしても後で2冊の本を読めば分ることだ。

その一つとは・・・。

なんと、俺が希望すればこの世界、AV界の高校に通えると言うことだ。

住民課の彼女によると、この世界は9月から新学期が始まるらしい。

と言うことは、この世界も今は11月らしいので、この世界で受験をしない俺は、この世界の高校3年生をほとんどフルに楽しめることになる。

いやいや、誤解のないように。

決して、元の世界に戻ることを諦めた訳ではない。
その為にも勉強はしておくべきなのだ。

何れにせよ、この世界の高校には通うべきである。
正直言うと、ちょっとドキドキである。
それは、余り同年代の人は見掛けないのだが、見かけた女性全てのクオリティーが高いのだ。

しかし、あくまで目的は勉学だ。

彼女の話では、高校は次の3校から選択が出来るとのことだ。
ＡＶ科のある高校は、この学区では3校だというのだ。スカウトされた身とそては、ＡＶ科に通うのが当然のことらしい。

紹介されたのは、「1：原川石発展掘削高等学校《はらかわせきはってんくっさくこうとうがっこう》（通称：原石発掘高）」名前が長い。

それと、「精オイスター大学附属高等学校（通称：ＳＯＤ高）」。
何か聞いたことがある気がする。

そして、最後に紹介されたのが「併性ヘノ路学園高等学校（通称：へ高）」。”へ高”？
以上の3校である。

どの高校も妙な名前ばかりであるが、簡単な学校紹介を聞いて、俺は迷わず”へ高”に決めた。
決め手は、5年前まで女子高だったと言うことである。
当然の決定であろうかと思う。

そんなこんなで無事手続きを終え、俺はこのＡＶ界に来て初めての”夢”を抱き役場を退場することとなった。ああ、そう言えば余り思い出したくはないが、昨夜”悪夢”ならばあったが・・・。

帰り際に、

「分らないことがあったら、いつでもいらっしゃいねん～」

と甘い言葉を掛けられてしまった。

明らかにここに来とは違う対応。

これもスカウトされた人間への待遇と言うものだろうか？

対応が良いと、俺の見方も変わってくる。

人間容姿だけでは無いことが良く分ると思うのだが、良く見ると彼女は、流石ＡＶ界と言わざるを得ない容姿であった。

一見お堅く見えるべっ甲のクロブチメガネにアンバランスな、腰のくびれ。

そして、ヒップへと流れる曲線が柔らかく万人に語りかける。

心なしか住民課の彼女の喋りの間に漏れる吐息が、妙に色っぽく感じる。

人間、心の余裕は大切である。見逃すところであった。

反射的に、俺はその息を僅かでも吸い込もうと、深呼吸をしたのだが、少しか補給出来ただろうか。

この時俺は、”メガネっ子”がナンボのものか始めて知った。

そう言えば、ＡＶ撮影で業績を残すと世界を動かすことが出来る

と、一持兄さん言っていたが、役場の職員もきっとそれなりの成績を修めた人たちなかもしれない。
視野を広く取れる余裕のある今であれば良く分る。みんな粒が揃っている。

ＡＶ界、楽しい処かもしれない！

何だかんだとあったが、俺は次回役場に来ることも楽しみとなり、目一杯両手を振る住民課のお姉たまにも好意的に手を振ることが出来、役場を後にしたのだった。

その後、俺は一持兄さんと別れ、真直ぐに帰ろうと思ったのだが、この世界の俺には帰る先が無かった。
何気なく歩いていると、俺は自然に”併性ヘノ路学園高等学校”通称”へ高”へと向っていたのだ。
４０～５０分は歩いていたと思う。

そして今、校長室のソファーに座っているのだが・・・。

＜つづく＞

”へ高”へ歩行（後書き）

なかなか話が進みませんが、頑張って書きます。

ＡＶ科担任三人衆（前書き）

千乃工口は、併性ヘノ路学園高等学校（へいせいへのじがくえんこうとうがっこう）”、通称”へ高に転入することになった。

そして、工口の前に現れたＡＶ科３年の担任達は・・・。

ＡＶ科担任三人衆

俺、千乃工口が、うっかりＡＶ界なる世界に来てしまって、今日で2日目である。

八方とそれなりの調和を保つことが信条な俺であるのだが、早二日目にして不覚にも苦手な人を作ってしまった。

それも、ＡＶ界初夜をお世話になった恩人、千逗家のご主人の孫娘”千逗里緒”である。

彼女はきっと俺のことを敵視しているに違いない。

しかし、千逗家を後にした今、恐らく彼女と会うことは、この先まず無いないと想像する。

今となっては、万が一道端で偶然に会った時は、素知らぬ振りで通り過ぎればいいだけなのだ。

今後は、今回の失敗を教訓として、新たな苦手を作らない様に気をつけるとしよう。

そんなことよりも、”移転届け”を提出した役場にて、俺に吉報が舞い込んで来たのである。

それは、なんと！この俺にもこの世界の高校に通う権利があると言うことなのだ。

この世界の女性の質は、俺好みにハイレベルだ。

もちろん、聞いた瞬間から俺の気持ちは一つである。進む方向に揺るぎはない。

新たな刺激を欲している俺の脚は、役場からの帰りに、早くも無

意識に意中の高校へと向っていた。

向った先は、”併性ヘノ路学園高等学校（へいせいへのじがくえんこうとうがっこう）”、通称”へ高”。

なんと、男女比率は１：４。

俺はそこで、新しい人生を切り開くのだ！

もちろん、万が一このまま元の世界に戻れなかった場合だが・・・。

★☆　第　１２　話　★☆
☆★　ＡＶ科担任♂　☆★
★☆　　♀三人衆　　★☆

校長はこの俺を前にして興奮気味だ。

異世界と交流のあると言う奇異なこの世界において、異世界からスカウトされて来たと言うのが、そんなに特別なことなのだろうか？

この世界の常識を知らない俺には、疑問なところだ。

だが、これは俺にとって決して悪い状況では無い。

校長がこの俺に対して好意的であることは間違いないのだ。やっと暖かい南風が吹いて来たと言うことになる。

併性ヘノ路学園高等学校、学校長。俺の中での通称”へ校長”は、小さな体の広い額に大粒の汗を掻きながらもう３０分近くも、この俺に為に自らの高校の素晴らしさを力説を続けている。

「・・・でして、我が校は併性になって依頼この学区内トップなのです。代表が出場した大会でも、毎回優秀な成績を・・・。まあ昨日の”お願いします”は、たまたま不運で残念だったのですが・・・

」

俺に媚を売る様にも見える、もみ手を交じえて語るヘ校長の話には、終わりが見えてこない。

一体いつまで続くのだろうか？

そんなことよりも、俺は入学の手続きしたいのだが・・・。

そんな気持ちとは裏腹に、ヘ校長の話は手前味噌に続く。

「そして、卒業生達はＪＲＡＶ会の各大会でも好成績を納め、このＡＶ界の為に多くの人材ふが活躍を・・・」

俺はヘ校長の話を、後半から半分以上も聞き流していたのであるが、あることに気付いた。

時々俺の顔色をうかがい、一瞬だけ言葉を止めるのである。

俺に、何かを期待しているのか？

一体何をすればいいんだろうか？

ここはＡＶ界だ。普通のことを期待されているとは思えない。まさか、昨日の千逗里緒の様に半裸でブリッジでもすればいいのか・・・。

そんな冗談は自分を苦しめるだけであった。忘れるとしよう・・・。

俺は取り敢えず、ヘ校長のトークに飽きた事をそれとなく知らせようと、話の合間に様子を窺いながら小さく腰を回したり、若干の首の体操を試みたが、校長のトークは身ぶり手ぶりを加えて激しくなるばかりである。

困った・・・。
気付いてくれない・・・。
昨日の千逗里緒事件がトラウマとなり、積極的な行動には出にくい。
しかし、間もなく、
「どうですか？この学校が他校とは違うことを少しはお分り頂いたでしょうか？」
不安げな顔付きで、ヘ校長が俺に何かを求めて来た。
もしかしたら、俺の行動を気にしてくれたのかもしれない？
もしかして、不味かっただろうか・・・。
行動を起こしてしまった後で何だが、気分を害してはいないか心配だ。
”不安気”に見えるヘ校長の様子が、実は”不満気”かもしれないのだ。
何せ、ここはＡＶ界だ。昨日の千逗里緒との誤解のこともある。
一体、何んと応えれば・・・。
「はい」と一言を言ってしまえばいいのだろうか？
それでは、いつまでこの状態が続くか分からない。それも避けたい気がする。
何れにしても、このままではでは何処かで勝負をかけなければならない様な気もする。

この際、プレッシャーでお腹の調子が悪くなる前に。
そうだ、この際はっきりと言ってしまおう。無難に受け身に回るのにも限界がある。

「あの～、お話は十分にお聞きしましたので、こちらに転入したいのですが、転入試験とかが必要なんでしょうか？」

えい、やっ、で言ってしまった！

俺は気分を害してはいないかとハラハラしながら、へ校長の顔見る。目が合う。

顔が驚いている。

やはり、話の先を静かに聞くべきだっただろうか・・・。

しかし、

「し、試験！試験なんて、とんでもない。そ、そうですか・・・我が校に来てくれますか。それは良かった」

へ校長は顔を燦然と輝かせ、テーブル越しに身を乗り出し、俺の手を握る始末だ。

へ校長の手は異様に汗ばんでいて、あまり感じのいいものではない。だが、そんなこと後で手を洗えばいいことだ！

俺は遅まきながら気づいた。へ校長はこの俺を入学させようと頑張っていたのだあった。

俺は遠慮うせず、早くそれを告げるべきだったのだ。

どうも、昨日の”千逗里緒の変”が俺の勘を狂わせている。

こんな勘の悪い時は誤解を生み易い。とっとと手続きを終えて帰るべきだ。

そう思い、

「入学の手続きを・・・」

と、事を先に進めようと言い掛けたのだが、彼はそれを遮って話を更に続ける。

へ校長は俺の意志表明を聞き、喋り疲れも忘れ更に興奮しているようだ。

どっちにしても、話は止まらなかったのだろう・・・。

しかし、一持兄さんといい、この校長といい、ＡＶ界の人は本当に説明が好きである。

これは最後まで付き合うしかない・・・のかもしれない。

へ校長の話では役場からは俺が転入希望で、３校の何れかの高校に行くだろうと言うことしか聞いてなかったらしいとのことだった。

きっと、彼は俺の獲得の為に必死だったのだろうと思う。

気を良くしたへ校長は、この後、俺の決断に惜しみない賛辞を振るまい、選択に間違いが無かったことの裏付けとばかりに学校の歴史を語り出した。

この学校は５年前までは”塀の字学園女子高等学校（へいのじがくえんじょしこうとうがっこう）”と言う女子高であったとのことである。

此処までは既知のことであるが、その理由までご丁寧に教えてくれた。

何故共学（この世界では”併性”と言うらしいが）になったかと言うと、それまで”２７部そ地区”で、へ高は３０年間学区内トップの座を守って来たのであったのだが、それが８年前にトップの座を明け渡して、２年連続でトップの座を他行に譲ってしまったらしいのだ。

これが、事の発端らしいのだ。

そこで、校内での練習環境の充実が急務と言う声が、生徒、教員だけでは無く保護者からも上がり５年前に共学になったとのことである。

しかし、成績トップの座を奪還するのに、共学（併性）にして何の練習をするのだろうか？

ちょっと解せないところである。

ただ、共学になった２年後にはしっかりと２７部そ地区のトップの座を奪い返し、昨年は”２７部”全体でもトップ１０に入った程の優秀な成績を納めたのだから、練習の成果が出たのは間違いなさそうなのだ。

そして、解せないことがもう一つある。

そんな学力優秀で名門にも関わらず、この学校の男子生とは初年度から全く増加しないそうなのである。

未だに、全生徒の８割が女子なのだ。

そのこともあって、まだまだ圧倒的に女子の力が強い。生徒会長も未だに代々女子であると言う。それどころか、主要な部分は全て女子生徒が占めているのだそうだ。

男女均等の力があってこそ、学校の発展があると力説するヘ校長に取っては、この俺が希望の星であるのだろうが、買い被り過ぎは後で落胆も大きいはず・・・。

一般人の脳みそしか持ち合わせていない俺に大きな負担になりそうだ・・・。

まあ、ここまで来たら、後はなる様にしかならない。

とにかく入学手続きが終了するまでは、このまま買い被ってもらうことにするしかないのだが・・・。

ヘ校長の話、第二段も永遠を感じさせていたが、恐らく昼のチャイムであろう。その音が校内に響き渡るとヘ校長の顔がほころんだ。

そして、一息を入れる様に椅子に腰を掛けると、入学に必要書類を用意する様にと、電話で指示を行い始めた。

窓から入る陽が眩しい。影の位置からも昼を告げるチャイムであろう。俺は昼のチャイムに救われる形となった。

編入手続きが、やっと始まった事に、俺は内心ホッとしたのである。

だが、それから、まもなくである。第三段の幕が開けた。

コン、コン・・。

と、校長室内に向けて、重厚なノックの音が響いた。

ヘ校長室の扉は、良い木材を使っているらしい。

「どーぞ」
校長の待ってましたと言わんばかりの言葉に扉が開いた。
「校長、お呼びでしょうか」
その歯切れが良く、脂(あぶら)の乗り切った色気を感じる女性の声が聞こえて来た。
それに、へ校長はソファーから立ち上がって彼女を迎える。
「待っていました、宝家(たからいえ)先生」
へ校長の声に招かれ一人の女性が入室して来る。
俺はその宝家先生と言う女性の入室に息を呑んだ。そして、茫然と見とれてしまった。
それは月並みだが一言でいうと、彼女から発せられるオーラがもの凄いのだ。
俺は人として格の違いにあてられてしまった。
青黒い髪を耳が隠れる程度のショートカットで揃え、黒のスーツに身を包んだ彼女、宝家(たからいえ)先生の姿はまるで本場のファッションモデルの様であり、さらに顔付きからは知的さが伺える。
彼女、宝家(たからいえ)先生は入室して直ぐに、こちらに向って一礼をした。
それは、校長に礼をしたのであろうが、俺も釣られて立ち上がり深々と一礼をしてしまっていた。
正直言って、俺は名門と言われるこの”へ高”にあって、校長の威厳のなさからＡＶ界の高校に対し、多少の疑問を持っていたのであるが、それもこの宝家先生の出現で俺の心は一掃された。

流石は、名門と言うだけのことはある・・・。そんな気持ちになった。

ところが、この宝家先生が扉を閉めようと、取っ手に手を掛けると、その手の下を掻い潜って、もう一人の姿が飛びこんで来た。

一瞬にして校長室を引き締まった雰囲気に変えてしまった彼女のオーラを、これまた一瞬にして、妙な世界に上塗りをしてしまう強い個性が現れた。

「こ～長～！お呼びだワッオ～ん」

いきなり陽気な珍獣が出没した。

この珍獣は、華麗な宝家先生を追い越して、校長に向ってピンクの物体が猛ダッシュを始める。

甘くフレッシュな香りが俺の前を通り抜けて行く。

白い透きとおる様な肌に、メイド喫茶の衣装の様なフリルの付きのワンピースを纏い、ウェーブの大きい、ブロンドを靡かせる。

多少小柄で、舌っ足らずな喋りは愛らしいが、

「お～、太棒先生もお出で頂いていましたか」

この人も先生らしい。

唖然とする俺の前に、二人の好対照な女性が、いや先生が並んだ。

これ程、好対照な女性を並んで見ることも人生初の経験である。

しかも同職である。

「工口君、こちらのお二人はＡＶ科３年の担任の宝家棒薔薇先生と、

太棒御先先生（たぼうみさき）です。
そして、宝家先生、太棒先生、こちらが・・・」

校長は俺を紹介する前に、自慢げに二人の先生を見つめる。少し間を開けたのはどう言う意味か？

「なんと、我が校にも初のスカウトされた生徒が来られました・・・」

初だったのか・・・。
校長の興奮は、そこから来ていたらしい。
と、言うことは俺が珍獣なのかもしれない。

俺を見ていた二人の先生が顔を見合わせている。

そんなに、凄いことなのだろうか？
俺に物凄いプレッシャー圧し掛かる。

校長は再びたっぷりと、もったいぶった後に、俺の紹介を続けた。
「千乃工口（ちのくぐち）君で、３年生に編入致します」

校長の言葉は、常に謙虚である。

「宜しくお願いします」
俺が頭を下げると、当然の流れで向い側からも「宜しく」と声がするが、二人の先生の声には俺に対する驚きが隠せない。
だが、その声と共にもう一人の声を聞いた俺も驚きを隠せなかった。

俺が頭を下げた更に下からも、少し遅れて声が聞こえたのである。

「よ〜ろしく〜おねがいしま〜す」

ふわふわとした掴みどころのないこの声の出所が、俺を下から覗いているのである。

肩までの黒髪に、ふちなしのメガネ。前で立っている二人から比べると、段違いに地味な女性である。

だが、この後気付くのだが、それはある一点を除いてのことである。

「お〜、来てくれましたか。塩南（しおな）先生」

「遅く〜なりました〜」

いつの間に現れたのだろうか、校長も気付いていなかった様である。それにしても、気配を感じないくらいに影が薄い。

「工口君、こちらが塩南間子（しおなまこ）先生で、同じＡＶ科３年生を受け持って頂いています」

全くを持って、腰が低い校長だ。

「よ、宜しくお願い致します」

俺の戸惑った挨拶にも、

「よろしく〜、おねがい〜しま〜す」

物凄くゆったりと喋るこの塩南先生はマイペースを崩さない。

縁なしメガネのフレームを抑えながら俺に微笑む。どうやら、フレームが緩んでいて落ちそうなのを抑えている様である。

この塩南先生は、派手なオーラを撒き散らす宝家(たからいえ)先生と、様相が派手な太棒(たぼう)先生に比べ、内外共に地味一色。これまた正反対な先生である。

「校長、彼は本当にスカウトされて我々の世界に来たんですか？」

そう言うのは、凛々しくオーラを放つ宝家先生である。バラの花が舞って見えるのは錯覚だろうか。

「そうなんですよ、宝家先生。それも、あのスカウター”ラミア様”のスカウトなのですよ」

校長はご満悦であるが、俺は更に気が引けていく。

俺はそんなに凄いのだろうか？それは、一番付き合いの長い俺が一番よく知っている。

それは、

あり得ない・・・、

話だ。

そうだ。”まほまほ”の勘違いか早とちりで来てしまっただけなのだ。

つい先ほどまでは、無事に編入出来るまでは買い被っていてもらおうと思っていたが、ここまで言われると、どうも気が重い。

重すぎる。

だが、嘘だとは言えない。早とちりにせよ紛れもない事実なのだから・・・。

それにしても、俺は校長の言葉の”ラミア様”って言うのが気に掛かる。
”ラミア様”って、”まほまほ”のことではないのか？
”様”？
スカウターの地位の高さは一持兄さんから昨日聞いたばかりではある。
だが、それは”様”を付けて呼ばれる程なのか？
あの、まほまほを思い浮かべると、いくら不可思議なＡＶ界とは言えども納得がいかない。

すると、

「おー、それは凄い。ラミア様が・・・」
宝家先生が感嘆の声を上げれば、

「ぽよ～ん！」
太棒先生も、恐らく口調と顔付きからは感嘆の声だと思うのだが、一言お発っしになられた。

二人は、この俺を高級アワビでも観る様な目付きで受け入れてくれている。
やっぱり、この俺はどう控え目に捉えても、相当期待されているようである・・・。

だが、そんな中、塩南先生だけはふらふらと笑顔で揺れている。
何も発しなければ、表情も変なレベルで安定している。

流石はＡＶ界と言ってもいいのだろうか・・・？

この後、当然へ校長がこの場を取り仕切り、俺の所属するクラスと部活を決めることになった。
ＡＶ科は部活に在籍するのが必須で、今では学校生活の比重は、勉強よりも重くなっているとのことである。
前代未聞のスカウトされた生徒としては、この謙虚な校長の一存では決められないと言うことのようだ。

校長の隣に俺が座り、テーブルを挟み向い側の長椅子に3人の先生が腰を掛けた。

この3人の先生が並ぶ姿は、きっと見たものにしか分からないだろう。
長椅子に、マネキンと、雛あられと、アルパカが同等に座っている様なものである。

何んとも壮絶だ！

＜つづく＞

ＡＶ科担任三人衆（後書き）

今回は”下”系が一つもなかったのですが、それも”あり”でしょうか？
先に進まないので、切ってしまいました。

未だ設定段階から抜け出せていないもので・・・。

第1位　柔軟体操部（前書き）

”へ高”での部活を決めることになったのだが、何か妙な部ばかりなのである・・・。

第1位　柔軟体操部

俺、千乃工口（ちのくぐち）が、うっかりＡＶ界なる世界に来てしまって、今日で2日目である。

今日は、朝早くから最大の支援者である一持握（いちもつにぎる）兄さんと異世界からの移転届を提出に役場に向ったのであった。

心配していた手続きも無事に終えホッとひと安心した俺に待っていたのは、思いもよらぬ吉報であった。

それは、なんとこの俺もこのＡＶ界の高校に通えると言うのである。

役場で紹介してくれた高校はＡＶ科のある三校。

そこから俺が選んだのは、ＡＶ界の名門”併性ヘノ路学園高等学校（へいせいへのじがくえんこうとうがっこう）、”通称”へ高”である。

何もすることのない俺の足は、役場を出ると自然とその”へ高”に向っていた。

そこで難なく”へ高”の校長と面会した俺が聞かされたのは、超特待生の俺には、特別に担任を選ばさせてくれると言うのだ。

へ高ＡＶ科3年の担任は、マネキン（宝家（たからいえ）先生）、雛あられ（太棒（たぼう）先生）に、アルパカ（塩南（しおな）先生）の3人である。

新たな世界での一歩を確実に自分のものにする為には、まず、この世界で初めて知り合った女子高生、千逗家の孫娘”千逗里緒”との関係の二の舞を踏まないことである。

俺には、慎重なチョイスが要求されるのだ・・・。

★☆　第　１３　話　★☆
☆★　♂第１位♀　☆★
★☆　柔軟体操部　★☆

元は金色(こんじき)だったであろうメッキの剥がれたボタンが、取れかけてぶら下がっているヨレヨレの紺のブレザー。
その中には、手洗いで糊の効いてないブラウスが縦じまの様に影を作る。
そして、シワと折り目の境が定かでなくなってしまった白のギャザースカート。

彼女はこの３点セットを何の気にも掛けずに着こなしている。

こう言っては何だが、汚れてこそいないのだがこの世界に来て以来、彼女程身なりに気を使っていない人を見たことがない。

それでもアルパカ、いや、塩南間子(しおなまこ)先生は唯一教師の中では現役で大会に参加するＧ２戦士なのだ。
ブレザーの襟には、金ピカの星２つのバッチが輝いている。

俺の所属するクラスは３年アルパカ組に決まった。
アルパカ組の担任は今俺の前をふわふわと進む、この塩南先生なのである。

この塩南先生が担任を務めるクラスは、何と冗談抜きで、”アルパカ組”と言うのである。

何故そんな名前であるかと言うと、クラスの名前は毎年受け持った担任の先生が付けることになっているらしいのだ。
彼女は自分自身の見た目を知ってか知らずか、自ら”アルパカ組”と付けたと言うのだ。

因みに、あと二つのクラスは俺の直感は見事に外れ、マネキン組と雛あられ組では無かった。

宝家棒薔薇（たからいえばーばら）先生のクラスが”頂組（いただきぐみ）”で、太棒御（たぼうみさき）先生のクラスが、”盛組（もりぐみ）”である。
見た目と好みが違うどころか、意味が不明なところがＡＶ界らしいところだ。

この個性的な３人が受け持つＡＶ科３クラス。
この３クラスから、何故俺がこのアルパカ、いや塩南先生のクラスに決めたかを、そして、それが正解であったかを反省も含めて振り返って見るとする・・・。

・・・今回、俺は生まれて初めて女性からの取り合いと言う境遇に恵まれたのだ。
と言っても、俺の持ち物が魅力的だからと言う訳では無い。

それは、「謎の飛行少女スカウター”ラミア様”によって異世界からスカウトされた」と言う事実一点のみに魅力がある。と言うのは言うまでもない。

この事が、何かの間違いと気づかれた時の対応を考えると、腹の調子が悪くなりそうなので、極力考えない様にしようと思う。

ともあれ、今、目の前では俺の取り合いでは、宝家先生と太棒先生が火花を散らしているのだ。
理由は何にせよ、今まで味わったことのない気持ちが俺を興奮させているのは事実である。

何やらごそごそと二人が足を動かしているので、視線のみを動かして覗いてみると、見掛けに因らずテーブルの下でフリル一杯のスカートから陰険に足を出す太棒先生の攻撃を、これまた見掛けに因らず宝家先生が受身一方で、巧みに交わしているのだ。

しかし、そんな攻防も何処吹く風。俺の向い側に座っている塩南先生はと言うと、相変わらずふわふわとした笑顔を校長室の空間に向って無意味に振り撒いている。

そんな姿も当たり前の姿であるかの様に”へ校長”改め校長は気にもかけず、話を進めるのである。

「さて、それでは、工口君の所属ですが、まずは部活動から決めましょうか」
まずは、クラスよりも先に俺の部活から決めると言うのだ。

・・・後で分ったことなのだが、何故ゆえ、部活が優先されるかと言うと、実際このＡＶ科では授業よりも部活の方が重要らしいのである。
意味まではわからないのだが、その影響は先生の配属にも関係しているとのことなのだ。

まず、ＡＶ科の担任は部活の成績で決まると言うのである。
そして、特に3年ＡＶ科の担任は部活のトップ3の顧問の先生が受け持つことに決まっているのである。

このＡＶ科３年生の担任を持つことは非常に名誉なことであり、校外に出た一般世間の間でもステータスの高さは認められているらしいのである。

因みに、昨年の部活トップ３が、

１位　柔軟体操部
２位　マッサージ部
３位　畳部

なのだそうだ。

流石はＡＶ界である。訳の分からない部活が人気である。
当然、俺の希望としては、出来ればこの３つは避けたいところである。

だが、この３つこそが目の前の３人の受け持つ部活と言うことになるのだ。

最初に校長から全部活の成績について紹介があったのだが、それを聞いただけでも、どの部も若干俺の世界とはずれている気がする。

現在活動しているのは、次の通りである。

体操部、シンクロ部、美術部、背景部、陸上部、水上部、科学部、百人一頭部、球技部、社会部、こたつ部、手芸部、指人形部、自動車部、看護部、寝技部、強くて丈部、ロッククンロープ部、それに、畳部、マッサージ部、柔軟体操部の全２１部である。

この部の活動が、”ＡＶ撮影大会”に出ることを目的とした”ＡＶ科”にどの様に繋がるのかは意味不明なのだが、それはそう言うものとしてエロの郷、いやＡＶ世界の郷に従う以外になさそうである。

校長は、部活の一覧表を俺の前に差し出し、

「工口（くぐち）君は、今まで何部に所属していたのですか？」

と、聞いてきた。

俺は元の世界では、２か月前まで陸上部に在籍していた。

成績は平均的と余りパッとしなかったが、３年間の青春をそれなりにトラック競技に掛けて来た自負はある。

「一応、陸上部でした」

控え目に応えてみた。

陸上部は校長が見せてくれた部活の一覧表にもる。やはり、”走る”、”飛ぶ”、”投げる”はスポーツの基本なのだ。だが、

「えっ、陸上部に？！」

太棒先生は大きな口を開けて驚いている。

一見クールそうにな宝家先生の右手が膝の上から滑り落ちる。

コケテいるのだろうか？

何だろう、えらい驚かれ様である。

そんな時も塩南先生は相変わらず微笑んで、いや、微かに苦笑いに変わっている気がする。

そんな雰囲気を気に掛けてくれた校長が2つ程咳払いをすると、3人の先生も、”しまった”とばかりに表情を元に戻す。塩南先生だけは戻した気がするだけだが・・・。

「まあ、陸上部も我が校の立派な正式な部ですが・・・、陸上部は汚れるから、嫌う人も多いんだけど、工口君は気にならないんですか」

校長が、そう言う。

汚れる?

確かに、雨に降られることもあれば、風で砂埃を被ることもある、しかし、毛嫌いする程汚れる訳では無いし、外で行うスポーツとしては、当然のことである。

「特に気になったことはありませんが・・・」

「まあ、外の・・・だから～しょうが無いと言えばしょうがないのですが、

その～、工口(くぐち)君は土の上でどんなプレーをしていたのですか」

校長の口ごもった言いずらそう言い方が妙であるが・・・。

陸上部に可笑しな所はないはずだ。

「４００ｍを専門にしていました」

俺は事実を、普通に応えて見た。他に期待に沿える回答も見つからない。何を期待しているかも分らない。

「ほ～、一つのプレーを専門に・・・。それは、マニアックだー。で、”ヨンヒャクメートル”とはどんなプレーなのですか?」

確かに、あまり好まれない競技ではある。が、ごく一般の競技である。異世界とは言え、陸上部があるのだ。知らないと言うのは解せない。

しかし、本当にＡＶ界には無いと言うことなのだろうか？

「どんなって、４００ｍを走るのですが」

これまた、普通に応えて見た。他に期待に沿える回答も見つからない。

「走って、どんなことをするんですか」

”どんなこと”とは？と聞かれても・・・。

走るだけである。

「どんなことって、一所懸命走るんですけど・・・」

何か、おかしい気がする。期待されていることと、回答にずれを感じてしまう・・・。

「走るだけ？」

校長の頭の上には”？”の吹き出しが見えてくる様だ。

「走って、速さを競うのですけ・・・ど・・・」

「走って速さを競う・・・それって、楽しいのですか？」

「走ること自体は楽しくは無いですが、充実感はありますけど・・・」

何か怪しい。俺の言葉の語尾も自然とぼかすしかない。

「ほ～、充実感か。走るだけで・・・。ほ～、さすが異世界からスカウトされたことだけはある。観点が違う」

そう、校長は首を傾げながらも一応持ち上げてはくれるのだが、無理がある。

・・・俺はその時、直感的に陸上部の話が拙い気がした。

「ですが、もっと人気の部はどうですか・・・」

やはり、校長も陸上部から俺の気持ちを逸らそうとしている。

そうだ、ここは、校長に話を合わせる方が得策だ。

・・・そう思った。

「・・・ねえ、太棒先生」

校長のフリに、

「えぇー、えー。そ～です。我が畳部は、最近ぽよ～んと人気が出て来てますです。はい。きっと工口君も気に入ってくると」

太棒先生が”畳部”を進める。どうやら、太棒先生は3位の”畳部”の顧問らしい。

ここは、陸上部の話題から反れた方が良さそうである。

このまま続けていると、間違ってスカウトされてしまったことがバレないとも限らない。

仮に間違いでも、この非常に厚遇な対応はこのまま続けてもらいたいのだ。

いや、もしかすると俺には本当に才能があるかもしれない・・・。
この厚遇に値する人間かもしれないのだ。
下手にここで評価を下げる必要はないのである。

人間不思議なもので、ここまで持ち上げられると、そんな気になって来る。

「そ、そうですね。僕の世界では、陸上部が大人気だったのですが、せっかく違う世界に来たのですから、こちらの世界の人気の部に入ってみたいと思います。畳部について聞かせて頂けないでしょうか」

この位言った方がいいだろう・・・。

すると校長は、まず、”へ高”ランク第3位の顧問、太棒先生に畳部の説明をするように促してくれた。
この際、畳部でも良い気がしてきた。

太棒先生の話を要訳すると、畳部とは1畳から20畳以上の畳を敷き詰めたスペースでどんなことが出来るかを創造する部の様なのだが、太棒先生の説明は抽象過ぎて今一具体的なことが分らない。
しかし、ここは俺も大人になり理解した振りをして、大きく頷く。

と言うよりも、聞き返したところで、理解出来るとは思えないのだ。

そして、次は宝家先生の説明である。
彼女の率いるマッサージ部は、活動はその名の通りなのだろうが、衣装からマッサージの体位までに拘(こだわ)りを持つらしい。

マッサージ部はこの世界で彼女が初めて部活動に取り入れたと言

うことで、歴史はまだ4年目と非常に浅い。しかし、それにも関らず現在第2位の成績なのである。

そのせいもあるのかどうか分らないが、華麗な見掛けで男っぽい口調の彼女も、部のことを語り出すと止まらない。説明は熱く長く、終わりが見えてこない。

俺もさすがにこの説明には飽きてきたのだが、俺以上に我慢に弱い人がいた。

向いに座っている塩南先生は、しきりに欠伸をしたり背骨を鳴らしたりで落ち着きがない。それを、横眼で宝家先生は睨むのだが、等の塩南先生は全くきにしていない。

それどころか、業を煮やした塩南先生は俺に手を出すように促して来た。

ただ、そんな目を向けて来ただけであるのだが・・・何故か、間違いなくそうだと言いきれる自信が俺にはある。

かと言ってその眼は、相変わらず眠そうでおっとりとした目なのである。だが、俺に対しての強制力を持っている様に、何か”従わざるを得ない”と言うより、従いたい気持ちになっていく。

俺は熱く語る宝家先生には申し訳なかったのだが、塩南先生のプレッサッシャーに負け、そっと効き手を塩南先生に差し出してしまった。

俺の差し出す手にタイミングに合わせ、塩南先生もゆらゆらと両手を出す。

そして、テーブル上で撫でる様に微かに触れる手は、何んとも云えない柔らかさと温かさが伝わって来る。その感触が俺の心臓を活

発にさせる。

その光景を雲に隠れていた太陽までもが覗くものだから、校長室は急にパッと明るく照らし出しされ、窓から入り込む陽光が彼女を眩しく包見込んだ。

不思議にも、まるで彼女が世界の中心であるかの様に見えてくる・・・。

彼女の差し出した手は、温かい陽光を反射させ、その眩しさが俺の目に遮(しゃ)をかける。

目の前に居る塩南先生の眠たそうな眼が妙に色っぽく感じる。

そして、先ほどまでは服装で気付かなかったのだが、くびれたウエストからヒップに掛けての曲線、それに、座っていることからくっきりと分る、腰から太腿に掛けて描く円弧がたまらなく美味しそうに見えてくるのだ。

さらに、彼女のバストの位置は重力に逆らい、俺好みに高い位置をキープしている。

先程までの、地味な野暮ったさが嘘の様に輝いている。

もちろん、俺の若き血潮は急激に一点に収束を初める。

そして、目の前の彼女は俺の効き手に触れていた手を擽る様に滑らせた。

駄目だ、俺の体は震えている！

塩南先生は俺の目を見つめ、

「工口君は、柔軟体操部に入部で良いかしらん?」
優しい言葉を俺ごときに掛けて来くれた。

もちろん俺は、

「はい・・・」
そう、応えた。

・・・その時、俺は純粋に塩南先生の部活で楽しみたい、いや頑張りたい。そんな気持ちになったのである・・・。

＜つづく＞

暗黙のアルパカ（前書き）

工口（くぐち）、教室で固まる。

暗黙のアルパカ

俺、千乃工口（ちのくぐち）が深くにもＡＶ界なる世界に来てしまって、今日で2日目。

今朝、役場にて無事ＡＶ界への移転が認められ、晴れてこのＡＶ界の住民となることが出来た。

そして、１８歳の俺には、何んとこのＡＶ界の高校に通えると言う権利が舞い込んだのである。

俺が役場で紹介されたのはこの地区でＡＶ科のある三校。

その中から俺はＡＶ界の名門”併性ヘノ路学園高等学校（へいせいへのじがくえんこうとうがっこう）、通称”へ高”を選択した。

役場の帰りに”へ校”を訪問した俺は校長の大歓迎を受け、その流れのまま?に部活まで決まってしまったのである。

その部は、塩南間子（しおなまこ）先生率いる”柔軟体操部”である。

この世界の新年度は9月から始まる。今は１１月なので、ほぼフルに高三をやり直せることになるのだ。

こうなったら、自分の世界での悔いをこの世界で晴らしてやるしかない（必死！）。

もちろん、それはこのまま元の世界に戻れなかった場合の話だが・・・。

★☆　第　１４　話　★☆

☆★　♂　暗黙の　♀　☆★

★☆　アルパカ　★☆

俺は、それまで地味で野暮ったいと思っていた塩南(しおな)先生のイメージが一新してしまった。

それ程、彼女が内に秘めていたポテンシャルは大きかったのである。

俺は一瞬にして彼女に心を奪われてしまい、即座に彼女の申し出た”柔軟体操部”への入部を快諾してしまった。

その俺と塩南先生のやり取りを見て、宝家(たからいえ)先生はボソリと

「きったねえ～、いつも美味しいところを・・・」

そう、小声で呟いた様に見えたのは気のせいだろうか？

それに、

「でたでた、も～う、ぽっよ～ん」

そう、太棒(たぼう)先生も意味不明な言葉を放ちながら、呆れ顔をしている様に見えるのも気のせいだろうか？

しかし、仮に塩南先生がこの俺に対して”どんな汚い手”を使ったとしても、”ぽよ～ん”だったとしても俺の心はどうにも動かしようのないポジションに固まってしまっているのだ。

昨夜の千逗里緒から受けたトラウマのせいで、積極的に出れなくなっていた俺でさえも、これだけは別物であった。その位彼女が瞬発的に見せた魅力にはインパクトがあったのである。

「あ～あ、知～らない。塩南先生は厳しい～んだから・・・」

太棒先生はそう言い、

「まあ、工口君なら大丈夫でしょう。塩南先生、宜しいですか？」

校長もそんな言い方をするのだが、塩南先生のおっとりとした雰囲気からはとってもそんな風には思えない。むしろ、俺にはどう見ても宝家先生の方が厳しそうに見える。

その当の宝家先生は、

「止むを得ません。本人の意思ですから」

寂しそうにそう言うが、口調は既にあっさりと認めてしまっている。

「ぽよ～ん」

と、太棒先生も恐らく返事だと思うのだが、再び訳の判らない相槌を打つ。

先程までの熱い俺の取り合いも、寂しい位にあっさりと終焉を迎えてしまった。

揉められるのも気が引けるが、あっさりし過ぎなのもちょっと拍子抜けで寂しいものがある。

できればもう少し味わって見たかった。

もう、俺の人生、この先出会わない境遇かもしれないのだから・・・。

「ここは、我が校最高位の”現役G戦士”にまかせましょう。塩南先生宜しくお願い致します」

校長の言葉に

「は～い、わっかりましたわん」

あれ、元に戻った様な気も・・・？
塩南先生が一瞬見せた魅力は、気のせいか何処かに飛んでいった気もする。
元のふわふわと掴みどころの無い応えが空中をさまよっている。

しかし、その時の俺はその塩南先生の変移よりも、校長のある言葉が引っ掛かっていた。

”Ｇ戦士”？

その言葉はずっと俺の視界に入っていた、３人の先生が付けているバッジの”☆”マークと結びついた。

ＡＶ科担任の３人はスカイブルーに金色の”☆”マークの入ったシンプルなバッチを付けているのである。
ただ、塩南先生のみが星２つで、後の二人は星１つである違いはあるが・・・。

俺にはこの世界で”星の数”と言うと、一持兄さんに教えてもらった、ＪＲＡＶ会の階級のことしか思いつかない。
あれが、もしかして、それを表すバッジなのだろうか・・・。

そこで、

「星のバッジ・・・？」
そう、誰に聞くともなく漠然と呟いてみた。
この積極的に出れないのも、昨夜の千逗里緒との影響が顕著に出ている。

すると、校長は、

「工口君はＡＶ放映を管理している”ＪＲＡＶ会”の階級のことは、もう聞かれていますか？」
そう謙虚に尋ねて来た。俺の疑問に答えてくれるらしい。

「はい、大まかには知っていますが・・・」

「それならば、話は簡単。☆のマークは、その階級を表すんですよ。現役で言うと、最高峰が☆三つで、ＪＲＡＶ界最高のＧ１大会に出場が可能なんです。続いて☆二つがＧ２大会までに出場が可能。その次が星一つで、Ｇ３大会に出場が可能となっているんです。
バッジが与えられるのは、ここまで。
その下、５００万下⇒３００万下⇒１００万下⇒新人となっているんですが、バッチはもらえないんです。
即ち、太棒先生と宝家先生はＧ３戦士。塩南先生は何んと!現役Ｇ２戦士なんです。
因みにこの学校の教員でＧ２は塩南先生のみなのですよ」

誇らしげな校長の紹介に、太棒先生と宝家先生は、これまた誇らしげに背筋を伸ばして澄ましている。

高校の教員も”ＡＶ撮影大会”の成績が必要なはずだから、きっと、Ｇ戦士と言うのは教員としても名誉なことなのだろう。
二人の姿勢からはそれが伺えるのだが、宝家先生はともかく、太棒先生の澄ました姿には既に違和感を感じてしまう。誠に申し訳ないのだが・・・。

そう言えば、確か千逗家は代々Ｇ３であることが凄い自慢であったはずだ。
千逗里緒はその家の後継者である。

彼女の初めての大会に掛けた気持ちが今更ながら理解出来る気がしてきた。不可抗力だったのだが、申し訳ないことをしてしまった気になってくる。

塩南先生は、校長の紹介の間も他の二人の先生とは違い、相変わらず腰が座っていないふわふわとした雰囲気で自由に飛びまわっていた（気持ちの話だが）。

あれ？

やはり塩南先生には、つい先ほどの魅力が全く影を潜め完全に元に戻ってしまっている。

あれあれあれ？

元の地味で野暮ったいところばかりが目に付いてしまうぞ・・・。

俺は何か勘違いをしてしまったのだろうか？

それとも錯覚だったのだろうか？

いや、そんなことはない。確かににエロの花が咲いていた。

きっと、微妙な角度のせいだ。

そうだ、それに違いない・・・。

俺は、たった今決めた自分の道を全力で肯定する為に、色んな視点で塩南先生を見てみるのだが、水晶玉に映るのは、冴えない女性だけだ。

違う！きっと違うのだ！

中に秘めた極上のスタイルをヨレヨレの服が隠しているだけなのだ。中身は間違いなく本物なのだ。そう自分に言い聞かせた。

そうだ！
自分のモニターを手に入れたら、真っ先に塩南先生の裸、いや、作品を探すことにしよう。
俺の選択が間違っていなかったことを証明をする為に。
あくまで、証明の為に・・・。

そんな、俺のあさましさとは裏腹に、校長は話を控え目に続けた。

「見ての通り私にはバッジがない。それはG戦士でないことを意味しているんです。
私はただの５００万下なんですよ」

どうも、校長が腰の低いのはそれが原因なのかもしれない。
しかし、一持(いちもつ)兄さんの話では、この世界の地位はＡＶ大会の成績で決まるのでは無かったのだろうか？

そうなれば、塩南先生が校長になることになるのだが・・・。
しかし、それは幾ら何でも拙い気がする。Ｇ２戦士には大変失礼なのだが、ＡＶ界もそれ位の考慮はあるようだ。この現実にホッとしてしまう・・・。

そこに、校長の言葉を訂正する声がした。宝家先生である。
「しかし、校長は素晴らしい。私は尊敬している」

「そうですよ。私も校長の下で働けて幸せです。大会の成績が全てとは・・・」
そこまで、言って、太棒先生は口を噤(つぐ)んだ。

塩南先生はと言うと、相変わらずふわふわと・・・だが、この校

長の存在に異論は無いようだ。

それに、校長は、

「いやいや、とんでもない。
我が校の先生達は本当に皆素晴らしい。私はそのお陰で校長としてやっていけてます。
皆さんもG戦士と言うだけではなくて・・・。ああ、いかん、いかん、この続きは先生方とのお酒の席でということで、今日は工口君が主役だったね。
とにかく、工口君、我が校、ＡＶ界、なにより自分の為に頑張って下さい」

どこまでも謙虚な校長である。だが、”酒”と言う言葉には、校長を初め、先生３人が露骨に目を輝かせていたのは、多少気になるところではある。

これは、後で塩南先生から聞いた話なのだが、どうも、この校長の正式な役職は”校長代理”とのことである。
たまたま、前校長が病気の為に退任された後、余りにも急な為に、数人いたG戦士の先生達が引き継ぎに尻込みする中、断り切れない彼が校長代理に着任したと言うのが事実らしいのだ。

彼が校長代理に就いてからは、危かった”２７部そ地区”でのトップの座も死守し、さらに校内の雰囲気も盛り上がり、２７部全体での成績でも何度もベスト１０入りしたらしいのだ。

そして、ＡＶ界の流行が変異していく中、昔ながらのカリキュラムを守っていた”へ高”の成績が落ち始めた時にも、その原因が男女の練習不足と言う声が生徒や保護者、教員の一部から上がると、

保守派の反対を押し切り即座に共学（この世界では併性と言う）に踏み切ったらしいのだ。

常に迅速な決断と行動に手腕を発揮していることが評価されて、ずっと校長代理と言うポジションのまま、実質、校長としての職務を全うしているとのことである。

これは、ＡＶ界では本当に珍しい特例らしいのである。

人は見掛けによらないと言う、模範的な人の様だ。

この俺の転入に対しての生徒の意思を尊重したのも、そう考えて見れば、自分で決められなかったのではなく、何か考えがあっての判断だったのかもしれない。

ＡＶ界とはいえ、生徒が自分の担任を決める何て言うことが世間にしれて問題にならないとは考えにくい。彼はそれを押してでも、俺の意思を優先してくれたのかもしれない。

買い被りだろうか？

どっちにしても、俺はこのことは黙っておこうと決意した。

そして、この校長の為に頑張りたい。そんな気持ちになったのだ。

ちょっと、熱いだろうか？

いや、俺が熱いのは何も、時折一部で起こる自家発電現象の時のみではない。

心も、あの一部も熱い普通の若者である。

ただ、トラブルが嫌いで交わし続ける為に、冷めていると誤解されがちではあるが、本当は熱い人間なのだ。

この後、校長が「部活もクラスも同じ先生にお任せした方が良いでしょう」との判断を示したことにより、俺のクラスは塩南先生の”アルパカ組”に決まったのでる。

と言うことで、この俺をクラスに紹介したいと言う塩南先生の意向えお請け、校長が用意してくれた昼食を簡単に済ませると、校舎最上階5階のアルパカ組に向うことになったのだ。

今、俺は塩南先生の直ぐ後ろを歩いているのである。

だが・・・、本当に”柔軟体操部”を選んで良かったのだろうか？

やはり、どうひいき目で見ても塩南先生の後ろ姿からは、先程お目にかかったウエストからヒップ、さらに太腿にかけての体のラインにその面影を感じられない。

よれよれの洋服で、ファジーのせいもあるのだが・・・。

それだけとは、とっても思えない。

俺の目が太陽光に、やられてしまっただけなのだろうか？

それとも、G2戦士は幻覚を見せる超能力を持っているとか？

いや、いくら異世界とは言え、今まで出会った人の感じでは幻覚を見せる様な超能力はこの世界にもなさそうである。

そんな俺の後悔を知らずに、相変わらず塩南先生は俺の前をふわふわと歩いている。

それでも、”G2戦士”であると言うことは紛れもない事実なのである。

それに、確かこの先生は学校で唯一の現役と言っていたはずなの

だ・・・。

やはり、脱いだら素晴らしい曲線をお持ちだと考えるのが妥当である。

俺は塩南先生の御顔をもう一度拝もうと・・・、正直に言うと胸の形をもう一度確認してみたくなり、先生の隣に並び掛けた。

その時だった。

塩南先生は、いきなり俺の方に顔を向けた。

やっぱり、超能力があるのだろうか・・・。

「今日の授業は午前でお仕舞いで、午後からは部活動ですのン。クラスの皆さんに紹介した後に、柔軟体操部の皆にも紹介したいのだけど、どうかしらン」

「は、はい、構いませんが」

いかん、俺のエロ視線（レーザービーム）に気付かれただろうか？

「そうそう、せっかくだから見学位してみてはどうかしらン。」

先生の弾む声に否定の回答は許されない気がする。

「そうですね！見学してみたいかなぁって思ってました。ははは」

「そ～う、それは良かったわン」

心なしか先生の足が弾んでみえる。そんなに、この俺が柔軟体操部に入部したのが嬉しいのだろうか？

俺の実力を知ってしまった時の先生を想像すると気が引けてしま

う・・・。

しかしだ、こんな具体的な話になるとは思いもよらかった。
何の心構えも出来ていない内に事が進んでしまい、これでは緊張で腹の調子をおかしくしてしまう。

ここは、ゲーリー予防の為に頭を慣らした方が良さそうだ。

そうだ、予習をしておこう！
そう思い、俺は先生に部活について聞いて見ることにした。

「先生」
「な～にン、工口くん」
嬉しそうだ・・・。

「柔軟体操部とはどんな部なんですか？」
期待を全面に出してみた。

「あら？柔軟体操部は柔軟体操をやるのよ」
ちょっと驚いている。ストレート過ぎただろうか？

「体操・・・だけ・・・をですか」
「もちろんぇ。どうしてかしらン？柔軟体操部なのよン。今はね～、ブリッジをやってるの」

「ブリッジ？」
ブリッジが柔軟体操なんだろうか？

まあ、近い気もするが・・・。
これ位は世界間の誤差と言うものだろうか・・・。

でも・・・、ブリッジと聞くと妙に心が騒ぐのはどう言うことだろう・・・。

「そっ。でもねン、私の要求するブリッジはちょっと違うのよン。余裕が必要なのですよ」

「えっ、余裕とは？」

「そうね～例えば～。オレンジジュース位は飲めないと駄目ねン」

「オレンジジュースを・・・」

ブリッジしながら、オレンジジュース？

この組み合わせ、んっ～？

何故か、何故か俺は不快を感じるのだ。それは何故だ～・・・。

「先生、部員は何人位なんですか？」

ちょっと話を変えて見た。

「部員ちゃんはねン、一般科も含めて３０人。ああ～今日から３１人だったわねン。内、３年生は工口君を含めて５人で、ＡＶ科が３人よン。部員の殆どはね１年生なのー」

確か全校生徒数は、校長の話では、５００人足らずとのことだった。

第１位にしては人数が少ない気がする。

「あの～因みに一番人数の多いのは何部なんですか」

「あは～ん。部員数が少ないと思ったのねン」

ドッキ！やはり、何か特殊能力でもあるのだろうか？
今後、余り下手なことは考えない様にするとしよう・・・。

「今は、マッサージ部が流行なのよ。宝家先生のね。今では７０人で最大なのよン。校長先生が宝家先生が始めた部だっていってたでしょ。元々はね、マッサージ部は私達が学生時代に考えたことなのよン。
それを宝家先生の手腕で部活になって、全ＡＶ界に広まったのよン」

「私たちって、言うと・・・？」

「太棒先生と、宝家先生と、塩南先生の仲良し３人組で～す。
私たちはＡＶ大学の同期生なのよン。二人は私よりも３年先にこの学校で教職に就いたの。
二人の内どうして”オスカル”が、いえ、宝家先生がマッサージ部の顧問になったのかは、分らないんだけどねン。
”先っちょ”いえ、太棒先生と宝家先生は幼馴染で、凄～く仲がいいから、私も二人の秘密には入れないのよン」

そう聞くと、俺もマッサージ部に入れば良かったと後悔してしまうのだが・・・。

「塩南先生も柔軟体操部よりも、マッサージ部の顧問になりたかったですか？」
ちょっと、聞いて見たかった。

「先に、宝家先生が苦労して起こした部を奪うことは出来ないじゃない。それに柔軟体操は”基本”で”伝統”があるから、根強いの

よン。
現に我が柔軟体操部は昨年、一昨年の校内覇者のマッサージ部を引きずり落とし、第1位になったのだからン」

理由までは掴めないが、何故か柔軟体操部は”基本”で”伝統”があると言うことだ。
ここはＡＶ界だ。きっと柔軟体操がＡＶ撮影大会に役に立つと言う事に違いないはずだ。

そういえば、千逗里緒の家でみた１０年前のビデオがそんな感じであった・・・。

千逗里緒?

それにしても。校長はマッサージ部を2位としか紹介しなかったが、実際は一昨年1位なのか・・・。
と、言うことは昨年2位の時が3年目だから、開部2年目で1位になったことになる。

何で、校長は言わなかったのだろうか?
それは、宝家先生も同じである。何で、俺にあれだけ長いアピールをして、それを言わなかったのだろうか・・・?
良く分らない・・・。

「と言うことは、マッサージ部は開部2年で1位だったんですか?」
「あら、私は去年1年目で1位よン」
俺の驚きは、あっさりと返されてしまった。

この世界のことは良く分らないが、この3人の担任は本当は凄いのかもしれない。いや、凄いのだろう。何せG戦士なのだから。

「す、凄いんですね」
「まぐれよン、うちには凄いエースがいるのよン。柔軟体操部の部長ちゃんは、現在学年1位なのよン。
昨日の”お願いします”にも学校代表で出場したんだからン」

”学校代表”？
だんだん、俺の脚が重くなっていく。これも気のせいだろうか・・・。

「お願いしますって、相方探しのですか」

「あら、それは知ってるのねン」
「まあ・・・」
「昨日は、たまたま不運にも相方が見つからなかったんだけどねン」

たまたま、相方が・・・？

俺の体が震えて来た。カラータイマーが黄色く点滅しているぞ。

「ちょっとナイーブだから、いきなりの無差別大会で緊張しちゃったかな。へへっへ」

この震えは武者震いであってくれ・・・。

教室に入る前に、塩南先生から念を押された。

結局俺の素性（スカウトされたこと）は内緒と言うことになったのだ。
それは生徒に刺激が強すぎ混乱を招くと言うことが理由らしい。

それよりも素性を隠し、俺が成績を収めて”みんなに刺激を与えて欲しい（無理と思うが）”と言うのが校長を始め、先生方の一致した考えであった。

結局、”第４８部のを地区”と言うこの世界最果ての地区からの転入生で通すことになったのだ。

塩南先生が騒がしい教室のドアを開けると、教室内は一瞬にして静まり返った。

彼女の登場で、教室の中は一転して緊張に包まれたのだ・・・。

凄い！

塩南先生の”オーラ”だろうか？

そう思いながら塩南先生に続いて教室に入った俺は、級友となるべく一人の女子生徒の”オーラ”を浴び、一瞬にして石の様に固まってしまった・・・。

お腹が・・・、ゴロゴロ・・・。

＜つづく＞

暗黙のアルパカ（後書き）

次話は、下復活祭です。

二度会うからには三度会う（前書き）

里緒、何故お前が此処にいる。それになんだ、その生徒会長の態度は・・・・。

二度会うからには三度会う

俺、千乃工口がうっかりＡＶ界と言う異世界に来てしまって、まだ2日目である。当然、この世界の勝手も分らない。

だが、そんな状況にも関わらず、早くも正式にＡＶ界の住民となる権利を得、さらに、ＡＶ界の高校に通えることまでが決まってしまったのである。

その名は、”併性ヘノ路学園高等学校（へいせいへのじがくえんこうとうがっこう）”、通称”へ高”である。

それだけではない。

柔軟体操部と言う部活も決まれば、アルパカ組と言うクラスまでもがとんとん拍子に決まってしまったのだ。

そして、何とその部活の顧問、並びにクラス担任の塩南先生は、ＡＶ撮影大会の組織”ＪＲＡＶ会”の現役Ｇ2戦士だと言うのだ。

ちょっと、順調すぎないか？

そんな疑問も過（よぎ）るのであるが、路頭に迷う寸前だったことを考えると余計な心配である。

そして、展開は俺を新しい級友達へ紹介するという運びへと進んだ。

緊張もするが、俺の新しい一歩だ。期待もある。

ただ、その過程で、塩南先生と行った会話の中、嫌な予感が小走りしたのも事実である。

そんな気持ちが交差する中である。

俺は塩南先生の後に続いてアルパカ組の教室に入ったのだった。
が、・・・その瞬間、俺は固まった。

なんと、そこにお出で有らされたのは、このＡＶ界で唯一の天敵
せんずり王・・・。
嫌な予感があたってしまった。

★☆　第　１５　話　★☆
☆★　二度会う♂　☆★
★☆　　からには　★☆
☆★　♀三度会う　☆★

千逗里緒よ、どうしておまえが此処に居る。
それはきっと、おまえも思っていることだろう。
何せ、先に此処にいたのはおまえであり、俺は今日来たばかりな
のだ。
完全に俺に部が悪い展開だ。

だけど、信じてくれ。決しておまえの後を付けて、この”へ高”
に転入した訳ではないのだ。
千逗里緒、世の中の偶然を信じてくれ。頼む・・・。　（ｂｙくぐち）

今、俺は頬を中年オヤジの肝臓の様に膨らませた千逗里緒に案内
されて、”柔軟体操部”の活動拠点に向っている。と、言っても校
内（１階）にあるのだが、部活動第１位に与えられる”第１スタジ
オ”と呼ばれる練習所である。

何故、天敵の彼女と一緒かというと、俺と千逗里緒が既知の間柄
と理解した塩南先生が、二人の関係の問題点を全く無視し（いや、

変な解釈を付加した為かもしれない）、俺のサポートを彼女に指示したからでる。

問題はそれだけではない。クラス中が俺と千逗里緒の間に特別な解釈をした可能性も否定できないのだ。

この状況の負担は何キログラムの重荷になるのだろうか・・・。

それは、ほんの３０分前のことであった。

俺は塩南先生に続き、アルパカ組の教室に人類（俺の世界の）史上初の第一歩を踏み入れた。

俺の登場は、”しーん”とする教室にひそひそ話を広めて行った。

そんな中である。

ゴトリと椅子が動く音がした。この瞬間、俺の脳裏のカラータイマーが点滅した。

俺を見た瞬間に、大きな口を開けて立ち上がってしまった新しい級友がいたのである。

それは、この世界唯一の天敵であり、３度目はの出会いは無いと信じていた、”千逗里緒”である。

まったく、嫌な予感が当たってしまった。

彼女の怒りであろう真赤な視線と、俺の凍てついた真白い視線が空中で衝突。

俺はこの時点で呆気なく彼女に撃ち取られ、石の様に固まってしまった。

恐怖で顔を動かすことが出来ない俺は、彼女から反射的に視線のみを逸らすのみだ。

横眼で覗くと、彼女も俺から視線を逸らし時々こちらを覗いているのが伺える。

こんな時の場の繕い方を俺は全く知らない。

ただ、”時”の流れに身を任せるより術がない。それが、俺の今の実力なのである。

だが、この”時”と言う奴は必ず何かしらの結論に向けて動くものなのだ・・・。

・・・＜時の主役＞　塩南間子先生（２７歳）

俺と千逗里緒のぎこちない様子を、きょろきょろと交互に確認する塩南先生。

そして、先生は小首を傾げて、一言。

「あら、千逗さん千乃君とお知り合いなのねん」

そう、ひょうひょうと簡単に片づけた。

立ち上がった千逗里緒は私服姿の俺以上に級友達の注目を浴びている。

「い、いえ、まあ、は、はい。ちょっとだけですけど・・・」

「あら、それは良かったわん」

と手を合わせて喜ぶ塩南先生。

「でも、千逗さん座ってねん」

そこで、千逗里緒は自分がうっかり立ち上がった事に気付く。

爆笑の渦の中心の彼女は身体中を真赤にして席に着く。
そこに聞こえる、若干のひやかしの声。

その後も、俺と彼女の視線は偶に合うことはあるが、基本逸らせ相大会。
それに耐えかねた俺は、腹の調子を崩してトイレに急行。

塩南先生が交互に俺と彼女を見つめる視線も手伝って、級友達に広まる二人の妙な関係。
その一連の姿、つまり、彼女からのプレッシャーで俺がトイレに逃げ込んだ構図が大完成。
（以上、想像を含むだが）。

と、言うことで、トイレから帰ってくると級友達のスペシャル視線に包まれて、どう言う訳か俺のサポート役が、彼女、千逗里緒になったのが、＜主役＞塩南間子先生による”時”の出した結論なのである・・・。

”第１スタジオ”に向って不満そうに、俺の前を歩く彼女の足音は雪女の様に冷たい。
サポート役にも関わらず、俺が掛けられた言葉は必要極最小限の「ついてきて」その一言だけである。

会うはずでは無かった彼女に、三度目の出会を果たしてしまったのだ。
この縁は少しは温めないと、このままでは冷たくなった手足が凍えてしまう。

しかし、昨日の今日である。あのホームルームでの様子からも怒

っていることは疑いようもない。

誤解とは言え、俺はあろうことか、ノックもせずに彼女の部屋に入ってしまい、下着姿のブリッジを”もろ見”してしまったのだ。それも、一番美味しい角度からだ。彼女の部分的形状は目をつぶると、今でも瞼に浮かんでくる。

せめて、今朝、何か繕うことが出来ていればと思うのが正しい考えであったのだが、つい、喜んでしまった。つけが回ったのだろうか？

先に立たないのは、後悔と、○ん○とは良く行ったものだ。聞いたことはないが・・・。

ボヤキはこれ位にするとして、どうする、工口（くぐち）。彼女からのアプローチは未だにないぞ・・・。

えい、ここは声を掛けて見るしかあるまい！この状況を耐え続けるよりはましだ。一か八かの勝負だ工口！

「せ、千逗さん、お、怒ってらっしゃいますでしょうか」だめだ、何て日本語だ！丁寧で且つ、お硬く無い言葉が上手く喋れない・・・。

しかし、俺の言葉に千逗里緒は振り向いたのだ。一応無視はされなかったことは喜ぶべきか・・・。

「何よ、その聞き方、苗字で呼ぶなって昨日言ったでしょ」

あれ？触れられたのは可笑しな言葉ではないぞ。苗字の方だ。確か、塩南先生は苗字で呼んでいたのだが・・・。

でも、そんなことはいい、それよりも思っていたよりも彼女の口調は柔らかいぞ。

こうなったら、名前に”さん”付けは呼びにくいが、ご要望とあらば・・・、

「あの～、里緒さん昨日はすみませんでした」

それに里緒さんは、少し満足そうな表情を見せたのは気のせいだろうか。

「なに、謝るならさっきのことでしょ！何で、何でその～、さっき目を逸らしたのよ。私と何かあったみたいじゃない。普通にしててよね」

えっ、昨日のことが問題になっていたのでは無いのか？

”時”と”女性心理”の移り変わりに付いていけなかった不覚はあるが、普通な態度で接しなかったのは、そっちも同じでは無いのか？

俺にも主張はあるが、そんなちっぽけな事はどうでもいい。下手な論争をするよりも、ここはモットーの低姿勢でいくのがパラダイスには近道だ・・・。

「ご、ごめん。びっくりしてしまって、つい・・・」

”すみません”の方が良かっただろうか？

「びっくりしたのはこっち、こっちだって同じよ」

大丈夫だ、”ごめん”は問題ではなさそうだ。

「じゃあ、昨日のことは、怒っては・・・」

「え、ＡＶ女優を目指す私が、いつまでも練習を見られた位で怒っている訳・・・無いでしょ。き、昨日は急で驚いただけよ。失礼ね！」

どうやら、昨日のことは言わない方が良さそうだ。

何やら、心の中の葛藤が感じられる。俺にはその意味が分らないが、俺の向かう方向は一つ、無難と言うパラダイスだ。

よし、このまま・・・と思っていた打ち解けムードに、俺が体温を取り戻した所だった。そこに、水を入れ、いや、茶菓子付きでお茶を入れる邪魔者が現れたのだ。ゆるさん！

邪魔者の声は、俺達の後ろから聞こえて来た。

「あら、今頃殿方とご一緒とは、まだ相方探しを続けているのかしら？

今頃”お願いします”をしても撮影大会には出られなくてよ・・・。

まあ、どっちにしても、あなたじゃ～どうせ断られるでしょうけどぉ、オ～ほほほ」

なんだ、いきなり後ろからやって来てこのベタキャラの笑いをする女は？

不愉快な思いで振り向いた俺の前には、派手な３人の女子生徒が

ムンムンの色気全開でポーズを作って立っていた。

里緒を挑発する言葉を宣(のたま)ったのは真中の一番いい女、いや、嫌味な女の様だ。

彼女は、里緒に向ってさらに続ける。

「”お願いします”で相方が捕まえられなかったなんて、”へ高”１０年ぶりの珍事ね。

まあ、学校代表に選ばれるのも、せいぜい今週の大会までしょうから、最後のチャンスをがんばることね。

来週には私(わたくし)も１８歳の誕生日を迎えるわ。そうなれば、どうせ私がこの学校の代表になるのだから。ホ～ホホホ」

その卑劣な言葉に、里緒は顔を赤くし拳を握るが何も言葉も出せないでいる。

どうしたんだ、里緒！

言われっ放しじゃないか。

いくら、お前より色気があっていい女だからと言っても、そこまで言わせていいのか？

説明が遅れたが、この高校の制服はスカートとブレザーは校則で決まっているのだが、そのブレザーの中は自由なのだ。もちろん、スカートの中もである。

そして、男子はと言うと、どうでもいいだろう。それに付随する。

その女子生徒は制服のブレザーの下には、エラく派手なキャミソール、具体的に言うと限りなく透明に近いブルーのキャミソール１枚である。ブレザーの前のボタンが外れているので、確信するが、

ノーブラである。スカートは股下５ｃｍと言ったところか。あくまで前から見ての目測である。

それにお供の二人もタイプは違うが、３人合わせればアイドルグループも可能であろう。

この世界で見た全女性の中（２日間だが）でも、俺の好みではかなりの上位に位置する。

しかし、しかしだ里緒。

いくら、俺の欲望が翼を広げようとも、今の俺はお前の味方だ。

なにせ、この世界で初めて会話をしたのは、他ならぬお前じゃないか・・・。

だが、里緒はその後の嫌味の攻撃にも終始黙ったまま身体を震わせ、何も言葉を返さず耐えていた。

そして、嫌みに飽きた彼女達が去っていくと、悲しげに笑って俺に、

「さぁ、行きましょうか」

一言だけ言った。

どうしたんだ、らしくないぞ。

「誰なんだ、あいつら」

俺の少し粗くなった言葉に、いや、自分の感情を俺に見せないようにとの配慮だったのかもしれない。

一呼吸おいて、

「生徒会の人。あの真中の子が生徒会長の”稲荷家一子（いなりやいちこ）”」

そして、俺の感情を収める為なのか、こう言った。

「私が、悪いの。昨日のお願いしますで、会い方を探せなかったから。学校代表なのに・・・」

その言葉は、俺の心を締め付けた。

そうだ、里緒は昨日の”お願いします”に出場していたのだ。

と言うことは、塩南先生の話から行くと、彼女が柔軟体操部の部長であり、エースであるのは間違いない。さらに、学校のトップであり昨日の”お願いします”ではこの学校の代表と言うことになる。

遅まきながら俺は全容を理解した。

昨日のお願いしますで相方を、見つけれ無かったと言う嫌味は、俺のせいなのか!?

資格も無いのに、あの場にいた俺のせいなのか・・・。

お前は俺のせいで、校内の笑いものになっているのか。

お前の昨日のつれない態度はそう言う訳だったのか・・・。

それなのに・・・、それなのに、何だ?今の優しい笑顔と言葉は。

俺を気遣ったと言うのか。里緒!

俺は、俺はお前のプライドを必ず取り戻してやる!

絶対にだ!

俺の下半身の拳が黙っていないぞ!!

しかし、それにしてもミニの下から覗く、去りゆく生徒会長の半尻(はんけつ)は、たまらない。一度、一度でいいから両手でぷにぷにしてみたい・・・。

＜つづく＞

塩南先生は制服で征服する（前書き）

柔軟体操部とは？

塩南先生は制服で征服する

昨日、俺（千乃工口（ちのくぐち））はうっかりＡＶ界と言う異世界に来てしまった。

全く勝手の分からないこの”ＡＶ界”と言う世界。

だが、不思議とトントン拍子に事が運び、今俺は”併性ヘノ路学園高等学校（へいせいへのじがくえんこうとうがっこう）”通称”へ高”という、ＡＶ界の名門高校の”第１スタジオと言う施設の入口に居るのである。

このスタジオは、”へ高”で校内成績第１位の部活”柔軟体操部”のみが使用できると言う特別な部室兼練習場である。

この部活の順位とは、てっきり生徒からの人気ね順だと思っていたのだが、第２位のマッサージ部の方が部員数は倍以上なのだ。

一体、何で順位が決まるのだろうか。それに、何故ストレッチを行うだけの柔軟体操部が第１位なのだろうか。

これから、この謎に迫ろうとしている。

第１スタジオの扉の向こうには一体、何が待っているのだろうか・・・。

★☆　第　１６　話　★☆
☆★　塩南先生は♂　☆★
★☆　　制服で　　★☆
☆★　♀征服する　☆★

部活に対して充実した設備が整っている”へ高”は、部室や練習

場に対しても然りで、校舎の1階（と言っても丘の傾斜に建てられており、頂上側の2階に玄関があるため、実質は地下である）全が部活動の為の設備として使用されている。

中でも、校内部活動第1位に与えられる三角屋根の別棟”第1スタジオ”は、校舎1階の一番端、丁度”へ”の字の短編の先に、離れの様に別棟で建てられているのである。

今、俺は第1スタジオと校舎を繋ぐ廊下に立っている。
もちろん俺のサポート役に指名された里緒と一緒にだ。

このスタジオの扉は高さ3mはあろうかと言う大きさで、そのデザインは洋館の門を思わせるゴージャスな観音扉になっている。
全く、高校の部活の場としては相応しくない重々しさである。

「ここがそうよ」
里緒は建物の雰囲気を全く感じさせい軽い口調で、これまた、重そうな扉を軽く開けてしまう。

「びっくりしたでしょ。この扉、重そうだけど、実は凄く軽いの。樹脂製よ」
何て嬉しそうに笑って見せる。

「なるほど〜」
と扉を見上げ全体を確認する俺だが、近づいて来る大群の足音に驚いた。
その音は、肉食獣の様に猛ダッシュでこちらに向ってくるのである。

反射的に俺は一歩後ずさりして、里緒の陰にそっと隠れた。

その足音に対して堂々とした彼女の姿は、ジャングルの王ターザンを思い出させてくれる。
と言うことは後ろに隠れる様に立っているのはチンパンジーのチーターと言うことになってしまうのか・・・。

まあ、俺はともかくとして、ここに来た彼女は生き生きとしているのだ。
生徒会長の嫌味な言葉からも立ち直っている様に見える。良かった・・・。

ところで、押し寄せて来た大群だが、幸い、それは荒々しい獣(けもの)達の群れでは無かった。
不意を突かれて驚いてしまったが、やって来たのは質の高い、制服姿の可愛い”ウサギちゃん”達の群れである。
何せ男女の比率が1：4なのだ。肉棒獣の群れ、いや肉食獣の方がよっぽど珍しい。

”ウサギちゃん”の運んで来た、季節はずれの春風が頬を撫でる。
気持ち良い・・・。

彼女達は俺達の、いや里緒の前で3列横隊に整列し、姿勢を正す。
そして、前列中央の一際可愛いウサギちゃんが皆を先導する。

「『部長おはようございます』」

腰を直角に曲げて、張り裂けんばかりの大声で挨拶をして来た。
ウサギちゃん改め、部員達の一糸乱れぬ姿には、緊張感がみなぎっている。
この状況に俺は三分の興奮を感じる。

里緒は、

「おはよう」

とにっこり笑って軽く応える。

それに、女群の代表者が里緒に出欠の報告を始めた。

「今日の欠席は1年AV科西組の鉾田矛(ほこたほこ)1名の全29名です」

その報告に、これまた、

「ご苦労さま」

里緒はニッコリ応える。

何かすご〜く偉く見える。お前は”隊長”か！と突っ込みたいところだ。

確かに隊長、いや里緒はこの”柔軟体操部”の部長の様だが、部長とはそんなに偉いのだろうか？

柔軟体操部とは、そんな上下関係の必要な部なのか？

和気あいあいと、来たる中年の日々の為に身体を解すだけでは、いけないのだろうか？

疑問なところだ。

取りあえず、分ったことは挨拶が昼でも”おはようございます”と言うことと、里緒が思いの外偉いと言うことだ。頭にインプットしておこう・・・。

「じゃあ、”への路高体操”やりまーす」

そう言う里緒に、

「『はい』」
と部員全員の気前の良い元気良さが返ってくる。部員達は、列を成したまま体操体系に広がった。

俺は里緒から何の紹介もされないどころか、誰からも触れられることも無く、事が流れて行く。

全く無視なのか？
男の俺が居ることに何も感じないのか？

若干の温かさを期待をしていただけに、少し心が折れそうだ。足元の血行が悪くなっていく。

そう思ったのだったが、部員達からは頻繁に横目の視線がやってくる。
気にならない訳ではないらしい・・・。
俺はそれにホッと胸を撫でおろす。

危なく腹の調子を悪くすることろであった。
いつしか、足元にも熱が蘇っている。

特に熱いのが、
おー、男子が2人居た！

彼らは優雅に体操を見物する俺をしきりと気にしている。
普段であればあまり歓迎しない視線だが、男子が俺一人で無かったことには安心する。
俺も小さい男なのだ・・・。

シーンとしたスタジオに音楽が掛かり、部員達が体操を始めだした。

興味を持って見ていたのだが、この”への路高体操”は俺の世界のラジオ体操と殆ど変らないようだ。　それなのに、何かが違う気がする。

何だか、妙に色気を感じるのだ。いや、エロの花がほのかに咲いているのだ。

一体何だろう？

もちろん、裸でなければ下着姿でもない。昨日の里緒のブリッジの様に・・・。

里緒との仲も修復できた今、いい思い出のカテゴリーに入ろうとしているのだが、ここでは余り思い出さないことが懸命だ。もちろん、俺個人の身体的な理由でだが・・・。

彼女達はしっかり制服を着ているのだ。もちろんエロさに含まれない＋2人もだ。

それなのに・・・。

何故だ？

しかし、その疑問への回答は直ぐに出た。

これも常日頃から鍛えている賜物だ。

制服・・・？

そうだ、制服だ！

部員達は制服姿のまま体操をしているのである。
そう言えば、ジャージ姿以外の体操を見るのは、小学生の時の”夏休みのラジオ体操”以来のことである。

その時は所詮子供の姿である。
それが、画像送信されて来ても、何も気にならないのは当然のことだ。まして、その時は受信する俺も小学生だった訳である。

しかし、高度な通信方式が可能となった高校生18歳ともなれば話は別だ。
余計な付加情報を連れてくれれば、受け側の妄想と言う加工も容易になる。

それに、ただでさえこの”へ高の制服”はフィット感がいい。タイトな縫製が魅力的なのである。

下半身は、肩幅に開いた両脚がタイトなスカートを圧迫し、ずり上がろうとするスカートと、腿の摩擦の攻防が繰り広げられている。野球で言えば9回裏二死満塁、一打逆転の醍醐味である。

そして、上半身は”ぶるんぶるん”と縦横無尽に動かす両手が、ブレザーの中のブラウスの類(たぐい)を胸元に張り付かせている。

ブレザーのボタンも締めている女子も多いのだが、ウエストを存分に絞っている制服には、はち切れんばかりの無理が掛かっており、拘束感が俺に語りかけてくる。

さすがに生徒会長の様なインナーの部員こそいないが、それでも充分に見応えのある体操である。

もちろん、俺は２９－２＝２７人の女子生徒に視線が定まらず泳ぎ回っている。
だからと言って、この俺が外見でそれがばれるようなドジは絶対にしたりはしない。

遠くを見ている様な漠然とした視野の中で、一点のみを確実に捉えると言う技術位は標準仕様として装備しているからだ。
その脳の訓練は常日頃から鍛えている。

この体操の１番が終わり２番が始まる頃には、俺はしかとこの体操を楽しみながら、もしかすると、この柔軟体操部のチョイスが正解だったかもしれない・・・。
そんな気持ちに満足していた。

その時である。俺の周りに誰もいないと思っていたのだが、急に、

「制服の体操って美があるでしょン」
に横から声を掛けられて体をビクつかせた。俺の心を簡単に読んでいる奴が、気付かぬ内にふわふわと近づいていたのである。

んっ、ふわふわ？

「千乃君はさすが”ラミア様”にスカウトされただけのことはあるわねん。この美に直ぐに気付くな～んて！」
この喋り、他でもない塩南先生である。
見られてしまった。

んっ、見られた？

おかしくないか？

極力顔の向きも視線も漠然と全体像を捉えていたはずだ。
それなのに、俺のエロ心をしっかり見られてしまっている。

俺にカマをかけただけのか？・・・何の為に？

それとも本当に、気付いたのだろうか？

もし、そうなると、俺なんぞ、この先生から見るとまだまだ”ピヨッコぴよちゃん”と言うことにる。
それがG2戦士の実力なのだろうか？

そらに、塩南先生は俺に回答を求めてくる。

「今日の部長ちゃんは、一段とシャイなところが体に出てて堪まんないわねん、ねえ、千乃くん」
いつもどうなのかは知らないのだが、それは俺も同感である。
この先生、男並に鋭いぞ！

だが、うっかり「そうですね」なんて同意していいのだろうか？
この掴みどころの無い塩南先生だ。
俺の本性を誘導しているのかもしれない。引っ掛け問題と言うことも考えられる。

ここはどちらとも付かない回答で様子を探ろう・・・。
そう思い、

「いつも制服で体操をするんですか？」
逆質問の高度テクニックを使ってみた。すると、

「制服体操は、な～んと私の考案なのよん。素敵でしょ！」
その繋がらない回答に、俺は驚きを見せてしまった。

上手くかわしたと思ったのもつかの間、彼女の高度テクニックにやられ、本性をさらけ出してしまった。分かっていながらも、乗ってしまう。

恐らく俺の瞳は輝いていたことだろう。
止まらない衝動なのだ。

それに、塩南先生は”乗って来た！”、”いただき”と言う顔をする。

俺は、それよりも”先生の考案”と言うところが気になってしまう。

いたずらだろうか？
この先生ならありそうだ。

しかし、もし本当だとすれば一体目的は何なのだ？
疑問が募る。

知りたいぞ！俺は知りたい！！
だめだ、身体がむずむずしてくる。

部活動とは言え、教育の一環だ。いや、ここはＡＶ界だ。ＡＶ部と言うものであれば、それも有りかもしれない。しかし、ここは”柔軟体操部”であるのだ。

部員達のきびきびとした動きといい、間違い運動部なのだ。
しかし、そう言えばＡＶ撮影の類の部が無かった気がする。これも妙だが・・・。

先生は”美”と言う表現を用いたが、これは絶対に”エロ”を意識しているのに違い無い。
まあ、エロを美と捉えるか否かは、賛否両論はあるだろうが・・・。

言葉もなく興奮している俺に、先生は、

「今年はこれで攻めようと思うのよん。斬新でひょっ！最近の大会は技術に走り過ぎと思うのよん。
ほら、あの娘見てどう思うン？くぐっちゃん」

つい、あの子と言われて凝視してしまったが、大会とはＡＶ大会のことではないのか？
柔軟体操部もＡＶ大会を意識するのだろうか？

聞いてみなければならない。俺はもしかすると、大きな勘違いをしているのかもしれない。
でも、その前にだんまりでは芸が無い。
何か応えなくては・・・。

だからと言って、この先生には適当な回答は良くなさそうである。
俺の質を下げてしまうことになりかねない。
この先生には全て見透かされている、そんな気がする・・・。
よし、”正直”は人間の基本だ。

「はい、両手を上げた時の胸を反らしが足りなく、直ぐにでもブラ

ウスから飛び出したいと言う”締め付けと躍動感”、そして、その狭間での抑揚に欠けるとみますが・・・」

俺は思い切って素直な感想を伝え、先生の顔色を伺ってみた。すると、

「そ～よン、そうよね。さすが、くぐッちゃん。さすがだわン。あの娘は技術に溺れ過ぎなのよん、もっと、こう込め、込めないと」

そう言いながら塩南先生は身体をくねくねさせる。その腰とヒップのうねりの時間差に俺は見とれてしまう。

塩南先生は、ノリノリで一緒に体操を始めた。

結局、塩南先生はただ俺の本音が欲しかっただけなのだろうか？
俺に本音を言わせ、何を求めてるんだろうか？

それにしても、さっきから拘（こだわ）っている”技術”とは一体何の技術だろうか？
”込める”とは何を込めるのだろうか？

これも疑問だ。聞かねば・・・。
聞きたいが、この俺にノリノリで体操する先生の邪魔は出来そうにない・・・。

そうこうしている内に残念ながら斬新な、といっても体操自体はノーマルなのだが、終わってしまい、こちらに部員達が集まってきた。

さすが顧問の先生、里緒の時以上に猛ダッシュだ！

俺はすっかり山ほどある質問のタイミングを外してしまい、”柔軟体操部の行き着く先”、”先生の求める先”他、諸々を聞きそこなってしまった。

それに、”くぐっちゃん”と呼ぶことのリアクションも取りそこなってしまった。きっと先生は満足しないに違いないはずだ。

次に呼ばれた時のリアクションを考えねば・・・。

部員達は、やはり3列横隊に整列、そして、里緒が前に出て部員達と対峙した。

俺の両サイドを里緒と先生が挟みサンドイッチだ。このサンドイッチは悪くない・・・。

「『おはようございます』」

スタジオ内に、再び大音響がこだまする。吸音壁は使用していない様である。

まず、塩南先生の話から始まった。

「おはよ~ん、みなさ~ん。今日は、一人多いのが気になってたでしょん。

ちょっと、見つめ過ぎだったわよ~ン、まあしょうがないけどねン。

今日から、新しい部員が一人増えま~す。

見ての通り待望の男の子で~す。

名前は、千乃工口(ちのくぐち)君ですよ~

工口くんは”第４８部、を地区”から・・・・・」

と、俺の一通りの紹介の後で、

「・・・千乃君、どうじょん」

先生は俺に挨拶を振って来た。

パチパチと瞬きをして、俺に挨拶を促す。

ここは予想通りだ。既に準備はしてある。

だが、多少振り方が気にはなるのだが・・・。それでも、

「千乃工口と言います。ＡＶ科３年アルパカ組に明日から転入します。宜しくお願いします」

ここは色気を出さずに普通に行くのが鉄則だ。こんな時、ウケ狙いをする奴がいるが大概失敗をするのだ。

俺は無難に手短な挨拶をしたのだが、塩南先生がそれに不満そうに見える。

この先生は、一体俺に何を期待しているのだろうか？

しかし、ここは敢えて小細工せずにこのまま流すとしよう、俺に期待しているものが掴めない。

塩南先生は物足りなさを見せながらも続けた。

昨日の”お願いします”の話である。

里緒も辛いだろうが、俺も耳の痛い話だ。

どうしても、生徒会長、稲荷家一子（いなりやいちこ）の嫌味な言葉を思い出してしまう。

それにあの、臀部（でんぶ）のプニプニも・・・たまらない・・・。

「先週、新3年生初の代表にの部長ちゃんが選ばれて、昨日の”お願いします”に出場したのですけど、残念ながら失敗しちゃいました～ン。

いきなりの”無差別級”だからしょうがないわねン。だから、今日の撮影大会には出られませ～ん。

でも、今日は予定通り3時で練習は終わりにしますから、帰ったら、みんな今日の大会を是非見てくださいねン・・・」

なに？あ・・あの昨日、里緒の家で見た類（たぐい）のビデオ鑑賞を進めると言うのか？

スッポンポンなんだぞ！

しかし、良く考えれば当たり前のことなのだ。学校代表が出場する大会なのだ。ここはそう言う世界、ＡＶ界なのである。こんなことで驚いてはいけない世界なのだ。

つい俺の世界に似ているので忘れてしまいそうになるが、ここで驚いては、”第４８部、を地区”から転校してきたことが疑われてしまう。平然と流さなければ・・。

「・・・さて、今度の日曜は新人戦の第1回目ですよん。恐らく、次回も部長ちゃんになると思いますけど、予断は許しません。

みなさんも一致団結。モチベーションを高くして頑張ってくださいねン・・・」

「『はい』」

相変わらず気合いの入った返事を部員達は返す。

「・・・では、部長ちゃん一言どうぞン」

「みんな、期待を裏切っちゃってごめんなさい。あんなに喜んでくれたのに、今日、撮影もできません・・・」

偉いはずの里緒が、深々と頭を下げる。

やはり、それ位大きな事だと言うことか・・・。あの生徒会長のこととといい、里緒はこのことになると防戦一方だ。しかし、それに部員達は優しい。

「先輩、気にしないで下さい」

「そうですよ。きっと来週は良い相方が見つかりますよ」

里緒は意外と人徳があるのだろうか・・・。

しかし、そんなことより、この優しさは俺の耳にも痛い言葉だ・・・。

不可抗力とはいえ責任を感じてしまう。

よし、こうなったら俺も来週の里緒の新人戦の為に全力で協力しなければならない、例え部員達の前でスッポンポンになってもだ・・・いや、パンツくらいは穿いててもいいだろうか・・・。

「さて、それじゃ気分を変えて練習しますから、みなさん着替えてきてよン」

先生の声がミーティングを締め括った。

なに?これから着替えるのか?

本当に体操だけを、敢えて意図的に制服でやっていたと言うのか?

その意味は何ですか、先生!

エロと言う”美”と言うやつなんですか？

俺の心は疑問で一杯だ。

早く質問をしなければ、俺の頭のメモリがフルになってしまう・・・。

＜つづく＞

立位体前屈とおしり（前書き）

柔軟体操部で正解だったのか？

立位体前屈とおしり

昨日、俺（千乃工口）は流されるままにＡＶ界と言う異世界に来てしまった。

勝手の分からないこの”ＡＶ界”と言う世界。

だが、不思議とトントン拍子に事が運び、今、俺は”併性ヘノ路学園高等学校”通称”へ高”の転入が決まり、”柔軟体操部”の部活を見学するまでに至っている。

柔軟体操部とは、俺が成り行きで所属することになった部活なのだが、なんとこの柔軟体操部は校内ランク第１位と言う成績で、その為、高待遇を得ていると言うのである。

偏見かもしれないが、”柔軟体操”なのにである。

果たしてこの柔軟体操部が、ただのストレッチを行うだけの部と言う解釈でいいのだろうか？

それだけで１位になれるものだろうか？

俺にはこの”校内順位”と言う、格付の意味するところが未だ不明である。

分っているのは、この格付けが人気順ではないと言うことだけである。

それに、学年第１位と言うことで”柔軟体操部”部長の千逗里緒が、今回の”ＡＶ撮影大会”の学校代表に成ったのだが、学年１位とは一体何の成績なのだ？

まさか、定期テストの成績だけで決まる何てことはないだろう。

俺は未だ何一つとして、この疑問の解決に至っていない。

それに、柔軟体操部顧問の塩南先生の方針が、”美”と言う名の”エロ”に向っているのは間違いなさそうなのだ。
その方針の意味するところは、一体何なのだろうか？
さらに、新入りの部員の俺に意見を求めるてくる意味も不明だ。

謎は深まるばかりである・・・。

今、塩南先生の発案の元に制服で行う”ヘノ路高体操”が終わり、部活本番に備え、部員達は着替えに行ったところだ。

どんなコスチュームが俺の目の前に登場するのだろうか。
謎と一緒に期待が膨らんでいく・・・。

★☆　第　１７　話　★☆
☆★　立位体前屈　☆★
★☆　♂　と　♀　★☆
☆★　おしり　☆★

「は～い、ではストレッチ始めま～す」
更衣を終えて整列した部員達が部長の里緒に従い、体操体系に列を開いていく。

そして、何のことはない。
始めたストレッチは、俺が自分の世界の陸上部で行っていたものと、全く代わり映えがないのである。
色気の欠けらもない・・・。

えっ？！

思わず口を開きそうになってしまった口を、俺は右手の力を借りて元に戻す。

塩南先生、”ヘノ路高体操”との趣向と違い過ぎではないでしょうか？

そう抗議の心を顔に出し、先生の顔色を伺って見るが、先生はにこやかにふわふわしているだけである。

残念ながら、このストレッチはこれで良い様だ・・・。

と言うことは、この柔軟体操部は”ヘノ路高体操”だけが、塩南先生の遊び心が含まれているだけで、特に何の変哲もない”柔軟体操部”と言うこなる。

うっそ～・・・。

吹き出しの様に膨らみかけた、俺のあらゆる思考がしぼんでいく。それと行動を共にしていたハード的部分も以下同文。

確かに先程までの塩南先生の発言は、エロに向っていたはずなのである。

なのに、なぜだ?!

部員達が着替えた姿も、これぞ学校指定のジャージと言わんばかりの上下コバルトブルーのオーソドックスの安物である。目を疑う限りである。

確かに校長室からアルパカ組の教室に向う時に、「柔軟体操は柔軟体操」だと言っていたが、その言葉には形容詞一つの修飾も隠されていなかったと言うことなのか・・・。

だめだ、落胆で呼吸が苦しい。

早とちりだったのだ・・・。

せっかく取り戻した高校3年の青春を、ストレッチに燃やさなければならないと言うのか・・・。

俺は外見上の平静を保つのに必死だ。

ただ、気になるのは塩南先生もジャージ姿に着替えて来たと言うことである。

しかし、いくら着脱容易なジャージを身にまとって来たとしても、先生がそれを駆使した芸を見せてくれたりはしないだろう。

重箱の隅を突っつく様な期待は、空しいだけだ。

先生は相変わらずふわふわと部員達の周りを飛び回っている。

俺の気持ちも知らずに。

恨めしい・・・。

やはり、俺はマッサージ部を選択するべきではなかったのか？

もちろん、太棒先生の畳部等訳の分からない部は、もちろん眼中には無い。

ここは手堅くマッサージ部だったかもしれない。

柔軟体操部の選択は余りにもアドベンチャーであった。

男女比からいくと部員もその比で構成されているに違いない。肉体的接触の可能性はマッサージ部の方が断然高かったはずなのだ・・・。

そうだ、

揉みつ揉まれつ、組んず解れつ、雨アラレ。

あんな処も、こんな処も影日向、本人同士の意思次第・・・ｅｔｃ。

と言うこともあったかもしれないのだ。

失敗だ・・・。

これでは俺は毎年新学年を迎えた時に、１年間の後悔でブルーな気持ちに追い詰められていくのと同じ心境だ。今は１１月なのだぞ！

俺は完全にＧ２戦士に騙されてしまった。

塩南先生にやられてしまったのだ。

なぜ、あの時、部活を決める時に平常心が働かなかったのだろうか。

これでは、先程まで溜まり溜まっていた質問も、回答をもらう前に半減である・・・。

そんな、幾ら後悔してもし足りない後悔に苦しんでいる間に、

「は～い、ストレッチ終了」

里緒の声で、部員達は各自行っていたストレッチを終えてしまった。再び整列をする。

これで、部活は終了なのか？

期待を裏切って、普通のストレッチで終わってしまうのか？

しかし、まあこんなノーマルなストレッチを眺める位であれば、早く帰ってこの世界で楽しく暮らして行く対策を考えた方がいい。その前に今日の宿泊先も探さねばならないのだ。

だが、第一スタジオの時計は、まだ午後2時を指したばかりである。

先程の塩南先生の話では、午後3時までのはずであるが・・・。

そんなことを考えていると、整列した部員の半数強がスタジオの奥の扉に入って行き、中からマットを運び出して来た。

恐らく1年生部員思われる。次から次へと運び出してくる。

それを恐らく3年生部員と思うが、彼女らの指示に従って2年生部員がスタジオ内に敷き詰めていく。

やはりＡＶ界も運動部の年功序列は厳しい様だ。

何を始めると言うのだ?

今、里緒の掛け声と共にストレッチが終わったところである。と、言うことは柔軟体操部のメイン活動は終わったはずなのだが・・・。

このマットは、丁度寝具のマットレスと同じ大きさである。

良く見ると、生地も薄手で花柄である。寝具のマットレスそのものに見える。

昼寝か?まさか・・・。

では、何故運動部がマットレスを敷き詰めるんだ?

何故体操用の白いマットではないのだ?

何だ?

何か、起こるのか？

俺のしぼんだ物が、騒ぎ出してくる。

すると、

「今日の体操は、ブリッジと立位体前屈の基本練習をやりま～す。二人一組になってねン」

塩南先生の開始の合図と共に、部員達は一斉に上靴を脱ぎ全員がマットレスの上に移動する。

何だ？

ストレッチと柔軟体操は違うのか？

確かに厳密には違うだろう。

では、柔軟体操の為のストレッチだったと言うのか？

では、一体全体、柔軟体操とは何なのだ・・・。

ストレッチの必要な柔軟体操とは何なんだ？

そう言えば、塩南先生は確か校長室からアルパカ組の教室に向う時にブリッジとか・・・。

そうだ、ブリッジでオレンジジュース位飲めないと駄目だと言っていた。

それに、それに、昨日のリオの自主練習も布の少ない下着姿のブリッジであった。

ブリッジ！

まさか、昨日の里緒の様に生地の少ない薄手の下着姿になるとか・・・。

いや、過度な期待をしては、裏切られた時のショックが大きい。

ここはマイナス思考で行くべきだ。簡単に一喜一憂するべきではない。

そう思っていると、始まったブリッジは想像通り、期待は負の方向に進んで行った。

やっぱり、ジャージのままである。

そして、ブリッジも補助役に支えられ、時折片手を瞬時だけ離す位で、芸としても見ごたえがない。

ほぼ普通である。

いや、芸の見ごたえはどうでもいい。

それに、ブリッジが柔軟体操に含まれるかどうもどうでもいいのだ。

問題はそこではない。柔軟体操部が楽しいか楽しくないかである。

昨日の里緒の下着姿のブリッジは単に風呂上りで暑かっただけと言うことか・・・。

空振りである。またもや空振りだ。

やはり、マイナス思考で正解だった。

そのお陰で、今何とか立っていることが出来る・・・。

人生の基本は、期待を低く取っておくことだ。

しかしだ、そんなしぼんだ気持ちも、塩南先生の次の一言から展

開が一変したのである。

「次は、先週約束した”立位体前屈”をやりますわよ～ン。ちゃんと衣装は準備してるかしらン」

それに部員達は、

「は～い」

と希望に満ちた返事を返す。

衣装？

俺も希望に満ちてもいいのだろうか？

ジャージの下に何かを隠しているというのだろうか？

まさか、もう一度着替え直すことはあるまい。

ジャージの下と言うことは、確実に上に着ているジャージよりも生地の面積が小さいか、或いは薄手であるかの二者択一だ。もしくは両方と言うことだ。

そう想像をもっこりしていると、

まず、先頭を切って、塩南先生が「ホイ、ホイ、ホイ」とジャージの下を気前よくずり下げていく。

「おお～お～！」

俺は言葉をのみ込み、再び右手で下がり掛けた顎を抑える。

それに、追随して部員達も気前よくずり降ろす。余計なことに2名の男子部員もだが、それは見ないこととする。

しかし、格安のコバルトブルーのジャージの下から顔を出したもは、残念ながら薄手のアンダーウエアーと言うものでは無かった。
そんなに甘くはない。

ショートパンツと言うやつである。
だが、このショートパンツ。

何かが違う。
何か引っ掛かるものがあるのだ。
俺の直感が期待を引き戻していく。

良く見ると、このショートパンツと言うやつは、かなり肌にぴったりとフィットしており、さらに、ぴったり過ぎて、脚丈は股下より若干鋭角に、切れ込んでいるではないか。

だが、肝心なのはそこでは無い。俺から見た最大のポイントは、素材に伸縮性が欠けていることである。

あの素材と、あの丈である。前屈で起こり得ることは言うまでもない。

絶対に、絶対に屈伸により突きだされたお尻は、生地を圧迫するはずだ。そして、生地の逃げ場は一つだ。

お尻の”溝”しかない！！

しかし、俺のポジションではその理論を確かめる術がないのだ。
今、俺のいるポジションから立位体前屈を見ても、後頭部が見えるだけだ。せいぜい逆さうなじ位だ。
うなじや、後頭部を見て何が面白い。うなじの何処が楽しいのだ！

何とかベストポジションに移動したい・・・。

そんな中、

「いち、にい、さ～ん・・・」

里緒の声に合わせて部員達は、前屈を始める。そして、塩南先生が一人一人に身をもって熱心に説明をしていく。

何かいい方法はないのか？

「それじゃあ、全然だめなのよん。

もっと腰を反って、お腹とお尻を出して、そのまま～、はい前屈～」

先生の説明には俺も賛辞を贈りたい。だが、見れないことが空しい。

「はい」

その指導に部員達は忠実に従っている。

みたい、見たい・・・。

むっちりお尻がみたい・・・。

食い込み前屈が見たい・・・。

しかし、いくらこの俺の視野が広いとは言え、後から見ることは不可能だ。

何か、必然的に部員達の後ろに回る方法はないか？

俺は立位体屈伸が終わらぬ内にと、頭を高速に回転させ、可能性を消去法で減らしていった。

だが、妙案が見つからない。その数は直ぐに”0”になろうとした。

だが、その時である。

ふわふわとした、天の手招きを俺の視界が捉えた。

なんだ？
こっちへ来いと言うのか？

塩南先生は前に出した右手を、手首を下にして前後に振っている。
決して、揺れているのではない！

間違いない！来いと言っている。
そこまで言うのなら。行ってもいいぞ。

先生は手を振り続けている。

よし！
そんなに来いというのなら仕方がない。行ってやろう。直ちに、直ちにだ！

俺は振りたい脇目も振らずに先生の元に向った。無論、視野は可能な範囲で広く取っている。
合わない焦点の中、俺の理論が確かだったことは確認出来た。
うっすらとした視界には、行き場の無くなったショートパンツの布地が半尻（はんけつ）を表現している。

見たい！
手を伸ばせば届く所にあるのだ・・・。

見たいが、ここで凝視してしまえば俺の品位を部員達に疑われてしまう。
この先をトータル的に考えれば、
ここは、ここは、ここは我慢だ！！工口（くぐち）。

ここは、焦って覗いてはいけない。
事は大義名分のポジションに移動してからだ。

俺がゆっくりと、急ぎ足で塩南先生の元に行くと、先生は待ってましたとばかりに俺に話しかけて来た。
俺は視野を可能な限り広く取る。

「くぐっちゃん、いいっでしょん。この眺め」

塩南先生は乙女の様に両手を胸の前で組んで俺にそう言うが、雰囲気は女湯を覗いてる最中に、覗きに来た仲間を喜んで招き入れている男子高生と同じである。

「どうかしらん？この立位体前屈」

先生は、また俺に感想を求めて来た。
俺に対する接し方が全く男友達ではないか？
何を期待しているのだ？

いや、今はそんなことはどうでもいい。

やっと、やっと解禁になったのだ！
俺は次々に２９－２人に焦点を合わせ、よりはみ出した臀部を探す。

いるぞ、あそこも、ここも・・・。よりどりみどりちゃん。

その甲乙付け難い逸品の中から、俺は最高傑作をを見つけ出した。

持ち上げられたボリューム感に縦横の比率。ほっそりとした膝から骨盤にかけてのラインには、全くごつごつとした硬さはなく。程良い脂肪が丸みを出している。

肌の色、艶、それにキメ細かさは群抜(ぐんばつ)。さらに股間の隙間が非常に狭い。

それに、何と言っても食い込み量の大きさに関らず、清楚に見えることだ。

”ベストショートパンツ賞”を挙げたいくらいだ。

俺は顔を確認すべく、彼女が腰を上げるのを待った。

でも、中々俺にその素顔を見せてはくれない。

分った、もう分った・・・。

お前のお尻の素晴らしさは分った。

だから、だから今後の為に、それに、見たものに対する感激を増幅させる為に、俺に顔を見せてくれ。お願いだ!

願いは時として、奇跡を呼び寄せる。

多分、ただの偶然だが、彼女は腰を上げて振り向いてくれた。

その彼女は・・・んっ?

千逗里緒?!

里緒さん?

千逗里緒であった。

驚きと、興奮に包まれる俺。
既に二人の仲が戻っていることの喜びに、恐らくほくそ笑んでいたことと思う。

その時、俺の視界の中央、それも直ぐ目の前に顔が現れた。

「部っ長ちゃんねン」
そう言って、ふわふわ笑う。

いかん、忘れていた。この人の前でそんなあからさまな行動を取ってはいけなかったのだった。
それに、余りの眺望にこのパラダイスを与えてくれた恩人に対して、感想を応え忘れるところであった。

「部長ちゃんのお尻どうだったン」
やっぱりきた・・・。

「はい、おし・・・」
危ない。危なく釣られて里緒のお尻の感想を言うところであった。
忘れてはならない。これは立位体前屈なのだ。

そう思い、一度ためらったのだが、この先生の目線は完全に男であるのだ。
もう面倒だ。
里緒個人ではなく、全体として、そこそこ応えてしまおう。
さすがに里緒個人のお尻に触れるのは抵抗がある。

「いえ、皆さん素晴らしいです。後ろにお尻を出してからの前屈な

ので、お尻のボリューム感がアップされた上に、腰や腿と遠近感が出てより魅力的です」

お尻を中心に回答を作って見た。　しかし、肝心なことには、まだ触れていない。

それでは、先生は満足しないであろう・・・。

「あと、ショートパンツの生地が素晴らしいです。その窮屈な中でもがくお尻と生地との攻防。そして、逃げ込んだ生地による、え～、何と言うか・・・」

幾らなんでも、その先は言いにくい。

すると、

「めり込み具合ねン」

そう、はっきりと言う。

「えっ！」

俺は先生のあからさまの言葉には衝撃だ。

だがそれ以上に、衝撃が起こった。

先生は俺の方に背中を向け、模範的な立位体前屈を俺個人に披露しようとしているのである。

すると、一気に先生の雰囲気が変化した。

全くふわふわとしたところがみられないのである。

魅力が俺にムンムンと伝わってくるのだ。

そして、マッチョがポーズで筋肉を誇張する様に、先生は自らのお尻をこれでもかと言わんばかりに誇張する。

そ、それは・・・。

やばい！

里緒のもいいが、これは別格だ。

俺はそれに一瞬で危険を感じ、半目で遮をかける。

セルフモザイクで自己防衛だ。

とても、平常心ではいられる代物ではない。何処に入り込んだのか、ショートパンツのうしろ半分の生地が、元の3分の1にも満たなくなっている。

しかし、それであって、お尻中央の溝は開いては見えないのだ。

恐ろしい括約筋（かつやくきん）の大活躍だ。

あの校長室での出来事は、幻では無かったのだ。

やはり、やる時はやるG2戦士なのだ。部員達とは格が違っている。

「ど〜おン、めり込み」

先生が前屈のまま、俺に聞く。

「そ、そう・・・」

俺は慌てて応えようとするが、目の前でめり込んだ本人を見ながらでは応えにくい。

既に気付いてはいたがこの衣装、”めり込み”を目的として縫製されているのである。

一瞬どう応えようか悩んだが、こんな時でも喜んでいいのかどう

なのか、俺の脳は働いてしまうのだ。

直接的回答を回避する方法を・・・。

俺は、先ほどから”め り込み”と言う表現が気になっていたのだ。

そこで、

「そ、その～・・・。先生、もしかすると、”め り込み”と言うより、どちらかと言うと、”食い込み”が的確かと・・・」

俺の応えに、

「食い込み?」

先生は立ち上がり、口元に拳を宛て俺の言葉を噛みしめていたが、閃いた様に口元の拳をもう一方の掌に叩きつけた。

「パチン」

と言う音がなり、先生の目が輝く!

「なるほどー。食い込み!いい言葉だわね。ン～、それいただきだわん。

そぅよん。膝のあたりの細さから腿に掛けての丸み。そして、それに強調されたヒップ。

さらに、その”食い込み?”食い込んだ衣装が最高に”美しい”わん・・・」

先生は”食い込み”と言う言葉を大いに喜んでくれた。

”先生、そんなに喜んでくれたら、俺も嬉しいです”

口には出さないが、俺もそんな気持ちで一杯だ。

しかし、先生はそこでまた立ち止まった。

「”美しい”？ん～”美しい”も、ちょっとこれも表現が不適格かしらね。”最高”に何と表現したらいいのかしらン。そうねン・・・」

それって、完全に”エロ”だろう。そう思うが言っていいのだろうか。この言葉・・・。

そう思っていると、

「くぐっちゃんだったら、どんな表現するのからリン」

俺に回答を求めてきた。

えい！ここまで言ってしまえ。

「”エロ”いかと・・・」

正直に言ってみた。すると、

「”エロイ”？」

塩南先生は、顔をしかめて首を傾げる。

また、何か考えているようだ。しかし、先ほどよりも顔が遥かに険しい。

「は、はいい～」

あれ？どうしたの先生？

今まで、喜んでいた表情が強張っていますが・・・。

不味かっただろうか？

ＡＶ界では言っていけない言葉なのだろうか”まほまほ”の様に・・・。

そう思ったのだが、

「”エロイ”って何？」

考えるのを諦めて、俺に聞いて来た。

えっ・・・？

この世界には”エロ”と言う言葉がないのか？

それとも、”ＡＶ”界にはエロと言う概念がないのだろうか？

塩南先生はふわふわとした表情で、俺の回答を心待ちにしている。

どうやって説明したらいいのだろうか・・・。

俺はこの後の部活の時間は、塩南先生にエロの意味説明することに必死で、殆ど半尻（はんけつ）を楽しむ、いや、練習の見学をすることが出来なかった。

しかし、この先生、本当に女性だろうか？それとも、女性が好みでいらっしゃるのだろうか？

＜つづく＞

エロって何よ！（前書き）

工口は里緒と買い物に行くことになったのだが・・・。

エロって何よ！

昨日、俺（千乃工口）は流されるままにＡＶ界と言う異世界に来てしまった。

見知らぬ世界でたった一人となってしまったのだが、何とか生活の基盤は出来そうである。

今日、”第２７部そ地区羊”役場にてＡＶ界の正式な住民となり、”ＡＶ界必需７つ道具”も受け取った。それに、”併性ヘノ路学園高等学校”と言う高校に通えることにもなったのだ。

生活資金だって、スカウト金の１００万ペンスがある。節約すれば半年位生活も可能だろう。

住む家こそまだであるが、これも3日後には役場の住民課が用意してくれることになっている。

取り敢えず近々《きんきん》の生活の全てが何とかなりそうだ。

んっ？そうであった。感じなことを忘れていた。

今日、宿泊するホテルを決めなくては・・・。

今、俺は”酉センターモール”と言う所に居る。

ここは、２７部そ地区の最大のショッピング街である。

へ高の部活をを終えた後、俺は里緒の案内で制服等、諸々の買い物に出掛けたのである。

この買い物が終わったら、今日宿泊するホテルを探すとしよう・・・。

★☆　第　１８　話　★☆
☆★　エロって♂　☆★
★☆　♀なによ！　★☆

「それで、さっき先生と話していた”エロ”って何よ」
”エロ”と言う言葉に食い付いてきた里緒は、学校を出てからしつこくその説明を俺に迫ってくるのである。

どうせ迫ってくるのであれば言葉のみではなく、出来れば体で迫ってきて欲しいものだが、里緒は俺と並んで歩こうとともしないのだ。

常に俺との間に1メートル足らずの距離を保とうとするのである。
お前は衛星か！
と言いたくなってしまう・・・。

我が柔軟体操部の練習室である第一スタジオ出た俺は、何気なく彼女の隣を歩こうとしたのだった。
もちろん、下心無しにだ。

しかし、彼女は辺りを見回すと直ぐ様、

「離れてよ！」
と言い、早歩きで俺との距離を取ろうとするのである。

だが、俺が彼女のご機嫌の安全を見て2メートル位後ろを歩くと、今度は、

「遠い！」
クレームを付けてくる。

自分が早歩きで離れて行ったにも関わらずだ。

”遠い”と言う理由は、俺と”話がしにくい”と言う理由らしいのだが、じゃあ一体隣を歩いていけない方の理由は何だ！と思うのだが、俺にはとっても聞く度胸が無い。

結局俺は、里緒の歩く速度を常に気にしながら、歩くと言う面倒な事になてしまっているのだ。

話しをしていて分ったのだが、彼女の”したがっていた話”と言うのは、俺と塩南先生が部活の練習中に話していたことについての様なのだ。

彼女が聞いて来る話は、その時の話ばかりである。

どうも、その時の話に聞き耳を立てていた様だ。

ただ、カマをかけて見たが、俺が里緒の食い込んだお尻を眺めていた事には気付いていないようであった。それに俺はホッとした・・・。

彼女は俺と塩南先生の話を一通り聞いた後で満足そうな顔をすると、何が気に入ったのか”エロ”について食い付いて来たのだある。

だが、里緒を納得させる説明をするのは、今の俺では間違い無く無理であろう。

俺がこの世界をもっと知る必要がありそうである。

現役G2戦士でもある、顧問の塩南(しおな)先生でさえ、あれだけ説明してやっと大まかに掴んでくれた位なのだ。

塩南先生にも色々と説明試みたのである。

結局は「今、食い込みショートパンツを見て、”美”とは違うプラスアルファーのものを先生は感じたと思うのですが、それが”エロ”です」と言う、応えとは言えない抽象的な説明を一番納得してくれたのである。

それは、先生が男性的感覚の持ち主であるからこその説明で、他の女性が理解することは、到底不可能であることは言うまでもない。下手をすると、俺が変態扱いされるだけである。

そんなことで、柔軟体操部の見学の方も、半分が塩南先生への”エロ”の説明で終わってしまったのだった。

それでも塩南先生の中で、今年度の柔軟体操部の方針が「制服、食い込みとエロ」と決まったので、説明した甲斐はあったのかもしれない。

しかし、一体、柔軟体操部とは、何が目的の部活動なのだろうか・・・？

説明から解放された安堵感で、すっかり聞きそこなってしまった。

それはそうと、里緒は雑貨店の店頭で、また買いもしない物を嬉しそうに眺めている。

俺の買い物に来たはずなのだが・・・。

俺が今里緒と一緒に居る所は、２７部そ地区の最大のショッピング街の”酉センターモール”である。

そこへは、学校からバスで１０分程である。

歩いていけない距離ではないのだが、敢えてバスの乗り方を教えると言う里緒の意向でバスに乗って向かったのである。

何といっても、生徒で俺が異世界から来た事を知っているのは里緒だけなのである。学校では、事情を知っている彼女に頼るところは今後も大きいはずなのだ。出来る限り彼女には従うべきである。

まあ、今は彼女が俺の為に案内をしてくれているのだ。多少の彼女の趣味に付き合うのは、しょうがない事であろう・・・。

そう思っていると、見飽きたのか、また思い出したようだ。

見ていてくれていた方が良かった・・・。

「ねえ、部長の私にエロを教えなさいよ！」

こいつ、俺が説明に困っている姿を見るのが楽しいのだろうか？

顔が活き活きとしているではないか・・・。

うすうす気付いていたが、彼女は”S”なのかもしれない。

「ん～、”楽しい”ってどう言うこと？って聞かれてるのと同じで、難しいんだっけど～」

俺が悩んだ末にそう言うと。

すると、

「”楽しい”の説明なんて簡単じゃない」

そう言って、里緒は満面の笑みを作り、手をヒラヒラさせてスキップを始める。

それが、お前の楽しいと言う表現なのか・・・？

お前は、それが楽しいのか？

それでは、俺のエロと言う表現はこうなるぞ！
右手を軽く握り、体の中心に置いて前後運動・・・なんて、出来るわけないじゃないか・・・。

そんな、困っている俺を彼女は楽しそうに見ている・・・。

何故、そんな里緒と一緒に居るのかと言うと、それは部活の練習が解散して直ぐのことである・・・。

練習終了後に、俺の元に2人の部員が近寄って来たのである。
新入部員の俺を尊敬の眼差しで見つめ、

「先輩、塩南先生と練習について語り合える何て流石です！
今日これからお時間ないでしょうか？」

などと、言ってきたのだ。

この二人は今日俺が入部するまで、柔軟体操部でたった二人っきりであった男性部員である。

「これから、買い物に行かないと・・・、制服とか諸々ね。
買い物をする場所も分んないから、時間が掛かりそうなんだ」

そう応えると、

「俺達が、ご案内します」
などと、可愛いことを言って来た。

俺も小学2年生以上の男を可愛いと思ったのは生まれて初めてである。

これも異世界に来た不安から来ているのかもしれない・・・。

この二人は1年生なのだそうだ。

二人は見るからにひ弱そうなオタク系草食男子であり、名前は一人が”砂万名風琉（さばんながぜる）”と言い、もう一人は、多少はマシかもしれない、島宇摩（しまうま）と言う。

確かに、このひ弱な二人では、女群の中で生きて行くの苦しかったことと思う。俺の出現は強い味方なのであろう。

でも、俺も緊張すると直ぐに腹にくる弱い奴なのだが、それを知っても歓迎してくれるだろうか・・・。

俺も、男同志色々聞きたいこともあった。

もちろん異世界から来た事がばれない様に、遠回しに聞かなければならないのだが、それでも貴重な情報が欲しい限りだ。

喜んで案内してもらおうと思ったのだが、そこに割り込んで来た奴がいたのだ。

それが、今少し前を歩いている”部長ちゃん”の千逗里緒殿である。

彼女は、

「ちょっと、あんた達！私はこの人に、聞きたいことがあるんだから遠慮してよ」

そう一言、可愛い男子部員には放ったのだ。

この一言で、部長の権力に気圧された二人は、あっさりと挨拶を済ませると、すごすごと帰ってしまったのだ。里緒、お前は凄い奴だ！

二人が行ってしまった後で、

「なによ、私がサポート役なんだから・・・」

独り言の様に呟く。

なので俺も、

「その通りです」

つい独り言の様に同調してしまった。

さすが、部長。任務に熱い・・・。

だが、それも悪くは無い。あの身体を見てしまった以上、俺も里緒と二人と言うのは満更でもないのだ。

しかし、こうもしつこく”エロ”について聞かれると、今になって後悔をしてしまう。無理にでもあの二人にお願いするべきであった。

出来はしないがのだが・・・。

”酉センターモール”は、両サイドに大小様々な店舗が並ぶ幾つかの小路を、アーケードで結んだもので、その路によって扱っているものが異なっているのである。

取り敢えず必要なものは制服と鞄。それに日常の衣類と文房具である。ああ、それとコバルトブルーの部活用ジャージだ。後は、家が決まってからの方が良い。

教科書類は学校で用意してくれるとのことであった。
何といっても俺は、あの”ラミア様”からスカウトされた身なのである。

既に、俺は里緒の案内で”文具の路”、”鞄の路”と通り、途中里緒の趣味で”雑貨の路”を通り、今は”衣類の路”と言うモールに来ている。

俺の当初の目的を無視して、里緒は勝手に必要だからと言って色々と買いまくる。
しかし、お金を払うのが俺であれば、荷物を持つのも俺である。

里緒は一向に荷物一つ持ってくれようとはしない。
俺の両手は持ちきれない程の荷物になっている。

里緒は楽しそうなのであるが、当然、俺は疲れて来た。
後は、恐らく制服を買えば解放されるであろうが・・・。

やはり、草食系後輩の”風琉（がぜる）”と、宇摩（うま）に案内役をお願いすべきであった。
彼らならば、全ての荷物を持ってくれそうだ。

里緒は許さないだろうが・・・。

そう思っていると、

「ああ、ここ。”へ高”の制服はここで買うの」
里緒は店の前に駆け寄り、懐かしがっている。里緒も久しぶりにこの店に来た様である。

その時であった、店の中から派手な格好でスーツバッグをぶら下げた若い女性が出て来ようとするのが目に入った。
その瞬間、俺は嫌な予感がした。

その女性は、図らずも里緒と店の前で対峙してしまったのである。
女性は里緒の少し後ろに居る俺に目をやり、ニタっと笑った。

「あ～ら、まだ一緒なの？相方でも無いのにお仲が宜しいこと・・・」

いきなりの嫌味から始まった。

「・・・ああ～、そうですわね。暇ですものね。せっかくの学校代表だと言うのに撮影がないですものねー。
今日は柔軟体操部も練習が終わるのも早いでしょうから優雅にショッピングかしら？
でも、才能ないんだから、早く帰ってビデオを見た方が良くなくて？
それとも、もう諦めたのかしら～ホホホ・・・」

この派手な女、一度見れば忘れたりはしない。生徒会長、稲荷家一子である。彼女の声の大きさに、周りの買い物客も奇妙な顔でこちらを見ている。

やはり、彼女の行動には”S”であるはずの里緒も、顔を赤くして、俯いて黙って耐えているだけである。

今日、二度目である。
あまりに、”らしくない”姿である。

そんなに、学校代表で撮影大会に進めなかったことが、卑下しな

ければならないことなのか？
そこまで言われても黙って耐えなければならないのか？
この女に・・・。

これでは余りにも里緒が可愛そうでは無いか。
強すぎるのも困るが、俺はこんな里緒を見たくはない！

そうだ、この女に初めて会った時に俺は里緒を応援すると決めたのだ。
学校にとってのＡＶ大会の事情は、俺もほぼ把握したつもりだ。

代わりに、この俺が言わせてもらう！
俺は胸を張って、里緒の横まで出た。出たのだが・・・、

「部長、制服はここで買えばいいんですか？」

気張って前に出たところまでは良かったのだが、何も主張する言葉がを用意してはいなかった。
気合いだけで、全くのノープランであった・・・。

俺は里緒の腕を掴み、稲荷家一子から遠ざけることには成功したのだが、咄嗟に思いついたのは情けないことに弱々しいアドリブであった。
里緒は返って怒ったのではないだろうか。
それが心配だ・・・。

しかし、里緒は、

「ありがとう」
そう一言いった。

きっと、里緒は言葉の弱さとは裏腹な、俺の強引な態度を感じ取ってくれたのかもしれない。
里緒を彼女から引き離した時、稲荷家一子は唖然として口を開いたままであった。

それに俺は、
「いや、別に・・・」
何が”別に”か分からないが、そんな言葉しか出てこなかった。

でも、里緒は、

「こんな、嫉みが毎年あるらしいの。でも、そんなことに私は負けない・・・。
部のみんが応援してくれてるんだから。
それに、今回は元はと言えば私の力不足が原因なんだし。
私は次に、そんな事を言わせない演技を見せなければならないの・・・」

俯きながらも強い気持ちを語ってくれた。

俺は里緒の言葉に何も言葉を返せなかった。

里緒はもう、俺のせいにはしていなかった。
確かに、俺と接したのはたったの1~2分程度だが、彼女の意外にも内気な性格からでは、俺を見かけて直ぐに声を掛けて来たとは思えない。
あの時の緊張した姿を見れば分かることだ。

恐らく、暫く迷っていたに違いないのだ。それに、俺を相方に出

来なかった後も、きっと引きずっていたはずだ。
俺の為に相当無駄な時間を使ってしまったはずなのだ。

その理論が正しければ、彼女は行きずりではなく俺を好みで選んだことになるのだが・・・。

洋服店に入ると、彼女が全て店員さんと話しをしてくれた。
彼女はしきりに、自分がサポート役で付いて来ただけと言うことを店員さんに強調している。

店員が用意してくれた制服は俺のサイズ通りで、パンツの丈を少し詰めるだけであった。
以外にも、彼女は俺のサイズを見た目だけで把握していたのである。

パンツの丈を直してもらっている最中も、誰に話し掛けるでもなく、先生の指示で俺のサポートをしているのだと強調している。

店を出ると、やはり里緒が予定していた買い物もこれですべてらしい。
満足そうな顔を浮かべている。

分かり易い奴だ・・・。

だが、何か言いたそうである。
そう言えば、パンツの丈を詰めてもらっている最中も何か俺に言いたそうであった。
恐らく、また”エロ”のことであろうと思うが・・・。

すると、彼女は意を決した様に、また口を聞いた。

”エロの話か”そう思い、「説明はもう少しだけ時間をくれ」そう言おうと、

「エロだったら・・・
そう、言い掛けたら

「ねえ、家は決まったの？」
と里緒は聞いて来た。

俺と里緒の言葉が交錯した。
里緒の顔が少し赤い。

「役場で紹介してくれるんだけど、三日後らしいんだ。これからホテルを探そうと思ってるんだ」
俺はその里緒の恥ずかしさを消そうと、敢えて淡々と応えた。

すると、

「だったら、今日家に来なさいよ。ねえ、そうしましょう」
お願いする様な目つきに俺は圧倒されて、首を縦に振ったのかもしれない。
余り意識は無いが・・・。

ただ、俺も半ばそのつもりになっている。

「ゆっくりエロの説明を聞かせてもらうから」
やたら、嬉しそうである。

「そんなにエロを知りたいのか？」

「私がサポート役になったんだから・・・」
小声でそう言う。
全く会話が噛み合っていないのだが、俺は納得した。

モールを出て脇道に入ると急に人影が少なくなった。
里緒はキョロキョロと辺りを確認して。

「貸して」
そう言って俺の荷物を強引に手に取った。

「いいって、いまさら」
ちょっと嫌味ぽかったと、後悔していると、

「だって～、だって、持ってあげるの見られたら恥ずかしいじゃない」
顔を真っ赤にして、消えそうな声で俺に抗議をしてくる。

里緒はそう言うと、俺の荷物を持って夕暮れの中をどんどん進んでいった。
俺はそれをゆっくりと追いかける。

頬に触れる風が俺の顔を優しく導く。
彼女に向けるべき気持ちへと。
そして、俺は自然と微笑んでいた・・・。

やはり、俺の今日の宿は昨日と同じになりそうだ・・・。

この後、里緒は散々しつこい位に聞いていた”エロ”について一

言も聞いて来なかった。

本当に”エロ”に興味があったのだろうか・・・。

＜つづく＞

金袋寿司（前書き）

工口（くぐち）と里緒には偶然の共通点があった。偶然・・・。

金袋寿司

いつの間にか俺と彼女は並んで歩いていた。

そうではない。

彼女が途中で脚を止め、俺を待っていたからだ。

そして、彼女は俺に教えてくれた。

金袋寿司のことを・・・。

★☆　第　１９　話　★☆

☆★　♂金袋寿司♀　☆★

”酉(とり)センターモール”で買い物をした帰りである。

里緒(りお)は生徒会長”稲荷家一子(いなりやいちこ)”と自分の関係を、この俺に教えてくれた。

それは、里緒が年端もいかない幼かった頃のことである・・・。

「一子とはね、幼馴染なの。と言っても、凄く小さい頃の話なんだけど・・・」

別に俺が聞いた訳でも無い。里緒がいきなり話し始めたのである。

彼女はさらに続けた。

「私のお母さんと、一子のお母さんは友達だったの。

そして、偶然同じ年に子供出来たの。それがね、私と一子なの・・・」

里緒は俺を見上げて少しだけ笑ったのだが、その笑顔は彼女らしくなかった。

「・・・二人は時々お互いの家を行き来する程の仲だったのよ。幼稚園に入るもっと前の、3歳とか4歳の頃の話なんだけど、今でも何となくは覚えているんだ。

ある日ね、突然、私のお父さんが家に帰って来なくなったの。結局、お父さんは今でも、そのまま行方不明のままなんだけど・・・」

俺はドッキとした。それは、里緒にはあって欲しくない話だったからだ・・・。

「・・・私は小さかったから良く覚えていないんだけど、お母さんはそれからが凄く大変だったの。私を、育てる為にね・・・。

お母さんはある時、生活の為に自分の故郷の食べ物で商売を始めようと思い付いたの。お母さんの自慢の料理で”金袋寿司”って言うんだけど、今でもその味を覚えているの。凄く美味しかったんだ。

私はお母さんの作るそのお寿司が大好きだった」

里緒の言葉は俺の心にしみて来る。

里緒が一生懸命に笑顔を作って話すから、尚更である。

だが、ちょっと気になることがある。
その名前のお寿司なら、俺も食べたことがあるのだ。
もちろん俺の世界でこのとなのだが・・・。

この世界と、俺の世界はほぼ同じである。同じ名前の食べ物も、既に幾つも耳に入って来ている。
でもこの名前、俺の世界では一般的に使われているお寿司の名前ではないのだ。

「後から、お祖父ちゃんから聞いた話なんだけど、本当はお母さんの故郷では”稲荷寿司”っていうらしいの。
でも、お母さんは”金袋寿司”って呼んでたんだけどね。
何故かって言うと、そのお寿司は醤油味で煮込んだ油揚げに酢飯を詰めるんだけど、油揚げって薄茶色で油で光っているでしょ。
それを、もう少し光らせると何んとなく金色っぽいからなのよ。
それが袋状になっていて酢飯を詰めるから、だからお母さんは”金袋寿司”って呼んでいたのよ」

ちょっ、ちょっと待て。”金袋寿司”とは、稲荷寿司のことなのか？
呼び名だけじゃ無くって、そこまで同じなのか。

俺は驚いてしまい、変な声を出しそうになってしまった。

しかもだ、その”金袋寿司”とは、里緒、おまえの母親が付けた名前なんだろ！
俺の世界の”金袋寿司”も、俺のお袋が勝手につけた名前なんだぞ。
俺と全く同じ体験じゃないか・・・。

ただ一つ、里緒の母親と俺のお袋では、名前を付けた理由は違っているが・・・・。

俺のお袋がそのお寿司に命名した理由は簡単である。色といい、形状や大きさといい、”き〇〇ま袋”に瓜二つだからである。

実は、俺はお袋が稲荷寿司をその偽名で呼んでいた為に、小学校で大恥をかいたことがあるのだ。

当然純粋だった小学生の俺は、それまで”金袋寿司”と言う名前も、その名前の由来についても、お袋から教わった事に一切の疑いを持っていなかった。

由来については、俺の持っているウンチクだとさえ思っていた。

あれは、小学校3年生の遠足の時である。お袋は俺を驚かそうとして、俺の大好きだったその”金袋寿司”を遠足のお弁当に詰めてくれたのである。

それを知らなかった俺は、お昼にお弁当箱を広げた瞬間、嬉しくなって声を上げてしまったのだ。

「わ～、金袋寿司だ！」と。

俺は級友達に自慢げに見せびらかしたのであったが、級友達はキョトンした目で俺を見つめるのである。

それはそうだろう、”金袋寿司”等と、妙な名前を叫びながら見せびらかしているのだから。

俺はキョトンとする級友達が、羨ましくて黙っているのだと勘違いをし、調子に乗ってウンチクまで語ってしまったのだ。もちろん、

名前の由来をだ。

後は言うまでものない。

少しの間をおいて爆笑を浴び、それから暫くの間、俺のあだ名は”〇〇たま袋”になってしまったのである。全く嫌な思い出だ。

今、こんな回想で里緒の話しを聞き逃してはいけない。取り敢えず、今は里緒の話を聞かなければ。

しかし、凄い偶然があるものだ・・・。

「ある日、お金に困ったお母さんは、”金袋寿司”で商売を始めようと思ったの。

それで、一子のお母さんの所に相談に行ったらしいの。

その時、丁度、一子のお父さんもいて、お母さんのお寿司を一緒に試食したみたいなんだけど、あまり評判が良くなかったらしいの。

もちろん、友達である一子のお母さんは、美味しいとは言ってくれたらしいんだけど、一子のお父さんは商売は止めた方がいいんじゃないかって・・・。

それで、お母さんはどうしようかと悩んでいたんだけど、そんな時にね、私、病気をしてしまって、お母さんはその計画を見合せてしまったの。

その間に、元々お総菜屋さんだった一子の家で、お母さんの”金袋寿司”を売り始めたのよ。

お母さんに何の断りもなしに、”稲荷寿司”って言う名前でね」

なんだ、その話は・・・。

子が子だったら、親も親だ。俺は怒りで拳が熱くなって来た。

「それを知ったお母さんは慌てて、”金袋寿司”って名前で、近所のお店に出して貰えるように頼みに行ったんだけど、その時には稲荷寿司が大人気になった後で、既に役場の認可も下りた後だったの。
それで、違反になるからって誰も受け合ってくれなくて・・・。
ついてないでしょ」

ついてないではない！
里緒、そんなとこで笑わって、俺の怒りを鎮めようとしないでくれ。
俺がお前を心を鎮めたいのに・・・。

「それでお金に困ったお母さんは、私を連れて、今住んでいるお祖父ちゃんのところに行ったのよ。
私はお祖父ちゃんに会うのは、その時が初めてだったんだ。

お祖父ちゃんはお父さんの方の親で、理由は話してくれないんだけどね、お母さんとの結婚には大反対だったらしいの。
それで、お父さんは家を出てお母さんと結婚したの。
だから、お母さんがお祖父ちゃんの所に行ったのは、よっぽどのことだったんだと思うんだ。

でも、その時のお祖父ちゃんは凄くうれしそうだった・・・。

お祖父ちゃんはね、結婚に反対したことを凄く後悔していて、今でもお酒を飲むと、そのことを私に謝ってばかりなの」

てっきり俺は、代々Ｇ３戦士と聞いていたから、この世界ではそれなりの暮らしをしているものだとばかり思っていた。
考えて見ると里緒は食堂のご主人と、二人暮らしなのである。

異世界に来て余裕が無かったとはいいたくない。早くに気付けることである。
自分の鈍感さに飽きれてしまう・・・。

「そして、お祖父ちゃんの家に行って二日後にね・・・、お母さんも、返って来なくなっちゃたの。
今も・・・行方不明のまま・・・」

里緒の言葉は途中で切れた。

きっと、幼い里緒は毎日両親が帰って来るのを待ち続けたに違いない。
ずっと寂しさに耐えていたに違いない。
里緒なら、幼いながらも気丈に振舞っていた様な気がする。

こいつの気の強さも、弱さも、気真面目なところも、全てそこから始まっているのかもしれない・・・。

それから、里緒は黙ってしまった。

里緒は俯いているので、頬が少し見えるだけである。
それでも、俺は里緒の涙を感じた。
俺は何も喋らずに、里緒が話し出せる様になるまで待つことにした。

いつしか、夕陽が街灯の光に替わっていた。
俺は里緒の肩を堪らなく抱きたい衝動にかられた。
多分荷物を持っていなければ、抱いていたことだろう・・・。

暫くして、里緒は顔を上げて話を続けた。

「それでさ、一子の家は”稲荷寿司”を当てて大金持ち。
お惣菜屋さんは、チェーン店も出来て稲荷寿司総本家となったの」

口調が急に明るくなったのがわざとらしくて、返って心に痛い・・・。

「一子は、多分そのことを知らないんだけどね。
高校に入って暫くぶりに一子に会って、と言っても小さい時の話だから、お互い名前で気付いただけなんだけど・・・。

私は一子には関係ないと思っているの。だから、私は一子に会えて嬉しくて、見つけて直ぐに話し掛けたんだけど。
でも、一子の私に対する態度は、私の気持ちとは釣り合わなかった。
いつも何か言いたそうで我慢している感じなの・・・。

特に、私が学校代表になってからは、いつも今日みたいな感じでね」

俺はそこで、初めて口を開いた。里緒の心の落ち着きを感じたからだ。

「稲荷家一子が知らないってどうして、分るんだ」

俺は心を抑え付けて聞いていたせいか、静かに話すつもりがつい口調を荒げてしまった。
それでも、里緒は、

「あれでも、曲がったことは嫌いなタイプなのよ・・・」
そう言った。

「稲荷家が？」

そうなのだろうか？
俺には十分に曲がっているとそか思えない。
真っ直ぐな奴が、理由もなくあんな嫌味を言う訳が無い。

それとも、何か理由でもあるのだろうか？
いや、無いだろう。
里緒に落度があれば、里緒はそれを受け止める奴だ。
昨日の”お願いします”で、会い方を探せなかったことに対しても、自分の責任だと受け止めていたではないか。

「・・・それとね、その稲荷家って言うのは、お惣菜屋から、稲荷寿司屋さんに変えた時に替えた家号で、本名は珍宝っていうの」

「家号で、本名が珍宝だって？」
俺には意味が分らない。

「ああ～、そうね。知らないわよね。この世界には苗字の他に家号と言うのがあって、元々は一族の総称だったらしいの・・・」

屋号、落語家の一門名みたいなものなのか？

「今は、その家号を撮影大会の”演者名”に使ったりするのよ。うちの家号はね、その～、え～と”千逗豆”大昔に豆屋だったらしいの・・・」

語尾が小さくなっていく。
恥ずかしそうに顔を赤くして、いじらしく笑う。

あんなに豆みたいで嫌だって（実際に豆屋だったようだが）、苗字で呼ばれるのを嫌がっていたのに、今は俺の前で自分で笑っているのだ。

里緒は打ち解けると凄く気の優しい奴なんだ。
きっと、慣れない人には防御をしてしまうだけなんだ。
この話を聞いて、俺は里緒と上手くいやっていけそうな気がして来た・・・。

俺は里緒と話すことに抵抗がなくなって、軽い気持ちで気になったことを聞いてみた。

「里緒・・・さんの・・・」
それにしても、名前にさんを付けるのは本当に呼び辛い。
呼び捨ては・・・、まだ早いだろう・・・。きっと。

「・・・お母さんの名前って何て言うんだ？」
特別な意味は無かった。ちょっと聞きたくなっただけである。

「えっ、名前？　名前は”かおで”って言うのよ」

里緒はいきなり母親の名前を聞かれて不思議がったが、俺は名前を聞いて驚いた。
俺のお袋と同じ名前ではないか。

まさか、名前まで一緒とは・・・。
宝くじ並の偶然か・・・。いや、宝くじは当たったことがないか

ら、そこまででではないのか・・・。

「ど、どう言う字を書くんだ？」

この世界は言葉も字も、俺の世界の俺の国と同じである。不思議なことに・・・。

「”香りが出る”と書いて”香出”って書くんだけど、それがどうかしたの？」

「いや、ちょっと聞いてみただけなんだけど・・・」

そうだろう、そこまで一緒じゃないだろう。”香りが出る”で”香出”か。流石に”顔に出す”と書いて”顔出”はお袋位のものだろう。

俺は俺のお袋と同じ名前だと言うことを、里緒には告げなかった。特に意味は無い。

字が違っていたことで不思議と安心してしまい、俺の中ではそれで終わってしまったのである。

話が一段落ついた時には、俺と里緒は丁度”Ｇ３食道”（里緒の家）の前まで来ていた。

「ただいま～」

里緒が食堂の分厚い木製扉を開けると、一持兄さんが食事に来ていた。

一持兄さんは、この店の常連客らしいのだが、いつからなのだろうか？

ふと、気になった・・・。

＜つづく＞

金袋寿司（後書き）

やっと、物語が始まった感じです。

ＡＶ界９５年の歴史（前書き）

ＡＶ界の小さな疑問は解決していくが、大きな謎が次第に・・・。
それに、工口（くぐち）と里緒の母、”顔出”と”香出”は。

ＡＶ界９５年の歴史

このＡＶ界と言う世界の中で、俺（千乃工口）が異世界から来たことを知っている”人”は役場の住民課を除けば、現在７人である。

それは、”併性ヘノ路学園高等学校”通称”へ高”の腰の低い校長先生（代理）と、ＡＶ課３年の担任”宝家先生”、太棒先生、それに、俺の担任になる”塩南先生”の合計４人。

それと、俺が今来ている”Ｇ３☆食堂”のご主人と、孫娘で同じアルパカ組の”千逗里緒”、それに客として来ている恩人、一持兄さん”一持握”の３人である。

今、その一人である千逗里緒は、俺と一緒に帰宅（Ｇ３食道）したのだったが、張り切って食事の支度の為、奥に入っていった。

今日はご主人のお店の料理ではなく、里緒の手作り料理を食べることが出来るらしい。

せっかくの里緒の好意でなのだ。腹は減っているのが、過度の期待はせずに気長に待とうと思う。

その間俺は、一持兄さんと話をしようと思う。

聞きたいことは、山ほどあるのだ・・・。

★☆　第　２０　話　★☆

☆★　♂ＡＶ界♀　☆★

★☆　９５年の歴史　★☆

「一持さん、来てたんですか・・・」

今、俺がこのＡＶ界と言う異世界に馴染め初めているのは、この一持兄さんに出会ったからこそであり、どんなに感謝しても感謝し過ぎということはない。
本当に心からそう思う。

「・・・今日は有難うございました。お陰で、明日から正式に高校に通えることになりました」

心からの感謝に一持兄さんは、

「それは、良かった。おめでとう！
高校は”へ高”かい？」

いきなりのご正解だ。

「なぜ・・・、分るんですか？」

もちろん、俺は驚いた。
仮にＡＶ界にスカウトされた高校生がＡＶ科に転入することを予想したとしても、少なくてもこの地区にはＡＶ科のある高校だけでも3校あるのだ。
すると、

「願望さぁ！
僕はね、あの高校を高く評価しているんだよ。
僕が君の立場なら、間違いなく”へ高”を選ぶよ。
それはいい高校を選んだね・・・」

こうも様に喜んでくれると、俺も”へ高”を選んだことに悔いはない。

「・・・あそこの校長も、あ～まだ校長代理だったかな、彼は優秀な人材だよ。
それに、”へ高”のＡＶ科の先生達なら実力者揃いだと思うよ」

確かに、そうかもれない。他の高校の事は知らないが、３年生の担任は皆”Ｇ”が付く。ちょっと変わってはいるが、何と言ってもＧ戦士だ。

しかし、いくら説明好きで色々な事を知っている一持兄さんでも、ちょっと詳し過ぎではないだろうか？そこで、

「一持さん、詳しいですね」
ちょっと聞いてみた。すると、

「ああ、あああ～ハハハ・・・」
少し変な間を置いて、

「・・・ウンチク？　うん、そう。そうなんだ。ウンチクが好きでね、ウンチクマニアってとこかなー」
うんち食うマニアだと言う。

確かにこの人は”うんち食う”、いや、ウンチク好きだ。
色んなウンチクを仕入れて、人に聞かすのが好きなのだと俺も思う。

だが、何を慌てているのだろうか？
もしかして、”へ高”は女子高生が多い。まさか、一持兄さんは”ＪＫ趣味”でもあるのだろうか？

俺の趣味は大河の様に広い。おそらく、一持兄さんも多趣味なのだろうと思う。

ここは、お互いに個人の趣味趣向のことを掘り下げるのは無粋と言うものだろう。

それよりも、溜まりに溜まった疑問を解決してもらうことにしよう。と思う・・・。

「一持さん、教えて欲しいことがあるんですが、ちょっと良いですか？」

「おっ、何か疑問にぶつかったんだね。どんなことだい？」

一持兄さんは額の汗を拭き拭き、豊富な女子高生の知識（想像だが）で、俺の疑問を解決するき満々である。そこで、俺は柔軟体操部に入部し、既に練習を見学するまでに至った経緯を簡単に説明をしてみた。そして、

「どうも、この練習の意味が良く分らないんです・・・。その～、柔軟体操の前にストレッチを行ったり、柔軟体操なのに身体のことを考えているとは、とっても思えないんです。何か別なことを目的としている様な・・・」

そう、質問をしてみた。

すると、一持兄さんの顔の筋肉はブルドックの様に緩み、大声で笑いだした。

他にお客さんがいないので、店的には問題は無いが、果たして俺は何かおかしなことを言ったのだろうか？

だが、ここはＡＶ界だ。どこに笑いの壺が隠れているのか俺には

分からない・・・。

「工口君は、体操をしようと思ってその部を選んだんだね」

柔軟体操をしたいと思う高校生がＡＶ界にいるのだろうか？

そう思ったが、それは飲み込んで、

「まあ、選んだと言うよりは、顧問の先生の押しに負けて・・・」

事実をそのまま伝えた。

「そうかい。でも悪い部じゃないよ。柔軟体操部はね。

工口君の疑問は、恐らく一言で解決できると思うよ。」

前置きはいいから、早く教えて欲しい。

「高校の部活はね、”ＡＶ撮影大会に出演するのが目的”なんだよ。

それは、柔軟体操部に限らず、全部の部がね」

「えっ？」

なんだ、それ？

一つ二つの部ではなく全部の部が・・・ＡＶなのか？

俺はその徹底したＡＶ魂に驚いた。

「ＡＶ科は全員が、どこかの部活に所属する校則になっているだろう。そして、一般授業よりも部活のウエイトが重要視されているはずだ。特に”へ高”はね」

そう、へ校長も言っていた。

「はい、確かに校長先生からそう聞きました」

「つまり、そう言うことなのさ。部活動は全て”ＡＶ撮影大会”の為のトレーニングを目的としているんだよ。

それが、今のこの世界の高校の部活なんだ。昔は、違ったらしいがね。ねえ、店主（マスター）」

一持兄さんは、ご主人（店主）に話を振った。

すると、ご主人は調理をしながらも俺と一持兄さんの話をしっかりと聞いていたらしく、一持兄さんの頼んでいたメニューをこちらに運びながら、話しに加わってきた。

「ああ、私が高校生の頃は、まだＡＶに関係しない部が幾つかあったね。

そのころは、スポーツ系、文化系、ＡＶ系と言ってたよ。でも、その頃でもＡＶ系が、全部の８割近かったかもしれないなあー」

「そうなんですか～」

俺は平静を装って納得するが、顔はほころんでいるかもしれない。

何せ、塩南先生の考案したと言う制服姿の”ヘノ路高体操”に、食い込みショートパンツの立位体前屈への謎が好ましい方向で、すなわち、その手の催事が継続方向で疑問が解決したのだ。

これで、１年間正式な柔軟体操に明け暮れなくて済むのである。

体操に”付加するもの”への期待に俺の胸はＣ、いやＥカップ・・・。

俺がすっきりした顔をしていると、

「部活ではどんな練習をしてたんだい」

一持兄さんがそう聞いて来たので、練習の一部始終を細かく話してみた。もちろん塩南先生が興味を抱いたエロについてもだ。

すると、

「斬新だね～、柔軟体操部の先生って、何という先生なんだい？」

そう聞いて来た、

「塩南先生です。確か、フルネームは塩南間子だったと思います」

俺が応えると、

「そ、そっか・・・、し・お・な・先生か・・・」

ちょっと、動揺した気がする。また額の汗が光り出した。

「知ってるんですか？」

「ああ、まあ、ちょっとね。ゆ、有名なG2戦士だからね」

知り合いなんだろうか？

それとも、単にビデオ上で好んで観ているとか・・・。

ちょっと、聞いてみたかったのだが、一持兄さんからの質問に俺の疑問は消されてしまった。

「”エロ”とは工口（くぐち）君の世界では有名な言葉なのかい？」

やはり、”エロ”に興味を持ったようだ。

「まあ、有名と言うよりは、一般的な言葉ですよ。特定感情の表現、いや、特定感情の為の手段っていうんですかね」

そう応えると、

「エロね」

何かを考えている・・・。

一持兄さんも塩南先生と同様、この言葉を軽く流そうとはしない。

何を考えているのだろうか・・・。

ウンチク好きの一持兄さんだったら、もしかしたら何か知ってるのかもしれない。そう思い俺は聞いてみた。

「この世界には本当に”エロ”と言う言葉がないのですか?」

すると、

「今はね。

昔はあったかのかもしれないがね」

そう応えた。

「ああ、私は聞いたことがある様な気がするね~、多分、私の亡くなったお祖父さんからだと思うがね」

ご主人がそう言うと、

「そう、昔は有ったのかもしれないんだ。普通にね・・・。ただ、”正式な”記録がないんだよ」

一持兄さんは、そう付け足す。

「どう言うことですか?」

何か、この世界にも問題がありそうな口ぶりだ。

「外にミンジュ塔と言う、空まで続く白くて高い塔があるだろ。昨日説明した通りあの塔は９５年前に出来たんだ。

現在では公式な、いや、恐らく非公式も含め書物類では、それから後の歴史しか残っていないんだよ。

もちろん、人づてには残っているんだが、それも大した情報量ではないんだ。

何故か人々から、過去の出来事が消えていってしまっている気がするんだ。それでなければ、たかが９５年でそれ以前の歴史が殆ど消えてしまう訳がない」

そう言う一持兄さんには、いつものヒョウヒョウとした感じが見て取れない。

俺はこのＡＶ界は、思っていたところと違った部分で、何かある世界なのかもしれない。そう思った。

その時の俺の様子を伺ったのだろうか、一持兄さんは自分の言ったことを訂正する様に、

「・・・まあ、僕の勝手な想像だけどね」

いつも通りの雰囲気で、手を左右に振りながらそう言い、

「まあ、過去はどうであれ、変えられない過去よりも、僕たちは今を、これからをどう生きるかなんだけどね。聞きたいことは、それだけかい？」

そう言った。

今の俺には一持兄さんの言う通りこの世界の過去を考える余裕はない。それよりも、小さくても今の疑問の解決である。

「あと、部活の校内順位と、学校代表でＡＶ撮影大会に出られる学年１位とは何で決まるのかと・・・」

そう言うと、

「それは、里緒ちゃんに聞いた方が詳しいよ」

「まあ、そうなんですが、ちょっと・・・」

・・・その通りですが、本人が絡むことは聞きにくいです。

「聞きにくいんだね。僕が分る範囲で応えると・・・」

察してくれた。

一持兄さんの模範解答は、次の通りである。

部活の順位は、年に数回開かれる”校内ＡＶ祭”つまり、へ高では”へ高ＡＶ祭”になるのだが、それで決まるらしいのだ。

それは、俺の世界で言う”学校祭”を分割開催した様なもので、各部活が発表するステージ、ビデオ、展示を一般公開し、それを観た一般観客と生徒の投票、それに教員の採点によって決まるとのことである。

因みに、一般的に”学年１位”と言う順位の決定は、その”ＡＶ祭”の個人成績に、学校の成績を加味した総合採点で決まるそうだ。恐らく”へ高”も同じだろうとのことだ。

一通り質問が終わったところに、タイミング良く里緒がお盆を持ってやって来た。

「お待たせ～」

お盆の上の大きな皿には、沢山の稲荷寿司がのっていた。

「『お～お』」

ご主人だけではない。一持兄さんからも歓声があがる。

里緒の料理が珍しくてなのか、それとも、俺と里緒の様に稲荷寿司に思い入れがあるのか分からない。だが、二人とも強い感情を表現している。

その歓声に満足そうな里緒は、自慢げに俺と一持兄さんの座るテーブルの上に置いた。

一持兄さんは、まだ里緒の持って来た”稲荷寿司”改め、”金袋寿司”を見て感慨にふけっている。

本当に、何か思い入れがあるのだろうか？

「どうしたんですか、ボッとして？」

俺は一持兄さんに聞いてみた。すると、思いも掛けず、その応えはご主人から返って来た。

「一持君、失礼、一持さんは里緒の母親の”香出さん”の大ファンだったんだよ」

「一持君でいいですよ、昔の様に・・・」

「いえ、一持さんは大切なお客様ですから」

ご主人と一持兄さんの関係は結構古く深そうである。

それにしても、この里緒の作った”金袋寿司”を見て、里緒のお

袋さんの香出さんを思い出すと言うことは、どう言うことなんだろうか？

俺がそう思っていると、その疑問に対する回答は質問もせずに直ぐに返ってきた。

「僕は、香出さんにはファンなだけじゃなくて、個人的にもお世話になっていたんだよ。
僕がまだ君と同じ高校生の時なんだけどね。
その時、一度この”金袋寿司”をごちそうになったことがあるんだよ。懐かしい・・・」

「そうなの？知らなかった」
里緒も知らない事実の様だ。驚いている。

そこに、ご主人がいつの間に料理したのか、炒めものを運んでくれた。

「さあ、食べましょう」
里緒が言う。

「うん、あ、ああ～」
里緒の機嫌は俺が彼女に会って以来、最高に良好である。
最高に嬉しいのだが、それに慣れていない俺は戸惑ってしまい、上手い返事が出来ない。

それでも、里緒は俺の顔つきで理解出来たのだろう。
俺を見てニコニコと微笑んでいる。

「僕も一ついいかなぁ？」

一持兄さんが里緒に聞く。

「まあ、いいわ。今日は特別！」

里緒が応える。

俺は里緒の作った”金袋寿司”を一口食べて驚いた。

もの凄く美味い。お袋の味と全く同じである・・・。

お袋と同じ？

・・・似過ぎだろう。

＜つづく＞

ＡＶ界９５年の歴史（後書き）

これからＡＶ界の謎と、その解決が時々出てくる予定です。

ペアシート　DE　ビデオ観賞（前書き）

工口（くぐち）は里緒（りお）とＡＶビデオを観ることになった・・・。

ペアシート　ＤＥ　ビデオ観賞

今、俺（千乃工口（ちのくぐち））は自分の世界に戻りたいと言う、強かった気持ちが薄らいでいくのを感じている。
もしかすると、ＡＶ界と言う異世界に惹き付けられているのかもしれない。

それは、見知らぬ世界からやって来たこの俺を、温かく受け入れてくれる人達に出会ったこと、特に今、俺の横に座っている里緒（千逗里緒（せんずりお））と出会ったことが大きいのだと思う。
いや全てかもしれない。

俺はこのまま元の世界に戻れなくても、いいかもしれない・・・。
そう、思っている。

ただし、条件がある。
今、彼女が醸し出す湯上りの香りを、一生嗅ぐことが出来るのであればだ・・・。

★☆　第　２１　話　★☆
☆★　ペアシート　☆★
★☆　♀　ＤＥ　♀　★☆
☆★　ビデオ観賞　☆★

先ほどご馳走になった晩御飯は、里緒が１時間以上もかけて作ってくれた稲荷寿司改め”金袋寿司”は、間違い無く俺のお袋と同じ味であった。

稲荷寿司など、それ程味の違いなんて無いのかもしれない。だが、

ひじきに、たけのこ、それに、ゴマの入った酢飯は間違いなく稲荷寿司ではない。お袋の”金袋寿司”である。

偶然だろうか？

それとも、俺の世界と、このＡＶ界とは何かの繋がりがあるのだろうか？

つい５分程前までは凄く気になっていたのだが、それよりも今は、隣から漂うシャンプーの香りと、女性フェロモンと言う”魔性のエッセンス”との化学変化に酔い潰れそうである。

と言うのは、俺は二夜連続で里緒の部屋にお邪魔すると言う、一大事件に恵まれたのである。

決して昨夜の再放送ではない。今日は正式に里緒に招かれたのである。

その事件は、３０分程前から始まった・・・。

食事を先に済ませた里緒は「お風呂に入る」と言って、店から家の中へと入って行ったのである。

それから、暫くの間、俺と一持兄さんは談笑しながらの食事を楽しんでいたのであったが、今日の”ＡＶ大会”のビデオを見るということで、一持兄さんは慌てて店を引き上げてしまったのである。

店内に取り残された俺は、まさか、ずうずうしく”家の中に入ってもいいですか”とも聞けず、行き場の無い思考は店内の隅々を彷徨(さまよ)っていた。

そこに、千逗宅の店と自宅の境となる扉が開く。

飛び出したのは、洗いざらしの髪にタオルをあてた意外とセクシーな幼顔。
その人物、他でもない。女を一段上げた里緒であった。
もちろん、里緒以外いないのだが・・・。

里緒が開けた扉からは、気圧の違いでもあるのだろうか。店内に心地良い風が入り込み、それに乗って食べ物以外の美味しそうな香りが俺の鼻をくすぐった。
食べ物であれば、直ぐにオーダーするところである。

その香りの発信源は、

「お風呂に入っちゃって」
そう一言いうと、扉を閉めて戻って行ってしまった。

多分俺に言ったのだと思う。ここに来るまでの流れから言って、ほぼ、ほぼそれは間違いない。
だが、昨日の今日である。勘違いはしたくはない・・・。

そう思っていると、俺の微妙な間を察してくれたのだろうか、大人の気遣いが俺をヘルプしてくれた。

「だ、そうだよ」
ご主人が、俺に合図をくれる。ご主人も里緒の言葉を待っていたのだろうか、苦笑いをしている。

「ありがとうございます」
俺は今夜も千逗家のご厚意に預かることが正式に決まった。

他人の家とはいえ、連泊となれば勝手も分っている。
俺は、お風呂場へ直行する、そこには昨日と同じようにタオルが用意されていた。

今度、俺の為の物と自信を持って行動が出来る。
経験値とは大きいものだ・・・。

俺が遠慮なくお風呂を堪能していると、お風呂場に近づく足音が聞こえてきた。
足音の持ち主は、二択だ。ご主人か、里緒だ。５０％の確立で当たりである。
ほぼ、足音の感じで想像がついている。

俺は極力頭部ではマイナス思考でいるのであるが、どこかの部位にプラス思考の奴がいる。
俺のハートはドキドキだ。

すると、間もなく足音が止まった。恐らくお風呂の扉のもう一つ向こう、脱衣場の扉の向こうからだと思う。里緒の声がした。
ちょっと、声の掛かる位置が遠い。

「まさか、一緒にお風呂にとか・・・」と言う展開はこの時点で、ほぼ”あり得ない”。
それはそうであろう。彼女は既にお風呂が済んでいるのだ。

しかし、この展開に俺が肩を落としていると、別のあり得ないことが起こったのだ。

「お風呂から上がったら、私の部屋に来て！今日の大会のビデオ見たいでしょ」

そう言い残すと、階段を駆け上がる物凄いダッシュ音が風呂の中まで響いて来た。

それに俺は、

「は、はい」

一応小さく意志を返したが、聞こえてはいないだろう・・・。

それからの俺の行動は、早かった。

物凄い勢いで隅々まで綺麗に洗い上げると、お風呂場を飛び出した。

そして、平常心を心がけて、流行る心とは裏腹にゆるりと階段を昇る。目指すは里緒の部屋である。

今日は何の勘違いもない。俺はすんなりと里緒の部屋に入ることが出来た。

と言うことで、俺は千逗里緒殿の部屋にお呼ばれすると言う、幸運な事件に巻き込まれたのである。

俺の目の前のテーブルには、昨夜のいわくつきオレンジジュースが2本並んでいる。

今日は里緒の用意したものである。もちろん昨夜とは違い2本共、俺が飲むわけでは無い。

1本は里緒の為のものである。

このジュースが2本並んでいると言う状況。

その意味することろが何かは言うまでも無い。それが今の俺と里緒の位置関係である。

そうなのだ。俺と里緒は、今、ＡＶビデオを観る為のモニタを前にして、二人掛けシートに並んで座っているのである。

昨日の彼女のルームウエアはジャージ姿であったのだが、今日はちょっと可愛い。

それに露出も多いのだ。

里緒の姿はまるで、”どらネコちゃん”なのである。

上はパイル地の半袖のパーカーで、黄色と黒の縞々模様。小さな耳の付いたフードがとても愛らしい。そして、下は小さな尻尾にリボンが付いているショートパンツだ。

脚丈が短くちょっと悪戯っぽくセクシーである。

それに加え、しっとり感が残るこの世界には珍しい黒髪が、彼女が動く度に巨大な香りの渦を巻き起こす。

俺はその度毎に吸い込まれそうになり、必死に肘掛を掴み耐えるのみだ。

そんな俺の状態を知ってか知らずか、知らないのだろう。里緒は鼻歌交じりで楽しそうにモニタのリモコンをいじっている。

そんな里緒を見ていると、撮影大会に進めなかったことの無念に、踏ん切りが付いた様にみえる。

それであれば、それに越したことは無い。里緒の辛そうな顔は、俺も見たくは無い。

いつも、こんな風に楽しそうで、好意的な里緒でいて欲しい。そう願う。

しかし、こうも好意的であると、この関係を崩さないようにと守りに入ってしまうのが、”無難”が信条の俺である。

一応、自問自答してみる。

失敗を恐れずに、それ以上の”あ～”とか、”こ～”とかを望む度胸がお前にはあるのか？

いや、ある訳がない。

強引と言う意味を知っているのか？

聞いたことが無いぞ。

お前は、彼女に触れたいのか？

手でも構いません・・・。

俺はとにかく、”エロ念”を封印する事に勢力を注ごうではないか！

そうだ！　最低限、楽しく一時を過ごせれば良いではないか。

ただ、後は里緒から近づいて来るように念力だけは使ってみよう。

頼みます。一時、俺に能力を下さい・・・。

そんな雑念と戦ってい間に、

「ねえ、聞いてる？」

知らない間に、里緒は俺に話し掛けていた様だ。

「ごめん、ちょっと考え事してて」

必死に真面目な顔を創作してみたが。

「そうよね、異世界ってこの世界と違うんでしょ。大変よね」
里緒が俺に労いの言葉を掛けてくれている。

「でも、みんな助けてくれるから」
ちょっと言ってみたりした。
もちろん、嘘ではない事実そう思ってはいる。

それに、里緒の顔だけではない。露わになっている手足もピンク色に染まる。
ピンクのウサギが”どらネコ”の気ぐるみを着ている。

だめだ、可愛すぎる！

里緒は赤い顔を無造作に俺に近づけて、

「まだ、カード持ってないでしょ。カードが無いと大会のビデオは見られないのよ。知ってた？」
里緒はカードを俺に見せて来る。

近い！吐息が俺に届きそうだ。
よし、俺はちょとだけ口で息をしてみようと思う。
しかし、気が小さい俺は、ばれない様に顔を直ぐにそらし、その辻褄合わせにパンツのポケットから、思いつきで

「カードって、これ？」
俺は財布の中から、今日役場でもらった”ＡＶ界必需７つ道具”の中にあったキャッシュカードを取り出して里緒に見せた。
因みに、既に契約金の殆どは、このキャッシュカードで預金済みである。

だが、この取って付けた行動が、不幸にも大当たりであった。

「な～んだ、もう持ってたのね」

里緒はがっかりした顔でそう言った。

なに！ビデオを見るのも同じカードを使うのか？

もしかして、部屋に呼んだのは俺がカードを持っていないからだったのだか？

拙い。俺はこれで隣の部屋に戻らなければならないのか？

何とかしなくては・・・。

咄嗟に俺は、

「このカードって、どう使うの？」

そう聞いていた。

そうだ。いいぞ俺！

この状況を継続するには疑問系だ！

事実、俺はまだ今日役場から貰った説明書を何も読んではいない。

本当に知らないのは事実だ。後ろめたくは無い。

すると、里緒は、

「そうよね、大会のビデオの見方は知らないわよね・・・」

嬉しそうにそう言いながら、モニタの横に立てて置いているＣＳ放送チューナの様な装置にカードを差し込んだ。

「うん・・・」

頷いたが、昨日１０年前のＧ１大会のビデオを隣の部屋で見た時

は。特別な操作はいらなかったような気がするのだが・・・。

「私が教えてあげる・・・」

因みにこの言葉の響きは大好きである。一から教えて欲しい。出来るならば・・・。

「・・・大会のビデオはね・・・」

里緒は、詳しく説明をしてくれた。

里緒の話では、３年以上前の大会でアップロードされた作品は”無料チャンネル”から、もちろん無料ダウンロードが可能とのことだ。但し、それはＧ１大会のみで、自由に大会の選択までは出来ないとのことだ。

昨日は、恐らく１０年前の大会をダウンロード出来たのだろうと思う。

３年以内の大会でアップロードされた作品は有料で、チューナーに差し込んだカードから自動で引き落とされていくらしいのだ。

課金方法は、一律１０分毎に５０ペンス。因みに、今日の「無差オープン大会」は３０分撮影なので、最後まで見ると、１５０ペンスが自動で引き落とされることになる。

さらに、出演者が”ＬＩＶＥアップロード”を選択していると、その作品を視聴者は生放送を見れるのだが、それは１０分で６０ペンスと２０％程割高なのだそうだ。

因みに、今日は里緒の奢(おご)りだそうだ。

なる程、聞いてみると俺の知らないことばかりである。里緒教えてくれて有難う・・・出来ればＡＶ的なことも教えてくれないだろうか・・・。

いかんエロ念は封印だったのだ・・・。

まず、里緒はメニュー画面から今日の「無差オープン大会」を選択した。そして、

「ジャンルは何にする？」

そう聞いて来た。

モニタには、あいうえお順で今日の作品のジャンルが並んでいる。

1．アットホーム、2．うさぎ（バニー）と始まり、5．学園、6．看護、・・・26ベロベロべろんちょ・・・31．ヤンデレ、32．湯上りと並ぶ。

リモコンを借りて一通りジャンルを確認したのだが、閃くジャンルが見つからない。

個人的に覗いて観たいジャンルは結構あるのだが、今は里緒と二人である。

おかしなものを選択する訳にはいかない。

女の子に無難な路線で、”恋愛”にしようと思ったのだが、奇妙な事に一番ありそうな”恋愛”と言うジャンルが見つからない。

よく考えてみれば、全てが恋愛ものと言えないこともないので、敢えてジャンルがないのかもしれない。

そこで、もう一度画面を戻して見直すと”柔軟体操”と言うのがあった。まだ、頭に馴染んでいなくて見逃してしまったようだ。ここは、無難に我が”柔軟体操部”に因むのが一番だ。

「やっぱ、柔軟体操かな」
そう言ってみると、
「そ～よね。私も他のジャンルも参考に見るけど、やっぱり、柔軟体操部が一番好きよ」
里緒の好みに合っていたようだ。
良かった・・・。

さらに、作品名、演者名（俳優名では無く、作品毎に付ける名前）、キーワード（作品の紹介文の中から文字検索）から1本の作品を選択するのであるが、ここから先は里緒に任せることにした。

何も決めないのは”煮え切らない男”と思われるが、少なくてもジャンルは決めたので、後は勝手を知っている里緒に任せるのがベストである。俺はそう判断した。

今回の大会でアップロード登録された作品は、無差別と言うことで数が多くいらしく、1，２００本と言う数であった。
そこから里緒が選んだのは、「体上開脚前転二分の一ひねり」である。

「あっ、これにしましょうよ。これ、何か凄そう！
本当は、私が”お気に入り登録”している俳優さんが出てれば、工口（くぐち）君にも見て欲しかったんだけど、今回は出て無いの。”木林森（きはやしん）”って言う女優さんなんだけど、凄いのよ」

一応、それに、

「へ～そうなんだ。今度教えてよ。見てみたいから」
よし、次につながる良い回答だ。そう思いながらも、俺は固くな

っていた。

俺は初めて里緒から名前で呼ばれた気がするのだ。恐らく間違いない。

名前を呼ばれて俺の諸々が固くなりだした。

危険だ！リラックスしなければ・・・。

酸素だ。酸素を補充しろ。如何、補充した酸素にたっぷりのフェロモンが・・・。

しかし、これは二人の距離が可也接近したと言うことではないのか？

今、ソファーの上で、３０ｃｍは開いている距離を５ｃｍ位詰めても大丈夫だろうか・・・。

俺は何気なく里緒の方に”ずり足”ならぬ、”ずりケツ”で近づいてみた。

これは念力だ。決して真の俺の行為では無い・・・。

予定の５ｃｍは近づいただろうか。里緒の脚に近づくにつれ、その無毛で小さい毛穴の御御脚（おみあし）が反射させる蛍光灯の光が俺の眼を眩ませる。

目が、目が・・・。俺は目を閉じるが瞼の裏にも雑念が・・・。

既にビデオ鑑賞は俺にとってどうでも良いのだが、大義名分はそこにある。

それが無ければ今も無い。

と言うことで、俺と里緒は、彼女が選んだ「体上開脚前転二分の一ひねり」と言うビデオを見ることになたのである。

しかし、これは里緒の趣味なのか？
そう思ったが、ここはＡＶ界だ。俺の尺度は通用しない。

間もなく、ビデオが静かに始まった。

しかし、俺はビデオを見て３０秒で絶句した。

いきなり、そう来るか・・・。

＜つづく＞

見ると聞くでは聞くがエロ（前書き）

里緒の部屋で、工口（くぐち）と里緒の二人は次第にいい雰囲気になって行くのだが・・・。

見ると聞くでは聞くがエロ

この部屋の主、里緒（千逗里緒）のセンスは意外と乙女チックにである。

今日のルームウエアは”どらネコ”がモチーフなのだろう。黄色のベースに黒の縞模様。フードには小さな耳がついており、ショートパンツの尻尾が愛らしい。

それに手足の露出も多く、もろに俺（千乃工口）のバットの芯を食っている。

昨日のしおれたジャージとは大違いである。

恐らく昨日は、このルームウエアを洗濯中だったのだと思う。この彩り鮮やかな部屋にはキュートな”どらネコ”がぴったりだ。

でも欲を言えば、俺は昨日の極少生地のインナーの方がこの部屋にはベストマッチだと思う。

今、隣で一緒にＡＶ大会のビデオを観ている里緒には内緒だが・・・。

★☆　第　２２　話　★☆
☆★　見　る　と♂　☆★
★☆　♀聞くでは　★☆
☆★　聞くがエロ　☆★

よく人間の姿を表現するのに”大の字”という言葉がある。

例えば大の字になって寝るとか、大の字に手足を広げるとか・・・

。

この”大”の文字。

一本の線、または一つの点を加えると様々な読みに姿を変えることはご承知のことと思う。

今、このモニタ上に出演している俳優のシルエットはその例である。

ちょっと、点の位置が上過ぎるかもしれないが・・・。”太”の字を見事に表現しているのである。

里緒が選んだ「体上開脚前転二分の一ひねり」と言うビデオは、逆光が作り出す二つのシルエットから始まった。

左のシルエットは”大”の字を。そして、右は”太”の字だ。

綺麗な人文字を描いている。

さすがはジャンルが”柔軟体操”と言うだけのことはある。一目で分る人文字である。

柔軟体操とは関係がないかもしれないが・・・イメージで・・・。

さて、ここからどの様にな展開になるのだろうか？

何てことは安易に予想されてしまう。俺は慌てて里緒の様子を伺ったのだが里緒は至って冷静である。

まだ、気付いていないのだろうか？

だとすると、ここで俺が騒ぐのは得策ではないだろう。この手の事に想像力がたくましいことになってしまう。ここは気付かぬ振りをするべきだ・・・。

モニタの中では、微動だにしない二つのシルエットに当たる逆光が徐々に弱まっていく。そして、それに従い上部の照明が光を灯しだした。二人の姿が徐に三次元の凹凸を取り戻していく。

この”ＡＶ撮影大会”は男女が組みになって行うのが大条件である。と言うことは、ギャグで無い限りはっきりしている。

左が女性で、右は男性である。

そして、完全に現れた姿は想像通りだったのだ。

もちろん、”すっぽんぽん”である。

点の位置が微妙に動いた気がしたのは気のせいか・・・。

共に年の頃なら３０前後。”太”の方は頭髪をしっかりと七三に固めた、細身ながらも絞まった身体。そして、”大”の方も女性なりに良い筋肉である。彼女のショートヘアーは、その身体つきに良く似合っている。

二人とも大真面目な表情でそのまま脚を広げていき、あわや、太いが横長の”木”と言う文字になりそうなところで、柔軟体操が始まった。

俺は思わず、あっ、付くぞ！

と声を出しそうになったのだが、すんでのところでの回避をする。

今の”太”から”木”への移行は演出だったのだろうか？

左から読むと”大太”から”大木”だ。

み、見事なのだが、俺が一番気になるのはそこでは無い。隣で同じビデオを見ている里緒のリアクションである。

横目で覗くと、里緒が呟いていた。

「なるほどね、自分達の名前を表現したのね。でも、ちょっと違うわね」

そう言って、首を僅かに傾げている。

名前？

そう言えば里緒がこのビデオを選択する時に、作品名の横の”演者名”にそんな名前が書いてあった気がする。

しかし、問題はそこでない。そうだろう、里緒！

お前はこのビデオに特に問題を感じないのか？

キャーとか顔を赤くするとか、そうでなければ、せめて笑うとか他に何かないのか？

ちょっと違うとは、何処なんだ！何が違うのだ！

そんな俺には無視をして、モニタの中では上だったり下だったり、ぶらぶらとストレッチを初め身体を解して行く。

そして二人の体が前後に重なる。

何が始まるんだ？

そう思っていると、里緒がゴクリト唾液を飲み込んだ。真剣な顔つきである。

おい、まさか・・・。お前も、俺と同じ期待をしているのか？

あんなに恥ずかしがリ屋のくせに、今は顔が全く赤くないぞ・・・。

前後になった二人の内、前の女性が脚を伸ばして座ると、後の男性が背中に跨り体を擦り付ける様に押していく。前屈の補助である。さらに女性は開脚前屈へと移っていく。

Ｏｈ！

俺は危く声を出しそうになった。皿になり掛けた目を小皿で止める。

はっきり言って少しお下劣である。だが口には出しはしないが、俺としてはそれなりに視覚的な快楽はある。

しかし、里緒にとっては・・・。

そう思い横目で里緒の顔色を伺うと、里緒の顔は真剣である。首は頷いたり、傾げたり。眉間には皺を寄せたり、伸ばしたり。一端の批評家の目でモニタに噛付(かじり)いている。

どうやら、一連の動きの全てに顔を出している”あるもの”の存在に対しては全くＮｏ　ｐｒｏｂｌｅｍの様である。

どうしてだ？

一人ならともかくだ。いや、ともかくであって欲しくはないが、俺と二人で”あんなもの”や”こんなのもの”が、角度を変えて映し出されているんだぞ・・・。

現状に対する行動を迷っている俺を知ってか知らずか、知らないだろう。

モニタに噛付いていた里緒は、

「ごめん・・・」
俺の方を向いて、そう一言謝った。

何なんだ、その”ごめん”は？
一体、何に対してだ？
謝られた理由を俺はどう捉えればいいんだ、里緒？

すると、里緒は、

「駄目ね、これ。名前ばっかり。やっぱり作品名じゃあ判んないわよね」
謝りはビデオ選択に対する謝罪だったようだ。

俺は何て応えればいいのだろうか？

唖然とする俺に、

「全然面白くないわね、違うのに変えましょうか？」
そういってくる。

里緒には”あんなものや”こんなもの”が手を変え品を変え、出たり引っ込んだりすることが、何てことでは無いことは間違いなさそうだ・・・。
これは、一体どう言うことだろうか。

少なくても俺は、おまえと一緒に見ることに何とも思うぞ里緒。
それに、どうでもいいが、作品名は気に入っているのか？

しかしだ。考えてみれば昨日俺が部屋で観ていたＧ１ビデオ。あ

れも里緒が来た時には”その部位”こそはっきりとは見えていなかったにせよ、すっぽんぽんの姿で、それなりの摩擦行動は行っていたのである。
その時も、里緒からのリアクションは俺に対する”感心”だった。
ＡＶ界とは、そんなところなのだろうか？

里緒は肝心な題名の大技「体上開脚前転二分の一ひねり」を見る事無しに、更新すること無く１０分間で次に観るビデオを探し出した。

きっと、俺の意思を聞くまでもない酷い出来な作品なのだろう。
俺はそれなりに、面白かったのだが・・・。

それにしても気になるのは、この直ぐ顔を赤くする里緒が平然”それ”を見ていることである。
と言うことは、言うまでもなくかなり見慣れていることになる。

ご主人のだろうか？
いや、それは無いだろう。有って欲しくない。
だとすると、大会のビデオと言うことになるのだが・・・。

気になってしょうがない俺は、次の作品を探している里緒に疑問をぶつけて見ることにした
もちろん遠回しにだ。

「り、里緒・さんは大会は何歳から見てるので・・」
やはり、名前のさん付けは呼びにくい。その後が敬語になりそうで語尾を濁した。

すると里緒は
「お互い呼び捨てにしましょうよ。何か固くて変。言い直して！」
俺に要求えおする。

バカ、それはそれで、
「急に、そんなこと・・・。緊張するだろ」
そう言うと、

「いいから言ってみて」
頑固だ。そう言いながらも、里緒の顔は恐らく俺以上に赤い。

「じゃあ、り、里緒は、その～、何歳から大会を見てるんだ」
い、言い易い！何か大接近した感じがする。

その流れで俺は少し”じり尻（ケツ）”で、里緒に近づいてみた。その距離は”されど２ｃｍ”・・・。
横を見れば里緒の顔がそこにある。脚を広げれば膝が触れそうな距離になった。”されど２ｃｍ”。
処々の理由で広げられはしないが・・・。

しかし、そんな俺の興奮も、応えた里緒の言葉に打ち消されてしまった。

「いつって・・・、生まれたときからよ」

なにっ！生まれたときー？

何を言われても、さり気無くしていようと思ったのだが、流石にそれには俺の顔も驚きで固まった。
すると、それを察して里緒は言い直した。

「あ～ごめん、ごめん。ちょっと大げさだったわ。物心付いた頃からって言うのが正解よね」

何も変わってないじゃないか。そこじゃないだろ。

しかしだ。と言うことは、それは里緒だけではないだろう。恐らく、ＡＶ界全ての人がそうのだろう。

柔軟体操部のあの食い込み”立位体前屈”の時も、今考えるとそうである。

余り見てはいなかったのだが二人の男子部員の視線には、煩悩があまり感じられなかった気がする。

それに、当の女子部員もそうである。俺に見られることに対して平然としていたのだ。

かと言って、塩南先生は、食い込みを”美”と言った後に、違う表現を欲していた。と言うことは何も感じていない訳ではないのかもしれない。

そうだ。何かが違うからＡＶ大会が存在するのに違いない！

俺はそう仮定を立ててみた。

そこに、

「ねえ、また柔軟体操でいい？さっきのは、技術が無かったわよね」

里緒がそう言った。

んっ？　技術・・・。

里緒は柔軟体操の技術を見ていたのか？

それならば、別に裸になる必要もなければ、体を擦り合わせる必要もないはずだ。

それとも擦り方にも技術が必要なのか、ゴマでさえ擦るのに技術はいらないぞ・・・。

「技術が・・・？」

俺は思わず口にした。すると、

「ん～技術もそうだけど、技術以外に感じる物があれば、もっといいんだけど」

それだ！

その感じるものとは何だ？

塩南先生の言っていた”美”とは違う何かのことか？

俺の言い替えた”エロ”とは違うのか？

こうなったら、納得いくまで大会を見てみよう。

俺はそんな気になった。

里緒は直ぐに次の作品を選択した。

今度の題名は”脱いだ後には服着るたる”だ。

だが、これも１０分間観ると更新はしなかった。これも感じるものが無いと言う。

依然として、俺にはその”感じるもの”と言うのが分らない。

「次～ん～、違うジャンルにするわね～」
次に選んだジャンルは”学園”。作品名は「学校の階段」だ。
里緒の生唾を飲む音が聞こえる。ちょっとそわそわしているのか？
観る前からである。偶々か？

「ごめん、これなら大丈夫だから。多分、この女性Ｇ３戦士だから・・・」
と言う。初めからある程度の内容が期待出来る言い方だ。

その作品はやたらと狭い学校の階段で始まった・・・。
これは里緒も何かを感じたらしい。いい顔をしている。
里緒は最初の１０分が終わると、俺の意見も聞かずに更新をしていた。
それは、もう１０分間、観る価値があるということだ。

このビデオも最初の１０分間が終わる前には、既に”すっぽんぽん”だ。撮影場所の違いさえあれ、擦れ合う事には今までの作品と変わりは無い。

でも、今までの２つの作品よりは、確かに短くはあったがシツエーションから訴え掛けてくるものは感じ取れる。ただ、欠点は学園ものにしては俳優の年齢が不自然なことである。

それでも俺には、制服から始まったせいなのか一層、隣の里緒が気になってしまう。
モニタ上の女優の裸を里緒に置き換えている自分がいる。

いつの間にか、いや俺は知っている。この作品が始まってからだ。

里緒と俺の距離は肩を並べる程近くなっていた。
俺が近づいたのではない。里緒から近づいて来ているのだ。

偶に里緒の肩が俺の肩にふれ、里緒の手が俺の膝に触れる。モニタの中と現実がオーバーラップしていく。
静寂の中、言葉が無くても体が引き寄せられているのだ。意識をすると、気まずい気持ちになってくる。

脚を広げれば・・・、誤解しないでほしい。通常の肩幅強だ。そこまで広げれば、里緒と俺脚は触れ合うことが出来る。

だが、今の俺には広げられない理由がある・・・。
幾ら里緒がビデオで見慣れていたとしても、実況中継が同じとは言いきれない。
それに、何より俺の心理の現れをどう受け止めてくれるかは不明なのだ。

ドクン、ドクンと言う心臓の音が俺の頭にまで響いて来る。
里緒との会話もないこの静寂の中では当然このとだ。

静寂？
なぜ静寂だ？

そう言えば、さっきから消音のままである。気になることが多すぎてすっかり忘れていた。
静寂からの緊張を解しがてらに、ちょっと聞いてみよう。そう思った。

「大会って、音が出ないんだ？」
俺がそう聞くと、

「そんなことないけど・・・」
真剣にビデオを見ていたにも関わらず、里緒の反応は意外にも早かった。意識の在り場が俺にもあったと言うことだろうか？
いや、深読みはするまい。

「音、出さないの？」
昨日里緒は、ノックもせずに俺の部屋に入って来ると、俺がこっそり見ていた１０年前のＧ１ビデオの音量を、自ら大きくしていたのだ。

「出す？」
里緒の確認に俺が頷くと、里緒はリモコンの操作を始めた。
里緒はモニタ上で問い合わせて来る暗証番号を入れるが、あまり気が進まないようだ・・・。

里緒が暗証番号を入力すると、音声が出てきた。

「暗証番号？」
俺は聞いてみた。確か昨日はそんな番号は必要無かったなずだ。

「そう」
そう応える声が、少しおどおどしている。

「昨日は入れなくても聞こえたけど」
そう聞くと、

「お祖父ちゃんが入れっ放しなの。解除しないと、聞こえちゃうのよ」
そう応える。

暗証番号が必要なんだ・・・。一体どう言う意味なんだろうか？
それに、”聞こえちゃう”と言う言い方はなんだろうか？

この演技は、今までの作品と違って、多少の感情が汲み取ることが出来る。
今までの作品は全くの無機質なものであったが、これは人間味がある。

それにしても、里緒の”音”に対する反応はちょっとだけ気になるところだ。
もしかすると、俺との会話がし易い様にと言うのも考えられる。
もしかしてＡＶ界とはそう言う考え方なのかもしれない。
或いは、里緒が俺に対して・・・なんてことも・・・。

俺は糠喜びをしないように心がけ、その事には触れずにビデオを観ていた。

すると、モニタの中では次第に刺激的な絡みになってきた。女優さんの激しい息づかいも聞こえてくる。
昨日のＧ１ビデオのマラソンの様な息遣いとは明らかに違う。本物に近い。いや本物の息遣いだ！

里緒もそんな気持ちになってくれないだろうかと思うが、この手のビデオを見慣れた里緒には期待薄である。
そう思いながら、横目で里緒を見ると、何と里緒の顔が真っ赤である。

あれ？
里緒、どうしたんだろう？

今までのビデオもこれ程ではないにせよ、それなりの絡みはあったはずだ。
なのに、何故だ?
その時である。
女優がある言葉を発した。
「ま、まほまほ・・・」
「んっ?」
”まほまほ”って言った。
確かにだ。”まほまほ”と言った。
”まほまほ”のことか?いや、あいつの名前は”ラミア”だ。”まほまほ”はあいつがバスの中で発した言葉なのだ。そこから取って俺が付けた愛称だ。
”まほまほ”?
どう言う意味だ?
そう思った俺は、無謀にも真っ赤な顔の里緒に聞いてしまった。
「まほまほって、な〜に?」
その途端である。
里緒の顔が急激に強張って行った。
呆気に取られる俺の前には、あっと言う間に”鬼の形相”が出来

あがっていた。

まずい！

俺は身の危険を感じるのであった・・・。

＜つづく＞

制服のち食い込みは、エロんピー（前書き）

次のＡＶ大会に向けて・・・。

制服のち食い込みは、エロんピー

それは束の間であった。

この世界での初日のことである。俺（千乃工口（ちのくぐち））が初めて会話を交わした相手、千逗里緒（せんずりお）とは行きがかり上の不運と、このＡＶ界と言う世界に対する俺の無知さにより、不本意にも溝が出来てしまった。しかし、その溝はお互いに不可抗力の為の物だとは分っていたのだ。

出来た溝はそれほど深いものでは無く、むしろ、それが縁で彼女の部屋でＡＶ撮影大会のビデオを鑑賞するまでに接近したのである。

ところがだ。それは更に束の間であった。

そのビデオ鑑賞の最中に、何と俺の不注意な一言により再び新たな溝を作ってしまったのである。

一時の温まりつつあった関係は、一瞬で嘘の様に冷え切ってしまい、物理的に１メートル以内に近づくことさえ出来ないのである。

こんな状況下で無策な俺は、とにかく彼女のご機嫌が直るまで耐え続けなければならないのである。

一体、今度の溝の深さは前回と比べてどの程度なのであろうか？

里緒の心がさっぱり掴めない。

この溝、埋めることが出来る程度であるならばいいのだが・・・。

★☆　第　２３　話　★☆

☆★　制服のち♂　☆★

★☆　♀食い込みは　★☆

☆★　エロんピー　☆★

俺はあの時と同じミスを犯してしまった。
それは、この世界に移動する最中、彼女の腕の中で空高く運ばれている時であった。

”まほまほ”と言う言葉の裏に、何かが潜んでいる事に薄々気付いていたにも関わらず、”まほまほ”に、ではなかった”ラミア”に対して俺の中で作り上げた愛称、”まほまほ”と呼んでしまったのである。

すると、その言葉に反応した彼女は「いけませ～ん」と絶叫すると、俺の首に回していた腕に力を込めてしまい、憐れ俺はそのまま落ちてしまったのである。

そのお陰で、俺は彼女からＡＶ界に対する説明を一切聞けず仕舞いで、訳も分からず一人この世界に来てしまう破目になったのである。
もし、その説明を聞けていれば、違った展開になっていたかもしれないのだ。

そんな苦い経験をしていながら、俺はあの”忌まわしき名前”ではなく、”なぞの言葉を”再び軽々しく発してしまった。

結局、あの日の里緒は凄い剣幕で、俺はそのまま部屋を追い出されてしまったのであった。
短い幸せな時であった。

そして、あの日から2日が過ぎた・・・。

俺は学校にもこの世界にも、それなりに慣れて来た。

それは常に俺の近くで里緒がサポートしてくれているからである。

ただ、あれ以来、里緒が俺に発する言葉は、「あれ」「それ」「そう」「違う」「ごはん」「行くわよ」「お風呂」の単語のみだ。殆ど直接目を合わせることも無い。一度、鏡越しで目が合っただけだ。

それでも先生から俺のサポート役を受けたせいか、俺の意思には関らず千逗家を追い出されることは無かった。

いや、と言うよりは会話にこそ出ないが（単語だけなので）、彼女は俺の同居を当たり前かの様に行動するのである。

そんなことで、俺は成り行き上、千逗家でそのまま気まずい生活を送っているのである。

それも、明日には役場の住民課が俺の住む場所を紹介してくれることになっている。

何せ俺はスカウトされた特別な身なのである。大会に規定回数出演する限り無償で住めるのである。

明日、学校帰りに役場に寄れば必然的に千逗家を出ることになる。

それにしてもだ。あの”まほまほ”と言う言葉には、どんな意味が隠されているのであろうか？

昨夜一人ビデオ鑑賞していた時にも一度遭遇してしまった。

それは、非常に色んな面で盛り上がった場面であった。

と言うことは、普通に考えて”あっち系統”の言葉なのかもしれない。

しかし、その程度で里緒や、”まほまほ”では無かった、ラミアがあんな剣幕で怒り出すだろうか？

何せ、ここは裸体を見せることが標準仕様のＡＶ界なのである。
単語の一つや二つは、何て話では無いはずなのだ。

とは言うものの、とにかくこの言葉の真意、迂闊に誰かに聞くのは危険である。
確認が出来るまでは、禁句と言うことで封印をするのが安全なのは言うまでもない。

取り敢えず俺は当面は”触れない”と言うことで行こうと思う。

まあ、そんな事件は抱えているが、今日は俺がＡＶ界入りして４日目である。

因みに今日は水曜日である。
へ高では、週初めに行われるＡＶ大会の学校代表者を発表する日である。

いつもの様に午前の一般授業を終えると、柔軟体操部の面々は活動場の第一スタジオに集合なのだ。
もちろん俺も里緒と３メートルの距離を置いて、第一スタジオに向ったのである。

第一スタジオに到着すると、いつもの様に部員の代表から里緒に出欠の報告があり、里緒の、

「じゃあ、”への路高体操”やりまーす」
の掛け声で制服姿の体操が始まった。

この準備体操すらもＡＶ大会の為のトレーニングなのだ。みんな真剣に制服体操を行っている。

本当に、こんな部活があっていいのだろうか？
そう思うのだが、このＡＶ界の全高校の全部活がＡＶ大会に出場する為の団体なのである。
部活動にその他の目的は存在しないのだ。
そんな世界にも関わらず、既に俺はこんな生活に慣れ始めている。
ホント、人間の適応能力とは恐ろしいものだ。自分ながら・・・。
恐ろしいと言えば”部長ちゃん”こと里緒の今日は一段とピリピリしている。
その責任の半分は既に述べた様に俺にあるのだと思うが、恐らくもう半分は、この後に行われる次の”ＡＶ大会の学校代表”の発表であるのだと思う。
言ってるそばから、その発表者がふわふわと現れた。
どんな時でも締まらない顧問の先生”塩南間子（しおなまこ）”先生である。
いや、それは語弊があった。ある時を除いてはだ・・・。
今日の登場は、ハッタリにゴージャスである第一スタジオの入口の扉からではない。いつからそこに居たのか、第一スタジオ二階の部員室からである。
彼女は教員であるにも変わらず、制服姿で現れた。
先生が制服姿とは、一体今日は何をしようと言うのだろうか・・・。
俺にとっては、この現役Ｇ２戦士がこの世界以上に不明である。

”への路高体操”が終わり、集合する俺達部員達の前には制服姿の塩南先生と、部長ちゃん殿が向い合わせに並んでいる。

そして、塩南先生のお話が始まる。

「まずは、嬉しいお話で～すわよ～ン。

昨日の校内ＡＶ委員会で、来週の”２２４卯年度　第一回　サラ１８歳新人大会”の学校代表には・・・、ドドスコドドスコ・・・正式に部長ちゃんに決まりましたわよ～ん。みんな拍手～」

先生自前のドラムロールの発表に、どよめきと拍手が巻き起こる。

その発表に里緒は安堵の表情を半分浮べているが、残りの半分はピリピリ状態のままだ。

もちろん、残りの半分は俺に対するものなのだろう。

まだ一度も目を合わせようとしない・・・。

「部長ちゃん、今度は楽勝よ～ん。”お願いします～ン”に参加するのは、新学年に入って２ヶ月だから、右も左も分からないウブい子ちゃんばかりよん。チョロイわよねン。

参加者も、少ないとは言っても２～３００人は参加するから、”お願いします”は積極的に行けば直ぐに相方が見つかるわよン。

部長ちゃんは可愛いから、黙って待っていても目立っちゃって大変かもしれないニョン！」

と言って、塩南先生は自分の肩を里緒にぶつける。

「それと、撮影大会の方は２０分と短いから、アッという間。それだけに、無駄な動きは出来ないから構想は練っておいてねン」

塩南先生の言葉に、
「はい」
里緒は引き締まった声で返事をする。

他の部員に聞いたのだが、”お願いします”に二度失敗すると校内順位を相当落としてしまうらしい。
そうなると、暫くは学校代表に選ばれない可能性が高いそうだ。
それに、柔軟体操部自体に対する評価が下がることに繋がるとのことである。
学校代表が決まっても里緒の顔が真剣なのはそのせいなのだ。

塩南先生はさらに話を続ける。
「それと、今日は遅くなりましたけど今年の目標を発表しま～す。みんな聞き流さないようにぃ～ねン！」

「『はい』」
直ぐ様、部員達は気合いの入った表情に変わっている。さすがAVで回っている世界である。

「今年度は”制服”のち”食い込み”は、”エロんぴー”でいきますわっよ～ン！！」
珍しい先生の興奮した音量に、部員達からのどよめきが湧き起こった。数人が一番後ろの隅に居る俺に向かって振り向く、気恥しい限りだ・・・。

「みんなも知っての通り、”食い込み”はくぐっちゃん（俺のこと）が考えた言葉で、”エロ”とは、これまた、くぐっちゃんの故郷の言葉ですのんよン。
この”エロ”と言うのは抽象的で大変難しい言葉よねン。
先生も皆さんのヒントになればと思って、一所懸命考えましたン・

・・」

別に食い込みも俺が考えた訳ではないが、ここは否定することもあるまい。気恥しいが・・・。

そして、塩南先生そう言うと自分の穿いているスカートをヒラリと捲り上げた。すると中から”立位体前屈専用ユニフォーム”、ショートパンツがお目見えした。

過剰なフィット感がと、伸びない生地が売りのユニフォームである。

この時点で、塩南先生はいつもの掴みどころのないふわふわ感が何処へやら、魅力的なＧ２戦士に変身している。

だが、この程度。驚く程の行動ではない。

俺はこの程度の事には既に慣れてしまっている。

とは言っても、もちろん俺の情熱が一点に収束していくのは言うまでもない・・・。

先生は部員に向かってお尻を向け、素早い動きで完璧な”立位体前屈”を披露し始めた。

すると、勢い押し出された尻肉は、両足を分離する５ｃｍほどの布地を一気に追い込んでく。

行き場の無くなった布地は、自らを守るために必至に中央の一光の溝へと逃げ込んでいくしか手立てがない。

だが、その溝は余りに狭く深いのだ。

余儀なく布地は紐の様にダイエットしていくのであった。

先生は部員のみんなに、

「は～い、これが食い込みで～す」

とお尻を振っている。愛嬌で振っている訳では無い。更に食い込ませているのだ。

俺に取ってはこの段階で十分にエロいのだが、何せこの世界で育った他の部員達は、物心ついた時から、”あんなもの”や”こんなもの”を見ているのである。

何とも思わないに違いない。

そう思って部員達の顔を覗いてみると、決してそんなことは無かった。

塩南先生を尊敬の眼差しで見つめている。憧れの目で顔を赤くしている女子部員もいる。

決して何も感じていない訳ではないのだ。大いに感じているようだ。

これが現役Ｇ２戦士の力と言うものなのだろうか？

それともＧ２戦士が敢えて選んだ行為である。それ以外の何かがあるのかもしれない・・・。

しかし、俺に取ってエロいと言っても、５日前の俺とは違う。

既にこの辺りは俺の範疇（はんちゅう）となりつつある。

だが、塩南先生はさらに次の行動に移ったのだ。

「よ～く見て下しょんセ」

先生はそう言ってショートパンツに手を掛けると、お尻を左右に振りながら一気にずり下ろした。

おっ～つ！！！

昨夜のＡＶビデオの見過ぎで、乾いてしまっていた俺の目が一気潤いを取り戻す。

さすがに公開ライブとなると迫力が違う。

言われなくてもよ～く見ますよ、先生！

俺は目を細め、瞳の焦点距離を調整する。

塩南先生は、スルリとそのままショートパンツを膝の位置まで下げ、再び立位体前屈を披露したのである。

う、う、うわ、わわわ～。

さ、さ、さ、先生、さすがにそこまでは・・・。

この二日、ＡＶビデオで色んな”御姿”に巡り合ってるとは言え、俺の心身への影響が懸念される。

慌てて隣にいる俺以外の男子部員二人目をやるが、砂万名風琉（さばんながぜる）と、その向こうの島宇摩（しまうま）はメモでも取りそうな真剣な眼差しで先生の臀部を見つめているのだ。

確認の為、風琉（がぜる）の若さの象徴を盗み見るが、全く地殻変動は見せていいない。平静状態のままである。

それであれば、ここで俺が隆起させる訳にはいかない。それが先に生まれた男としてのプライドだ。

そうだ、くぐち、植物と思え！

あれはきっと食虫花だ。ピンクに咲いた怖い花だと思うんだ・・・。

そんな俺の気持ちも知らずに、先生は屈伸状態のままで、あっけらかんと、

「さっきの方がぐっとくるでしょん」

と、自分の足の間から顔を覗かせニコニコと楽しそうである。

先生！俺には今の方がずっと刺激的です。心で叫ぶが、部員のみんなは納得している。

何故だ？

「部長ちゃん、なんでだと思う？」

先生が里緒にそう聞くと、里緒は首を傾げ、

「何か、いきなり最終回を観てしまったような・・・。そんな感じで呆気ないっていいますか・・・」

「そうなのよん。さすが部っ長ちゃ～ん。先生も、何かそんな感じがするのよン」

そう言いながら、キラッと自信にみなぎった顔を見せる。

一体、その自信満々な笑顔は何に対する自信なのだろうか？

確かに、論理的には当たらずとも遠からずな気もするが、俺には間違いく今の方がエロい。

官能的です！

しかし、そう思っているのは俺だけらしい。隣の男子部員の宇摩（うま）も、名風琉（がぜる）も納得している。

それって、どう言うことなんだ？
幼い頃から色んな凸や凹を見ているから、麻痺していると言うことなのだろうか？
見慣れてしまうって見飽きてしまっているのだろうか？
だとすると、恐ろしいことだ。

俺がそう思っていると、塩南先生は、

「くぐっちゃん、そう言うことよねン」
そのままの格好で俺に同意を求めて来た。

そんな無防備な格好で急に振られても、

「は、はいっ！」
俺は慌てて肯定の言葉を返すしかない。

すると、部員のみんなが俺に注目だ。

大丈夫だ。
”俺の若さ”は外見には影響を出さない程度で保たれている。見られて問題なことは起こってはいない。見よ、これが俺の適応能力だ！

だが、そこでは無い部分で俺を緊張に追い込む事態が発生したのだ。

集まった俺への視線が尊敬の眼差しになっているのである。

尊敬って、こんなことでいいのか・・・何か心に痛いと言うか恥

ずかしい限りだ。
俺の世界では絶対に関心などされないぞ。それどころか、低俗扱いは必至だ。
でも、少し良い気持ちがする・・・。

俺が恐縮に縮こまっていると、いつの間にかパンツを上げた塩南先生が、

「来月にある今年度1回目の”へ高ＡＶ祭”の実行委員を決めますわよン」
と、話を次に移した。

視線を先生に戻すと、隣に立っている里緒と久ぶりに視線が合ってしまった。

彼女の何んとも言えない冷やかな視線に、俺の若さの象徴は縮みあがるのであった・・・。

＜つづく＞

第3希望はカーブもキレる（前書き）

工口（くぐち）に接触して来た、穴井狭子（あないきょうこ）と言うクラスメイト、彼女の目的は？

第3希望はカーブもキレる

里緒（千逗里緒（せんずりお））との距離が遠ざかるに連れて、偶然にも俺、（千乃工口（ちのくぐち））の人気は上がっていく。

アルパカ組では”天才現る”的に持てはやされ、柔軟体操部では尊敬の眼差しだ。

もちろん、このＡＶ界に来て俺の頭が急激に良くなった分けでもは無ければ、残念ながら人徳が高くなった訳でもない。

この世界の高校の学力が、ＡＶ撮影に力を注いでいる分だけ俺の世界よりも当然低いだけのことであり、それに、柔軟体操部で尊敬されているのも顧問の塩南（しおな）先生に俺の世界の情報を提供しただけのことである。

そのお陰で、不本意にも来月の”へ校ＡＶ祭”の実行委員にも選ばれてしまった。

だが、そんなことは大した問題ではない。

問題は俺の人気うんぬんよりも、里緒との距離が遠ざかって行っていることである。

偶然とは言え俺のこの”人気上昇現象”、里緒の眼にはどの様に映るのだろうか？

俺は誰よりも里緒一人からのスペシャル人気第一希望なのだ・・・。

しかし、もしそれが無理なら、この際、第3希望でもいいかナ・・・。

★☆　第　２４　話　★☆
☆★　第三希望は♂　☆★
★☆　♀カーブも　★☆
☆★　キ　レ　る　☆★

元女子高であった、この”へ高”だけなのだろうか？

このへ高の男子は揃いも揃って、みんな小さな虫も食べない草食系オタクである。
殆ど女子に話し掛けているのを見たことが無いのだ。

と言うことは、逆も真なりだ。恐らくこのＡＶ界の女子も男女間については消極的なのだと思う。

だが、それでも女子の方がまだマシである。男女間のことはお互い様なのかもしれないが、全ての校内活動は女子が男子をリードしているのである。
先程まで出席していた”へ高ＡＶ祭”の実行委員会も男子は俺を含めて3人だけである。

もちろん、柔軟体操部で俺と”へ高ＡＶ祭”の実行委員会に出席していたのも女子である。
２年ＡＶ科南組の”リンリン”こと林林（はやしりん）である。

彼女も消極的なのか、俺と殆ど会話をしてくれないのである。
会議中も俺の言葉には、俯いて頷く程度に返事をするのみである。

最初俺は嫌われているのかと思っていた。ところが、そうでないことが少し前に分ったのだ。

むしろ、俺の手応え的には少なくとも人間的な好意は持たれている様なのである。

決して買い被りではない。

なぜならば、委員会が終わり、柔軟体操部の部室である”第一スタジオ”に戻る途中で、辺りに誰もいなくなった瞬間に・・・。

「先輩って、他の男子とはちょっと違いますね・・・。頼もしいっていうか～、その～今度、今度エロについて、教えてもらえないでしょうか」

恥ずかしそうに、そう言って来たのである。

りんりんは赤毛の奇麗な小柄な女の子で、いつも里緒に出欠確認の報告をする子である。

部活では物凄く元気な子なのだ。

と言うことは明らかに人目を気にしている・・・。そうとしか思えないのである。

それに関連して、俺にはこのＡＶ界の高校生で気になることが一つある。

それは、”へ高”に限らず男女交際らしき姿を、一度も見たことがないのである。

と言うことは、どう言うことなのだ？

それは、男女交際を見られることが恥ずかしと言う感覚が異常に

強いと言うことではないのだろうか？

この惜しげもなく人前で色んなものを露出し、非常にアクティブに男女が絡む”ＡＶ撮影大会”と言う大会が存在するにも関らずである。

それって、不自然ではないだろうか？

俺にはこの感覚、大いに疑問である。

その為、俺の世界では消極的な部類であったこの俺が、このＡＶ界と言う世界では、相対的にエラく肉食動物になってしまっているのである。

平気で女子に話し掛けたり、目を合わせたりしているのは俺くらいのものである。

話すと言っても特にナンパ的な行動を取る訳では無い。校内生活上の必要な会話と、挨拶程度のコミュニケーションである。

それに、平気で目を合わせるは俺の習性だ。

その程度でさえも俺は良い意味で特異な目で見られ、俺の周りには人が集まって来るようになって来たのだ。主に男子だが・・・。

それも、偶然だと思うのだが、再び里緒と不仲になってからである。

りんりんが今、俺に言った”他の男子とは違っている”と言うのは恐らくそう言うことなのだと思う。

俺がりんりんに、

「もちろん」

そう一言応えると、りんりんは嬉しそうな顔を見せてくれた。

やっと、りんりんと親しくなれる。そう思ったところであったのだが、第一スタジオ二階の部室（屋根裏部屋を含めると3階まである）に着いてしまったのである。

誰も居なければ、まだ話が弾むところであるが、ぽつんと一人っきりで佇む人影が見えるのだ。

それは、柔軟体操部部長の千逗里緒である。

「お疲れ様・・・」

里緒はりんりんに向いそう声を掛ける。

もちろん俺とりんりんの二人に掛けた言葉だと思う。恐らくはだが。

むしろ彼女の意識は俺の方に向いている様に見えるのである。

それに、りんりんは里緒と俺を交互に目を配りを見せる。すると、

「委員会の報告は明日します」

そう言って、慌てて部室を出て行ってしまった。

ちょっと待って、二人にしないでくれ～！と言いたいところだが、口が裂けても言える訳が無い。

広い部室には、俺と里緒の二人になってしまったのだった。

気まずい雰囲気が流れる。

もしかすると、りんりんは既にこの雰囲気を感じ取り、耐えられなくなって慌てて帰ったのかもしれない。

りんりんでは無いが、俺も帰りたい雰囲気だ。
と、言うよりも今日は本当に俺も急いで学校を出なければならないのだ。
今日は役場に寄って俺の新しい住居の鍵をもらわなければならないのである。

これで、千逗家での里緒との同居生活も終止符を告げることになる。
複雑な気分だ・・・。

俺が静寂の中、思い切って、

「里緒・・・」
久しぶりに呼んだ呼び捨ての名前と、

「今日・・・」
言いにくそうに口に出した里緒の言葉が重なってしまった。

お互いに言葉を飲み込んでしい、緊張した時が流れる。
そんな一時の間を破ったのは里緒が先であった。

「・・・なに、・・・先に言って」
気まずい顔が、出鼻を挫かれた不機嫌さに変わって行き、その雰囲気がヒシヒシと俺に伝わってくる。
が、俺は思い切って切り出した。

「うん、今日は役場に寄るから、その～、先に帰って欲しいんだ・・・」
会話こそ単語で、二人の間には常に物理的に一定の距離があった

が、俺と里緒は毎日一緒に登下校をしていた。

「鍵・・・」

里緒の口元が微かに動いて、かすれた里緒の声が聞こえた気がするが、それは次の言葉で消されてしまった。

「言われなくたって帰るわよ。あんたを待ってたわけじゃ無いんだから、委員会が終わるのを待ってただけなんだから・・・部長として・・・」

「ごめん」

謝ることが適切かどうか俺には分らないが、俺を待っていたことに変わりはない。

役場が閉まるまで時間が無いので、そう一言いうと俺は急いで部室を飛び出した。

何かした分では無い。だが、何となく後味の悪さを感じてしまう。

俺が今、義務感の様に役場へ急いでいるせいなのか？

こんなに急ぐ必要があるのだろうか？

どうしても今日から一人暮らしをしなければならないのか？

そんな疑問もあるが、俺は千逗家の居候なのである。

家を出るだけの準備が出来れば、直ぐにでも千逗家を出る努力をするべきである。

でも、それは全て形式ばって考えてのものである。

必ずしも、里緒やご主人がそれを希望しているのかどうかは、正直なところ俺には分らない。

しかし、二人の本意は仮に言葉を耳にしたところで想像でしかないのだ。
正直な心かどうか、俺には分らないのである。
であれば、どちらにしても・・・これが常識なのだろう。
きっと・・・。

俺が”への路学園前”バス停に急ぐと、”第27部　そ地区羊役場”行きバスにぎりぎり間に合うことが出来た。
俺がバスに掛け込むと、その後にもう一人バスに掛け込んで来る気配を感じた。
若い女性であることは本能、いや鼻をくすぐった風で気がついた。
だが、以前の俺であれば直ぐに振り向くところだが、俺の中の女性の価値が低下しているのか、或いは里緒とのことがあったせいなのか、俺にも分らないのだが余り気にせず一番後ろ座席に着いた。
すると、その女性も俺の後ろを付いて来ていたのである。

「千乃くん、隣に座ってもいい？」
そう声を掛けて来た。

顔を上げた俺の前には、防虫剤の香りがしそうな位にまっさらで清楚な女性が立っていた。
もちろん実際の香りは防虫剤ではない。その反対だ。雄の成長を促す香りである。

彼女は同じアルパカ組の穴井狭子（あないきょうこ）である。

「えっ、あ、ああ」
否定の理由はない。

彼女は社会部部長であり、生徒会主催の”へ高ＡＶ祭実行委員会”の審査委員長でもある。
これは、先程まで彼女もＡＶ祭実行委員会に出席していたので分かった事実である。

俺の知っていた情報では、学業だけで言えば生徒会長の稲荷家一子（いなりやいちこ）と双璧であると言うことだけである。
もちろんＡＶ祭の個人成績を含めれば、里緒がトップである。

彼女は見た目も行動も絵に描いた様に真面目である。
”へ高”はブレザーの下は自由である。何を着てもいいことになっている。にも関わらず、彼女の服装はいつも少しの遊び心も無い、高校生の正装と言っても過言ではない服装なである。

因みに今日の服装は、今日一日着ていたとは思えない位に全く着崩れの無い制服に、中には純白で飾りの無い素朴な白のブラウスである。

もちろん、きっちりとしているのは制服だけではない。
ヘアースタイルにしても、一片のウェーブも無い胸までのさらさらヘアーのストレートであり、その毛色は自色なのであろう、美しい翠色（すいしょく）が、里緒とは異なった清楚さを見せている。

意図してはいないであろうが、黒ブチのメガネが頭脳明晰さを窺（うかが）わすアクセントになっている。
だが、近くで見ると何処となくエッチなアクセントにも見える。
これは俺の偏見かもしれないが・・・。

「珍しく、今日は一人なんだ・・・」
彼女はそう言ってきた。

彼女と話すのは初めてある。それにも関わらず、そう笑顔で話す表情には少し皮肉が見て取れた。
だが、この男女間に消極的なＡＶ界の高校生には珍しく、男の俺に対して感情を見せているのだ。

見た目とは、と言うより校内での態度とは全く異なっている。

今の俺にはこの”正直な気持ち?”が込められた皮肉が、返って心が休まる感じがした。
それは感情を素直に言葉にしない里緒への想いなのかもしれない。
しかし、

「一人って?」

俺にはこの”一人”と言う皮肉の意味が分からない。
すると彼女は、

「いつも、サポート役さんと一緒だから・・・」

言われて見て俺も気づいた。
そう言えば里緒と一緒なのは登下校の時だけでは無い。いつも一緒だった気がするのだ。
それは、会話の無い今でもそれは変わってはいない。

「ほら、学校では話がしにくいじゃない。里緒みたくサポート役って名目があれば話易いんだけど・・・それに里緒もいるし・・・。。

千乃くんが一人なのを見つけたから走って追いかけてきちゃった」

そう言って、穴井狭子は小悪魔的に舌をペロリと出した。

確かに男女間に消極的な学校内では周りの目があって、俺に話かけることは出来ないであろう。

この世界の高校生としては男女間に特異な俺でさえも里緒の目があり、中々雑談の領域には手が出しずらいのである。この部分は、彼女も同じだったようだ。

俺はこの後、異世界から来たことをバレない様にする為に必死であったが。意外性のある彼女と久しぶりに楽しい会話を続けた。

何か彼女と話していると、里緒と一緒でない今が気楽な状態に感じてくる。

里緒との距離が遠ざかるに連れて、俺の女子からの人気が反比例するのは偶然ではないのかもしれない・・・。そう思えてきた。

そんな中、俺は少しずつ彼女に惹かれていくのを感じながらも、彼女の意外な表情や行動に驚いていたのが顔に出ていたのだろうか、

「私のこと、イメージと違ってるって思ってるでしょ」

彼女がそう言ってきたのだ。

怒ってはいないとは思うのだがちょっとドキリとする。

正直そう思っているのだが、折角、里緒以外の女性と仲良くなれるチャンスだ。いや、今では目の前の彼女だけである。

俺としては彼女を喜ばせたい。肯定すべきか、それとも否定すべきか・・・。

「いや、そんなことは無いけど・・・」
咄嗟に、俺は肯定顔で否定していた。すると、
「違うって言ってもらった方が嬉しいなぁ～。ほら、私”校内ＡＶ委員会”の生徒代表だから、きちっとしてきゃならないでしょ。」
そう言う彼女は嬉しそうである。
どうやら、俺の回答は正解だったようだ。
彼女は不機嫌で言ったのではなく、意外性を強調したかったようだ。
それに、もしかすると”校内ＡＶ委員会の生徒代表”と言うことを俺に言いたかったのかもしれない。
確か、この委員会は、”ＡＶ撮影大会”の学校代表を決める教員と生徒からなる決定機関だった気がする。
その生徒側代表が、彼女と言うことになる。
と言うことは俺が予想するに、校内ランク1位の里緒と、生徒会長稲荷家一子、それに穴井狭子（あないきょうこ）の3人がこの学校の生徒の中心と言うことになる。
1．里緒、2．一子、3．狭子　の順だろうか・・・。そう思いながら、
「そうなんだ・・・」
俺は無愛想かもしれないが、生徒でも地位により見出しなみが違うと言うの初耳である。里緒はまだしも、稲荷家一子は論外の格好である。そんな応えしか出来なかった。

すると彼女は、

「そうなんだって、おかしい～。千乃くんの住んでいた地区だって、ＡＶ委員会の生徒代表って、きちっとしてたでしょ？」

そうなのか？

何か、話し方まで変わってきたが・・・。

「も、もちろん」

俺は一応合わせることにした。それしかない。

しかし、身だしなみまでが必要と言うことは、１．狭子、２．里緒、３．一子　の順だろうか・・・。

だが、順番どうのを考えているべきではなかった。

「へ～、千乃くんって、やっぱりどこか違う匂いがする～。どこか別世界から来た見たいよね」

狭子はそんな事を言ってくるのだ。

「えっ？どうして」

何かおかしなこと言っただろうか？

それに、彼女は、

「そんな分けないじゃん。格好は私の趣味に決まってるっ！」

そんなことを言う。

こいつ、俺の何かを知っているのか？

拙かっただろうか？

もしかして、魔女かもしれない・・・なんて。少し俺も構えてしまう。

でも、何か引き付けられてしまう。本当に魔法にでも掛かってしまった様な気分である。
俺はこの異世界に魔法や、超能力系統が存在するのかどうかをまだ認識していないのだ。
まあ、無いだろうが・・・。

本当は俺としてみれば、異世界から来た事を話してもいいのだが、何上、あの人の良い校長と約束したのである。きっと話すことは拙いのだと思う。

良い人を裏切る訳にはいかない。それが俺の信条だ・・・。
であれば、

「俺の趣味と一緒で良かった～」

こういう時は話はチャラく逃げ切るしかない・・・。

「うまいな～。千乃くん。
流石、突然現れた天才な～んだ」

何か意味深である。
俺のこと本当に何か知っているのだろうか？
いや、知らないだろう。
俺は決して天才ではない。ただの受験生だ。数日前までだが・・・。

そう思って、彼女の次の言葉に構えていると、彼女は話を変えてきた。

「それより、千乃くん、家こっちだった？
って、違うわよね。いつも里緒と一緒だものね。
もしかして、一緒に住んでるとか・・・？」

攻める方向を変えて来たのか？

俺としては問題ない質問だ。ただ、それは俺だけの問題であれば、である。
それは里緒の問題にもなるのだ。

里緒とはたった数日同じ屋根の下に住んだからと言って、やましいことは何もない。
期待はしていたが・・・幸か不幸かそれも叶わなかった・・・。

それに、何故里緒と一緒に済むことになったかを説明させられると、異世界から来たことに辿り着いてしま・・・んっ、待てよ？
そう言うことなのか？

遠くから大きく曲げて探りに来たと言うのか？

念の為、これも回避するしかない。
俺は初めに聞かれた家の方向にのみ間接的に応えることにした。

「これから、役場なんだ」

俺は彼女の次の言葉に神経を集中している。
何に対してもモザイクを掛けてやる。そんな気分を楽しんでいる自分がいる。
しかし、彼女は質問に対して肯定も否定もしなかったことに何も追求はしてこなかった。

「役場に私の姉が働いてるのよ」
彼女も間接表現をしてくる。

それに俺は動揺してしまった。
まさか・・・。いや、住民課の彼女もプロである。個人情報を家族にだって言うはずがない。
また、ひっかけだろうか・・・。

そう思っていると、彼女の降りるバス停まで来たらしい。

「いっ、行けない。降りま～す。じゃあ、また明日ね
　ああ、そうそう今度私にも”エロ”を教えてねー」
彼女はそう言って慌ててバスを降りて行った。

エロを？
エロが一人歩きしている。
既にそんなに有名になってしまったのかこの言葉？

しかし、俺の動揺はバレただろうか？
明日、何か仕掛けて来るのだろうか？
そんな不安もあるが、それ程嫌悪感を感じなかった。

彼女は、魔女なのだろうか？

いや、秘密を持っていることに俺の方が踊っているだけなのかもしれない。
正体を隠しているヒーローの様に・・・。
嫌悪感も感じないのはそのせいなのかもしれない。

まさか、彼女がそんな俺の感情まで計算して、話しているとは思えない。
だが、少し注意することにしよう。人の良い校長の為に・・・。

それにしても、本当に彼女の姉が役場にいるのだろうか？
確か住民課の彼女も同じクロブチのメガネを掛けていた。
しかし、顔が似ているならともかく、メガネが似ていて姉妹と言う法則は普通に世界では成り立たないだろう。普通かどうかは分らない世界だが・・・。

この後、俺は役場に行き家号と俳優名の登録をし、持って行った写真で身分証明書を作ってもらった。
そして、アパートの鍵を受け取った。
これで、異世界からの移転手続きは全て完了だ。

因みに住民課の窓口の彼女に妹がいるかと聞くと、ニタニタして肩を小突かれた。
「いないわよ～」そう言う回答だった。

そうだろう。幾ら何でも出来すぎである。
違う役場って言うこともあるし、俺が遊ばれたのかもしれない。

どっちにしても、もう考えるのは止めにしよう。考えても何も変わりはしないのである。
既に俺が知らないだけで回答は決まっているのだから・・・。

それよりも、俺はこれから里緒と合わなければならないのだ。
そちらの方が頭が痛い・・・。

俺は頭の中を里緒への対応に変えて、重い足取りで千逗家に向っ

た。

こちらの回答はこれから出るのである・・・。

しかし、既にはっきりしていることがある。

これで里緒との同居も終わりと言うことである・・・。

＜つづく＞

一人で前夜祭（前書き）

千逗家を出た工口（くぐち）。

無事、”ＡＶ撮影大会”出場に漕ぎ着けることが出来るのであろうか！

☆今回は初めに登場人物の紹介をしております。本編は☆★マークに囲まれたサブタイトル名のところからです。★

一人で前夜祭

俺（千乃工口（ちのくぐち）１８歳　男性）が単身ＡＶ界に来て、７日が経過しようとしている。
この短い間に俺は様々な個性と出会い、そして、様々な心に触れることとなった。
ここで、今後の展開への対策として、主要な個性について一度整理したいと思う。

まずは、ずっとご無沙汰の・・・。
・ララカー・ミラミ・アポストロ　年齢：未確認だが１６～１８歳位。まず女性のはず。
強引に俺をＡＶ界にスカウトした張本人。

ＡＶ界ではラミア様と呼ばれている。（ただ、俺は”まほまほ”と呼んでいる）
ＡＶ界５人のスカウター様の１人で、神の使いとして相当高位な存在。
空を飛び、異世界間の移動が出来るという凄いところもあれば、ドジで舌っ足らずで相当頼りない。

・千逗里緒（せんずりお）年齢１８歳　女性。家号（かごう）：千逗豆
（※家号：ＡＶ界では、元々は一族の総称で現在では店名や俳優名に使われる）

俺がＡＶ界に来て初めて話をしたのが彼女。
俺と同じ”併性（へいせい）ヘノ路学園高等学校（へのじがくえんこうとうがっこう）”、通称”へ高”のＡＶ科３年アルパカ組。
柔軟体操部部長で校内生徒ランク１位（生徒は順位付けされてい

る）

利発で清楚な顔立ちのスレンダー系美人。身なりは飾り気がなく質素。

性格は生真面目。さらに頑固で意地っ張り。

現在は”Ｇ３食堂”を経営している元Ｇ３戦士の祖父と二人暮らし。

行方不明の両親もＧ３戦士であった。彼女の母”香出（かおで）”は俺の母”顔出（かおで）”と、字は違うが同じ名前。さらに、不思議にも共通点が幾つもある。

・塩南間子（しおなまこ）２７歳　女性。家号：魚民（ぎょみん）

現役バリバリのＧ２戦士でありながら、”へ高”の教員で２年目。

３年ＡＶ科”アルパカ組”の担任で柔軟体操部顧問。

昨年新人教員ながらも、部活ランク１位となった。

いつもふわふわとしており、マイペースを崩さない。よれよれの服装で身だしなみに問題があるが、本気を出すと心身共に光沢を増す。ここ一発に強いタイプ。

部活動には厳しいと言う噂があるが、俺はそんな所を見たことがない。

・宝家棒薔薇（たからいえばーばら）　２７歳　女性。家号：農耕家　愛称”オスカル”

現在活動はしていないがＧ３戦士で”へ高”の教員、５年目。

３年ＡＶ科”頂組（いただきぐみ）”担任。さらに、へ高最大７０名の部員を持つマッサージ部顧問。

昨年の部活ランク２位で、因みに一昨年は１位。

ファッションモデルの様なスタイルで、いつも黒のスーツに身を

包んでいるが、カラフルなオーラを撒き散らす。塩南先生とはＡＶ大学の同期生。

・太棒御先（たぼうみさき）　２７歳　女性。家号：家政業　愛称”先っちょ”
現在活動はしていないがＧ３戦士で”へ高”の教員。３年ＡＶ科”盛組（もりぐみ）”担任。
宝家先生と同じ教員５年目。昨年部活ランク３位の畳部顧問。

白い透きとおる様な肌で、メイド服やお姫様ドレスの派手な格好が好み。
小柄で供っぽい妙な言葉遣いをするが、何故か宝家先生に対してはめっぽう強い。
塩南先生、宝家先生とは、ＡＶ大学の同期生。

・一持握年齢（いちもつにぎる）３２～３３位だと思う。男性。
石焼芋屋をやりながらメジャーＡＶ男優を目指す苦労人。諦めが悪いだけかもしれない。
俺がこの世界に馴染めたのは彼のお陰。千逗里緒の母親”香出”の大ファンだった。
やたらと色々なことを知っている雑学王。

・稲荷家一子本名：珍宝一子（いなりやいちこ）。稲荷家は家号。女性。
年齢１７歳だが来週１８歳の誕生日を迎える。
”へ高”ＡＶ科３年頂組。”へ高”の生徒会長であり、マッサージ部部長。
校内生徒ランクは里緒に次ぐ２位。

上下とも露出の多い制服を好む派手好きの目立ちたがり屋。
気取った言葉使いをし、意地が悪いが、里緒は本当は真面目な性格だという。

母親同士の付き合いから里緒とは幼馴染。里緒に極度のライバル心を持っている。

・穴井狭子（あないきょうこ）　年齢１８歳　女性。家号：巫女宮（みこみや）”へ高”ＡＶ科３年アルパカ組。校内生徒ランクは３位。肩書きが多く、社会部部長　で”校内ＡＶ委員会の生徒代表”。さらに。生徒会主催の”へ高ＡＶ祭実行委員会”の審査委員長。生徒内では実質の一番の実力者かもしれない。

２面性も持っており、表の顔は清楚で頭脳明晰。非の打ち所がないタイプなのだが、裏の顔は・・・まだ俺も掴みきれていない。

その他

・校長　”併性へノ路学園高等学校（へいせいへのじがくえんこうとうがっこう）”、通称”へ高”の　校長代理。校長が存在しないので、校長代理の報酬のままで、実質校長の任にある。

背が低くてお人好しだが、実は行動派で校内の制度を次々と改革してきた。

５００万下戦士と、ＡＶ界で身分が低いので校長になれないでいる。

・林林年齢（はやしりん）１６歳　女性。へ高　ＡＶ科２年南組　愛称”リンリン”時期柔軟体操部エース候補。

・砂万名風琉（さばんながぜる）１年ＡＶ科　年齢１５歳　男性。柔軟体操部男子部員　筋金入りの草食系オタク。多分俺をを尊敬してくれていると思う。

・島宇摩（しまうま）１年普通科　年齢１６歳　男性。柔軟体操部男子部員　名

風琉よりもややましの草食系。彼も俺を尊敬してくれているはずだ。

・鉾田矛（ほこたほこ）1年AV科西組。年齢15歳　女性。柔軟体操部。体が弱く休みがち。

上記人物は押さえていてほしい・・・。

★☆　第　25　話　★☆
☆★　一人で♂　☆★
★☆　♀前夜祭　★☆

部屋の中央で仰向けになり、部屋の中を見渡す。
まだ馴染まない景色に俺は物足りなさを感じてしまう。

その広さの割には、生活物質が圧倒的に少ない。がらんどうな部屋である。

俺の心に空虚な空間が広がっているのはそのせいだろうか？
広さのせいなのか？

いや、それは大した問題ではない。

では、
生活感の無い匂いが俺に孤独感を伝えてくるのは・・・。
緩んでしまった緊張感が脱力感を与えるのは・・・。
何のせいだ？

自問するまでもない。本当は分っている。

部屋を埋める生活物資がない様に、俺の心を埋めるものが欠落し

ているのだ。

ＡＶ界に来てこの数日、俺は常に緊張していた。正直重く感じる時もあった。

だが、今、その緊張から開放されたことに喜びは無い。

今までその緊張感は俺の寂しさを埋めるべく、常にある程度興奮を味あわせてくれていたのである。

この俺に適度な興奮を味あわせてくれたものは・・・。

他でも無い。

”里緒の存在”である。

彼女を近くに感じない、意識しない。そんな生活がこんなに空虚であるのかと思い知らされてしまった。

きっと、見知らぬＡＶ界の生活に馴染めたのは、彼女在ってのものだったのかもしれない・・・。

正直そう思う。

俺が今居るのは”第２７部そ地区羊役場”の”住民課”が用意してくれた新居である。

役場から”へ高”方面に徒歩で１０分位のところである。

１ＬＤＫの間取りは、１２畳位のＬＤＫに、８畳程度の寝室である。

このアパートには、俺の世界のウイークリーマンションの様に簡単な家具は備え付けである。

特にＡＶ大会のビデオ鑑賞の設備は、里緒の部屋以上である。もしかすると、異世界からのスカウト仕様なのかもしれない。

４０インチのモニタにＪＲＡＶ放送受信チューナーはもちろん、立派な音響設備の他にも良く分らない機器が縦型ラックに並んでいる。それに、ＡＶビデオ観賞用のペアのソファーも里緒の部屋にあった物よりも豪華である。

もう一度、このソファーで里緒と並んでＡＶ大会のビデオを観たいのだが、それは恐らくもう無理であろう。

里緒は今ごろどうしているのだろうか？
明日の大会に向けて緊張しているのだろうか？

千逗家を出てしまった俺には知る由もない。

俺は千逗家を出て３回目の夜を迎えているのである。

千逗家を出たのは一昨日の夜であった・・・。

一昨日役場を出た俺は、千逗家に置きっ放しの荷物を取る為、そして、お世話になったお礼を告げる為に新居には直接向かわずに、千逗家に寄ったのである。

いや、そうではない。
一番の目的は新居に移ることを切っ掛けに、里緒と話すことであった。

俺はせめて里緒と一言話をしたい。
そう思い、里緒の家である”G3食堂”で待たさせてもらったのである。

しかし、その日の里緒はなかなか家には帰って来なかった。

俺はまだこの辺の地理に詳しくない為、新居にすんなりと辿りつく自信がない。その上、取り敢えず今夜と明日の朝使うもの位は買い揃えなければならないのである。時間に制約がある。

それでも、俺は帰って来ない里緒のことが心配になり、千逗家を出れなくなっていた。
里緒を探しに行こうかどうしようかと、時計ばかり眺めていた。

そんな時、ご主人が俺を気に掛けてくれた。

「工口(くぐち)君は里緒が母親に連れられて、初めてここに来た時の事を聞いているかい」
いきなり、そう語り掛けて来たのである。

「えっ、ええ、まあ」

その話であれば”酉センターモール”の買い物の帰りに聞いていたから凡そは知っている。
しかし、急に何を話し出すのだろう。正直そう思った。

「そうかい」
そう確認してからご主人は話してくれた。里緒の小さい頃の話を・・・。

「里緒は小さい頃から、家に来たお客さんが帰る時に、よく涙を流してたんだよ。
きっと、母親の香出(かおで)さんが出て行ったきり戻らなかったのと重なってしまうんだろうね。
工口(くぐち)君が、この家を出て行く時に涙を流しそうで。
きっと、恥ずかしくて戻って来れないんだろう」

ご主人の心配は家に帰って来ない事ではなかった。里緒の心の方の心配であった。

「里緒は中学に入った頃から、いつもお別れの時はいなくなるんだよ。
涙を見せないようにね。
工口君。今晩もう一晩泊ったらどうだい。そんなに急いで我が家を出ることもないだろう。
まあ、一人の方が落ち付くと言うこともあるから、無理は言えないんだが・・・」

そう、ご主人はもう一晩泊まることを進めたが、今の里緒との関係では正直それもしにくい。
それに、仮にご主人の想像通りだとしても、新居が決まった今ではこれ以上ご好意に甘える訳にはいかない。
理由が何にせよ里緒が故意に帰って来ないのであれば、今日は出るべきだ。
それが俺の結論であった。
俺はこれからも学校では毎日会えるのだ。

何も永久の別れではないのである。

しかし、それでも何か里緒とは、遠いお別れになった気になってしまう。

やはり俺に取っては里緒が断トツの一番なのかもしれない。

そう思いながら、俺はご主人に丁寧にお礼をすると、G3食堂の重い扉を内側から開けたのだった・・・。

そして、昨日からは学校で顔を合わせても、今までの様に一緒に行動することは全く無くなってしまった。もちろん単語だけの会話もである。

やはり、せめて里緒と一言会話を持ってから家お出るべきであっただろうか？

今更ながら後悔してしまう。

教室で思い切って話し掛けようともしたが、逃げられてしまう。

そして、部活では尚更であった。

里緒は次の大会に向けて、終始ピリピリとしているのである。話し掛けようと出来る状態ではないのである。

今回の”サラ18歳新人大会”という新人だけの大会での成績如何では、校内生徒ランク1位の座から大幅に落ちてしまい、さらにこの柔軟体操部自体の成績にも関ってしまうのだ。

柔軟体操部部長として、責任感の強い里緒自信として、そして、あの嫌味な女、生徒会長でありマッサージ部の部長である稲荷家一子（いなりやいちこ）の手前、失敗は許されないのである。

こんな中で、俺のことに気を使わす訳にはいかない。
ここで俺のすべきは、当面は里緒をそっとしておくことだろう。

そう思い、俺は敢えて自分から遠ざかる様にすることにした。

今日の練習は味気のない淡々したものであった。俺がそう感じただけかもしれないが・・・。

練習が終わると、里緒の壮行会となった。

相変わらず何が起こってもふわふわと、マイペースを崩さない塩南先生の隣には、緊張で強張った表情の里緒がいる。

塩南先生の話と、後輩からの激励の言葉が終わり、部員みんなでエールを贈った。
そして、最後に里緒の挨拶である。

「明日から、２７部の”第一回　サラ１８歳新人大会”が始まります。”お願いします”は明日の正午からです。前回は”相方”を見つけることが出来ず、ＡＶ撮影大会には・・・」

里緒の挨拶の言葉が少し震えている。
只でさえ男女に消極的なＡＶ界において、彼女は更に”あがり症”なのだ。
挨拶の段階でこれでは、とても心配だ。

その心配は、塩南先生も同じの様であった。里緒の後ろに回り両肩に手を当て、リラックスを促している。

俺はそんな彼女を見て、改めて今回の大会は自分のことよりも里緒にバックアップに回ろう。
そう決意した。

だが、それは後付けである。
と言うよりは、気持ちの出所は里緒に関り合いたい。それが本音である。

そんな気持ち前後関係はどうであれ、俺は陰から里緒を助けるんだ。
そう気持ち盛り上がっていた時であった。俺は里緒の挨拶の中の一言が俺に引っ掛かった。

「へ高の代表として、柔軟体操部の代表として精一杯の成績を残します。皆さんも・・・」

あれ？
俺は”へ高”の学校代表では無いのである。
高校生の場合は学校の推薦が必要なのだ。と言うことは、俺は大会に出場出来ないことになってしまう。

俺が出場するには、里緒に勝ってへ高ランク1位にならなければならないことになる。
俺がたった今決意した”里緒を応援する”どころか、その真逆ではないか！

俺は大会に出場しなければ、新しい住居を追い出されてしまうのだ。生活費も底を突いてしまう。

まずい！

塩南先生に聞かなければ、いや、直接校長（代理）にお願いした方が・・・。
そうだ、校長だ。俺に積極的に転入を進めたではないか！

里緒の挨拶の後に、塩南先生が付け加えた。

「取り敢えず大会の登録は昨日、先生が行ったから安心してねン。後は～、部長ちゃんが思いっきり弾けてくればいいのよン」

俺は、再び引っ掛かった。
”登録”って・・・。

登録ってなんだ？そんなものが必要なのか？
明日だぞ。まだ間に合うのか？
いや、その前に俺に出場の権利があるのか？

俺は役場で貰った、２冊の本”生活の心得”と”ＪＲＡＶ会大会規約”にまだ殆ど目を通していない。

拙いぞ、工口（くぐち）！
俺は不安からの緊張で腹の調子が悪くなって来た。

さらに拙いの上塗りだ！
早く確認がしたい。トイレにも行きたい。

みんなの気持ちが一つになっている最中に恐縮であったが、

「先生、すみません・・・」
俺は青い顔で、小声を出した。
すると、塩南先生は、

「あはっつ！うんこさんね。
ウフッ、いってらっしゃ～い。
ゆっくり、お茶でもして来ていいわよン」

物わかりが良過ぎだ。

何故だ、何故トイレと分るんだ？
それも大きい方だと・・・。

それに、お茶とは何だ？
それよりも、そんな嬉しそうに言わなくてもいいじゃないか。
緊張に包まれた場が一気に、笑いと和みに変わってゆく・・・。

しかし、俺にはそれに構っている余裕がない。
俺は括約筋を目一杯活躍させて、極力平然とした歩行でトイレに向った。

こんな俺を里緒は軽蔑しているだろうか。そんなことを思いながら・・・。

便座に着いた俺のお通じは快調に流れていく。
一気に流れ出た。

よし、用を足せば、次の用だ。
俺は塩南先生のお言葉に甘えてそのまま校長室に向った。
校長（こうちょう）は待（だいり）ってましたとばかりに、自ら俺にお茶を入れてくれた。
既に、準備をしていたとしか思えない・・・。

塩南先生といい、校長といい、一体この人達は俺の心を読めるのだろうか？
そう思っていると、
「昨日来られなかったので、そろそろ来る頃かと思っていましたヨ」
腰の低い校長は、そう言いながら応接用のテーブルにお茶を置き、俺に座る様に進めた。
歓迎してくれるのは嬉しいが、俺はそれどころではない。
俺の生活と、何が出来るか分からないが里緒への支援がかかっているのだ。
「校長先生、僕は大会には出れないのですか」
俺は長椅子に座ると直ぐに切り出した。少し声を張り上げてしまった。
が、それにも校長は温和に笑顔を見せると、詳しく説明をしてくれた。
このＡＶ撮影大会の全ての大会は、１８歳以上でなければ出場出来ないことになっている。
ただ、１８歳には高校生が含まれる。
高校には１８歳未満の生徒が殆どであることと、大会の質を下げない為と言う理由で、教育委員会では各校で出場出来るのは基本枠は１名としている。
それも、学校が責任を持って推薦をすると言うことになっているのである。
だが、例外として地区推薦、特別団体推薦、スカウトはそれに含

まれないとのことである。
俺は場合は、この”スカウト”に該当する。
ただ例外であっても、そのクラスは”新人”且つ”１００万下”と言う最下層の扱いである。その為、出場出来るのは、新人戦か、１００万下または、無差別オープン大会に限られてしまう。
その他注意として、校長からは学校代表以外で出場していることが生徒に分ってしまうことは、生徒達に大きな影響を与えてしまう。更に、スカウトであることがバレてしまうと大変な騒ぎになってしまう。
その理由で、俺には名前と姿が分からない様に変装して欲しいとの要望があった。
強勢は出来ないが。とのことである。
俺はそれを承諾した。
説明が終わると。時計を眺めた校長が、
「後、締め切りまで３０分ですから、今直ぐ登録してしまいましょう」
落ち付いて、そう言う。
「ホントですか！」
それなら、それと先に言って欲しいものだ。お腹の調子が悪くならなければ、危く遅れるところであった。
大会の登録は役場の住民課からもらったスマートフォンの様な装置。名前が分かったのだが、単に”ＡＶ用子機”と言うらしい。これでナビに従って登録するだけであった。

そして、晴れて俺は初のＡＶ撮影大会の出場権利を得たのである。
昨日はドタバタであったが、そんなこんなで大会の相方探し”お願いします”の前日、土曜日になった。

ＡＶ界では、土曜日はＡＶ課のみが登校することになっている。
ＡＶに特化した授業のみがあるからだ。
しかし、一般課が休みなので部活動は無いのである。

授業が終わって部室を覗くと、一人緊張している里緒がいた。
俺は部室には入らず、里緒を一人にして置くことにした。

俺は縁の下の力持ちで良いのだ。それに徹しよう。そう言い聞かせた。

そして、今新居に帰って部屋の中央で仰向けになり、ここ数日を回想しているのである。
回想することで心を落ち着いて来た。

そこで、取り敢えず同じ失敗をしない様に”ＪＲＡＶ会大会規約”を読むとことにした。

そして、読み進めていくと衝撃の事実が記述されていた。
いや正直安心したと言うか、薄うすはビデオの内容から気付いていたが・・・。

”Ｈ（本番）と、射精は御法度”なのである。

演技とはいえ、里緒が他の男とＨをするのは許せない。

せめて最初は俺でありたい。
（そう思ってどこが悪い・・・。）

それはそれとして、更に重大な一文に廻り合ったのだ。

御法度を犯すと当然罪になる。それが相当に重いらしいのだ。

これは大変である！

里緒のサポートが一番だが、里緒が早々に相方を見つけた場合、俺も”相方”を見つけることになるかもしれないのだ。
そうなると、待ちに待った、いや待望のどっちも一緒だ。とにかく全裸での絡みの撮影なのだ！

俺はＡＶ界で育ってはいない。それに、残念ながら今までの人生で、そんな男女の絡みに恵まれてはいない。

慣れていない。

はっきり言って初めてなのだ。

誤射してしまう可能性がある。

拙いぞ！
自分の身の安全を考えなければならない！

その為には過剰なエロルギーを放出しなければ、お縄になってしまう。

危険だ・・・。

相当危険な大会だ！！

この対策で思いつくのは一つである。
もちろん俺はその対策の為、思う存分前夜祭を行った。

流石にここで、里緒をおかずにするのは人間的に問題がある。
ここは、財布に優しい無料チャンネルで昔のＧ１大会を観ることだ。

今の俺にはこの体操チックな絡みでも、裸体であるだけで充分である。

やはり、一人暮らしで良かったのかもしれない・・・。

＜つづく＞

一人で前夜祭（後書き）

長くなってしまいました。
次回はもう少し短く切りたいと思います。
また、読んで頂けると嬉しく思います。

ＡＶ界での俺は”なに”者？（前書き）

いよいよ、工口（くぐち）は初のＡＶ撮影大会出場の日を向えた。
初日は相方探しの”お願いします”である。

ＡＶ界での俺は”なに”者？

俺、千乃工口（ちのくぐち）がやって来たこのＡＶ界という世界は、全部で４８ある”部”と言う地域で構成されている。

さらに、この”部”と呼ばれる一つの地域には、複数の”地区”が存在している。

例えば、俺の居る２７部は”あ地区”から”と地区”までの２０の地区がある。５０音順である。

解り易く言うと、”ＡＶ界”が”国”に相当し、”部”が”県”、”地区”が”市町村”の様なものである。

そして、各地区には干支の名前が付けられた街があり、その街の一つ一つはに基本的に１つの役場が設置されている。

毎週開催されている”ＡＶ撮影大会”は、この”部”と言う単位が基本単位となって開催されており、今回開かれる新人大会は第２７部の単独大会である。

因みに先週のオープン大会は１～４８部の全部合同の開催であった。

と、言うことはだ。

今回の大会は、前回俺が驚いたイナゴの大群の様な大騒ぎの大会にはならない筈である。

恐らく、俺は里緒のことを簡単に見付けられることだろう。

しかし、簡単に見つけたからと言っても、俺が里緒に対して何の

支援が出来るかは全くのノープランなのだ。もしかすると、指を加えて見ているだけになるのかもしれない。

だが、俺の決意に変わりはない。

俺は里緒の為に全力をそそごうと決めたのだ。少しでも手助けが出来て、彼女が無事相方を見付けることが出来ればそれでいいのだ。

ただ問題は俺が手助けをしていることが分ると、あの里緒の性格である。返って拒絶するであろうことは容易に想像がついてしまう。俺の存在は、里緒には気付かれない様にしなければならないのである。

更にだ。

校長からも言われた通り、俺が”へ高”の生徒であることは、誰にも知られない様にしなければならないのである。

よって、俺は誰からも正体を知られていない”謎の人物”でなければならないことになる。

そこで取り敢えず俺は変装をすることに決めた。

頭には昨日買ったアルペンハットを被り、顔には白い風邪ひきさん用のマスクをすることにした。

これで里緒だって、簡単には俺のことに気づかないであろう。

おそらくは・・・。

しかし、この怪しい姿では俺に近寄る女性等、一人もいないのではないだろうか？

拙いだろうか？

いや、そんな事はどうでも良いのだ。今回の俺の目的は里緒の応

援であるのだから・・・。

俺のこの気持ち、かなりマジである・・・。

★☆　第　２６　話　★☆
☆★　ＡＶ界での　☆★
★☆　♀　俺　は　♂　★☆
☆★　”なに”者？　☆★

そして、日曜日がやって来た。
今朝はちょと肌寒いが天候は見渡す限り雲一つ無い快晴である。
心身ともに引き締まる思いだ。
だが、今日の俺の臀部にある口は締ってはいない。緩い・・・。

俺に襲った緊張は、例の如く腸内速度を活発にし、今日も朝から３度もトイレのお世話になってしまった。

しかし、それも3度で打ち止めである。
出るところまで出してしまえばもう安心！
これは俺の１８年の経験値からである。

それでも、取り敢えず念の為にお腹だけは冷やさない様にするとしよう。
今日は野外活動が多いのだ。更に大切な日なのである。
粗相が有っては絶対にならないのだ・・・。

俺はお腹に細心の注意を払って家を出たのであった・・・。

と言うことで、もちろん今日は、”第２７部　第一回　サラ１８歳新人大会”の初日である。

今日のＡＶ撮影の相方探し”お願いします”で、見事に相方を見つけることが出来れば、晴れて明日のＡＶ撮影大会に進める分けである。

俺は何としてでも里緒を本戦である明日のＡＶ撮影大会に進ませなければならない。

間もなく午前１１時である。俺は既に集合場所に来ている。

昨日、大会の参加登録直後に、ＡＶ用子機にて集合の時間と場所のメッセージが届けられた。その時間である。

しかし、そのメッセージでは本番の”お願いします”が始まるのは、１２時からと言うことであった。

本番までには大分時間がある。

これから何らかの説明、もしくはセレモニー等があるはずである。

通常は面倒な事は苦手なのだが、今回は別である。

俺としても、何らかの説明があってもらわなければ困るのである。

この大会、全く勝手が分らない上に、”御法度”を犯せば重大な罪となると言うことが昨日分ったのだ。

それに、昨日読んだ大会規約には各大会の詳細については何ら書かれてはいなかったのである。

情報は一つでも多く知りたいところである。

俺は些細なことも聞き逃さない様にと、会場に来てから常に集中を続けていた。

その説明を”２７部そ地区羊役場”で待っているのは、もちろん俺だけではない。他にもいる。

ただ、その人数が余りにも少ないのである。俺を含め8人の女性と6人の男性が集まっているだけである。その中に知っている顔はいない。

と言うことは唯一大会参加で知っている里緒の姿が無いことになる。

一体どういうことなのだろうか？

確か塩南先生は２００～３００人程度の人が参加すると言っていたはずなのだが・・・。

変装しているとはいえ目立てない俺は、この状況に不安を抱きながらもキョロキョロと少し離れた太い柱の影から辺りの様子を眺めていた。

もちろん、不安でこれ以上お腹を壊さないようにと、左手で常にお腹を温めるのは忘れてはいない。

すると、そんな俺の名前を後ろから小声で呼ぶ者がいる。

変装している俺に何故気付くんだろうか？

「千～乃さん、不安そうな顔して・・・。もう、頑張って下さ～いよー。”そ地区羊役場”全員が応援してますですよ～」

振り向くと、黒ブチメガネが会う度に卑猥度を増していくこの役場の住民課窓口の女性が、俺と同じ様に腰を屈めて立っている。

「や～っぱり、変装してきたんですね」

彼女は成る程と言う顔をしている。

「何で、分ったんですか？」
俺が少し驚いて聞くと、当然とばかりに胸を張って即答した。
「そ～れ・は、役場には大会課があって、ＪＲＡＶ会主催のＡＶ大会の運営の仕事もあるんですよ。
今回の大会でこの２７地区羊役場に集合するのは１４人なのよ。ほら、千乃さんを入れて全員が集まってるでしょ。
当然役場としては全員の名前を知っていますから～、・・・ねっ、他の１３人に千乃さんらしき人はいないでしょ」
そう言うことであった。
さらに何故、この役場に１４人だけが集合しているのかを教えてくれた。
ＡＶ撮影の”相方”は、抽選的な偶然性と本人の意志の半々で組める様にと、”お願いします”と言う大会を撮影大会の前日に設けているとのことである。
これは誰にでもチャンスがあり、且つ、努力が必要にする為のものらしいのだ。
つまり、この時期の新人戦は人数が少ないので、示し合わせて組めない様にと、”２７部そ地区”にある１２の役場に参加者を分けているとのことである。
里緒が此処にいないのはそのせいなのである。
会場も少人数の為、先週大会が行われた空まで続く白い塔”ミンジュ塔”から始まる幅が１００ｍ程もある大通りではなく、千々怜（ちぢ）木公園（れぎこうえん）で行うと言うことである。

彼女の話では、千々怜木公園（ちぢれぎこうえん）は少人数の大会の”お願いします”には適した場所だと言うのである。

彼女は、さらに小声で続ける。

「それはそうと、その変てこな格好はちょっといただけないで～すよ～。

それって、へ高の生徒達に正体がバレないようにって校長先生からの指示なんでしょ～」

彼女は勘がいい。その勘が更に俺の変装の粗を見つけ出したようだ。

「もう、学校もちゃんと変装まで手伝わないとねン。そんなセンスじゃあ、女の子が寄ってこないんだから～・・・」

やはり、思った通り俺の変装には問題があるようだ。

しかし、今回の目的は里緒への応援である。格好何てどうでもよいのだ。

とは言っても、せっかく応援してくれている彼女にそんなことは言えない。

それに、この世界のファッション感覚は彼女の方が圧倒的に解っている。不自然の無い格好にこしたことはない。

「そうですか？」

彼女は俺の返事に頷くと、俺のマスクを外してくれ、自分の掛けているメガネを俺に掛けた。

度が全く入っていない。彼女のメガネは実用目的ではないらしい。

「う～ん？
以外と似合ってるわね。そうね～後は・・・」

そう言い、手にもっている二つの紙袋の一方からカツラとマフラーを取り出した。
「これで、髪の毛と顎（あご）の骨格を隠すの、ね」

「帽子じゃ、駄目ですか？」
一応おれも髪の毛を隠す為に帽子を被って来たのである。

「もちろんよ！モミアゲからウナジまで隠さないと。はい、いいから付けて見て」

そう、断りずらい笑みを浮かべて言ってくると、彼女はさっさと俺の帽子を取り、俺の頭にカツラを被せた。
耳が隠れる程度の茶髪で、大き目のウェーブのかかったものである。
そして、顎の線が隠れる様に薄手のマフラーを俺の首に巻きつける。

鏡がないので自分の姿が良く分らないが、気恥ずかしい感じが湧いて来る。
それに、彼女が、

「ん～まあまあね。」
及第点を俺にくれた。それ程不自然では無いようだ。

しかし、ここまでの変装が必要なのだろうか？
不思議である。
それに、それよりも不思議なのは明らかに前もって準備して来て

いることである。

俺はそれを聞いてみようとしたが、

「後ね、これが撮影大会の時用の変装」

そう言って、二つ持っていた紙袋の内、カツラとマフラーを取り出した袋とは別の袋を俺に渡して来た。そして、

「じゃあ、頑張ってね。明日絶対にビデオ観ますから・・・」

そう、小声で言うと手を振って急いで帰って行った。

「あ、ありがとうございます」

質問をする間が無く、俺は咄嗟にお礼を口にしていた。

そう言えば、今日の彼女は私服である。

今日は日曜日だから、役場では大会課以外の課は休みのはずである。

彼女は大会課ではなく住民課なのだ。

と言うことは、わざわざ俺の変装チェックの為にワザワザこんな準備までして休みに来てくれたことになる。

相方になれば別だが、見ず知らずの人が一々俺を覚えているのだろうか？

大げさ過ぎる気もする。

個人の判断であろうか？

それはないだろう。意味がない。

と言うことは、そこまでしても俺の素性がバレない様にしなければならないと言うのが、住民課としての判断と言うことになる。

俺はヘ高の生徒のみばかりではなく、役場にチェックされる程に住民の混乱を招く可能性がある存在と言うことになる。

それって・・・、ホントなのか？

そうなると、俺はもっと危険人物としての自覚が必要と言うことになるのだが・・・。

一体、俺はこのＡＶ界で何者なのだ？

何の危険性があると言うのだろうか？？

何か変な方に動いて来た気がする・・・。

そんなことを考えている内に、今回の大会”第２７部　第一回サラ１８歳新人大会”の説明が始まった。

＜つづく＞

ＡＶ界での俺は〝なに〟者？（後書き）

次第に、ＡＶ界と言う世界が何故生まれたかと言うことに迫って行きます。

たまたま方式（前書き）

いよいよ、ＡＶ撮影大会の”相方”を決める”お願いします”が始まろうとそている。

たまたま方式

つ、ついに俺、千乃工口（ちのくぐち）はＡＶ撮影大会に出場することになった。

と、言ってもいきなりビデオ撮影に取り掛かれる訳では無い。

自慰行為でのビデオ投稿が不可であるこの大会、要するに男女の絡みを演じることが必須であるこの大会では、まずは自分と絡みを演じてくれる相手を探さなければならないのである。

因みにＡＶ界ではこの相手のことを”相方”と呼んでいる。

この相方であるが、１８歳以上で大会に登録していれば誰でも良い訳ではないのである。

一つだけ決まりがあるのだ。

俺の場合、１８年間出し惜しみこそしているが、尿意棒（にょーいぼう）を一本保持している。

これが理由となり、”相方”と言うのはこれを保持していない者と言うことになるのだ。

と、言うことはどう言うことなのか？

それは、俺とスッポンポンで絡むことを是とする女性を探せと言うことになるのである。

無茶な話しである。

そんな奇特なお方がそう簡単に探せるのならば苦労はしない。俺の人生には既にピンクの薔薇が咲き誇っているはずである。

しかしだ、こんな冴えない男たちも救済してくれるのがこのＡＶ

界と言う処である。

”相方”を勝手に探せと言うコクな事を言ったりはしないのである。

ちゃんとこの相方を見付ける為の大会が”撮影大会”の前日に用意されているのである。

因みにこの大会のことをＡＶ撮影大会をを主催運営している公営団体”ＪＲＡＶ会”では”お願いします”と命名している。

この”お願いします”は、お見合いの様にちょっとだけ堅苦しい。大まかではあるが、相方への申し込みには決まった形式が存在するのである。

まず、気に入った相方の前に行き右手を差し出し、上の頭を下げながら適当な能書きを垂れた後に、こう言うのだ。

「・・・（能書きタレ）・・・自分と組んで下さい。お願いします」

そして、申し込み側は相手の意思を待つ・・・しばし。

その申し出に対し申し込まれた側は、その場で結論を出さなければならない。

そして、結論が”申し出を受け入れる”場合は、

「・・・よろしくお願いします」

と言い、右手を握るのである。

残念ながら”その申し出を断る”結論に達した場合は、

「・・・ごめんなさい」
と言い、敬意を払って頭を下げるのである。
これで後腐れ無しだ。

ただ、この”お願いします”と言う相方探しの大会、最後の決め文句は共通であるのだが、探すまでのルールに関してはその大会毎に結構異なっているらしいのだ。

今回の”第２７部　第一回　サラ１８歳新人大会”の”お願いします”は一体どんな方式になるのだろうか。

実は今回の”お願いします”であるが、俺はこの方式の下で、自分の事ではないある特定人物の目的を達成しなければならないのである。

それは、この世界に来て何かと縁のある千逗里緒（せんずりお）の相方探しを成就させることである。

別に彼女に頼まれた訳では無い。
俺の心が勝手にそうさせようとするのである。

俺は自分の心に忠実に従おうと決めた。だから、誰がなんと言おうと（誰も何も言ってないが）俺は里緒の相方を探してみせてやる。

それには、まずは里緒の姿を見つけ接近しなければと思うのだが、この方式の下、里緒を見付けることが出来るのだろうか・・・。

★☆　第　２７　話　★☆
☆★　　たまたま　　☆★

★☆　♂　方式　♀　★☆

雲の上まで続くミンジュ塔。

その南側には、どこまでも地平線に向かって真っ直ぐに伸びる大通りが走り、そしてその反対、北側には千々木公園（ちぢぎこうえん）が深緑を彩っている。

この公園、広さは東西に約1キロメートル。南北には５００メートルと約５０ヘクタールにも及ぶ。

緑溢れる園内は起伏に富んでおり、谷間には小川も流れている。

この一見自然を利用して作られた様に見える公園が、何と砂地を改良して造られたものであるのだから驚きである。

今、俺はこの公園の南側を東西に沿って走る通りの東よりの一角で、その時を待っている。

右手にはこの公園の地図を、左手には”７番”と書かれた白い小さな玉を柔らかに握り絞めている。

もちろん待っているのは、他でもない”お願いします”の始まる時間、”正午”である。

そして、両手に持つ球と地図であるが、これは一時間近く前に集まった”２７部そ地区羊役場”で、大会の説明後に貰ったものであり、特にこの俺が回春マッサージのエステシャンの様に柔らかに握っている玉は、逆に若干ではあるが俺の明日を握っている。

いや、里緒の明日を握っているはずである。

そう、俺はほんの少し前まで、その役場で真剣にこの大会の説明を拝聴していたのである・・・。

説明は顎鬚（あごひげ）に疎らに白さが見られる”羊役場長”の大会宣言の後に続いて、役場内にあるＪＲＡＶ会の大会課から行われた。
初めは”新人大会の歴史について”である。

他の出場者達には周知の事かもしれないのだが、俺には興味深い話であった。

大会課の中年女性の話では、この”サラ１８歳新人大会”とは、今でこそ高校生以外も出場対象であるのだが、元々は１８歳になり”ＡＶ撮影大会”の出場権利を法律上得た高校生の為に始められた大会なのだそうである。

当初は一般社会人と高校生の間には演技レベルにかなりの開きがあり、“お願いします”で相方を見つけることはとても難しく、仮に相方を見つけることが出来たとしても、畏縮した未成年には撮影大会において十分な力をはっきすることが出来なかったそうなのである。

そこで、それを問題視したＪＲＡＶ会では、ＡＶ界の将来を担う若者を育てる為にと、とある高校の校長が提唱した、在学中の者だけの大会”新人戦”案を採用したのだそうである。

つまり、新人戦とは同じ１８歳でも新年度が始める当年９月１日から、翌年８月までに１８歳になった高校３年生のみの大会であり、９月生まれはフルに１年間の対象期間があるが、８月生まれの生徒はほぼ対象外と言うことになる。
要するに１８歳を迎えた高校３年生限定のジュニア大会と言ったものなのである。

しかし、この大会を採用した当初は１８歳高校生であれば誰でも出場出来る様にした為、余りにも演技レベルが低くアクセス数の伸び悩みが続いたのだそうである。
そして、ついには大会の存在意義すらが問題視されるようになったのである。

そこで、教育委員会とＪＲＡＶ会では校内の部活動を中心に”校内ＡＶ大会”を開くことを取り決め、この新人戦は、そこでの優秀な成績の生徒が出場できる大会へと変更したのである。
更に高等専門学校の代表や、各地区や特別団体の推薦者にも参加資格を与え、今の形が出来上がったとのことである。

そのお陰でレベルも年々向上していき、二十二年前からは、新人大会以外でも里緒の様に自分のクラスに合わせた大会に出場することが可能になったとの話である。

俺はこのエッチな大会にも・・・。いや、語弊がある。この世界の由緒あるＡＶ撮影大会について、改めて重みを実感してしまい、俺は自分が引き締まっていくのを感じた。
何か不思議にも子供の頃から俺はこの大会を目指していた様な気分になって来ていた。

さらに大会課の中年女性は”大会名”の由来について説明を始めた。

この話の中で俺をドキリとさせたのは、この大会名についている”サラ”と言う言葉である。

この”サラ”と言う言葉、俺の世界で言えば”サラ３歳”と言え

ば、競馬で”サラブレッドの3歳馬”と言う意味であるが（競馬好きの叔父に聞いた話である）、この世界では人間の大会である。
”サラ”の意味はサラブレッドではないのは当然である。

この大会名に付く”サラ”とは、”まっさら”の”サラ”と言う意味らしいのだ。

では、”まっさら”とはどう言うことか？
と言うと、はっきり言うと純潔を意味するのであるらしい。

俺はこの大会の出場に当たって、誰からも、その～何と言うか、つまり、童貞であるかの確認を受けていない。
と言うことは、何というか、見るからに俺が童貞にしか見えないと言うことになるのだが、ん～何と表現したらいいのだろうかこの気持ち・・・。

確かにそれは事実ではあるが・・・。

どうしてそう思われたのだろうか？
俺は見るからにHとは無縁にみえるのだろうか？

そう複雑な気持ちで続きを聞いていると、それは昔のことで、今は名前だけが残っていると言うことらしいのだ。

それを聞いて、俺は少しホッとしたのだった。
んっ、・・・ホッと？

いや、待て。ホッとする必要はない。
何も、誰に恥じることでは無いではないか。だから、堂々としていれば良いのだ・・・。

それはそうと、何故そうなったかと言うと、その理由が俺を更に安心させた。

安心する必要は全くないのだが・・・。

今のＡＶ界の高校生の殆どが聞くまでもなくＨ未経験が当然らしいのだ。要は童貞と処女である。

これには、俺は驚いた！

何故だろうか？

物心が付いた時から、スッポンポンの男女の絡みを見ているこのＡＶ界にあって、各自の暴れん坊達を大人しくさせておく事が可能なのだろうか？

それに、高校ではＡＶ撮影の為の部活ばかりが平然と存在するのにである。

みんなはそんなに聞き分けの良い物をお持ちなのだろうか？

俺の殿（との）は、元来そんなに上品でないぞ。今のところ上品に甘んじてはいるが、だが野望は常に持っている・・・。

しかし、今のこのＡＶ界ではそれが当たり前であるようだ。

と言う事は、俺の居た世界とは違ってＨ経験による優越な態度を取る者や、Ｈ未経験による悲観する者はいないのかもしれない。

初体験がいつか？何て質問をするような者もいないのであれば、焦る気持ちになる必要も全く無い。

と、すると今の俺向きの良い世界なのだが・・・この世界、Ｈ自体に対する感覚が違うのだろうか？

まさか煩悩とHが全く繋がっていないなんてことはないだろう。
そうすると、この世界で俺だけがサル並みと言う事になってしまうのだが・・・。

俺はサルに近いのか？

いや、俺の世界で俺は多分ノーマルな高校生だと思う。思いたい・・・。
だとすると、俺の世界よりもＡＶ界の方が文化的に進んでいると言うことになるのだろうか？

これが本来の文明社会の姿なのかもしれない。
俺をそんな気持ちにさせていく・・・。

俺の世界も書物の性的表現の規制を厳しくするよりは、どうせ行うならばＨ経験を当たり前とする下世話な雑誌類に対して規制する方が正しいのではないのだろうか・・・？

と思うのだが、こんなことを大声で言うと、所詮もてない奴のヒガミと言われそうだから大人しくしていよう・・・。それに、元の世界に戻れなければ、所詮、余所様（よそさま）の世界の話なのだ。

しかし、そう言えば俺の元の世界でも、特に男子は昔に比べると大人しくなったとも聞く。これも草食系オタクが増えたせいなのだろうか？
何となくこの世界と似て来ている気もするが・・・。

そんなことを考えている内に、全集合場所（２７部各役場）共通

の放送による開会宣言が行われ、今回のルールの説明が始まった。

ここから先は聞き逃すとエライことになってしまうかもしれないのである。何せ、このＡＶ撮影大会はＨと射精行為が御法度なのである。他にどんな禁忌が潜んでいるか分からないのだ。

俺はスイッチを入れ替え、放送に集中することにした。

まずは、今回の”お願いします”の採用方式の発表があった。この方式に従って”お願いします”が行われるそうなのである。

今回の”お願いします”は、”たまたま方式”である。

何だその方式？

と思ったのだが、他の参加者達からは途端に不安の声が洩れたのだ。

その声で俺にもある程度の察しはついた。

きっと、厳しいルールなのだ。と言うことは相方が探しずらいと言うことであり、里緒とのコンタクトが難しいことになる。

説明では、千々木公園内にある２０箇所の休憩所に拠点を設け、その拠点の中のみでしか”お願いします”が出来ないらしいのである。

さらに、次にどの拠点に入れるかは拠点毎に用意してある”ガラポン”と言う抽選機（歳末大売出しの時に良く使う抽選機）で出た球に書かれた番号のみとのことである。

これを制限時間の１時間の間行い、相方を見つけなければならないのである。

この方式の命名は、玉により偶々出会った人と相方を組むことになるので、”たまたま方式”と言うのだそうだ。ただのゴロである。

確かに、これでは里緒と巡り合うのは難しそうである。

しかしだ。俺と里緒の関係はそんなことで妨げられるものでは無いと、俺は信じている。

何故ならば、俺はこの世界で始めて偶然に話したのも里緒であれば、そのこの世界初日に泊めてもらったのも里緒の家である。

それに、同じ学校の同じクラスに柔軟体操部までも偶然一緒になったのである。

絶対に俺と里緒は縁があるはずなのだ！

俺はこの制限時間内に、里緒を会えないはずがないに決まっている。

既に俺と里緒は必然で結ばれているのである。いて欲しい・・・・。

今回の参加者は、全部で１８９人。男子が８７人、女子１０２人と、塩南先生の予想よりも少し少ない人数である。

人数が少ないのも探しやすいと言えば探しやすいのかもしれない。

いやいや、本線を反れてしまってた。違うのだ。探すのが目的ではないのだ。男子が少ないと言うのは里緒に取っては不運なのである。

目的を見失ってはいけない！

俺の目的は里緒が相方を見付けることなのである。

今回は敢えて縁の下の力持ちになると決めたのだから・・・。

この”たまたま方式”の説明が終わると、順に役場のガラポンで抽選を行い、スタート地点の場所と、最初に向う拠点の球を抽選により引いた。
続いて、公園内の地図も渡された。この地図に２０ある拠点が示されている。

そして、全ての説明が終わると１１時半過ぎにバスにより”千々木公園”に移動となったのだ。

俺を含めた１４人がみんな、緊張に包まれた顔でそれぞれのスタート地点で降りて行く。
これから、いよいよ始まるのだ。

学校の制服姿の者も居れば、勝負服らしき者もいる。
彼らは生まれた時から、この大会を目指しているのである。

先週のオープン大会に出場していない限りは、出場者全てが初めての大会と言うことになるのだ。
２０メートル前後離れた所にいる制服姿の女子は座り込んでいる。
その向こうの男子はＡＶ子機（スマートフォンの様な端末）を見つめたまま微動だにしない。

そして今、異世界からひょっこり来た俺も、この大会を目指して来た者達と同じ土俵に立っている。
俺は柔らかく握っていた”７番”の玉を持つ左手に力を込める。

不思議な気持ちだ。何かこの世界で生まれ育った気持ちに完全になっているかもしれない・・・。

俺は今自分のスタート地点で、ドキドキしながらＡＶ子機からの合図を待ちながら公園内を見つめている。すると、

”１０・９・８・・・”

ＡＶ子機のバイブが震動を始める。画面を見ると、秒読みが始まりだした。

何かこのドキドキ感心地よい。

どうしてだ?

出すものを家のトイレで全て出して来たからか?

”・・・３・２・１・”

いよいよだ。

俺の闘志に火がついたのか?

”スタート!!”

その合図と共に、公園内で花火が上がった。

俺は地図に従い、７番の拠点へと走った。

運良く里緒と会えれば良いのだが・・・。

体は熱い・・・。

＜つづく＞

情報は重宝（前書き）

ＡＶ大会の相手探し”お願いします”が始まった。
果たして、工口（くぐち）は里緒（りお）に会えるのだろうか・・・。

情報は重宝

いよいよ俺、千乃工口（ちのくぐち）が初参加する”第２７部　第一回　サラ１８歳新人大会”が幕を開けた。

この大会、“新人”だけの大会であるが、もちろんルールに変わりはない。

基本男女の絡みが主であるＡＶ撮影大会である。

初日である今日行われているのは、相方探しの“お願いします”である。

ここで撮影相手である”相方”を見付けなければ、明日の撮影本番に進めらないのである。

だが、今回の俺の目的は本番に進むことなどでは無い。

お節介（せっかい）にも自分の相方探しよりも色々と縁のある千逗里（せんずりお）緒の相方を探してやることなのだ。

まず、始めにその目的達成の為に向ったのは、右手の地図に”７番”と書かれた告白拠点である。

それは俺の意思とは無関係に左手に握った玉に書かれた数字によって決められているのだ。

これが今回の”お願いします”の”たまたま方式”と言うルールなのである。

しかし、俺がどんなお節介を焼くにしても、まずは里緒の現状の把握することである。

そうなると俺は、まず里緒を探すことから始めなければならないのだ。

だが、手掛かりは全くない。運と脚力だけが頼りである。

果たしてこのルールの下、俺に里緒を探すことは出来るのだろうか・・・。

そして、里緒の相方を見付ける事はできるのだろうか・・・。

制限時間は1時間である。

しかし、いざ始まって見ると色々な出来事が俺を待っていた・・・。

それに、俺の里緒に対する心配は・・・。

（この出来事については、第3章でと言う事になる。）

★☆　第　２８　話　★☆

☆★♂情報は重宝♀☆★

「バカ、何で”ごめんなさい”なんだよ!４人目の男ならお前の気持ちも分かるが・・・」

俺のボヤキは止まらない。

相方探しの”お願いします”も残り２０分を切った頃であった、俺は里緒の姿を見付けることが出来たのだった。

俺の心配も余所に、里緒の所には次々と”相方”の申し出がやって来る。

しかし、その１８才の若武者達は、次々と里緒に返り討ちにされているのである。

俺がこの場に来て６人目である。

どうやら、俺の応援は全く無用であったようである・・・。
里緒はモテモテの状態であるのだから・・・。

今、里緒のいるのは公園内にある最大の池”あっちに池”と、そこに流れ込む小川”おがわさん川”に挟まれた１９番拠点である。
そして、俺は幅３～４ｍの人工の”おがわさん川”を隔てた藪の中、腰を屈めて雑木の影から里緒の姿を伺っている。里緒との距離は３～４０メートルと言ったところだ。

俺のズボンの右ポケットに入っているＡＶ子機を見ると、”お願いします”の時間も既に残り１２～３分となっている。

この子機、役場から支給されたスマートフォンの様な端末であるが通話機能が全く無いのである。
因みに機能は、ＪＲＡＶ会本部の親機とのメール通信機能しか持っていないのである。
映像に関してこれだけ進んだ技術のあるＡＶ界において不思議な話はあるのだが・・・。

これがどう言うことかと言うと、里緒と連絡を取る手段がないと言うことなのである。当然、連絡が取れてしまえば偶然性が薄れてしまい、偶然の出会いを演出しているこの”お願いします”の”たまたま方式”が成立しなくなってしまう。

では、この偶然性の必要な競技の中、そして、更にこの広く起伏のあり、草木の多い千々木公園（ちぢぎこうえん）で、何故里緒を見付けることが出来たかと言うと、それは偶然にも俺に情報を与える出場者に出会えたからなのである。

やはり俺と里緒には、何か見えない縁みたいな”もの”があるのかもしれない・・・。
と俺は思う。

この”お願いします”と言うこの競技が始まって制限時間の三分の一である２０分が経過した頃であった。俺はいきなり一人の女の子に後ろから肩を叩かれた。

「玉を交換っこしよう」

そう言うのだ。

一瞬女の子に玉を交換しようと言われ、一歩引いた俺だったが、直ぐに左手に持つガラポンで引いた玉であることに気付き、ホッとして振り向いた。

すると、そこには白いドレスにデニムのジャケット姿の活発そうな女の子が、この大会を楽しむ様に微笑んでいたのである。

ただでさえ内気なＡＶ界の高校生の、それも殆どの出場者が始めて参加しているこの”新人大会”なのである。更には子供の頃から出場することが夢であったはずなのだ。その中で、この女の子は他の出場者達が緊張感に潰されそうになりながらこの大会に挑んでいると言うのに、偉く余裕をかましているのである。

俺の世界にも色々な人間がいるが、きっとこの女の子は異質なタイプなのであろう。人見知りの世界の中で、全く人見知りをしていないのである。

彼女は様々な色の髪と瞳を持つＡＶ界においても、それ程見ない

緋色の瞳をしている。更に、色は珍しくないが、栗毛色のお姫様カットと言う珍しいヘアースタイルなのである。

俺は一瞬にして彼女に興味を惹かれ、直ぐに首から赤い紐で提げた名札に目を向けた。

そこには、”秘苑緋壬子（ひぞのひみこ）”と言う女優名が書かれている。

それが、本名であるか、家号なのか或いは、全く作られた名前なのかは分からないが、もちろん俺の記憶には深く刻み込まれた。

何か、俺は意味も無いがその申し出に乗りたい気がしてきた。しかし、

「玉の交換って、そんなことしていいのか？」

そんなことをして良いのだろうか？この大会には色々と規則があるのだ。

確かに玉を交換してはいけないと言うルール説明は無かった様に思う。だが、迂闊なことをして、この世界の御法度に触れるとどんな罰を受けるか分からないのである。

すると、

「大丈夫、そんなルール聞いて無かったでしょ。何か言われたら、説明無かったって言えば筋が通るから大丈夫よ」

簡単にそう言う。強気だ。役場の説明忘れと言うこともあるのだぞ・・・。

だが、彼女は違う役場で説明を聞いていたのだ。二つの役場で同

じ説明を忘れると言うのも考えにくい。

本当に、筋が通れば大丈夫な世界なのだろうか？
少なくても俺の世界は法律を知らない方が悪いと言う世界である・・・。

そんなことを考えていると、俺の不安な心を掴んだのだろうか、

「何で、心配してるの？」

彼女は不思議そうな顔で俺の顔を覗き込む。

まずかったのだろうか？
この世界では、筋が通れば問題ないと言うのが当然なことなのだろうか？
もしそうだとすると、それを知らないと言うことは、この世界の人間でない事に繋がってしまう。
疑われてしまうかもしれない・・・。

「いや、そうじゃなくてさぁ、俺が聞き逃したかなと思ってさ、ちょっと思い出してたんだ」

「そっか、大丈～夫。絶対にそんなルール説明なかったから。
それより、せっかくの大会なんだから色んな人と知り合いたいでしょ、ね。
だから、私色んな人と玉交換をして話掛けてるの。
さっき、あなたを小川の近くで見付けて、話しかけたくて追いかけてきたんだから・・・」

本当に珍しいアクティブな女の子である。

俺としても、里緒の居る場所が分からないのだ。どの玉でも構わない。それに、俺と里緒との縁はこんな偶然から繋がっているのかもしれない。そんな気もする。

「うん、了解。交換しようか」

俺は彼女の玉交換の申し入れに快く応じた。

「そう、じゃあ交換ね」

俺は3番の玉を引き換えに彼女から15番の玉を手にした。

彼女は、手にした玉を嬉しそうに眺めて、

「また会ったよろしくね。もし、告白拠点で会ったら”お願いします”するかもしれないから・・・」

社交辞令なのかもしれないが、そう言われると恥ずかしいが嬉しいものである。何せ、裸で抱き合っても構わないと言っているのと同じなのである。

俺が照れ笑いしていると、続けてさらっと情報を教えてくれた。

何も聞いていないのだが・・・。

もしかすると、一物(いちもつ)兄さんの様に説明好きな人種なのかもしれない・・・。

それは、別にこの玉の番号に向かわなければならないと言うルールは無いと言うことである。

言われて見ればその通りである。この玉の意味は、番号が書かれ

た拠点に入って”お願いします”と言う相方申し込み行為が、出来ないと言うだけのことなのである。

良い事を聞いてしまった。

俺はそこである事を思いついて彼女に聞いてみた。

「ねえ、”へ高”の制服姿の人を見なかった？」

女の子と言わなかったのは、俺に対して本当に”お願いします”をする気持ちを持っているのかもしれないと思ったからだ。

しかし、

「あ～あ、お目当ての子がいるのね。”へ高”の女の子か～」

ちょっとがっかりした様にそう言うが、

「知ってるわよ」

明るくはっきりとそう言ってくれた。

「ホントに？」

そう聞き返すと、

「うん、嘘なんて付かないわよ」

任せなさい的な自信満々の顔付きである。

やはり、里緒は制服姿で参加をしていたのだ。里緒の性格であれば、学校代表で出場している以上、制服姿のはずである。先週の”オープン大会”でもスカートだけは制服のものであったのだ。ただ、気温が今日よりも高かったので上着は着ていなかったが、きっと、今日は上着も制服なのだ。

彼女は続けた。

「集合した役場が一緒だったから・・・。確か～、１９番の玉を引いていたと思うわよ」
そう言いながら、偉く、エッチな顔でくすくすと笑う。
俺の心を読み違えているかもしれない。が、ここで言い訳する意味も無い。
彼女は続けた。
「ふ～ん、意外とまだいるかもよ。お互いに探しあっている場合はね、一人は動かないと言うのがこの方式の鉄則！
だって、拠点は２０しかないんだから拠点で玉を抽選するなり、誰かと交換するなりをして拠点に向かえば確率的に２０回で１回当たるわけだから。ね」
その通りである。後は、拠点を回りきる時間との勝負である。しかし、里緒は俺を待っている筈が無いだろう。出場有無も知らないのだから。
だから、里緒がまだ１９番拠点に残っているかは全く分からない。
しかし、それでもそれしか手掛かりがないのであれば、そこに向かうしかない。
もしかすると、里緒も同じ場所にいるのかもしれないのだ。里緒に取って、同じ場所で留まって相方を探すのも一つの手であるのだから。
そして俺は、彼女と別れてから１９番の拠点に向かったのである。
その途中、すれ違う男子には全て声を掛けた。目的はもちろん、１９番の玉を手に入れることと、もう一つは、”へ高”の制服姿の

可愛くて、演技の上手い女の子が参加していると言う、情報を広める為である。

俺はその間、全く自分の撮影大会の事等は忘れて、里緒のことを考えていた。

多分、純粋に彼女のことを思っていたと思う。

彼女がこの大会で相方が見付けられなかった時の学校での立場を考えると、そうせずには居られなかったからだ。

彼女には、常に”へ高”ランク一番でいてもらいたいのだ。あの稲荷一子には絶対に明け渡して欲しくないのだ。

そして、俺はこの場所に辿り着いた。

里緒はまだ”１９番告白拠点”から動かずに居たのである。

相方も決めずに・・・。

＜つづく＞

情報は重宝（後書き）

やっと、始まりました。ＡＶ大会！

お願いします（前書き）

相方探しの結果は・・・。

お願いします

どうしたんだ・・・、里緒。

もう時間がないんだぞ。

そんなにおまえの前に現れる奴らが気にいらないのか・・・。

ＡＶ撮影の相方探しである”お願いします”も大詰めである。

俺の心配を余所に里緒の前には次々に男優候補者達が、相方の申し出に現れていた。

だが、里緒はその中の誰一人として選ぼうとはしないのである。

なぜなんだ?

なぜ、”ごめんなさい”なんだ?

遠くから見ているだけの俺には良く分からないが、里緒の前に現れるヤツ等は皆それぞれの学校で選ばれた優等生ばかりのはずである。

それは学力ばかりで無い。総合的に優れている優等生達なのだ。

それなのに・・・。

一体、お前は何を求めてるんだ?

ちょっと選び過ぎじゃないのか?

それともお前には、何か譲れない拘り(こだわ)でもあるのか・・・。

★☆　第　２９　話　★☆

☆★　お願い　♂　☆★

★☆　♀　します　★☆

残り時間は１０分を切った。
何をやってるんだ・・・里緒。

もちろん、俺の焦りが離れた場所に居る里緒に通じる訳もない。
里緒は次に現れた男優候補の手も握ることはなかった。

幾ら次々にお前の前に男達が現れるからと言っても、もう出場者達はかなりの数で相方が決まっているはずなんだ。そうなると残っている人数は少ないはずだ・・・。

分かっているのか？
それに残りの時間だって・・・。

早く誰かを選ばないと、もう、誰も現れない可能性だってある。
里緒の前に現れては虚しく去って行った人数は、俺が来てからだけでも６人となった。
その度に、里緒は去って行く後姿に深々と頭を下げている。

どう言うことなんだ？

今俺が里緒の姿を見ているのは１９番告白拠点から３~４０ｍ離れた藪の中の一本の雑木の陰である。
もう、里緒を眺め初めて１０分以上は経っている。
次第に１９番拠点の周りには、うろつく人影すらも無くなって来た。

ここで絶対に相方を見付けなければならない状況なのだが、里緒は中々相方を決めようとはしない。
学校での立場、周囲からの期待。それに、プレッシャーを掛ける

奴も里緒にはいるのだ。

俺は里緒の心が全く分からないでいた。

応援しよう、助けようなんて思っていても、何人もが里緒の前に現れている今では、結局は里緒の心一つなのだ。

俺には何も出来やしないのだ。

ただ俺はお前を見守っていることしか出来ないのだ。

でも、お前のことを本当に・・・。

そして、また里緒の元に7人目のヤツがやって来た。急ぎ足である。

その姿に俺は見覚えがる。それは、俺が此処に来る前に玉交換をして、里緒の宣伝をしたヤツなのである。

正直俺よりも良い男で、感じの良いヤツであった。高校生として、ほぼパーフェクトに近いと俺には思える。だから、恐らくこれで決まりだろうと思う。

あいつを断る様では相方など見つかるはずがない・・・。

彼は里緒の傍に来るなり話し出した。それに里緒も頷いている様にも見える。

今まで現れたヤツ等とは違い、二人の雰囲気もかなり接近して見える。

客観的に見ればいい感じと言ったところなのだろう。

良かった。良かったんだ。喜ばなければ・・・。

でも、何か俺の心臓が妙な爆音を響かせている。

なんでなんだ？
何で、俺がこんなにドキドキするんだ・・・。
里緒の相方が決まる寸前だからなのか？
きっと、そうなんだ。そうに決まっている。
そして、ホッとするはずだ・・・。

二人の声は全く聞こえないが、話が弾んでいる様に見える。
定かでは無いが里緒が笑った様にも見える。
残念だがこれで里緒の相方が決まってしまうのだろう・・・。
残念？
残念ではなく、嬉しいことではないのか？
なんだよ、この騒がしい気持ちは！

駄目だ、駄目だ。何を考えているんだ。里緒のことよりも自分の気持ちが大きくなってきている。
何の気持ちだ？
これで安心出来る、落ち着けると言う気持ちの筈だぞ・・・。

だが、俺は落ち着いてなんかいられない。今にも里緒の前に飛び出したい気持ちだ。
俺は、俺はどうしたんだ？

ついさっきまでは、そんな感情では無かったはずだ。

俺は心の何処かで安心していたと言うのか？
今までのヤツ等は、きっと里緒は選ばないと・・・。
嫌なヤツになってしまうが・・・。そうかもしれない。
応援すると言いながら・・・。
今、俺の持っている玉の番号は１２番。俺は里緒に告白する権利もないのにだ。

彼が里緒の前に跪(ひざまず)いた。そして、右手を差し出す。
”お願いします”のポーズだ。

里緒はここで、彼を相方として選んでしまうのだろうか？
そう思うと、俺は里緒の姿を見ることが出来なかった。
目を逸らしていた。

俺は願ってはいけない方を完全に願っている。
それが偽らざる俺の気持ちなのだ。偽善者の俺の心なのだ。

背中から誰かに刺されても仕方無い。俺は最低の偽善者なのだから・・・。
もしかしたら、そんな法律がＡＶ界には存在したりして・・・。

俺は情けなく笑って、藪の中の雑木の陰で里緒から目を逸らし俯いてしまった。
全てのものが目に入らず、音も耳に入っては来ない。

その時であった。

本当に俺の背中の中央を何かで突かれたのだ！

「あっ！」

不心得者の俺は刺されてしまった。当然だ。当然の・・・酬いだ・・・。

と、俺はその場に倒れようとしたが、

「・・・？」

倒れる程の苦しみが無い。

どうしたんだ？

そう思っていると、今度は背筋に沿って真っ直ぐに撫でられた。

んっ、指か？

俺が振り返ると、そこには人差し指を立てた緋色の瞳が立ってる。

見覚えのある瞳・・・。

俺は直ぐに思い出した。

始めに玉交換をした女の子である。

戸惑っている俺を、さらに戸惑わせて彼女は話し掛けて来た。

「何してんの？」

「いやいや、ちょっと川を見つめて・・・」

咄嗟の言い訳なんてこの程度が関の山だ。

「川を？　へ～、魚にでも”お願いします”するつもりなの？」

彼女は、何て事を言ってくる。意味は何だ？

今の俺の頭は全く回転しない。気持ちのあり場が此処ではないのだから・・・。

「いや、まさか・・・」
こんな答えが精一杯だ。

もしかして、里緒のことを覗き見しているのがバレただろうか？
そう思った。しかし彼女は、

「まあ、いいわ。それより、相方まだ見つけてないの？
”へ高”の探し人には会えなかったのね・・・」
そう、聞いてきた。

「んっ、ああ。まあ・・・ハハハ」
状況的に、当たらずも遠からずだ。

どうやら、彼女は川向こうの里緒の姿には気づいていないようだ？と思ったのだが、草木の陰から見え隠れする里緒の方に向かって目を細めている。

「あそこ、もしかして１９番拠点かしら。まだ、誰かいるわね。女の子かしら？」
かなり目が悪いらしい。どうやら、人影程度にしか理解していないのだろう。

「ホンと？」
俺も彼女と向かい合ったまま、惚(とぼ)けて目を細めキョロキョロと反対方向眺めて見る。
そして、直ぐ様話をすり替える。

「それより、相方は見付かったの？」
　すると、彼女は自慢げに、
「もちろん、相方はとっくに見付かって、今帰るところだったの。あっ、そうそう。もう遅いかもしれないけど、良かったら玉交換こしようか。
　ホラ、１９番。あそこよね、きっと」
　そう言う。
「１９番！」
　それに、俺は叫びそうな声を抑えて呟いた。
　そして、彼女が俺の影から１９番拠点を見ようとするのを、体で隠しながら、彼女の掌の玉に手を伸ばした。代わりに自分の玉を彼女の手に乗せる。
　焦りを抑える俺の右手は震えている。
　しかし、最後に１９番の玉を持っていると言うことは、１９番拠点で相方を見付けたと言うことではないのだろうか？
　話が合わない気がする。すると、俺の心の疑問に応えるかの様にその説明をしてくれた。
「相方を見付け終わってからね、玉交換を名目にして色んな人と話をしてたんだ。そうしたら、最後の人が持っていた玉が１９番。
　もっと早く君に渡せていたら、”へ高の子”に会えてたかもね」
　そんなことはない！まだ里緒はそこにいるのだ。
　いや、正確にはほんの１～２分前まではだ。今現在のことは俺の視界には入っていない。俺の後頭部が眺めている格好だ。

さっきまで見たくなかった自分の後ろの光景が気になる。
俺は正直里緒がまだ一人でいることを望んでいる。この玉を受け取って、直ぐにでも走り出したい気持ちだ。

このまま、直ぐに振り向いて走りだそうか。
”１９番”の玉を握る手が汗でべたべたになっている。どうする？

俺が耐え切れず、振り向き掛けた時だった。

「じゃあ、まだ3分あるわよ。１９番拠点は近いから、急げば”相方”見付かるかもよ。頑張ってね！」
そう、言い残すと彼女が踵を返し先に駆け出した。

「ありがとう」
俺も踵を返すと、ほんの僅かだけ遅れて走り出す。

彼女に振り向かれて何と思われても良い。
この先の数分を決して後悔したくはない。

俺は全速力で走った。
きっと俺はこの時の為に、元の世界で陸上部で頑張っていたのかもしれない。
そんなことを考える。そして、走りながら頭を上げて、前方の草木の隙間から前を覗き込む。

いた！
間違いなく。里緒はそのままの姿勢で立っている。
あの男の姿は無い。

里緒はまたしても選ばなかったのだ！

俺は一人立ちすくむ里緒に向かって走った。
決して今の俺と里緒の関係の下で、俺の右手を握って貰えるとは思っていない。

思わないが、嘘は付きたくない。俺の心に嘘は付きたくはない。
何もせずに諦めたくはない・・・。

俺は川を飛び超えようと助走をつけた。そして飛んだ。
もちろん、足場の悪い土手から飛び越えることが出来ないことは分かっている。
大きな水飛沫を上げ、土手の少し手前に飛び込んでしまった。深さは膝下までである。

俺はその川の残りを数歩で渡り終えると、雑草の生えている土手を夢中で登った。

せめて里緒の前に右手を差し出したい。
たとえそれだけでも・・・良くはないが、納得はいく。

そして、まもなく土手を登りきる。

もう、偽善者ではいたくない・・・。

足首が見える。他の誰でもない里緒の足首だ。
足先は俺の方を向いている。

さらに登る！

”へ高”のスカートが視界に入る。

土手を登り切った俺は、見上げるより先に右手を伸ばした。

「お願いします！！」

その時、俺はおもいっきり目を閉じていた・・・。

＜つづく＞

二割三割は当たり前（前書き）

工口（くぐち）の”お願いします”の結果は？

二割三割は当たり前

「お願いします！」

そう言って、ひざまずいた俺は即座に里緒に向い右手を伸ばした。
顔を俯かせると自然に目をつぶっていた。

風に揺れる草木の音、遠くから聞こえる笑い声。
いままで聞こえていなかった音が、頭の中に心地良く入って来る。

こんな切羽詰まった時に、何故か俺は妙に清々しい気持ちでいられた。
それは、達成感からなのかもしれない。

ただ俺は、荒い息を吐きながら彼女の言葉が耳に届くのを待っていたのだ。

全神経が彼女の言葉だけに集中していた。

心臓の鼓動が体の内側から響いてくる。

その鼓動の数からいくと極僅かな時間なのであろうが、俺にはやけに長く感じられた。
多分、実際は数秒なのだろう。

俺の耳届いた言葉は・・・、

「ごめんな・・・さい」

否定の言葉であった。

「・・・」　聞き間違いではない。
はっきりと、脳にまで響いて来たのだ。

当然だと思う。
それは、当然である。
俺だって、相方になって貰えるなんて思って里緒の前に現れた訳ではないんだ。
これでいいんだ。これで・・・。

後悔なんてしない。
後悔なんてするわけが無い。後悔しない為に里緒の前に来たのだから。

何もしないで終わったわけではないのだから・・・。
今まで各学校の代表が里緒に断られ続けていたのだ。
俺なんかが断られるのも当然のことである。
しかし、俺の力の入っていた肩は明らかに下がっていた。
はっきりと面と向かって意思表示されたのだから、後悔はしなくても落胆位はする。

それでも、せめて里緒の顔をしっかりと見て、笑顔を作ろう。
そう思い直して、立ち上がろうとした。

その時・・・。

俺は自分の手が掴まれていることに気付いた。

俺は里緒の言葉ばかり気にしていて、相方の申し込みを受けるも

う一つの動作のことを忘れていた。

差し出した手を握ると言う・・・。

★☆　第　３０　話　★☆
☆★　二割三割は♂　☆★
★☆　　♀当たり前　★☆

今日の俺は、朝から抱えきれない快楽エネルギーの放出を続けている。

それは、これから起ころうとしている出来事が、俺のエネルギーを一部位に偏らせているからである。

さらに、その放出は常に心地よくアンダーウエアーからの低反発を誘い、今では納まりの付く限界の２０％台を超え、３０％強に達しようとしているのである。

気持ちの良いスリルである。

そんな、”危機と背中合わせ”と言う興奮の中、今、俺は急きょ開かれた”へ高ＡＶ祭”の実行委員会に、体の弱い１年ＡＶ科西組の鉾田矛（ほこたほこ）と一緒に出席している。

もちろん、柔軟体操部の代表としてだ。

本来、柔軟体操部の実行委員は、俺と２年ＡＶ科南組の”リンリン”こと林林（はやしりん）なのだが、今日は彼女の代理の矛（ほこ）と一緒である。

それは、今日は珍しく部活の終わる３０分前の２時半から”へ高ＡＶ祭”の実行委員会が行われた為に、里緒の代わりに部活を仕切

っている副部長のリンンリンは、部活を抜けられなかったからである。

そのリンリンの代役が、矛（ほこ）と言う訳なのだ。

病み上がりで見学しかできない矛（ほこ）が、自ら俺と「実行委員会に出席する」と塩南先生に申し出たのであった。

と言うことは？

今日、里緒は学校を休んでいるのである。

別に体の調子が悪い訳ではない。

恐らくは今頃、初めてのＡＶ撮影の準備に頭を悩ませているはずである。

”お願いします”で相方を見つけたＡＶ大会の学校代表は、撮影当日は学校を休み、撮影に備えるのが慣習になっているのである。

つまり、昨日の”お願いします”で、里緒は無事に相方を見つける事が出来たのである。

そしてその相方とは・・・。

もちろん、この”俺”である。

これで、何故俺が朝から幸福エネルギーを放出し続けているかがお分かり頂けたと思う。

因みに「お願いします」と里緒に申し込んだ続きは次の通りである・・・。

あの時、俺は・・・。

・・・

「ごめんな・・・さい」

と言われ、一旦は断わられたと思っていたのだったが、実はその言葉の意味は違っていたのだ。

次に里緒の放った言葉は、

「待たせて・・・、待たせてごめんなさいでしょ」

であった。

つまり、遅くなったことを俺に謝れと言いたかったのだ。

あの時、里緒は俺の「お願いします」の言葉の後、直ぐに俺の差し出した手を握っていたのであるが、里緒の言葉ばかり神経を集中していた俺は、”手を握られている”と言う事実と、それが”申し込みを受けた”と言う事であることを、結びつけられなかったのである。

その後、里緒は、

「ずっと、ずっと、待ってたんだから・・・」

消えそうな位に小さな声でそ俺に言ったのだ。

里緒は”面食い”で次々と来る申し込みを断っていた訳ではなかったのだ。俺が来ることを信じて疑って無かったのだろう。

買い被りかもしれないが、里緒はきっと俺のことを、ずっと待っていたのだと思う。

俺が、”まほまほ”では無かった。”ラミア”にスカウトされて異世界から来たと知っている里緒は、俺が当然大会に参加すると思っていたようなのである。

と言うことは、俺とめぐり合う方法として、”最初に訪れた１９番拠点から動か無いこと”それを選択したのかもしれない。あの”１９番の玉”をくれた緋色の眼をした女の子の言った様に・・・。

手を差し出して俯(ひざまず)いたままの俺の上からは、里緒が鼻を啜る音が何度も聞こえて来た。

それは、多分風邪ではないと思う。

里緒が、

「よろしくお願いします」

と、俺の申し込みを正式に受けた時、その言葉と同時に俺の手に一滴の滴が零れ落ちたのだ。

それが、ヨダレや鼻水とは粘性が違っていたからだ。

俺は里緒の涙だったと確信している。

その滴の感触はこの右手にまだ残っている。

俺はどうしても、この滴の水源の”こと”が気になり、と言っても目か鼻かの場所の特定ではない。

里緒の表情が気になり、俺は直ぐに顔を上げた。だが、里緒は慌てて後ろを向いてしまった。

俺は里緒を心配させたことが、ただ、ただ申し訳なくて、里緒の希望通りに、

「ごめ、め、めん～。あ～、ああ～ちょっと、待った・・・」

謝る予定であったが、その途中で里緒に思いっきり引きずられていた。

「早くしないと、登録時間が過ぎちゃうじゃない！ホント遅いんだから・・・、もう」

そうであった。その時はもう”お願いします”の残り時間も1分を残しているかどうか、と言う時であったのだ。

俺は里緒の明るくなった声に引きずられ、約１０m先の屋根付きの休憩所に飛び込んだ。

ずり落ちそうなレンズの無い眼鏡を直し、飛びそうなカツラを左手で抑えながら・・・。

今頃になって気付いたが、里緒には俺の変装が全く通じていなかったようなのだ。

それどころか、全く気にも掛けていないのである。

女性とは、本題以外は余りきにしない”生き物”なのだろうか？とも思ったが、そんなことを聞く余裕は全く無かった。

俺達は急いで”１９番の告白拠点”の係員の所に行くと、言われるがままの指示に従った。

まず、”１９”と書かれた玉を係員に渡し、それと引き換えに相方成立の番号をもらう。

そのもらった番号と、相方（里緒）の大会登録番号をスマートフォンの様なＡＶ子機に入力し、親機に向けて同時発信するのだ。

それで、登録手続きは完了である。
後は完了通知を待つだけである。

この時俺は、渡した玉を記念に貰おうと思ったのだが、規則と言うことで貰えなかった。

あれ？この玉は確か・・・、
貰えるはずでは・・・。

心に引っ掛かるものを感じながら、３０秒後。

無事、登録完了通知を受信した。

登録は間に合ったのである。かなりぎりぎりであったのか、係員の女性もホッとした顔つきであった。

・・・と言う事で、見事今日の”撮影大会”に進めたのである。

これで、晴れて里緒の”裸を？裸と？・・・”と言うことになる。いや、良かったのはそこではない。里緒のプライドと責任感を守ることが出来たのだ。本当に良かった。

俺と里緒は、その”お願いします”からの帰り道で、今日の撮影場所を話し合った結果、誰の目も気にしなくて良い、俺のアパートで撮影することに決めたのだ。

きっと、里緒は今頃は俺との絡み、ではなく、俺との撮影に備えているに違いない。

構想を考えたり、衣装を用意したり。
そうだ、お風呂にも入っていることだろう。
湯上りの肌は、想像しただけでも3回は抜け・・・いや、いい演技だ出来そうだ。

もちろん、昨日は俺の部屋の合鍵を作り里緒に渡したのは言うまでもない。
この”女の子に自分の部屋の鍵を渡す”と言う瞬間を思い出すだけでも、2回は抜け・・・、では無かった。里緒とは他人ではなくなった気がして来る・・・。

ここで、疑問に思われたことがあるのではないかと思う。

何故、俺一人が登校しているか？
と言うと、それは彼女に合鍵を渡すのが目的だった訳ではない。
”ＡＶ撮影大会”当日の今日、二人で学校を休むことが、不自然に思われない様にである！

俺が今回の新人大会に出場しているのは校長代理と、塩南先生達3年のＡ科教員しか知らないことなので、過剰反応と思われるかもしれないが、この積み重ねが大事である。そう判断したのだ。

まあ、撮影時間は夕方5時までで時間がある。今日の部活は学校代表が出場した大会日とあって、恒例の午後3時には終わる。まっすぐ帰れば撮影には十分に間に合うはずだ。

準備は里緒が全てやってくれていることになっているから問題は無い。

と、言うことで、全ては計画通りであったのだが、何と急遽臨時の”へ高ＡＶ祭”実行委員会が開かれることになったのである。

この余計な案を持ち出したのが、あの生徒会長、稲荷家一子であると言うのだ・・・。

＜つづく＞

二割三割は当たり前（後書き）

更新が遅くなってしまいました。

上に「ま」、下に「こ」の付く3文字でしっとりしているもの（前書き）

工口（くぐち）と里緒のＡＶ撮影目前に、障害が発生！

上に「ま」、下に「こ」の付く3文字でしっとりしているもの

本年度の”第２７部　第一回　サラ１８歳新人大会”は、意外と慎ましく幕を開けた。

既にＡＶ撮影の相方を決める”お願いします”も、大会の初日である昨日、無事に終了している。

無事と言う意味は、俺も里緒も見事、ＡＶ撮影の相方を見つけることが出来たと言うことである。

それも、相方が他ならぬその里緒であるのだから、俺にとってこれ以上のない結果である。

もちろん、あの時ずっと俺を待ち続けてくれていたのだ。きっと里緒だってそう思ってくれているに違いない。まずは、めでたしである。

ところがである。そこまでは最良の結果であったのだが、撮影は今日の午前９時から１７時までに行わなければならない規定だと言うのに、なんと、俺は”第一回へ高ＡＶ際”の実行委員会で足止めを食う羽目になってしまっている。

現在の時刻は、午後２時５０分。

昨日作ったばかりの合鍵で、俺のアパートで帰りを待つ里緒との約束の時間は午後３時半。

たった１５分のビデオ撮影とは言え、初めての体験なのだ。諸々の準備時間を考えると時間に余裕はないであろう。

今、会議を行っている”へ高”から、俺の家までは徒歩３０分。

間もなくこの会議も終わって貰わなければ、その時間に間に合わ

なくなってしまう。だが、一向に実行委員会は全く終わる気配を見せない。当然、俺はそれに焦りを感じているのだが、この厳然とした雰囲気の中、会議室を出て行く勇気が湧いて出そうには無い。

ホント、自分勝手に行動出来る奴が羨ましい・・・。

★☆　第　３１　話　★☆
☆★　上に「ま」、　☆★
★☆　下に「こ」の　★☆
☆★　付く３文字で　☆★
★☆　しっとりして　★☆
★☆　♂いるもの♀　★☆

年４回行われる”へ高ＡＶ祭”の本年度の一回目は来月開催される。

その実行委員は各部活から２名選出されるのであるが、俺は運悪くその実行委員に柔軟体操部代表として選出されているのだ。

本来、学校代表が出場している”ＡＶ撮影会”の日は午後３時が下校時刻なのであるが、今日は急遽その”へ高ＡＶ祭”の実行委員会が行われることになったのだ。

こんな肝心な日に・・・。

この臨時実行委員会の言いだしっぺが、”生徒会長　稲荷家一子（いなりやいちこ）だと言う噂は聞いていたのだが、どうやら、それは間違いなさそうである。

それは、生徒会長　一子の取り巻きの実行委員が、次々と示し合わせた様に同意見を発言をしているからである。

それに・・・。

いつもクールで沈着冷静な社会部部長　穴井狭子（あないきょうこ）が、いつまでもだらだらと続く会議に苛立ちを見せ、生徒会長一子に向い珍しく皮肉を込めた言葉を言い放ったからである。

「先程から、今度の”へ高ＡＶ祭”を今までに無い盛大な大会にしたいと、抽象的な発言ばかりを繰り替えされている方が数名おられますが、中止になった”西部地区合同新人大会”の替わりを”へ高ＡＶ祭”にお求めなのでしょうか？」

狭子はメガネの淵を指で摘みながら、生徒会長　稲荷家一子を一瞥する。

因みに社会部部長の狭子は、里緒、稲荷家一子に次ぐ校内ランク３位で、”校内ＡＶ委員会の生徒代表”であり、この生徒会主催の”へ高ＡＶ祭実行委員会”の審査委員長でもある。

通常、部長は実行委員ではないので、出席しない筈の社会部部長の狭子が出席しているのは、その肩書きの一つの為である。

「替わりって、聞き捨てならないわね。私は生徒の代表として、この”へ高ＡＶ祭”を有意義なものにしようとしているのよ。何が悪いのかしら！」

狭子の言葉に声を荒げ、燃え上がる程の赤い顔で生徒会長　稲荷家一子は、声高く狭子に威圧を加えようとする。だが、それにも、

「あらっ、私は会長に言ったつもりはないのですが、それとも、会長がそもそもこの大雑把な提案の発信源なのでしょうか？」

校内の力関係で行けば、当然、表は生徒会長の稲荷家一子であるのだが、完全に裏では色々な実務権限を握っている狭子である。狭子に怯む様子は全く見られない。
何せ狭子は陰の”へ高のドン”なのだから。

しかし、俺にとってこれは・・・。
いかん。心地よいエロホルモン（略して”エロホル”）を垂れ流している場合ではない。

火に油、思春期にエロビデオ状態である。狭子の一子に対する言葉は気持ち良いのだが、返って悪い方向に進みそうだ。普段、あまり感情を表に出さず、メリットのある行動しか取らない狭子には、らしくない行動である。

能面の様な顔で皮肉る狭子の鉾先、生徒会長　稲荷家一子は爆発寸前である。

こうなると、生徒会長派の実行委員達を除くと、他の実行委員の生徒達は全くの傍観者である。
俺の前に座っている”畳部”の実行委員の2人なんかは、強張って固まったままである。

これでは、会議を収束させる様な客観的な意見は、出そうもない雰囲気である。
全くの感情論の応酬に終止しそうな状況だ。

実行委員会は一体どこまで続くのだろうか・・・。

俺がそう思った時であった。

そこに、”ひょい”と会議室の扉を開けてやって来た人物が、俺には救世主の様に輝いて見えたのだ。
その救世主こそ、我が”柔軟体操部の顧問、よれよれのスーツ姿の”塩南（しおな）先生である。

「は～いン、みなさ～ん聞いてくらはいなン。
今度の日、月に予定されていた本年度の”西部地区合同　第一回サラ１８歳新人大会”は、取り止めではなく２ヶ月延期の１月に行われることに決まりました～」

因みに、西部地区とは、ＡＶ界全４８部の内、第２５部～第３６部の西にある地区のことを指している。
突如として表れ、会議を無視して話を始めた先生に稲荷家一子の口がポカンと空いている。

「一部の生徒には、先に不確定な情報が届いてしまったみたいだわねん。
ま～あ、実行委員会のみんなは、騒いだりしないと思うのだけど、一応先に伝えとくわよン。

良いん。

因みに延期になった理由は、みんな大体想像が付いていると思うけど、この２７部だけではなくてン、全部で行われた新人大会の出場率が、ことごとく悪かったからなのヨロヨロ。

どうも、大会に参加するレベルに達する生徒ちゃんがいないからしいのん、これも少子化のせいねン」
と、話す塩南先生は緊迫した会議室の中でも、いつもの様にふわ

ふわとマイペースである。

この塩南先生の”少子化”と言う言葉は、俺も最近耳にした言葉である。

何と、このＡＶ界は極度の少子化で悩まされているらしいのである。

通りを歩いても子供の姿をあまり見掛けないのはそのせいなのだ。

この挑発的な性的産業が発達しているＡＶ界と言う世界にあって妙な話である。

普通、挑発されて血気盛んになるのではないだろうか？

俺ならば、そうなると思うのだが・・・。だが、確かにこの世界の若い男は、オタクで大人しい奴ばかりである・・・どうしてなのだろうか？

だが、この少子化こそが今回の出場校数の低下に繋がっていると塩南先生は言っているのだ。

つまり、こう言うことである。

まだ新年度が始まって２ヶ月では、出場資格のある１８歳の誕生日を迎えた高校生はただでさえ少ない。その上に、少子化で生徒が少ないのだ。

その少人数の中では、実力のある生徒もそういないのも当然のことである。

学校側も自校の名誉の為と、大会の質の為に実力不足の代表を選出する訳にはいかない。

すると、止むを得ず辞退に向かうことになる。

それが、今回の延期の理由であると言うのだ。

この延期になった複数部合同で開催される”合同新人大会”は年3回開催される。各部毎に行われる最初の新人大会と、最後の大会、そして、その丁度中間の大会の翌週である。

つまり、2週連続の各部開催と合同開催がセットで3回開催され、昨日から行なわれている”第27部　第一回　サラ18歳新人大会”と、”西部地区合同　第一回　サラ18歳新人大会”は最初のセット大会であり、高校生に取って、貴重な大会なのである。

その合同開催が中止になったとの情報が、何処からか稲荷家一子に入ったのであろう。

それで、里緒に変わって次週の大会に参加が出来ると、皮算用していた稲荷家一子が”合同新人大会”が中止と知って、その代わりを”へ高AV祭”に求めて来たと言うは、一子の性格から容易に想像が出来ることである。

実際、塩南先生から、中止ではなく延期になったとの訂正を聞いて、一子のトーンは一気にダウンしている。

会議室も落ち着きを取り戻して来た。

いいぞ・・・。

これでいけば、この実行委員会も俺の勘では、10分少々後の午後3時過ぎには終わってくれるだろう。そうすれば、俺の帰りを待つ里緒との約束の時間、3時半には充分に間に合うことになる。

俺と里緒の初Hビデオ、では無かった、初の競演作品は滞りなく完成することとなるのだ。

ありがとう、塩南先生・・・。

俺は心で叫ぶ！

塩南先生はその連絡だけを終えると、他言は言わずにふわふわと何事も無かったかのように会議室から姿を消して行った。

ドアを出るときに俺に向かってお尻を2回振った様に見えたのは錯覚だろうか・・・。

俺も先生のお尻を笑顔で見送ると、狭子も心なしか一瞬笑顔で見送っていた様にも見えるが、直ぐに、クールで沈着冷静な”へ高のドン”に戻っている。

それにしても狭子は先週まで、胸まであった綺麗な翠色（すいしょく）のストレートヘアーであったのだが、今日は耳が隠れる程度のショートカットに一変している。

何かあったのだろか？

失恋で髪の毛を切るタイプにも思えないが・・・。

しかし、ショートカットも良く似合っている。何か少し幼く見える分、親近感を覚える。

俺が狭子を見つめていると、あらら・・・、狭子と目が合ってしまった。

少し長く見つめ過ぎてしまった様だ。

変に思われてはいけないと思い、慌てて目を逸らそうとしたが、その心配は要らなかった。

俺に向かって能面が僅かに微笑んだのである。

自分を買い被っていなければだが・・・。

いや、買い被りだろう。
きっと、取り止めのない話し合いが、塩南先生により終わりに向い出した事が、表情に現れただけなのだろう・・・。俺に向かって微笑む理由が無さ過ぎる。

しかし、その顔が・・・。
似てる・・・。

以外にも昨日の”お願いします”での救世主、”秘苑緋壬子（ひぞのひみこ）”の人懐っこい面影を、俺に思い出させた。

最も、狭子は髪もしっとり濡れた眼（まなこ）（サブタイトルの回答は”まなこ”でした）も翠色であり、緋壬子の緋色とは大きく異なっている。それに、性格も違えば学校も違う。
顔もよく見れば違っている気もする。似ているのは輪郭ぐらいかもしれない。

恐らく、俺の頭の中でずっと、あの緋壬子の存在が気になっているから、そう見えたのだろう。
それは、気にもなるであろう、何と言ってもおれと里緒の裏のＭＶＰなのだから。裏の・・・？

その気になっている事とは、他でもない。
彼女が渡してくれたあの”１９番”の玉のことである。

彼女が相方を見つけた後に、”最後に残った玉”と言って俺に渡してくれた玉である。

それは、通常在り得ないことなのである。
何故ならば、本当に相方を見つけたのであれば、最後に”玉”を

持っているはずがないのである。

俺と里緒が互いの相方と決めた時に、１９番拠点の係員に玉を渡すことによって相方成立の番号をもらったのだ。その後で、俺が記念にその玉を貰おうとしたのだが、規則で貰えなかったのだ。

本当に彼女の言うとおり彼女が”相方”を見つけたのであれば、”玉”を持っているはずがないのである。

相方を見つけたと言うのは、彼女の嘘か見栄だったのだろうか？

・・・そんなタイプか？

それとも、係員のミスだろうか？　・・・それも・・・？

それに、もう一つ。里緒から聞いたのだが、”お願いします”のスタート前に何も聞いていない里緒に対して、「お互いに決めた人がいるならば、一箇所から動かないで来るのを待った方が確立が断然高い」

と教えたのも、”緋色の瞳”の持ち主だったと言うのだ。

それは、きっと彼女であろう。俺にも同じ事を言っていたのだから・・・。

それに、このＡＶ界の人達は髪と瞳に多種の色彩を持つのだが、緋色の瞳を見たのは彼女が始めてである。

まさか、他にも珍しい緋色の瞳の持ち主が参加していたのだろうか？

そうだ！

ちょっと、待てよ？

良く考えると、彼女と２回も会うと言うのは偶然過ぎるのではな

いだろうか。
そうだろう、それに最初に交換した”１５番の玉”。彼女は、それを持ちながら１５番拠点とは逆の方向に向かっていたではないか。

しかし、見ず知らずの彼女が俺と里緒の為に、そんなことをしてくれる理由が全くなければ、二人の状況を知っているはずもない。

それとも俺の事を知っているのだろうか？
俺と里緒のことをだ。

俺が異世界からスカウトをされたことを知っているのだろうか？

いや、それこそ無いであろう・・・。
そもそも、俺がこの世界に来た事自体が偶然としか思えない。
スカウト自体も、あの”まほまほ”の早とちりの可能性が高いのだし・・・。

やはり、ただの偶然と考えるべきか・・・。
ただの親切な人、又は、好奇心旺盛の人だったのだろう。
そう見るのが自然である。

取り敢えず、彼女がこの大会で女優名と違う”演者名”（作品毎に付ける名前）を使っていたとしても、参加者が少ないのであるから、きっと、彼女が本当に”相方”を見つけたかどうかは、投稿ビデオを探せば分ることである。
探すのに、ちょっとアクセス料が掛かるが、今日無事に撮影が済んだら、明日探してみるとしよう・・・。

俺が会議に耳も傾けず、さらに”情熱エロホル”を放出することも忘れ、そんなことを考えていると、会議室がまた騒がしくなって

来た。

一子の声が耳に入ってくる。

どうしたんだ?

＜つづく＞

上に「ま」、下に「こ」の付く3文字でしっとりしているもの（後書き）

遅くなりました。

尻芝居（前）（前書き）

早く、里緒と合流して撮影に移りたい工口（くぐち）であったが、足止めを喰うはめに・・・。

尻芝居（前）

生徒会長　稲荷家一子（いなりやいちこ）の体内で劇温で流れ始めた暖流により巻き起こったハリケーンは、”へ高ＡＶ祭”実行委員会と言う形になって、周囲を飲み込んでいった。
俺の被害も甚大なものになろうとしていたのだった。

しかし、そのハリケーンも突然現れた塩南（しおな）先生による生理用品並みの抜群の吸収力により、熱くなった一子の劇温も急速に奪い取られていき、停滞していたハリケーンも会議から去って行った。
必然、会議は収束へと向かって行くこととなった。

それに安心をしていた俺は、昨日の”お願いします”での印象的な出来事を、いつの間にか振り返っていたのであった。

ところがである。この冷めかけた”一子暖流”の海温が、知らぬ間に再び急激な温度上昇を起こしていたのである。
どうやら、全く雲行きの読めない奴の一言が引き金になったようなのだ・・・。

お陰でハリケーンは息を吹き返し、実行委員会の終わりと言う青空は、俺の視界の範囲から遠く消え去ってしまった。
このハリケーンを便宜上俺は”イナリーン”と命名することとする。

既に時刻は午後3時を回っている。
里緒の待つ俺のアパートまでは、走れば１５分も掛からないであろう。
今なら何とか、まだ里緒との待ち合わせの時間には間に合う時間

である。

どうにかして、このイナリーンを静め、早くこの会議を終わらせなければならない。

どうしたら、このイナイリーンを静める事が出来るのだろうか・・・。

被害を最小限に収めなくては・・・。

★☆　第　３２　話　★☆
☆★　尻　芝　居　☆★
★☆　♂（前）♀　★☆

ある一言ににより、”イナリーン”は再び勢力を回復したのは間違いなさそうだ。

その言葉を聞きそこなった俺は、隣でリンリン（林林（はやしりん））の代役としてこの会議に出席している鉾田矛（ほこたほこ）に聞いてみた。

すると、この実行委員会の議長が、この会議の終わりを告げようとしたその直前に、

「ねえねえ、今日、千逗（せんず）さんビデオ撮影するんでしょ。帰ったらビデオを見なきゃね。楽しみ・・・」

「ホント！キャッキャ・・・」

なんて会話を会議室の隅の方でした奴がいると言うのだ。

矛の話では、この言葉からイナリーンは蘇ったのは間違いないと言うのである。

小さな声だったらしいのだが、それを一子は聞き逃さなかったらしいのだ。

全くお粗末な奴である・・・。

と、言うことは、やはり一子は次週に予定でれていた”西部地区合同　第一回　サラ１８歳新人大会”に出場出来ると踏んでいたは間違いない様でである。

我が”へ高”では、ＡＶ大会の学校代表者がそのＡＶ撮影の相方探しである”お願いします”で、相方を見付けたかの有無は”ＡＶビデオ撮影大会”が終わるまでは正式に公表はされない。

その為、それを知っているのは教員達と、部活で顧問の先生からその話を聞ける同じ柔軟体操部の者だけである。

会議は部活中に始まった為、実行委員達の中でその真意を知ることが出来ているのは、俺と矛だけである。

ただ、実際に里緒は今日、学校を休んでいるのだ。

同じアルパカ組のクラスメイトは里緒が休んでいることで、当然その真意には大体の想像が付いている。もちろん、クラスでは朝からその噂で持ち切りであった。

この噂は恐らくそこから発生したものであろうと想像する。

だが、驚くことに情報に敏感な一子がこのことを知らなかったのである。

恐らく、一子は人見知りの激しい里緒には”相方”が見つけられないと勝手に思い込み、自分が里緒に変わって校内ランク１位なった時のことばかりを想像して、里緒のことを意識していなかったのであろうと思う。現に一子は、

「まさか・・・、あの里緒が・・・」
と、目を丸くして呟いていたのは俺も耳にしたところである。

一子は、今週ＡＶ大会の出場資格のある１８歳になるはずである。
今回の”ＡＶ撮影大会”で里緒がまたもや撮影大会に進めなかった場合、恐らく里緒は順位を大幅に落とし、学年１位の座は一子に取って代わることは間違いないであろう。
そうなると、自動的に延期された２ヶ月後の大会は、稲荷家一子が学校代表となるのである。

一子はそれを信じて疑わなかったのであろう。しかし、その青写真が再び崩れたのである。

その為、一子はこのままでは自分が次の大会に出場する可能性がほぼ無くなると思い、再び、”校内ＡＶ大会”を大きな大会にすると言い出したのである。

恐らく、自分の点数を大幅に上げ、校内ランク１位の座を里緒から奪取する為には、通常の大会では無理だと判断したのであろう。
生徒代表の生徒会長のくせに、何処までも身勝手な奴である。まるでどこぞの政治家ではないか・・・。

このままでは、この会議は更にだらだらと続いてしまう。
頼みの狭子もポーカーフェイスの中にも微かに顔を歪ませている様に見える。
きっと、先ほどの様な意味のなさない嫌味を言う訳にもいかず、きっと手を拱(こまね)いているのだろう。

因みに”へ高ＡＶ祭”は生徒会の行事なので、議長は生徒会の者

である。生徒会長の一子の意思を無視してこの実行委員会が終わる訳がないのである。

どうする工口（くぐち）・・・。

俺には人任せと言う時間は残されてはいないのだ。

俺は俺で何か打開策を考えなくてはならないぞ・・・。

だが、まずは此処は落ち着くことだ。

焦っては何も思いつきはしない。

落ち着け工口、そして、順序立てて考えろ・・・。

俺はあからさま深呼吸してしまった。

しまったと思い横を見ると、矛（ほこ）はそれを、無表情で見ている。

ちょっと恥ずかしいが、そんな自分の感情に構っている暇はない。

まずはあいつが問題視している原因の把握からだ。

いや、それは考える迄もない。今までの”へ高ＡＶ祭”を行っていては、あいつが大幅に点数を獲得して、里緒を抜き校内ランク１位になれないと言うこと以外にはないのだ。

と言うことは？

用は、あいつの満足する”へ高祭”にすればいいのだ。大幅にランクの上げられる”へ高ＡＶ祭”にだ。

俺には、まだ校内ランク付けの採点方法が分からないが、あいつの言い分を聞いている限りでは、”へ高ＡＶ祭”に沢山の人を集めることが必要であることは間違いない。

それを考えればいいのだ。

ただ、里緒にとって不利になってはいけない。だから、公明正大に個人得点が大きく左右する大きな祭りにすればいいのである。それであれば、里緒があいつ如きに負けるはずがない。

考えろ・・・。

朝から出っ放しの俺のいやしいホルモンの収めどころを考えるのは難しいが、この位のことであれば、何か策はあるはずだ。

・・・俺は極一部で白熱する会議を尻目に考えること5分。

思いついたぞ！

用は人数が増えればいいだけなのだ。簡単なことはないか・・・。

そして、今まで傍観していた俺は張り切って手を上げた。

突然の俺の行動に、隣の矛（ほこ）は驚いていると思いきや、またもや無表情で俺を横目で見ただけだ。俺の行動に何も感じていないのかもしれない。

そういえば、この子は殆ど感情を表に出さないのである。

まあ、その方が発言もし易いが・・・。

俺の挙げた手を見て、議長が俺に発言を促した。

俺の発言は大した案ではない。「２７部の他の高校と合同でＡＶ祭を開く」と言う案である。

しかし、これでも一子の思惑は満たされる筈である。

案の定、最初は俺の発言を舐めて掛かっていた一子の目付が、途中から俺を捕らえ出した。

いいぞ・・・。

続けて、俺は第２７部にある”へ高”を含むＡＶ科のある三つの高校での”合同ＡＶ祭”を提案した。

これには、一子も声を上げて乗って来た。俺の思惑通りである。

そして、生徒会長の一子の申し出により採決となり、賛成多数で俺の案を基本方針で進むことに決まった。　このタイミングで、狭子が、

「会議の続きは明日にして、それまでに各自案を考えておくと言うことでどうかしら？」

そう言った。実行委員達もそれに頷いている。ナイスタイミングの締め言葉である。

これで、今日の”へ高祭”実行委員会も終わる。

かと思ったのだが、

「せっかく乗って来たところだから、もう少し続けましょう」

一子が、両手を合わせて嬉しそうにそう言い出した。

いるのだ。どこにでも、会議好きの奴が。きっと、こいつも討論が盛り上がると楽しくて興奮するタイプに違いない。

元来、政治家もそうだが人前に出たがりの奴にはそう言う奴が多い。

それはいいとして・・・。

しまった・・・、そう来たか。

俺の作戦ミスである。彼女の性格までは考えていなかった・・・。

一子は目を見開いて、椅子に浅く座り前傾姿勢になっている。
大乗りだ・・・。

こうなったら、ある程度話しを纏めて終わらすしかない。
俺がそう思った時、同じ事を考えていたと思われる奴が一人いた。
それは、もちろん狭子である。

狭子は俺よりも早く、議事録を読むかのように既に頭の中で纏め終わっているかの様に内容を発言していった。
それに俺が一子の食いつきそうなアイデアを加えていく。
あうんの呼吸である。

二人で会議を終わらそうと、精力的に話を詰めていった。
”へ高ＡＶ祭”の概略は俺と狭子を中心にあっと言う間に固まって行った。

どうも、俺と狭子は会議を早く終わらしたいだけではなく、意見が合うらしい。

だが、大筋は纏め上げたものの会議は一向に終わりに近づかない。
それは、盛り上がった会議を楽しんでいる奴が細かなことまで持ち込むからだ。
恐らく、一子が会議自体に満足感を味あわなければ終わらなさそうである。

時間は、刻々と過ぎて行く。既に、午後3時半を過ぎている。
俺の焦る気持ちは、椅子から尻を浮かせ、収束していく精なる中心部とは反比例して、半立ち状態である。

せめてこの状況を里緒に知らせたいのだが、こんな時にこのＡＶ子機は役に立たない。
このＡＶ子機と言うスマートフォンの様な機械は、全てはＪＲＡＶ会の親機との文字通信のみで個人同士の通信が出来ないのである。

ＡＶ界とは、何と技術の使い道を知らない世界なんだろう、腹が立ってくる・・・。

今頃、里緒は俺の帰りをどんな気持ちで待っているのだろうか？
そう思うだけで心が痛い。
ベッドに腰を掛け、悲しそうな顔で俯いている里緒が目に浮かぶ。

しかし、何故だろう？
俺の中の一部で里緒を”待たせている”と言う興奮覚えている俺がいる。
一体何なんだ、相反するこの気持ちは？
俺の中にはＳが潜んでいるのか・・・。

でも、そんな興奮を味わっている余裕は全くない。
いつまでも待っているとは限らないのだ。早々に怒って帰ってしまっているかもしれない。

怒ってくれるならば、まだいい。
すっぽかされたと傷ついて、落胆して帰った時の方が心配だ。

そしたら、里緒のプライドはどうなってしまう。
一子に嫌みを言われっ放しのままではないか。柔軟体操部の皆への対面もあるのだ。
それに、それになによりも、里緒の幼い頃からの夢にまで見たは

ずの”ＡＶ撮影会”が目の前で潰えるのだ。
俺には落胆した彼女の姿に堪えられる程の精神力はありはしない。
では、仮に待ってくれていたとして、いや、待っていてくれるはずだ。
俺のリミットは何時になるのだ？
たった１５分の撮影とは言え、ビデオ編集を全くしなくても最悪、午後４時半には帰らなければ撮影内容の打ち合わせすら出来ないのだ。
午後４時に向けて時間は近づいて行く。
どうする・・・・。
そんな時であった。黒いスーツに身を包んだ長身で凛々しい宝家先生が会議室扉のガラスの向こうに見えたのだ。
会議を終わらせにやって来てくれたのだろうか？
トントン・・・。ノックをする。
塩南先生とは違いいきなり入ってくることはしない。
こんな時は、塩南先生の様に早く入って来てくれ・・・。
議長の、「どうぞ」
と言う声に、宝家先生は静かに引き戸を開けた。
「会議は、まだ続くのか？」
会議室の扉を半分だけ開けると、宝家先生は顔を覗かせ、そう言

った。
やはり、会議を終わらせに来てくれたのだ。
それはそうだ。本来、今日は3時帰宅の日なのだ。

それに、一子は、

「はい、先生もう少し。今、丁度いい案が出ましたので」
そう言う。

今じゃないだろ！そう思ったが、無駄な時間は使えない。
俺はくちを噤む。

宝家先生は続ける。

「だが、会長。今日は3時下校の日だ。会議は明日にしたらどうだ。
校長が、学校代表が出場した日は3時下校と決めた日だぞ」

しかし、一子は引かない。里緒の初演を祝うようなことはしたくないのだろう。
何処まで・・・な奴だ！俺の想像だが・・・。

「ですが、これは生徒会の会議ですので・・・。大丈夫です。規定の5時までには終わりますから」

なんと、こいつは5時までやる気なのか！

それには、俺が声をあげる前に狭子が声を上げた。
「何も、今日慌てて決める必要があって？
返っていい案が出ないのではないかしら。私は先生の言われる通り、明日にするべきだと思いますわね。皆さんどうかしら」

狭子は、今度は実行委員全員の意見を聞きに出たが、ここで話がまたもつれる。
会議室がザワメキ出すだけの結果となってしまった。

こんな最中にも時間は刻々と過ぎて行く。
既に午後４時になってしまった。

駄目だ。もう、なりふり構わず会議室を飛び出すしかないのか。
宝家先生は一子の担任であり、部活の顧問なのであるが、精悍なのは見た目だけで以外と押しが利かない。
こんなんだから太棒先生にいつもいじられるのだ・・・！

そう突っ込みたくなった時である。会議室の扉のところに立つ宝家先生の右隅で紺色の物体が顔を覗かせた。

ほら、まただ・・・。
それは、紺色のスカートを穿いたお尻が横向きに顔を覗かせているのだ。

そのお尻は完全に姿を覗かせると、前後に3度程動き出す。良い腰の動きだ。
このお尻の持ち主。スカートのヨレヨレ具合で分かる。
塩南先生に間違いない。

一体先生は何をしているのだろうか？
こんな時に・・・。
普段は好意的に見える突拍子もない行動も、このノー天気さにはちょっとイラついてしまう。

その時である・・・。

俺の隣から大きな物音が聞こえたのだ。
派手に椅子が倒れる音である。

会議室内が急に慌しくなる。
まさか、矛（ほこ）・・・。

俺が慌てて隣を見ると、ついさっきまで元気であった矛が椅子から落ちて床に倒れているではないか・・・。

＜つづく＞

尻芝居（後）（前書き）

救世主現る。

尻芝居（後）

？――――

フフ、やっぱさすがやわ・・・。
教員でありながら、現役Ｇ２戦士。それも、次期Ｇ１候補最右翼。
高校生の扱いなんぞは、お遊び半分ってとこなんやろ。ナア、せんせ。

みんな、彼女が現れただけで面白い位に彼女のペースに飲み込まれとるわ・・・。

それに、この矛（ほこ）って子も？ちょっと、ただ者やないかもしらん。
せんせと、何か関係ありそうやないの。

あんなに派手に転んで怪我してないんか？
無茶苦茶な芝居するわ～。熱演賞あげるわ。

そんなことよりもや、なんで、せんせ二人のこと知っとるんやろ？
昨日の”お願いしますの”こと何て、その場におらんと知ってる訳無いんやけどなぁ・・・。　工口君（くぐちくん）が話したんやろか？
いや、そんな筈無いわぁ、それやったら、こんな尻芝居で本人まで騙す必要はないやろ。
それじゃ、これって、ただ先生の勘ってことなん？

ホントそうなんか？
何の為やろか？

まあ、こっちも工口君（くぐちくん）には頑張ってもらわんといかんし、ここは感謝しとくな・・・、せんせ。

―――――？

★☆　第　３３　話　★☆

☆★　尻　芝　居　☆★

★☆　♂（後）♀　★☆

矛（ほこ）・・・。

俺は慌てて席を離れ、椅子ごと床に倒れ伏した矛の元に回り込んだ。

矛の顔色は青白い。元々病弱な為、色白なので普段との違いがそれ程判らないが、多分いつもより青白い顔色だと思う。

「矛、大丈夫か！」

俺の声に、矛はゆっくりと目を開けた。

それに、取り敢えずホッとはするが、瞳を動かすだけで体はぐったりとして動こうとはしない。

こんな時、情けないことにどうしたら良いのか全く解らない。

取り敢えず俺は感情のまま、床と彼女の顔との間に左手を挿し入れた。

俺としては床に押し付けたままの彼女の顔をそのままにはしたくは無かったからだ。

挿し込んだ俺の左手に押し当たる頬が赤ん坊の様に柔らかい。それが彼女の脆（もろ）さを俺に伝えてくる。

やっぱり、実行委員会には俺一人で出席するべきであったのだ。

矛はずっと、無理して会議に出ていたのかもしれない。気付かな

かった自分の鈍感さに腹が立ってくる。

俺が矛を見つめ、そんな思いに顔をしかめていると、

「貧血のようね」

後ろから俺の肩に手を乗せた者がいた。

社会部部長であり、この”へ高ＡＶ祭”実行委員会の審査委員長の穴井狭子（あないきょうこ）である。

「血の気が戻るまで、少しそのままにしてあげた方がいいわね。保健室にはそれから連れて行きましょ」

落ち着いた口調の狭子に対し、何も出来ないでいる俺は、ただ頷くだけである。

狭子は俺の隣に屈み、矛の上履きを脱がせた。そして、用意の良いことに持って来た自分の鞄を矛の脚の下に引いて、少し高くした。

派手に倒れた矛により一瞬にして騒然となった会議室も、次第に冷静さを取り戻しては行ったが、生徒達は立ち上がって覗き込んだり、心配そうに近づいて来たりで、未だ会議の雰囲気とは程遠い。

こんな状況では、無論、生徒会長　稲荷家一子（いなりやいちこ）の始めた身勝手な”臨時の実行委員会”の再開どころではない。

とは言っても、これで会議が終わった訳ではない。一子のことである、会議室の雰囲気が落ち着いたら続きを始めるであろう。ただ、矛はこんな状態だ。それがいつになるか全く分からない。

時間は刻々た経っていく。

俺と、俺のアパートで里緒の距離は遠ざかって行くばかりである。

仮に会議がここで終わったとしても、同じ柔軟体操部の代表とし

て出席している俺が、矛を放って一人帰る訳にはいかない。そう考えると、今日のＡＶ撮影は絶望的と言ってもいいかもしれない。

里緒、ごめん・・・。

事情を知らずに待っている里緒の気持ちを考えると心が痛い。

だが、もう諦めるしかなさそうである。

・・・。

しかし、こんな時に意外にもあの人の行動は素早い。塩南先生が俺と狭子の間に飛び込む様に割って入って来たのである。押された狭子はそれによろめき尻餅をつく。

塩南先生の後ろには宝家先生も続いている。

塩南先生は、全く狭子の行動を無視して、矛（ほこ）の上体を抱き上げて身体を激しく揺すった。

「あぁ～ん、矛ちゃん、矛ちゃん、しっかり！ああ、そうだわン、会議が長くて辛かったのねン。可哀想に。先生の胸でお休みねんねん」

矛の顔が先生の胸元に沈んで苦しそうである。

その矛の顔を、宝家先生が強引に塩南先生の胸から引き離した。

呼吸を取り戻した矛の顔に安堵が浮ぶ。

不満げな塩南先生は、

「え～い！こうなったら、今日の会議はこれでおしまいよン」

その腹いせを実行委員会にぶつけた。のだろうか？

気合の入れ所の意味が分らないが、塩南先生が会議を打ち切る宣言を、いきなり宣（のたま）った。

その一方的な発言に面食らっていたのか、一時、生徒会長　一子は呆気に取られていたのであったが、思い直す様に慌てて首を左右に降ると、言葉を発した。

「先生、病人は保健室へ連れて行きますから、会議はもう少し続けさせて下さいませ。”へ高ＡＶ祭”までに日数は、そんなにないのですから・・・」

しかし、そんな言葉で到着地点を変える塩南先生ではない。

「あら、会長タン。会議は病人が出たら終わりって決まったのよん」

そんな訳のわからないこと言い出す。

「そんなこと、全く聞いておりませんが、いつ誰が決められたのですか」

当然、一子もそれに納得する訳がない。

「今日、高速に校則として決まったのよん。ねえ、宝家せんせ」

塩南先生は、”数×質”で勝負が決まることを良く心得ている。すかさず、宝家先生を巻き込んだ。

「ああ、はは、いや、は、はい。」

塩南先生に睨まれて、いや、微笑みを投げ掛けられた宝家先生は、止む無く肯定してしまう。

これが、格の違いと言う物だろうか・・・。

「そんな無茶ですわ・・・」

一子も抵抗を試み、宝家先生に懇願視線を合わせるが、独り言程度に呟いただけの言葉では勝負は既についている。塩南先生の締め

の言葉が待っているだけであった。

「そうよん、会長タン。
無茶なものなの。校則だの条例だの、法律だのは知らない内に勝手に決まっていて、その存在もしらない内に罰則を受けてしまうものって、昔っから相場は決まってるものなのよん。
会長タンも罰を受けちゃったら大変よん」

なるほど・・・。と納得もするが、かなり強引と言うか、無茶苦茶である。それに、本当にそんな校則が今日決まったとはとっても思えない。
宝家先生の顔がそう言っている。

「・・・」
さすがの気の強い一子も、無茶苦茶過ぎて何も言えない。それを尻目に、

「は〜い、みんな一！そう言う訳で、今日はちゃんちゃんこだから、気を付けて帰ってねん。
みんな、ご・苦労ちゃん。矛ちゃんは先生達にまかせてねん。ねえ、宝家せ〜んせ」

事は強引に進んでいく。ただでさえ、みんな会議等早く終わらせたいところに、塩南先生の言葉である。
みんなは喜んで従うに決まっている。

「『は、はい』」
塩南先生の指示に返事をしながらも、実行委員達は一応、一子の顔をチラチラと伺いながら席を立ち始めた。
その視線から目を背けて一子も席を離れ、会議室を後にしたが、

不満をアピールする様に無闇に物音をたてている。

しかし、そんなことは塩南先生の眼中には全く入ってこない。
今度は俺に目を向けて来た。俺に何かあるようだ。

「さて、くぐっちゃんも、帰って大丈夫よん」
そう言うが、しかし、

「でも、矛が・・・」
ここで、簡単に帰ってしまうなんて人として出来る訳がない。

「あ～ら、くぐっちゃん。先生じゃ、頼りないか知らぁ～ん」
先生は珍しく不満を装って頬を膨らませるて見せる。

「そんなことは、ないですが・・・」
あり難いことに、その顔が俺を帰り易い様に威圧してくれる。

「ん～ん、そうでしょ。、急いで帰ってらっしゃいねン。狭子たんも帰って大丈夫よん」
そう言って先生は、俺と狭子に向かって尻を大きく2回振った。

”シッシッ”と追い払う感じにだ。
確かに矛を抱いているので手は振りにくいだろうが、普通、尻を振るだろうか?
らしいと言えばらしいが・・・。

狭子は素直に、挨拶をして帰ろうとしている。
既に、先ほどの塩南先生の一声に、会議室の中は早くも数人しか残っていない。

俺の行動の結論も既に出てしまっているようなものだ。
有り難い限りである・・・。

今なら、まだ間に合うのだ。
もちろん、里緒が待っていてくれればだが・・・。

思い直した俺は、

「それじゃあ、先生。矛をお願いします」
そう言い、鞄を持つと、気持ちは急に家路への焦りに変わっている。

「わかったわよん。気をつけて急いで帰ってねン」
塩南先生は楽しそうに、まだ矛を抱いている。

「失礼します」
俺が踵を返そうとすると、

「さようなら、ご苦労様」
と言ってくれた宝家先生に対し、残りの二人は無言で俺に向かって尻を振っている。

「はっ・・・」
その華麗に同期した動きに、一瞬、間を置いてしまったが、俺の対応能力も格段に上がっている。それに手を振って応え走り出した。決して尻は振らない。

会議室を出ると廊下を全速で走り、階段を2段飛びで降り玄関に向かう。

走りながら、考えてみると、塩南先生はともかく、矛が・・・尻を振る？

いくら、血の気が戻ったとは言え、そんな子じゃないだろう。それに、倒れたばかりなのだ。そんなことが出来る空気では、とっても無いと思うのだが・・・。

まさか、嘘だったのだろうか？

しかし、嘘であんなに派手に転べないだろう。それに、そこまでする意味も無い。

矛の本性は、意外とひょうきんな奴なのかもしれない。

俺は結論の場所は、そこで納めることにした。

俺が玄関に着くと、先に玄関に行っていた狭子が俺に声を掛けた。

「バスは15分来ないわよ。」

すれ違い様に狭子が、俺にそう言葉を投げた。

「うん」

俺は振り返って頷き、笑って見せた。意味は判らないが、狭子も嬉しそうに笑っていた様に見える。

何かハッピーな気分だ。

学校を出て、腕時計を見ると午後4時15分を回っている。

俺のアパートまでの距離は2kmちょっとだ。何とか午後4時半までには帰ってみせてやる。

その為に俺は、自分の世界での高校の3年間を陸上部で過ごしたのだ。そんな気持ちになってくる。

とにかく今は、その体力が役に立ちそうだ。

待っていてくれ里緒。必ず、お前を抱いてやる！

俺は２０００m走の新記録を誓った。

この距離、始めての距離だから全てが新記録であるのだが、それは俺の里緒への気持ち（エロい気持ちも含めて）として捉えて欲しい。

しかし、このエロさを含む誓いが俺にこれから待っていることを想像させてしまった。

里緒の裸体が脳裏を横切り、急激に自然界の”元気”が俺の身体の一部位に集められていくのを感じて来たのだ。

これが元気玉、いや、元気棒と言うやつなのか・・・。

元気棒は、次第にパワーを増し、急成長をしていく。

もし、里緒が待っていてくれれば、俺は”んなことやこんなこと”と言うことに絶対になるのだ。

これは、このＡＶ界ではビジネスであり、里緒の子供の頃からの夢なのだ。駆け引き等面倒なもの抜きで俺は、大義名分”あんなことやこんなこと”がで出来るのだ。

いよいよ、時は来るのだ。ただ、里緒が待っていれくれればだだが。

待っていてくれるだろうか？いや、待っていてくれていると信じよう。

しかし、このスリル、ちょっとやば過ぎではないか？

そう思っただけで、スリルと言う興奮が腸内を潤していくのが、腹の弱い俺には経験則的に分かってしまう。

大丈夫か・・・、持つだろうか？

それに、”カメムシくん”と言うカメラに撮られた俺の元気棒と性癖は、全ＡＶ界ならず、他１５局の異世界ＡＶネットで視聴が可能なのである。俺は世間の眼にさらされて里緒と絡むのだ。

そう思うと、俺の緊張は更に腸を活発に動かしていく。

ゴロゴロ・・・。

これは、この活性化はこの先不味いかも・・・しれない。

＜つづく＞

女　優（前書き）

工口（くぐち）は、学校を出て、里緒の待つ自分のアパートへと急いだ。
ＡＶ撮影を行う為に・・・。

女優

£―――――

よ・ろ・ず？

えっ！いま、”よろず”って言ったの？

うそ、うそ”萬（よろず）”って、お母さんの女優名といっしょ・・・

何で、何でお母さんと同じ名前を？

その名前をどうして？

どうして、使おうとしたの・・・。

お母さん・・・。

お母さん、今どうしているんだろう。

私をおいて何処に行っちゃたの。

・・・・・・。

私の母の女優名は”萬香出（よろずかおで）”と言う。

その苗字に当たる”萬”は母の”家号（かごう）”で、香出は本名である。

最近こそ少なくなって来たが、少し前までは通常俳優名の苗字には”家号”を付けるのが一般的であったのだ。

家号とはその一族が俳優名や、商業上の名前として引き継がれて来た一族の称号である。

母の“萬（よろず）”と言う家号はとっても珍しい家号であった。私は今まで同じ家号を聞いたことがない。

それなのに、彼は何故その名を口にしたのだろう？

お母さんのこと、何か知っているのだろうか？

いや、知っている訳が・・・、あるはずがない・・・。

彼は異世界からスカウトされて来たばかりなのだから。

なのに、なのに何故・・・偶然？

・・・・・・。

わたしは、私は動揺をしてしまい、自分を見失ってしまった。

たった今決心していたことも、いつもの強がることさえも全て何処かに飛んで行ってしまった。

これから、ＡＶ女優としての初演を目前にして・・・。

ずっと、夢を見てきたＡＶ女優であるのに・・・。

折角、恥ずかしさを抑えて、決心したのに・・・。

・・・・・・。

私は、昨日の“お願いします”で相方が決まってから、いざＡＶ

ビデオを投稿出切ることが決まってから、悩み続けていた。
そんなに悩むとは自分でも思ってもいなかった。

ずっと、夢見て来たことなのだ。恥ずかしくても結構簡単に割り切れると甘く考えていた。しかし、それは私にとって、そんなに簡単に割り切れることではなかった。
見ず知らずの人、友達、先生、お祖父ちゃんに私の体を見せる。体の全てを晒してしまう。
もしかすると、今まで誰にも見せたことの無い快楽を晒してしまうかもしれない。
それを見られてしまうのである。

でも、私は頑張ろうと思った。恥ずかしさ何て乗り越えようと思った。
幼いころから夢見ていたG1戦士になる為に。お母さんに初めて告げた私の目標を達成する為に。

だから、私はやっとの思いで自分の心に言い聞かせたのだ。
言い聞かせたつもりだった・・・。

でも、所詮内気な私の性格では無理があったのだ。
母の女優名を聞いただけで、簡単に動揺してしまい、固く決意がしたことがどこかに飛んで行ってしまった。

本当は初演から逃げたかったのだ・・・。
誰かに助けを求めたかったのだ・・・。

本当は、そんなことずっと前から予想出来たことであった。
私には無理だって言うことを。
でも、憧れのＡＶ女優に成りたいと言う気持ちが、それとは別に

成長し続けて行ってしまっていた。だから、自分の本音を否定し続けて来たのであった。

そう、小学生の高学年に成った頃には既に人前で裸になることが恥ずかしかったのだ。他の女の子の様に男の子の前で平気で裸になることが出来なかった。それは、年を重ねる毎に強くなって行った。

しかし、幸い部活動では裸になることが無く、今まで極力それを隠すことが出来ていたのだ。

学校ではそれでも何故か私は人気があり、通用していたのだ。

高校では3年生になって、上級生がいなくなると学年トップにも成れたのだ。

だから、こんな性格でもいざとなれば、ＡＶビデオ撮影になれば、私だって裸になることが出来ると思っていた。

でも、今回ではっきりと分ってしまった。

私の中ではそれはそんなに簡単に割り切れるものでは無いと言うことを。

どうしよう・・・もう初演が始まると言うのに・・・。

本当は演技なんか出来ないなんて、言えはしない・・・。

裸になんかなれないなんて言えはしない・・・。

ＡＶ女優になんか、成れはしないなんて、とっても・・・。

・・・・・・。

私の幼い頃からの夢も、強い心も、何処か遠くへ消えて行ってし

まった・・・。

私は、わたしは素の内気で、恥ずかしがりやで、甘えん坊の私に戻ってしまった・・・。

――――£

★☆　第　３４　話　★☆
☆★　♂　女　優　♀　☆★

里緒、頼む。待っていてくれ・・・。

学校を出た俺はそう願いながら、無我夢中で走り続けた。陸上部で常に気をつけていたペース配分等、全く無視をして走ったのだ。どんなに全力で走っても俺は絶対に倒れはしない。そんな根拠のない自信に溢れていた。倒れるとすれば、今、起こりかけていた持病の緊張から来る下った腹の痛みであろうが、走っている内にそれすらも忘れていた。

丘の上にある”へ高”の校門を出ると急勾配の坂が続く。それを一気に駆け下り、住宅地に出ると人通りの少ない裏通りを選んだ。

今日の俺は体が軽い。これであれば里緒の待つ俺のアパートまで１５分は掛からないだろう。
お腹も大丈夫かもしれない。そう思った。

しかし、その心の隙が俺に余計な妄想を与える結果となってしまった。

妄想の里緒が頭の中に出没してしまったのである。

引き締まった肉体でありながら、程良い加減に脂肪の丸みを帯びた裸体が脳裏をウロウロし始めたのである。

その視覚的妄想は更なる扉をこじ開け、肉体的な接触への妄想へと場面を変えて行く。

それは、無論俺のオイタな部位に別の人格を与え始めることとなるのは言うまでも無い。

本番行為はＡＶ界のご法度なので不可能であるが、初めての女の子との裸の接触だ。いや、女の子だけでは無い。全生物を含めて初めてである。

その初めてが里緒であると言うのは、この上ない幸運ではあるのだが、それは同時に、妄想だけでもオイタな部位を簡単に平常の一線を越えさせてしまうことでもある。

ただ、その部位だけであれば、多少走り辛いだけで済むのだが、それはその部位だけでは留まらなかった。俺の弱点である腸内に余計な水分をもたらす結果となったのだ。

その水分は、音を立てて内部の固体を崩壊させていく。

（ゴロゴロ・・・。）まずい・・・。

経験上、腹痛の我慢は3度までが限界だ。こんな所で、一回目の腹痛を起こしてしまっては、里緒との本番（と言ってもH的本番は出来ないが）を終えるまで持ちそうもない。

慌てて他の事を考えようとするが、一旦始まった“妄想”と言う快楽にブレーキは効かない。更に、夢は勝手に先走って行く。

妄想上の里緒は俺の思うがままだ。彼女との絡みに、俺の性癖が踊りだす。

一糸纏わぬ姿の若い男女。上とか下とか前後ろ。あんあん、のんのん、そんなこと。
俺はＡＶ監督になった様に妄想に対し客観的に外から演技始動を加えていく。

んっ、ＡＶ監督？

ＡＶ？？

余計な言葉から、余計なことを連想してしまった。
そうだ、里緒の心身のことばかり考えていて、現実に行われることに対して疎(おろそ)かになっていた。俺は全ＡＶ界のみならず系列の異世界を含め、自分の裸体と性癖をさらすことになるのだ。

一体、俺の性癖は人並みなのだろうか？

それにこの世界でのサイズ的には？

不安だ・・・。

しまった！
またもや、余計なことを考えてしまった。

と、思ったがもう遅い。この思考が俺に半端無い緊張をけしかけた。
俺の両足から血の気が引いていき、身震いが始まる。お尻の穴ではギョウ虫でも沸いたかのようなむず痒さ。
この興奮的緊張は、俺の腸内活動にとって最悪である。

と、思いながらも今の俺は限界まで走るしかないのだ。

しかしだ。直ぐに俺の脚は止まることとなった。第一回目の発作はやって来てしまったのだ。

急激に襲う腹痛と便意に頬の悪寒。
俺は左手でお腹を暖め、じっと耐える。
もちろん、一ミリも漏らさないように、括約筋に気の緩みを見せたりはしない。

グッとお腹に力を込め、絶えること暫し。
暫し・・・。

静まれ～、静まれ～・・・（肛門様）。

事は静かに去って行く。
よし、切り抜けたぞ。やはり一度目は統計上、大丈夫なのだ。

一度目は、事無く去って行った。今は時間に猶予が無ければトイレも無い。
去って行った隙に距離を稼がなければならない。俺のアパートはもうそんなに遠くは無い。俺は再び走り出す。

さらに走ること数分。もう、俺のアパートは近い！

その角を曲がれば・・・。
見えた！４階建ての白壁に赤い傾斜のある屋根。まだ数日しか住んでいないが、俺がこのＡＶ界で住むアパートだ。俺の部屋は最上階の南西角である。
住んだ時は最上階であることに喜んだのだが、今はそれが恨めしい。

俺は里緒がまだ居てくれることを願い、最上階の南西の角の茶色い木枠の窓に目を向けた。
すると、心臓が張り裂ける程にドキドキと高鳴り出したのだ。
その高鳴りは、全速で走っているからだけではない。窓が、窓が少し開いているのだ。

里緒は居る。絶対に俺を待っていてくれている。
そうだ、そうに決まっている。

幼い頃からの夢だったんだ。それに、今の里緒は柔軟体操部も背負っている。可能性がある限りこの俺を待っていてくれるに違いない。

俺の疲れきった体にパワーが蘇って来た。ラストスパートにも加速がつく。
もちろん、これ以上腹の調子を悪化させないように、左手でお腹を暖めることは忘れてはいない。

俺はアパートに入ると一気に階段を駆け上り、扉の取手を握った。

それに想い乗せて、“ガチャッ”と、回す。

「里緒、頼む。居てくれ!!」

何だろう!この瞬間・・・・。
この充実した高揚・・・・。
でも余り高揚をするな。お腹に良くないぞ。

こんな時に、何で俺はこんな客観的に自分を分析しているのだろうか。

不安も、緊張も、興奮も、腹痛も含めて過去を見ている様なそんな気になっている。全て決まってしまった過去を見ている気がする。

俺はその過去を記憶から探ろうとする。里緒がそこに立っている記憶を探そうとする。でも記憶にあるはずがない。これは現実に今起こっているのだ。

事実はこれから決まるのだ。

だから、もし里緒がドアの向こうに居てくれたら初めに言う言葉も今決めることが出来んだ。

そうだ、昨日と言う過去に、”お願いします”で言えなくて里緒に怒られた言葉を・・・間もなく来る未来に言おう・・・。

未来だからこそ、自分の意思を実行出来るのだ。

ドアを開けた瞬間、俺は確信した。
里緒の香りした。人の気配を感じた。
そして、赤い靴が一足揃えられていた。

俺は第一声に決めた言葉を言った。

「遅くなってごめん」

１ＬＤＫのアパートは玄関から、ＬＤＫ、寝室へと一直線上である。
里緒はＡＶシステムのあるリビングで、こちらを向いて立ってい

た。

俺は怒鳴られることを覚悟していたが、里緒は俺の言葉に頷くと、理由すら聞いて来なかった。

「早く、時間がないから」

里緒の第一声は、前向きな言葉であった。目付きには初演に対する闘志が見てとれる。

実は俺は心配していたのだ。このＡＶ界と言う幼い頃から裸体を見ることの出来る環境の中で育ったにも関わらず、里緒は異様な位に自分の身体を見られることに慣れていないのだ。

柔軟体操部の練習でも裸になることはないが、胸元の露出や喰い込みのある姿になることは頻繁だ。

そんな時、里緒は俺の視線に気づくと俺の視界から外れようとするのである。

この行動は、他の女の子達には殆ど見られない行動なのである。

気になっていた俺は、安心しながらもつい聞いてしまった。

「覚悟は出来てるか」

言ってから余計な事を言ってしまったと思ったが、里緒はそれに怯(ひる)まず、怒らず、ただ頷いた。

いける。これならいける・・・。

里緒、俺はお前と最高の絡みを演じて見せる。

本能のままに・・・いや、演技として・・・。

そして、里緒に導かれるままに”ＡＶ子機”（スマートフォンの様な外見で、ＡＶ界のビデオ撮影の組織”ＪＲＡＶ会”のホストと、文字通信のみが出来ると言う中途半端な先端機器）を出し、ＡＶ撮影登録を始める。

まずは大会名と、”お願いします”で相方が成立した時にもらった”カップル番号”を入力して、”カメムシくん”と言うカメラを呼ぶのだ。

カメムシくんは賢い。ＪＲＡＶ会が俺達の持つＡＶ子機から認識した現在地を、無線指示によってタクシーの様に、最寄のカメムシくんが俺達の元へ撮影に来てくれるのだ。

すると、後は作品名と演者名、それに”ＬＩＶＥモード”の有無を選択し、お互いの子機でスタートの指示をすれば良いだけだ。

そして、指示から１分後には撮影が始まるのである。

この”ＬＩＶＥモード”を選択すればリアルアップロード、つまり実況放送をしながらのビデオ撮影となる。その為、当然一切の編集が不可能なのである。

ただ、デメリットばかりでは無い。実況の場合は通常１アクセス５０ペンスのところ、２割増しの６０ペンスになるのだ。さらに、ライブマニアがいらっしゃるのでアクセス数も上がるらしいのだ。

作品時間は新人戦の為１５分と短い。本来は無難に録画にしたいところだが、今回は時間が無い。

もし、カメムシくんの来るのが遅くなり、撮影後に配信操作をする時間が無くなってしまっては大変だ。

ここは、里緒と相談の上、”ＬＩＶＥモード”を選択することに決意した。

里緒が、俺と自分の子機を使って”カメムシくん”を呼んでくれている間に、俺は里緒の用意してくれた変装用の衣装に着替えるとする。

里緒は、昨日の“お願いします”の前に役場の窓口の住民課の女性からもらった変装用のカツラも一緒に用意してくれていた。

里緒に抜かりは無い。っていうか、俺の部屋の中を探したのか？

今は時間が無い、それは後で聞くとしよう・・・。

それよりも、何故、変装をするのか？と言うと、それには理由があるのだ。

学校代表では無い俺が、ビデオに出演していることが判れば、俺が相当に特別な人物であることが判ってしまうからだ。

”へ高”の校長の話では、俺が異世界からスカウターによりスカウトされたことが判ると大変な騒ぎになるらしい・・・。

俺は着替えを始めた。本来、着替える前にシャワー位浴びるのが相方に対する礼儀だがそんな暇はない。俺は汗だくの頭にＡＶ撮影用のカツラを被った。眩いばかりの銀髪である。そして、里緒の用意してくれた衣装は真っ黒だ。

俺はそれに着替えようとしたが、カツラの横に真っ赤なアイマスクが・・・。

それはＳＭの女王か、はたまた、ド○ン女様（古い）を思わせる赤いアイマスクである。

これを本当に付けるのか？
と思ったが、遅れた俺に異議を言う権利は無い。

俺は既に先走っている”元気くん”を見せない様に里緒に背中を向け着替え始める。何処で用意したのか黒のビニール地の短パンに、へその出たこれまた、同じビニール製のベストである。
これでは、ハードゲイではないかと思ったが、それには赤いマントが余計である。

俺がそれを手にして、里緒の顔を窺ってみると・・・。
真剣に頷いている。やっぱり付けなければ駄目なようだ。

俺はビニールの短パンに”元気くん”を辛うじて押し込み、マントまで付けると、ハードゲイではない。ド○ン女様ならぬ、ドロン男様の出来上がりだ。
一体里緒は何処に向かおうとしているのだろうか？

俺は不安に思ったのだが、里緒は俺の姿に満足そう2回頷くと、説明を始めてしまった。

聞くしかない・・・。

聞いて見ると、残念ながら演技内容と赤いアイマスクとマントには接点が全く見られなかった。
それに俺は一先ず安心だ。

良かった・・・。

里緒が説明してくれた演技内容は、服を脱いでの密着柔軟体操である。無難なところである。これであれば、部活の延長線上である。

打ち合わせは2分で充分だ。

ただ、何処まで脱ぐかは里緒の口からは出なかったが、恥ずかしがりやの里緒の口から出なかったところを見ると、恐らくスッポンポンと言うことで間違いないだろう。

いかん、ビニパンが妙な形に伸びそうだ・・・。

そんな、ビニール系の俺に対し、里緒の姿はと言うと、俺の風変わりな格好に対し、柔軟体操部顧問の塩南（しおな）先生の今年度の方針通りで制服のままである。彼女の感性を疑うが俺としては嬉しい気もする。

着替え初めてから約5分後、開けていた窓の隙間から“カメムシくん”が進入して来た。残り時間は２０分と少々。

後は、題名と演者名を入力すればスタートだ。

演者名とは俳優名とは違い、作品ごとに付ける自分の名前である。（”小〇家になろう”で言えば、俳優名は”ユーザーネーム”で、演者名は”作者名”である）

作品名は里緒が考えてくれていた。

良く分からないが”初めての柔軟”だ。体操ビデオと間違えそうだが、この世界にはそんなビデオは存在しないＡＶビデオしか存在しないのだ。

俺としては里緒が良ければそれで良い。

里緒は本名をそのまま演者名にしたが、素性が知れては不味い俺はそう言う訳にはいかない。何か考えなければならない。

俳優名に決めた”福山回春（ふくやままわはる）“と言う、強引な名前のままでも良いのだが、念には念をだ。

「早く、名前を入れて」

里緒の言葉に考えては見るのだが、いきなり考えても良い名前は思いつきはしない。

だが、時間が無い。こうなったら面倒だ！

取り敢えず、今日のところは小さい頃から俺を可愛がってくれた、お袋の父親、俺の祖父さんの名前”萬好一（よろずこういち）”にすることにした。

「じゃあ・・・」

と言い、ＡＶ子機に俺が祖父さんの名前を入力していると、それを覗き込んでいた里緒から、震えた声が漏れた。

「よ・ろ・ず・・・」

「何か、おかしい？」

里緒の顔覗くと、先程までキリッとしていた里緒の表情が、遠くを見る様に焦点が合っていない。

そして、

「よろず・・・」

と繰り返す・・・。

どうしたんだ里緒、祖父さんの名前がそんなに気に入らないのか・・・？

＜つづく＞

秘すればエロ（前書き）

いざ、撮影と言う時になって、里緒の様子がおかしい。
俺はこのまま撮影を続けるべきなのか・・・。

秘すればエロ

£――――

私が人前で裸になることを恥ずかしいと思うようになったのは、この時からだったかもしれない。

こんな時に、どうしてしまったんだろう。

私はふとそれを思い出してしまった。

そうだ、そういえばあの時、お母さんは・・・。

・・・・・。

「里緒は甘えん坊さんね、里緒はＧ１の戦士（じょゆう）さんになるんでしょ」

私が４歳の時の暑い夏の日、母がいなくなる数日前のことだった。

母は私の頭を撫でながら、そう言ったのだ。

私はその甘えん坊と言われたことが恥ずかしくて、いつものように大きな声で返事が出来なかった。

「うん・・・」

口ごもってしまう。

「お母さんは甘えん坊のＧ１戦士（せんし）って聞いたことないなぁ」

今まで、私が”Ｇ１戦士になる”と言うと喜んでくれたことしかなかった母から初めてそんなことを言われ、ショックを受けてしまった・・・。

・・・その日は、”酉センターモール”と言う27部そ地区の最大のショッピング街に、久しぶりに母と一緒に買い物に来ていた。久しぶりと言っても、今の私にはそれ以前の記憶は、それ程残ってはいない。だが、久し振りだったと言う記憶は、はっきりと残っている。

母と私は買い物の途中で休憩をする為に、噴水のある広場に寄ったのである。そこには、買い物に来た沢山の人が集まっていて、結構大きな子達も裸で水遊びを楽しんでいた。

幼い私も噴水の中で遊ぼうと思い、迷わず裸になろうとしたのだった。

そして、お気に入りの苺柄のパンツを脱ぎ、母に渡そうとしたその時のことである。

「あー里緒ちゃん、もう直ぐ5歳になるのに、お外で裸になって恥ずかしいんだぁ」

母は本当に恥ずかしそうに顔を赤くしてそう言ったのだ。それが、幼い私には不思議であった。

「なんで、恥ずかしいの？」

私はその意味を素直に聞いてみた。すると母は、

「ほら、里緒ちゃんの大切なところが丸見えだよ」

そう言ったのだ。

「大切なところ？」

その時の私にはそれが何処なのか全く検討もつかない。すると、

「そこはね、あかちゃんを産むところなの」

母は裸の私の前に屈み、私の股の間を指さした。

「あかちゃんを?」

私は大声を出して脚を広げ、自分の股を覗き込んだ。

初めて赤ちゃんを産む場所を知った私には、ただただ、驚きであった。

「そう、女の子はね、そこから赤ちゃんを産むのよ」

「ここから赤ちゃんを産むの!」

私は自分の股を覗き込んで指さした。幼い私にはそのことが不思議でならない。

驚いている私に、母は微笑んで静かに続けた。

「そうよ~、そこから赤ちゃんが出てくるのよ~。

それはね、女の子だけに来ることなのよ。

女の子はね、あかちゃんをつくれると言う最大の武器を持ってるの。

だから、そこはとっても大切なところなの」

「”ぶ・き”?」

母はさらに私には理解のできないことを言って来た。幼い私にも

今日の母はいつもとは違っていると思った。

「あかちゃんはね、お父さんになる男の子が女の子のそこに興味を持たないと出来ないの。

男の子が、そこに興味を持つことによって、お腹の中に赤ちゃんが宿ってそこからあかちゃんを産むの」

「ふん～っ」

私は初めてまじまじと見た自分の股の間を指で突いてみた。少し気持ち良かった気もする。

そんな私にも真剣な表情で母は続けた。

「その為に神様はね、”男の子達が女の子達のそこに興味を持つように、大好きになるように”って、男の子の体の一部におまじないをかけたの。だから、そこが特別な場所になったのよ。

男の子を惹きつける特別な処だから、最大の武器になったの」

「ふん、ふん」

「最大の武器だから、大切に取って置いていざって言う時に見せないと。簡単に見せちゃもったいないでしょ。

ねぇ」

母の説明に、私はなんとなくだが大切な処だというのが分かった気がした。しかし、私よりも大きな子達が裸になって、噴水の中では遊んでいた。

「裸の人がいっぱいいるよ。昨日観たビデオも裸ばっかりだよ」

「みんなはね～、それに気付いてないんあだなぁ～。
何となくでも良いの・・・、それに気付かないとG戦士にはなれないのよ」

幼い私でも、母がG3の女優さんであることは知っていた。昔ビデオで凄く人気があったと誰かが言っていたのを聞いたことがあったのだ。

更に母は、

「”大切なところ”はね、頻繁に見せてしまうと、だんだん飽きられてしまうの」

と、ゆっくりと私に告げた。

そんな大好きで尊敬する母が言うのだ。私は凄く大変なことを聞いてしまった気になって、そわそわして来た。

「飽きられちゃうの」

それは大変だと思った。

「そうよ～、”大切なところ”って飽きられると脆(もろ)いものなの。所詮はおまじないにに掛かった男の子の妄想なのだから・・・」

「”もうそう”って何？」

「勘違いかな～」

母は少し考えてそう言った。

「女の子は”大切なところ”の周りが、一番魅力的なのよ。”大切なところ”はほら、里織ちゃんもビデオで見るけど、美しくはないでしょ。

だけどね、隠すと男の子には神秘で一番魅力的な処に思えてくるのよ。

隠せば隠すほど抜け出しにくい勘違いに陥るの。

でもね、あんまり頻繁に見せてしまうと飽きてしまってね、大したことがないことに男の子達が気付いてしまうの。

そうなったら、大変!!

女の子の周囲の綺麗な部分を沢山見せてね、男の子達をメロメロに惹き付けておいて、いざ中央の最大の武器で、”とどめだぁっ!”って時に、がっかりされちゃったら恥ずかしいでしょ。

”大切なところ”が飽きられちゃうと、女優さん達の力は無くなっちゃうのよ。そしたらん、いい演技は出来ないわね。

何で神様はそう作ったんだろうね~。

きっと、理由はあるのよね~。

きっと・・・」

母は何かを考えているようだった。そんな母が何故か遠くに見えてしまい、急に心配になった私は、いきなり母に抱きついた。

すると、母は私の頭を撫でながら、

「里緒ちゃんは甘えん坊さんね～。里緒ちゃんは、Ｇ１の戦士（じょゆう）さんになるんでしょ」

「うん」

「お母さんは甘えん坊のＧ１戦士（せんし）って聞いたことないなぁ」

私は、いつも自分が甘えていることは幼いながらも分かっていた。
それを初めて指摘されて、Ｇ１戦士を引き合いに出されて、ショックを受けてしまった。
その私に母は毅然として改めて聞き直したのだ。

その時の母の大きな”黒い瞳”が今でも強く心に残っている。

「里緒ちゃんは、Ｇ１戦士になりますか！」

「はい」

私は甘えてばかりいるせいで、Ｇ１戦士になれないと大変だと思い、挽回とばかりに今度は元気良く返事をした。
幼い私は引き締まった気持ちを体感して、母の顔見上げた。
初めて、恐る恐る見上げた。
すると母は、優しい微笑で言ったのだ。

「だったら、まだ取っておかないと。簡単に見せたらもったいないぞ～」

私の鼻の頭をくすぐりながら・・・。

凄く心に入り込んで来た。

笑っていたけど、母の真剣さが伝わって来たのだ。だから、私も

「ハハハ、見せないでとっておく」

くすぐったくて笑いながらだったけど、真剣に応えた。それに、母は私を抱きしめて言った。

「そう、覚えておくのよ。
”最大の武器”はねえ、”ここ”っていう時にだけ、ちらっと見せるの。それが一番魅力的なのよ」

「みりょくてき」
「そう、魅力的。一番綺麗で、可愛く見えるの」

「うん、里緒、わかった！」

見上げると、母は私の言葉に大きな黒い瞳で優しく微笑んでいた。優しく大きな”黒い瞳”で・・・。

そして、母はこんなことを、

「でも、この世界はビデオがその自然の法則を、子供の内から、余り錯覚する前から、ずっと見せてしまうなんて・・・」

呟いていた気がする・・・。

私はそれから、他の女の子みたいに人前で脱ぐことが恥ずかしくなったのかもしれない・・・。

――――£

★☆　第　３５　話　★☆
☆★　秘すれば♂　☆★
★☆　♀　エ　ロ　★☆

「里緒、どうしたんだ？」

俺はこのビデオの演者名を、母方の祖父さんの名前をそのまま取って”萬好一（よろずこういち）”で登録しようとしたのだったが、里緒がその名を気に入らない様子だったので、咄嗟に思いついた”エロン棒（ぼう）様”で登録を行った。

それでも里緒の様子は全く変わらない。明らかに俺がアパートに戻った時に見せた決意の眼差しも、前向きな行動も全く影を潜めてしまっている。

いざとなって、緊張してしまったのだろうか？

それも当たり前のことだろう。でも、俺のせいではあるのだが、再び心の準備が整うのを待っている暇など今は無いのだ。

こんな時こそ里緒が一度見せた決意を信じ、俺は男として彼女をリードしなければならないのではないのか？

よし・・・。

「里緒、始めるぞ！」

男としてのプライドが柄にもない言葉を吐かせた。そして、その勢いが手伝って、俺は自分に酔いながら二人のＡＶ子機のスタートボタンを同時に押すに至る。

俺の強引な態度にも里緒はやはり俯(うつむ)いて黙ったままだ。

良かったのだろうか？

慣れないことはするものでは無かっただろうか？

だが、もう後には引けない。もう取り消しは効かないのだ。

”カメムシ君”が赤く点滅を始めている。

１分後に青くなると、ＯＮ　ＡＩＲだ。

３台やって来たカメムシ君は自動でベストポジションへと移動して行く。

里緒ばかりではない。余りの心臓の強振にこの俺も倒れるのではないかと言う不安が過る。だが、俺は平静を装い立ち上がった。そして、里緒の手を取り立ち上がらせる。

俺は男として里緒をリードすることを決めたのだ。

里緒は辛うじて立ち上がることはしたのだが、下を向いたままザリガニの様にジリジリと後ろに下がってしまう。さほど広いとは言えない部屋の中で、二人の間には１メートル以上の距離が開いてしまった。

里緒の膝は曲がり、明らかに内側を向いている。俺がいくら里緒を見つめても目を合わせることすらも出来ない。

どうした、里緒。らしくないぞ。

お前の決意それだけのものだったのか？

お前の夢の一歩はそんなものなのか？

「里緒、いつもの・・・」

里緒に励ましの声を出そうとした瞬間、カメムシくんが青く点灯をしてしまった。

ついに撮影開始だ。

”ＬＩＶＥモード”生放送を選択してしまった以上、編集は出来ない。この一瞬一瞬が、放映されているのだ。

里緒の構想でいけば、最初は他のＡＶビデオ通りにお互いに自分の服を脱ぎ捨てると言う段取りである。しかし、里緒は明らかに震えており、手は力なく下がっている。ブラウスのボタンさえも外す気力があるとは思えない。

どうしたらいいんだ・・・。

「里緒・・・」

俺は小声で、里緒の名前を呼んでみた。カメムシくんのマイクに音声を捕らえられることも覚悟の上である。取り敢えず、里緒の顔色だけでも窺わないと先には進めないからだ。

その声に里緒は少し顔を上げて俺を見てくれた。俺の声は取り敢えず聞こえているようではあるが、その目は完全に泳いでいる。

「大丈夫か?」と口から出掛かったのだが、その言葉をマイクに捕らえられる訳にはいかない。

俺は慌てて言葉を飲み込み思考する。

中止すべきか?それとも、続けるべきか?

里緒、俺のことはいい。次の大会で頑張れば良いことだ。だが、お前はここで失敗出来ない状況じゃなかったのか？

きっと、そんな過去の話をしたところで、今の彼女には何の助けにはならないであろう。

そんな意味のないことを考えているだけでも、時間は確実に過ぎていく。

何か、方法はないのか・・・、取り敢えず着ているものだけで脱がさせなければ・・・。

んっ、”脱がす？”その言葉に俺は閃いた。

そうだ。緊張しているのであれば、俺が先に脱いで見せよう。

何食わぬ顔で脱いでみせるんだ。そうすれば里緒も落ち着きを取り戻し、強い心が戻ってくるかもしれない。

俺はドキドキと高鳴る心臓に気合いのみで対抗し、度胸を決め・・・一番無難な靴下から脱ぐことにした。

靴下からと言うのを、決して弱気になったからではないのだ。プールに入る前に、体に水を掛けて慣らすのと同じことと思ってもらいたい。

そして、ハードゲイか、うら若き乙女のの様なピッチピチのビニール製のベストに手を掛け、更に惰性に任せてこれまた同じ材質でピッチピチの黒の短パンへと移行する。

これで、俺の首から下は、赤いマントとパンツ1枚になった。

これでパンツを脱いでしまったら、本当の変体ちっくな正義の味方ではないだろうか？

いや、それすらも買い被りであろう。ただのオタクな変質者が、たまたま撮影に挑んでいるとのと大差はないであろう。

しかし、ここで止めては、俺の度胸を里緒に見せることが出来ない。俺が辱(はずか)しめを味わうことこそが里緒に勇気を与えるに違いないのだ。

俺は”えいっ！”、”ポヨン”とばかりにパンツも脱ぎ捨てた。

現時点で俺が身に着けているものは、赤いアイマスクに赤いマントだけである。即ち、俺の”存在意義”にとっては、自由にお遊び頂いている状態だ。完全に残すものを間違えている。

人前にさらされた俺の”存在意義”は先程までの勢いはなく、この状況にすっかり”意義”も薄くなってしまっている。

それでも、意外と脱いでしまえば割り切れるものなのだ。俺のヘソから上では高鳴っていた心臓は次第に治まって行き、緊張もそれにつれ解れて行くのを感じる。

意外と人間やっちまえば、平気なものなのかもしれない。

そうだ、脱いでしまえば結構割り切れるものなんだ・・・。

こんなこと、この世界では特別なことではないんだから・・・。

里緒、お前に出来ないはずがない・・・。

＜つづく＞

秘すればエロ（後書き）

すみません。前回予告した部分を含めると、１００００文字を越えてしまうので、途中で一回切りました。続きは近々更新致します。

えっ、誰も期待をしていない？

そう言わず次回も宜しくお願い致します。

黒い瞳は何のいろ（前書き）

里緒いくぞ！

黒い瞳は何のいろ

ついに俺、千乃工口（ちのくぐち）は、ＡＶビデオ撮影の日を迎えることとなった。

だが、天からの試練か日頃の行いなのか、いつもの如く俺の行く手には次から次へと障害が降り注いで来るのである。

しかしそれも、ここぞと言う時に何とかなってしまう持前の運の良さと、少々の頑張りで何とか切り抜けることが出来、俺のアパートで待つ撮影の相方（パートナー）の同級生であり同じ柔軟体操部の部長、千逗里緒と落ち合うことに漕ぎ着けたのであった。

そして、いよいよ撮影と言う時に新たな障害が発生してしまったのだ。

何と、ＡＶ撮影に挑む決意が済んだはずの里緒の心が折れてしまっているのである。

そこで悩んだあげく俺の取った方法は里緒の決意を取り戻す為に、まず自分が先に真っ裸になって見せたのである。

俺の色んな形状を惜しげもなく全視聴者に晒したのである。

これで里緒の気持ちが楽になればいいのだが・・・。

★☆　第　３６　話　★☆

☆★　黒い瞳は♂　☆★

★☆　♀何のいろ　★☆

里緒、お前に出来ないはずが無い・・・。

俺は真っ赤なアイマスクとマントを残し、それ以外の全ての着衣を脱ぎ捨てた。
後はお前の気持ち一つで、この俺たちの初演のＡＶビデオの出来は決まってしまうのだ。

お前が再び女優としての心を取り戻し、脱衣を初めたその瞬間からだ。
そこから俺たちの絡みが・・・・んっ、脱衣？絡み？

脱衣・・・（＝裸体）
里緒の”は・だ・か”・・・。

絡み・・・（＝接触）
里緒と”密・着”

”裸で密着！”

・・・・・ゴクッ。

最初は抵抗があったものの、以外と脱いでしまえば吹っ切れるものである。吹っ切れた俺の心には、邪念を焚き起こす余裕と言うものが出来てきた。
こんな晒された状況でも途端に妄想を始めるのが俺の性（さが）？いや、俺だけではない、雄として性を受けた者の性なのだろう。
この先に起こるであろう最善の妄想いや、錯覚が俺の治まっていた”欲望のアゲハ蝶”に進化を与え始めたのだ。

今は艶やかとは言えないが、俺のアゲハ蝶は柔らかい毛が生えただけの虫から、既に蛹（さなぎ）マンへの変態を終え、来るその時に備えジッと固まっている。いや、硬くなっている。

いかん！
裸に成ったことに慣れて来たとは言っても、この成長過程をお茶の間の家族団らん中にお茶のお供としてお見せしてしまうのは、いささか恥ずかしい。何せ俺のリアルな心が形として表れているのだ。

それにだ、その成長の原因である里緒本人に”お前の裸を想像してるだけで元気はつらつだぞ～”って言うことがバレバレなのである。

俺の右足も若干左足に重なろうとし、内向きになってしまうのも致し方ないことであろう。

だが、そんな俺の”蛹（さなぎ）マン”に対して里緒の表情は何一つ変わりはしないのだ。

それはそうかもしれない。幼い頃から見慣れている物でもあれば、見慣れている肉体現象であるのだ。それ位のことで里緒の様子が変わらないのは当然である。

であればだ。俺は堂々としていればいいのだ。恥ずかしがる行為は場違いあのである。

それに、俺はサイズ、形状共に頑健状態なのだ！

見ろ、里緒！
これが俺の覚悟だ！
今日から俺は露出狂になってやる！

里緒、後はお前の覚悟だけなんだ・・・。
俺は目をパチクリさせ、一所懸命に目で語りかけているのだが、里緒からの返答は返っては来ない。

一体、里緒は何故こんなにも裸を見せることに躊躇(ためら)いがあるのだろうか？

俺的にはそんな里緒に堪らなくそそるられるものを感じるのだが、今はそれを感じている時ではない。

撮影時間はたった１５分しかないのだ。もう、既に５分位は経っているであろう。

何の演技も無いまま時間は刻々と経過していく・・・、いや、一箇所が余計な演技を始め出した。俺の蛹(さなぎ)マンが孵化(ふか)を始めている。

俺ばかりが心身共に準備万端となっていく。いや、このＡＶ界のビデオにはそんな準備はどちらでも良かった。だが、そんな俺の先走った体流の変化は、少し上げた里緒の顔の興味を引くところには至ってはいないのが現状だ。

里緒の折角上げた顔も、俺の”蛹(さなぎ)マン”とは反対に既に元の俯いた状態に戻りつつある。

このままでは・・・。

恐らくこのままで終わってしまうだろう。脱げない里緒と脱いだ俺、お互いに道化である。

初演は道化芝居で終わってしまう。

どうする、工口(くぐち)。

アイマスクをして、演者名を付けている俺には救いがあるが、本人バレバレの里緒には救いが何一つとしてない。

時計を俺は背にしているので、どれだけ時間が経ったかは分から

ないが、時間が更に進んでいることは、物理上間違いはない。

どうするか・・・どうする・・・。

長かったのか、それとも一瞬だったのか。

いつの間にか俺の時間軸に空白の時間が動いていた。

別に、気を失った訳でもなければ、当然酔い潰れた訳でもない。

何が俺を動かしたのだろうか、気が付くと俺は1メートル少し先にいた里緒の目の前に歩み寄っていた。そして、我に返った俺の両手は、里緒の肩まで数センチのところまで近づいていたのだ。

俺は一体どうしたのだろうか？

俺は何をしようとしていたんだ・・・。

この手のやり場をどうすればいいんだ・・・。

どうする？

どうする工口（くぐち）！

いや、どうするも、こうするもない。こんな時は考えるな。

無心だ、無心！

この手のやり場は・・・位置と角度から、その先の行動は一つしか有り得ないではないか！

無心と言いながら、しっかり考えている。

無心になど簡単になれる訳がない。であれば、暫し俺の本能に理性を預けよう・・・。

俺は里緒の着ている制服のオリーブ色のブレザーに手を掛けた。

二つボタンは既に外れてる。両肩を外せば後は重力に任せるだけ

だ。

俺は思い切って、ブレザー襟に指を忍ばせブレザーを持ち上げた。

初めての自分の行動に、下方に集中していた血液の余剰分が上の頭めがけて逆流して来たのを感じる。

きっと、俺の顔は柄にも無く赤くなていることだろう。しかし、構いはしない健康な証拠だ。

そして、ブレザーを里緒の肩から外してみると、ブレザーはスルスルと自重でいとも簡単に里緒の腕を擦り抜け、「バサッ」と言う音を立てて、床に落ちる。

ニュートンよありがとう！

別にニュートンの力ではないが、少なくても５Ｎ（ニュートン）位の力は働いたであろう・・・。

それに、里緒は抵抗しようとはしなかった。

体を動かさないまま、驚いた眼だけを俺に向けただけであった。

その音、自分の行動に、一瞬驚きはしたものの、俺は心を強く持ち俺を見つめる驚いた目を見つめ返した。

それは、里緒の不安や躊躇いを全て包み込みたかったからだ。包み込んで里緒の視界から見えなくしてしまいたかったからだ。

里緒の瞳は”黒い瞳”である。もちろん俺も”黒い瞳”である。

俺の世界の俺の国では普通の瞳の色であるのだが、そう言えば”黒い瞳”はこの世界では余り見た記憶がない気もする。

里緒も同じ”黒い瞳”で俺の目を見つめ返している。口元が少し動き、引き締まった感じがする。

何を思ってくれているのかは分からない。だが、気のせいかもしれないが、次第に里緒の瞳にいつもの力が戻っているのを俺は感じた。

俺の気持ちが伝わったのだろうか？

理由は分からないが、里緒の表情が変わったのは明らかだ。

再び”決意”の心が生まれたのだろうか？

それは、考えなくてもこの先分かる事だ。ここは迷わず本能のまま先に進めばいい。

ブレザーの下は白のオーソドックスなブラウスだ。ブラウスの下からは白のブラが透けて見えるのを目の前で見ると新鮮なときめきを感じてしまう。

俺はときめきを楽しみながら、里緒の首筋に手を伸ばし、滑らかに上のボタンから一つずつ外していく。

2番目から3番目のボタンに移る時に、微かに胸の頂きを滑るように触れただけで、このまま里緒を押し倒したい衝動にかられたが、それも危ういところで一瞬の妄想に留めることに成功した。

今日の俺は本能と理性が完璧なまでに程良いコラボをしている。俺は男優なのだ。

里緒は軽く口を開けると、瞳を虚ろにした。先程までの緊張した面持ちとは打って変わって、心を体に任せている表情を向けて来た。

これは、俺に全てを任せてくれると言う意思表示なのだろうか？
それとも、これは里緒の女優としての顔なのだろうか？

だとすれば、これは打ち合わせにも、柔軟体操部の練習にも無い完全な里緒のアドリブである。最も、里緒の服を脱がせていることすら俺のアドリブなのであるが、どちらにしても里緒はそれに対応して前に進みだしていることになる。
それも、この世界のＡＶビデオには無い表現をしてである。

俺はこのＡＶ界に来て相当数のビデオを楽しんだ、いや、勉強したが、ビデオの中で感情の入った演技を殆ど見たことがないのである。大抵が感情の無い機械的な動作なのである。
ただ、機械的な振幅運動によって本当に気持ちが良い時にはその感情が顕著に表れたりはすることは頻繁にあることだ。だが、それは”気持ちいい”と言う行動からの副産物であって、今、里緒が見せているものとは明らかに別物である。

こうなれば・・・。
もう、俺に妨げるものはない。俺は男優なのだ、先に進めばいい。

露（あらわ）になっていく里緒の肩、首筋、胸元は余りにも滑らかで、真っ新（さら）だ。そこを、白く細い肩紐が、けな気に胸へと降りていき、隆起を始めたところでシンプルな白い２つカップを支えている。
そのカップは里緒の胸を包み込むには、明らかに少し小さい。

このけな気な肩紐と、自らのサイズには余る胸の膨らみを懸命に包み込もうとしている二つのカップが成長段階の乙女の体を微妙なニュアンスで表現しており、俺の硬くなった蛹（さなぎ）マンに更なる進化の時を告げ始めた。
俺の蛹（さなぎ）が孵化（ふか）を始め、羽を広げ始めている。

き、気持ちいい・・・。

そして、俺は全部のボタンを外し、ブレザーと同じ様に肩から腕へと滑らせる。

里緒の口元が微かに動いた気がするが、その言葉は聞こえない。

露わになった里緒の上半身は締まっているにも関わらず、脂肪の柔らかさが丸みを与え滑らかな曲線で描かれている。

美しい・・・。

そして、腰周りの細さを見た瞬間、俺の体内が自己主張を始め出した。だが、色んな欲望が沸き立つ中、それに溺れてはいけない。俺は男優だ。今度は本能を抑える番だ。

俺はカメムシくんを意識し、里緒の殻を一つずつ綺麗に剥くことを意識する。

慎ましやかなブラの留金（ホック）は後ろだ。俺は里緒の背中に手を回す僅かな時間にも留金（ホック）を外すイメージトレーニングを欠かさない。

この外す上手さで男の甲斐性、いやＡＶ男優としての技量が決まると言っても過言では無い。と。俺は思う。

必ずワン摘（トライ）で外さなければならない。

俺は親指と人差し指、中指の間に、想像上の４０ミリと言う隙間を作り、緊張と共にホックの縫い目と思しき位置に指を引掛け挟見込んだ。

そして、背中の肉を摘まぬ様に三本の指の間を中指先行で縮め

ていく。
全ては俺のイメージ通りに運んでいく。はずだったが、
その時だった！腸が若干ゴロッと動く。
バカ、こんなことで緊張するな・・・。
引き続いて起こっていた興奮が、一部で緊張と同種の人体反応を起こし俺の体に影響を与えていたのだ。だが、ここで止める分けにはいかない。俺は汗ばんだ指をそのまま目的へと向かわせる。
”パカッ”と音はしないが、それに近い感触が俺を至福ゾーンへと導いていく。
しかし、その至福は同時に、俺への危険を知らせるタイマーの引き金となったのだ。俺の耳にその音が伝わってくる。
ピコン、ピコンと言う小気味よいカラータイマー的音であればまだしも、伝わって来たのは、ググッ、ゴロゴロと言う冷や汗が出そうな腸内発酵音である。
こうなれば、もう時間と気合いの一騎打ちである！
とは言っても、それを態度で見せる訳にはいかない。俺もＡＶ男優の端くれなのだ・・・。
ホックの外れたブラは前方にたわみ、隙間を作るが惜しくも里緒の脇に挟まれ、ミルキーヘッドとのご対面とは至らない。微かに薄い桜の花びらが先端周囲を染めているのが確認できるだけだ。
花見をしているかの様に芳しい香りが俺の食欲をそそる。
惜しい・・・。

しかし、極力感情注入は抑え込まなければならない。これ以上の緊張は危険である。

まずは心を落ち着かせ、口の中に溜まっている十分量の期待汁を飲み干し静かに深呼吸だ。

そう思い、里緒に気付かれないようにと静かに飲み込もうとした瞬間、先に”ゴクリ”と唾液を飲み干す音が聞こて来た。

おっ?!

里緒ももしかすると、興奮!をしているのだろうか?

想像が俺の心に火を点ける。

俺の手先に里緒の心が追随を始めているのだ!俺と里緒がシンクロし初めているのだ!!

そう思うと、震えそうな快感が俺を襲って来た。

”沈まれ”と思う心と、快楽を味わいたい心の葛藤が俺の頭の中で紅白戦を始め出す。恐らく快楽が紅組なのだろう。

紅組が先手を取る・・・。

だが、ここで我が紅組は胸への攻めをホックを外すに留め、先へとは進まなかった。一工程飛ばして、スカートへと進む。

俺は早く二つの隆線的な小山とその先端のミルキーヘッドを当然確認したいのだが、紅組はこの宙吊り的な危険な状態を楽しむこと、いや、楽しむ演技を優先したのだ。

敢えて自分を虐めてしまう、いや、視聴者をじらすのだ。決して

俺の性癖ではない。

が、堪らない・・・・。

既に”夜の蝶”は成長として、思う存分羽を広げているのは言うまでもあるまい。

＜言えないＲ１５なのだ＞

そして、制服のプリーツスカートに手を掛ける為、体を屈める。

鼻先が二つのカップを繋ぐ部分を掠めると、里緒の体に力が入るのが分かった。

もう少し近づいて屈めば恐らくブラは落下しただろうが、俺は逢えて、宙吊りの二つのカップの緩みが目の前で踊っているのを楽しむこと、いや視聴者に楽しんでもらうことにした。

里緒の甘い香りに引き込まれそうになりながらも、俺の演技はスカートへと移る。

俺は両手で里緒の腰骨を包み込むと、親指と小指を目一杯に極力伸ばした。

その瞬間俺の興奮腺の興奮液が、体の支配を始めだした。

心地よい・・・。

心地よいが、この興奮が限界点へと近づけていく。

グググ、ゴロゴロ・・・。

まずい・・・・。

俺は一旦里緒の腰から手を離し、右手で自分のお腹を暖める。そして、左手は里緒の背筋を這わせ演技を継続する。せめてもの男優魂だ。

ついに、極度の興奮が大腸を活性させてしまったのである。腸内の余分な水分が本格的な発酵の手助けを初めてしまった様だ。

腹痛が始まる。しかし、ここは耐えなければならない。

直径５０ミリの腸の内径に、６０ミリの物質が通り抜けようとしていると思われる激痛だ。しかも、通り抜けさせてはいけないのだ！

ここまで来て、ここまで来て、この手を止めることは、里緒並びに視聴者に失礼だ。

この世界の視聴者はこの程度のことに何も感じないのかもしれない。だが、途中棄権はアクセスしてくれた方に失礼だ。それに、俺の”アゲハ蝶”の治めどころもないままだ。

俺は少しの時間その場で固まり、耐えた。

凌(しの)んだ。工口(くぐち)！

冷や汗が出る。体が震える。しかし、これはまだ二度目だ。

二度目はまだ耐えられる筈だ。俺の統計上・・・。

直径６０ミリを腸の力で５０ミリに圧縮させる。そして、括約筋に力を籠め奥へと逆噴射。

ゴロゴロ・・・。

耐えること暫し・・・。

後悔するのは、アパートに入ってから、撮影が始まるまですっか

り腹痛を忘れていたことだ。
トイレに行く暇が全く無かった訳ではなかったからだ。短い時間であれば今となっては可能であった。

だが、仮に覚えていたとして、絡みを目前にして里緒の前で放出することが出来るだろうか。それに短時間で”用”が済むとは限らない。中途半端にするのも危険である。
何れにしても、耐えるしかなかったはずだと自分を慰める。

すると・・・。

間もなく・・・、二回目の激痛は去って行った。
裸になり腹が冷えたのも良くなかったのかもしれない。早く里緒の体温で温めてもらいたいが、その前にもう一作業が残っている。
攻め落とせ、スカートを!

細くくびれたウエストに、清純そうに規則正しく折れたプリーツスカートが安心しきった様に引っ掛ている。
その無防備な油断は俺の餌食なのだ。

俺は第二次腹痛前に腰骨に手を当てた時に、既にスカートの留金（ホック）の位置は確認済みだ。
既に覚悟が出来ていると思うが、万が一に備え里緒の抵抗に会わぬ前にと、素早留金に手を伸ばす。

留金など形状こそ異なれ、仕組みはブラと一緒である。二度目ともなれば、俺の手は熟達者と遜色は無い。そんな熟達者が居るかどうかは分からないが、俺は利き手で無い左手を軽く触れるだけで、マジシャンの如きいとも簡単に外してはずしてしまう。
そして、ファスナーをおろすと重力は俺の望んだ方向へと働く。

目と鼻の先には純白のショーツいや、パンティーが燦然（さんぜん）と輝く。
そいつは、辛うじて盛り上がった部分を隠すことの目的を達し、
臀部に一皺（ひとしわ）の緩みなく張り付いている。上端中央には赤い小さなリボン。
それは、草原に咲く一輪の花の様に可憐極まりない。

俺はその丘を越えることを。その名もなき花に決意した。

人差し指が腰骨に触れる。

俺の脳に稲妻が走る・・・。

＜つづく＞

黒い瞳は何のいろ（後書き）

Ｒ１５だとこの辺が限界かと・・・。

欲求と油汗と想いの中で（凸）（前書き）

初演は続く・・・・。

欲求と油汗と想いの中で（凸）

里緒は白く小さな逆三角形の布に、全ての恥じらいの防御を託している。

今、俺の欲求の８割強はそこに集約されている。

俺の前に立ちはだかるその白い布、一見、薄く、脆く柔らかそうに見え、手触りも指にしっくりとムンムンするのだが、それが里緒の心にそびえる城壁であることは周知いている。見た目とは裏腹に難関であることは間違いない。

果たして、俺はその白くムンムンとする壁を乗り越えられるだけの男なのだろうか？

それとも、俺では役不足なのだろうか？

これから、俺は自分の”全せい力”をかけて白壁の城、里緒の純白城に立ち向かうことにする。

全せい力を掛けて・・・。

いや、嘘でございます。全てはかけられませんでした。

俺の”白いせい力”だけはかけられません。

なぜならば、その”白い力”が映ることは、このＡＶ界ではご法度として位置付けられているからなのです。

やはり８割強で止めとくとします・・・。

★☆　第　３７　話　★☆

☆★欲求と脂汗と♂☆★

★☆♀想いの中で凸★☆

湧水のように止めどなく湧き上がる唾液を、気づかれないように音も立てずに喉へと流し込んだ俺は、一連の流れの中で一番細く引き締まったクビレに両の手を伸ばすことに難なく成功を納めた。

改めて女性のクビレの素晴らしさを認識してしまい目まいがしそうだ。

今、俺の手のすぐ下方には、骨盤により悲壮に伸ばされた逆鈍角二等辺三角形の白色の布、別名パンティーが、里緒の恥じらいを隠す使命を全身全霊で堅持している。

俺はその一杯に張り詰めた上端の開口部に向かい、クビレの曲線に沿って両の手を滑らせると、そのさらさらとした肌質が簡単に俺の人差し指の浸入を許してくれた。

思わず頬を擦りつけたくなるが、内股に力を入れて懸命に堪える。今の目的はそこではない。

更に俺は掌を一杯に広げ、包み込む様にゆっくりと下ろしていく。すると、直ぐに華奢（きゃしゃ）な腰は、一転して弾けそうな肉感へと変わっていく。そこはケツだ。

そうか、お尻ってこんなに冷たいんだ・・・。

その肉感から勝手に温もりを連想していたが、それは勝手な妄想であり、現実はそうではなかった。気にして触ったことはないが自分のケツも冷たかった様な気もする。

しかし、それでも俺の合理的思考は直ぐに順応し、驚きを楽しみながら俺は人差し指一本を更なる奥地へと滑り込ませる。すると、

間もなく人差し指と中指の付け根、股の部分に布の柔らかさをを感じる。そこは最後の砦（とりで）、白い城壁だ。

指の股でも股は股である。最終決戦、白い城壁への攻撃に向けて、血潮を踊らせる前戯としては充分な役目を果たしてくれる。俺の気持ちは高揚し、あらゆる箇所で過剰な鼓動を響かせ始め俺の下半身の決意は半分硬くなっている。

ここから先に進むと、”里緒の楽園”と呼ばれる秘所が俺の目前に出現することになる。わずか5秒前に命名したばかりだが、そこは未知の草木が茂る楽園の丘が待っているに違いない。いや、草木が茂っているとは限らない。藻かもしれなければ、はげ山かもしれない。

はげ山も、結構好きだ・・・。

と、俺の好みを言ってみたりもするが、口には出さない。

それに、何とも秘所も避暑も高地と言うのは奇遇で面白い。もちろん、それも口には出さない。

と言うと、俺には余裕がありそうだが、実は一杯一杯だ。つまらない事ばかりがぐるぐると頭の中を巡っているだけなのだ。

それにしても、里緒は今この時を俺に預けることに対し、何を思っているのだろうか？

この裸に対して異常に開放的なＡＶ界において、何故かそれを異様に躊躇う里緒だ。きっと、相当な覚悟を持って全てを託してくれているのであろうと思う。

その相手が誰でもないこの俺なのだ。そう思うと、”心苦しい”

と言いたいところだが、異様な興奮を覚えてしまうのが俺の性らしい。興奮が俺の血潮に加速を加え、一部位に集結すると、目一杯の膨張を引き起こさせる。そして、どうにも止められない欲求が目覚める。

お早う！

その目覚めが俺にパワーを与え、最後の砦へと進む勇気を与える。

下だ、下へ進め！

と。

それいけ！！

俺は落ち葉広いの名画の様に前屈姿勢へとなり、白い布と共に床に向けて手を下げようと・・・ところが・・・。

んっ？

あれ？

下がらない。降りない。下げられない！

その砦は、完璧なまでの白い城壁であったのだ。

白く、もろく、薄い布として視界に映っていたことにより、俺に油断が生じてしまったのだ。その城壁には既に固い意思が添えられていたのだ。里緒の両手がしっかりと押さえているのである。

しまった！

下ばかり見ていて気付かなかった。

俺の”脱がす”と言う行動は里緒の同意に基づいた行動では無かったのか・・・。

強引にパンティーを下ろすこと等出来ない俺は我に返ってしまい、高ぶっていた欲求にお暇(いとま)を与え、この僅かな時間に起こした自分の行動を瞬時に振り返ってしまう。反省だ。

もしかすると、俺の行動は先走った場違いな変態行為だったのではないのだろうか？

セクシャルな何とかでは無かっただろうか？

一瞬に吹き出す冷や汗を火の様に熱い顔に掛けて冷やしてしまいたい。

は、恥ずかしい・・・。

一気に奈落の底へと沈んで行くが、こんな時に俺には合理的な自己解釈、通称”弁解”が普段にない速度で次々に頭の中を駆け巡り出す。それは、俺だけでは無いだろう。

そうだ、パンツを脱ぐこと等、普通の事ではないか。確かに脱がせているビデオは不思議なことに観たことはないが、真っ裸(ぱ)はＡＶビデオの基本のはずだ。

それにだ、何処まで脱ぐかの相談はしていない。俺が間違えて脱がせ過ぎてもそれはしかたのないことだ。俺のせいじゃない。更に・・・。

もう、いい充分だ。

どうせ誰にも言えない、自分を納得させるだけの弁解なのだ。これで充分だ。

既に思考よりも先に反射的に俺の人差し指は白い城壁の中から退

却し、前屈仕掛けた腰は逃げるように伸びきって直立不動になっている。

これって、視聴者にどの様に映っているのだろうか？
馬鹿な奴とでも映っているのだろうか？

え～い、これも弁解してしまおう。
これも一つの演技と言うことにしてしまえばいい。
全部故意にやったと思い込もう・・・。

そんなコミカルな動きな俺に、里緒は一瞬、上目遣いで俺を睨んでいたが。その目付きは、本当に怒っているものではなく、悪戯に俺を虐めようとしている目つきであった。俺が一応、型どおりに

「ごめん」

と謝罪を入れると、それとほぼ同時に里緒は微笑みながら未だ宙吊り状態のブラを自らの手で取り去り大きく投げ捨てた。
ヒラリと空を舞う白いブラ。そして、体を俺に近づけて来る里緒。

有ろうことか、その行動に面喰ってしまった俺は宙を舞うブラに気を取られてしまい、里緒はその間に俺に近づいてしまった。
この選択ミスで俺は恐らく薄いピンクであろう”ビーチクン”と、５００円玉より小さいであろう”ニューりんちゃん”を見損なってしまった。遅ればせながら、可能な限りの下目使いでそれを見ようとるが後の祭りである。見難いのは当然だ。

出来れば、一歩下がり有効な視界を確保したいのだが、この行動は逐一”カメムシくん”と言うハイテクカメラが俺を自動撮影している。それに、何より里緒から前に進もうとする行為を、自分の視

覚的欲求の為に後退するなど、里緒の行動に水を差してしまう事になってしまう。と言う位の判断は、欲求から目が覚めた俺には判断が付く。

そんな一時の欲求よりも、今は演技を続けなければならない。残り時間は少ない。もう無駄な時間は使えないのだ。

しかしだ、パンティーに精力（勢力）を注いでいた俺には、急に里緒の意図が把握できない。この続きはどうしたらいいのだろうか？

・・・敢えてパンティーは脱がないと言うのは俺に何を要求しているのだ？

代替はオッパイと言うことなのか？

俺に”オッパイ”と言うエサだけをを与えたこの状態は、何のパスなのだろうか？

里緒の顔には、完全に自分の意思が蘇ってる。

この短い間に何が変わったというのだろうか、あれだけ弱気だった里緒にいつもの、いや、いつも以上の積極性が生まれている。

一体、何があったというのだろうか？

こうだから女は　ＷＨＹ？

判らないがここは男として、折角立ち直った里緒に応えなければならない。里緒のデビュー作なのだ。

だが、どうしたらいいのか・・・。

これでは初めに打ち合わせした柔軟体操部の練習を生かせる流れではない。それに、残念ながらプライベートでのこの先の経験値が

俺には全くない。アドリブが効かない。

ここまで来てしまうと、良い作品と言うのは既に難しい。だけど、せめてそれなりの出来へと可能な限り近づけたい。遅いかもしれないが・・・。

どうする、工口(くぐち)！

自分に問うたその瞬間、プレッシャーが身体に変化を与えた。そして、

グググ・・・。

警報、いや、お腹が鳴る。腹痛が起こり始める。

冷や汗の気化熱がお腹を冷やしてしまったのも後押ししているかもしれない。

まずい・・・、3度目の腹痛が起こってしまった！危機だ！

俺の人生の統計上、3度目の腸内発酵は我慢で納まらないことは間違い無い事実だ。

今の俺はいつ爆発するか解らない爆弾を抱えているのと同じである。これ以上プレッシャーを感じてしまうと、恐らく直ぐにでも噴射してまうだろう。

確か、この汚物噴射は白濁放射とは違いご法度では無かったが、人間のモラルとして許されない。もちろん、俺もそんな姿を見られたい訳がない。それに、これからの里緒の女優人生の汚点となってしまうかもしれない。

こうなったら、ヤケクソだ！焼けばクソだって少しは硬くなるだ

ろう。
よし、我慢が効くまで、触れたい様に触れてやろう。そして、抱いてやろう！

とは言うものの、気の弱い俺はカメラの前であからさまにオッパイを揉むのは抵抗があるので、俺は胸で里緒の胸の感触を味わうことを代替とした。

俺は若干震える手つきで里緒の背中に手を回し、自分の胸に引き寄せる。
・・・はずであったが、

うっ！ピクン！

予想外の出来事が起こってしまい、反射的に俺は腰を引いてしまう。

気持ちいい・・・！

妙な電気が俺の脳に刺激を与える。
腹痛の中でもその気持ち良さは、雑草の中の一輪の”エロの花”の如く光輝いた・・・。

＜つづく＞

欲求と油汗と想いの中で（凸）（後書き）

大変遅くなりました。

欲求と油汗と想いの中で（凹）（前書き）

初演のＡＶビデオ撮影も大詰め。
その出来栄えは？

欲求と油汗と想いの中で（凹）

£――――

ごめん・・・。

私がダメなせいで工口君の大切な初演を躓かせてしまった。

工口君はラミア様にスカウトされた特別な人。だから、こんな最初から躓くわけには行かないのに。そんなことは、私だって充分判っていたはずだった。なのに、いざとなって思いっきりどん詰まってしまって、自分のことすらも見えなくなってしまっていた。

きっと、これが私本来の実力だったんだ・・・。

名門と言われる”へ高”で柔軟体操部の部長を任され、校内ランク1位にもなり、そして、学校代表としてたった一人しか出場出来ない新人戦にも推薦されたことで、気付かないうちに自分のこと買い被っていたんだと思う。

特別な人になれた、スカウトされた工口君と対等だ。なんて思っていたんだと思う。

だけど、だけど本当はそれに相応しい人じゃなかったんだ。

全然、大したことなかったんだ・・・。

自分の実力何て何にもなくて、気が付いたら運良くそんな立場になっていただけなのに、そんなことにも気付いていなかったんだ・・・。

それなのに、工口君の相方になるなんて・・・。

もしかしたら、私、ラミア様から罰を受けてしまうのだろうか？
こんな情けない私じゃ、罰を請けても当然かもしれない・・・。

もう、柔軟体操部の部長だって辞めたって構わない。校内ランクなんて何処まで落ちても構わない。もう一度、一から頑張ればいいんだし・・・。

でも、もう遅いのかもしれない。
遅いのかもしれないけど、やっと、工口（くぐち）君の黒い瞳が思い出させてくれたお陰で、子供の頃に思った強い気持ちを取り戻すことが出来たんだ。
だから、せめて残りの時間は工口君に全てを任せて、私はそれを精一杯受け止めるようと思う。
工口君の演技の為に一生懸命頑張ろうと思う。

それが、工口君や柔軟体操部のみんな、それに、塩南先生へのせめてもの償い。

だから、何をされても構わない。
何をもくっつけられても大丈夫・・・。

でも、お願い。我がままだとは判っているの。だけど、パンティーだけは脱がさないで。
お母さんとの約束だけは守らせて・・・。

初演から終着地には着きたくないの・・・。

―――――£

★☆　第　３８　話　★☆
☆★欲求と脂汗と♂☆★
★☆♀想いの中で凹★☆

「うぅぅっ・・・」

里緒を引き寄せた俺の腕は、里緒の胸の感触を確かめる為の行為であったのだが、その寸前に予想外の出来事が起こってしまった。

予想外に気持ち良い出来事。

それは・・・。

俺と里緒の間を近づけまいとする邪魔者が現れてしまったのだ。

だが、そいつは他の何でもない俺の煩悩の叫び。

だから、邪魔と言うのは正確な表現とは言えない。ただ単に、そいつは素直に一早く里緒に触れようとしてしまっただけなのだ。

俺は、自分の視線がカメムシくんと言うハイテクカメラを通して視聴者に気付かれない様にと、極力正面をを見ながら下目遣いでそっと見てみると、そいつは体の中央やや下で俺の体の全景が”ト”の字になるようにと、”どうだ”と言わんばかりに凛々しく地面と水平な横棒を担当しているのである。

だが、俺はその凛々しさとは裏腹に、想像よりもより早い里緒との接触に心の準備が間に合わず、思わず動揺してしまって取った行動は、善良な高校生の行為としての行動。

腰を引いてしまったのだ。

しまった！と思うも、もう遅い。俺は自ら自然な流れを壊してしまったのだ。

そのまま何気なく押し付けて抱いてしまえば、恐らくは上方に位置を流していき、上手く納まったものを、返って里緒にその存在の意識させてしまう結果となってしまった。いや、俺が意識してしま

っている。

だが、どちらにしても体の構造上こいつを里緒と接触させない限り、俺は里緒を抱きしめることが出来ない。

いや、そうではない。そいつを一番里緒に触れさせたい。ただ、こいつが再度、里緒に押し圧を与えた時、里緒はどう思うのだろうか？

既に里緒はこいつの存在を意識していないはずがない。

里緒はこのＡＶ界において、珍しく裸に対して極度のはずかしがりやなのだ。

俺と俺の元気印がこのまま、突っ走っても大丈夫なのだろうか。

やはり、拒絶されてしまうのだろうか。

次の一手が出てこない・・・。

だがだ、これはＡＶビデオなのだ。他のビデオでは普通に行われている行動である。それどころか、昔のビデオでは激しく陰の部同士を擦り付けているものも多数ある。

里緒は昔のビデオにも可也詳しいから、当たり前の様に子供の頃から見て来ているのはずである。

だとすると、これはあからさまにオッパイを鷲掴みにして揉み解すのとは違い普通の、演技行為なのだ。きっと、俺が思うほど意識をしていないに違いない。

それに、今は里緒の目付きが明らかに変わっている。

よし、そうだ。そう思うことにしよう。

ここは、里緒を信じて思いっ切り何気なく行くべきだろう。

思いっきり、俺のこの”ト”の字の突起物の先端部を里緒の下腹

部やや上方へ押しつけてみよう・・・。

そう決意した俺は、継続する腹痛を気合いで抑えながら再度俺は里緒を引き寄せた。もちろん、いち早くそいつは里緒の体に押し圧を与え、その反作用として俺に快感を与えてくる。

「うっ・・・」

だが、今度は引かない。そう決めたんだ！健全な高校生の条件反射は男優魂で封印である。

ぶつかった突起物の行き場は上か下かだ。

どちらかに方向を変えなければ里緒を抱くことは出来ない。本能的には下に進ませたかったが、その場合、人体の構造上俺の手のサポートが必要となる。さすがに視聴者の皆様の前で、その欲求を満たすことははばかれる。

俺はナメクジを這わす様に、その感触を味わいながら下から上へと奴を押し流がす。それと共に徐々に里緒の体が近づくと、直ぐに里緒の胸が俺の胸に触れた。

「んっ・・・」

里緒が小さく声を漏らした。

うっかりすると、余りに柔らかくて触れたことに気付かぬ程に柔らかい。柔軟体操部の部活では、ブラと言う硬い布に収まった状態でしか触れることは無い。その時の感触とは全く別物である。

通常生が勝に決まっているのだが、俺だけなのだろうか、どちらかと言うとちょっと物足りなさを感じる。

俺はもっと感触を味わおうと、背中に回した両手で強く里緒を引

き寄せると、里緒は俺の行動にその柔らかい体だを預けて来た。

背中の反りが両手に感じられる。俺の首筋に里緒の髪が触れ、髪の甘い香りが俺の鼻腔をくすぐる。俺は引き寄せられるように里緒の頭に頬を寄せると直ぐそこに里緒の耳が俺の顎を心地よく掠めた。

そうなると、

耳＝息を吹きかける

と言う半ば常識ともなった性式（こうしき）は俺にだって身に付いている。俺の衝動は止められない。

腹痛の脂汗を流しながらも、俺は堪らず里緒の耳に息を吹きかける。すると、

「ウゥン・・・」

背中を反らせた里緒から声が漏れる。

調子に乗った俺は更に耳の上端を甘噛みしてみる。何処か耳なら何をしてもいいだろうという自分なりの道徳感が俺の行動の制御を外してしまう。

「はぁ、ぁぁ・・・」

俺は更に、輪郭に沿って舌を這わせる。

「あぁぁぁっ・・」

里緒から漏れる声が聴覚から脳に伝わってくる。

これで、耳、鼻、それに、あらゆる箇所の触覚で里緒を感じている。

でも、俺はもっと里緒を近くで感じたい。もっと、もっと深く感じたい。そんな欲求に満ちていく。

俺は、素直にただ少しでも多く里緒を感じていたい。純粋にその気持ちのみになっていく。

だが、これは演技なのだ。作品として成立させなければならない。人に見せることにより名誉と収入を得ることが目的である。俺の場合、スカウトされた特別な男優としての待遇も掛かっている。

演技をしなければならない。

だが、俺には未だ体の欲求に従うことと、演じる虚為との違いが今一掴めていない。

どうすることが演技となるのか？

この世界のＡＶビデオとは？

その位置付けは？

既にあらゆる年代のあらゆる種類を観てきているが、この世界の人々が求めているものは何なのだろう？

古いものはものには、単に裸で性的体の接触で終始するもの、性的欲求に近いものが多い。ただ、最近のものにはアクロバチックな要素を取り入れたり、衣装や場面設定を作ろうとしている努力が見て取れる。ただ、それでも最終的には殆どのビデオが真っ裸になり身体的な接触で終わるのは今も昔も同じである。

俺の世界のＡＶビデオと同じ様であり、同じで無い。

俺はこのまま、自分の求めているものに沿って行うだけで良いの

だろうか？

さっぱり判らないが、今の俺にはそれしか何も思いつかない。

思いつかないのなら出来ることを。

見せるしかない。

であれば、やってやる。

俺の性癖を見せてやる！

俺の決意が体に興奮を与え、武者震いが起こる。

すると、それと同時に更なる

「グググ～、ゴロゴロ・・・」

興奮が急速に腸内の異変を進展させていった。

どうやら俺の限界が近づいて来たようだ。腹痛を抑えることで流れる脂汗がハンパでない。

だが、耐えなければならない。耐えてそれなりのビデオを完成させなければならない。そうでなくても出だしで躓いているのだ。このままでは、里緒の立場も来年の柔軟体操部の1位の座も守れなくなってしまう。

俺は全身の力を括約筋に力と思いの全てを込めて、肛門の穴を塞ぐ。

これっぽっちも漏らさぬように。

時間との戦いだ。

あと数分漏ってくれ・・・。いや、漏らないでくれ。

俺は汗ばんだ左手で里緒の腰を引き寄せる。
どんな腹痛でも演技は続けなければならない。そう誓って・・・。

思考は次第に働かなくなって来ている。
もう、演技も性癖がうんぬんでも無い。煩悩のままに出来ることをするだけだ。

俺は激痛に震えながら、右手を里緒の背筋に沿って這わすと、里緒は俺の行為に吐息を微かに漏らし、僅かに体をくねらせた。
何か腹痛に苦しみながらも、ちょっと面白さを感じてしまう何て、我ながら呆れてしまう人間だ。

俺のサド的な部分が目覚めてしまったのだろうか？いやマゾか？

なんて思いながら苦しみの中で”苦笑い”を思わずしてしまうが、手は更に下へと這わせることは忘れない。
やがて、両手が半分だけお尻を隠しているピッチピチの布、パンティーに再び手が届く。
これが男の性なのだろうか、幾ら苦しくてもパンティーを後ろから触れるとこれをせずにはいられない。

俺は腹痛の谷間に四本の指を下からパンティーの仲へと滑り込ませ、上に少し持ち上げ親指を上からねじ込み、腰ひもに当たる部分を鷲掴みにした。
そして、上に引き上げる。

男として生まれたからには。一度はやって見たい、即席Ｔバック・・・。

脂汗を流しながら、それが見事に完成させた。
それに、若干であるが弱まった腹痛の中で感慨深いものを感じるが、その姿が俺の視覚に入らないのが残念でならない。

しかし、その満ち足りないものを埋めて余りある事が同時に起こったのだ。
里緒が少し仰けに反り顎を上げ、そして、唇を開くと、

「ま、まほ・・・」

艶やかな顔に、久々に聞く”禁句”。
囁く程度ではあったが、里緒の口から漏れたその言葉は、至近距離の俺の耳には確かに届いた。

薄目を流した里緒の顔が俺を招いている。
俺はたまらず。唇を里緒の唇に重ねる。

さらに即席Ｔバックを上に引き上げると、俺を求めるかの様に重ねた唇が軽く開きながら動き出す。

この接吻と言う行為は俺にとって肉体的に何処かが気持ちよくなる訳ではない。で、あれば意味が何処にあるのか解らないが、ただ何故か心に触れてくるのは確かである。

これが、ＡＶビデオの演技として認められるのあろうか？

しかし、そうは思うが、今の俺には心が求めて止めることが出来そうにもない。
何故か腹痛の中でも心が気持ち良くなり、物体としてではなく心として里緒を求めている。

心を近づけたい欲求は純粋に体を近づけたい性的欲求となり、Tバックを作っていた両手を放し、思いっきり里緒の体に巻き付け強く抱くに至る。

その心を里緒も感じてくれたのだろうか？それとも演技なのか？里緒の手の温もりが、いつからか俺の背中で感じられている。自らの意思で俺の背中に手を回し、引き寄せているのだ。

俺はその事実に陶酔し、陶酔し・・・陶酔しかかったが、こんな時に腹痛が激痛へと姿を変えた。

「グググ、ゴロゴロ・・・」

俺の腸内の発酵が恐らく腸を風船の様に膨らませているのだろう。肛門は今にも開門しそうである！

危うい！限界が近い・・・。

我慢だ！頑張れ俺。頑張れ肛門さま！

我慢をする程に全身が震えだす。

もう撮影時間はそんなに鋸っていないはずだが、時計は俺の位置からは見えない。ハイテク自動撮影カメラの”カメムシくん”の点灯が青から赤に変わると撮影は終了である。だが、まだランプは青のままだ。

出る、出てしまう！

が、我慢を・・・、いやだめだ！！

もう選択の余地は残されてはいない。
もう勝負を出来る状態ではなくなってしまった俺は一瞬の判断で最悪を回避していた。

「ごめん・・・」

無視の鳴くような声でそう一言を残すと、俺はトイレに全速で駆け込んだ・・・。

＜つづく＞

欲求と油汗と想いの中で（凹）（後書き）

思ったように日本語が操れないもどかしさに苦しんでおります。

三つの大技（前書き）

初演が終わった。最悪の出来と思っていたのだが・・・。

三つの大技

俺、千乃工口（ちのくぐち）がこのＡＶ界に来て初めて参加したビデオ撮影大会、今年度最初の”第２７部　第一回　サラ１８歳新人大会”は例年に比べ大盛況の元に終わった。

毎年、１回目のこの大会は１８歳の誕生日を迎えた高校生が少ない為に地味に終えることもしばしばとのことである。更に、このＡＶ界は極度の少子化に悩まされている。

今回のこの大会もその煽りをもろに受け、通常２００～３００人が参加することろが、男子が８７人、女子１０２人の参加に留まってしまっていた。しかも、男女比率が合わない上に、男子のオタク化現象による消極化によって、撮影前日に行われる相方探し大会の”お願いします”では、５５組のコンビ結成に留まると言う最悪の結果となってしまった。

となると、大会は当然盛り下がることになるのが必然である。なのに、何故この状況下でなぜ盛況だったかと言うと、ある一組が翌日の撮影大会で偉業を成し遂げたからなのである。

どうも、その一組は新たなウルトラＥ感度の荒技を立て続けに３つも決めてしまったらしいのだ。

今や第２７部の全高校、いや、２７部を超えた全ＡＶ界では、高校生を中心に騒ぎになっているらしいのである。

そのコンビとは、誰あろう・・・。

★☆　第１話　★☆

☆★♂三つの大技♀☆★

どうして、緊張や興奮をすると漏れなく腹痛が起こるのだろうか。

一般的に、精神が虚弱である程、そんな不合理な体質の持ち主が多いと言うことなのだが、よりによってそれが自分であると言うのは、恨めしい限りである。

俺はこの精神的疾患に幼い頃から悩まされ続けてきた。しかし、年齢と共に幾分神経も太くなり、精神のコントロールも効く様になって来てはいた。だが、全く経験地の無い出来事に対しては、未だ対処方法が見い出せていないのが現状である。

そして、今回も大失敗を起こすこととなってしまったのだ。

撮影の翌朝、まだ布団の中の半現半夢の中で、思い出されるは昨日の撮影の大失態。

夢であってくれと切に願いながら次第に目覚めて行く中で、気付かされるのはそれが紛れもない事実であったと言う事であった。

やっぱり、現実かぁ・・・。

学校、行きたくないなぁ～。

と、正直思うが、まだ俺は顔が割れていない分増しなのである。里緒は顔も名前も割れている。そんな里緒を一人で登校させる訳にはいかない。

俺は重い体を起こし、失意の元に登校することを決めると、そそくさに準備を始めた。

そして、準備を終えると重い脚を引きずる様にいつもより早い時間にアパートを出たのだった。

何故、いつもより早い時間に家を出たかと言うと、極力人と合わないように、裏道を通って徒歩通学をすることにしたからである。

マスクとカツラで顔は分らないはずだが、極力その話に触れない為には、誰とも会わないことが一番である。そう思ったからだ。

運良く会話をする程度の友人には会わずに学校に到着すると、極力雑音を聞かぬように我がアルパカ組に向かった。しかし、そこで待っていたのは教室の前の人だかりである。

何か?あっただろうか・・・。

人だかりは教室の二つの入り口から、数人のグループ単位で中を覗いてはキャッキャと騒ぎながら離れて行き、再び違うグループが中を覗くと言った行動を取っている。

柔軟体操部の部員達もいたのだが、俺は気付かぬふりをしてその人だかりを掻い潜り、教室の中に一歩踏み入れると、教室の中でもある一か所を囲んで人だかりの渦が出来ているのである。

その人垣に出来た僅かな隙間から、その渦の目にあたる位置に視線を向けると、そこにいるのは誰あろう”千逗里緒(せんずりお)”あるのだ。

まさか、里緒に対する抗議の人だかりとか・・・。

と一瞬思ったのだが、幾らなんでもそれは無いはずである。それ程積極的な行動に出られる生徒は、生徒会長稲荷家一子を始め数える程しかいない。

それに、教室の外から覗く生徒達も、中で里緒の周りに集まるク

ラスメイトも、その目付きは光り輝いた羨望の眼差しであり、聞こえて来る声はアイドルを目の前にした興奮状態なのである。

俺としては取り敢えず里緒が登校していることを確認し出来、まずは一安心なのだが、

これは、一体どういうことなのだろうか？

全く訳が解らない。

里緒も、そんな状況に戸惑っていると言ったところである。

昨日のビデオが好評だったとか・・・。

まさか、それはどう買い被ってもありはしないだろう。それに、ビデオの出来が良ければ俺の周りにだった、人が集まったて良いと・・・。

と思ったのだが、ビデオの中では俺は誰有ろう、謎の高校生”エロン棒様”であり、赤いアイマスクをした眩い銀髪姿なのである。誰も気付く訳がない。

一体何があったのだろうか？

そう思った時である。

教室の入り口に立つ俺の後の低い位置から肩を叩く奴がいる。

えっ、小学生が？

若干謎の高低差に驚きながら後ろを見下ろすと、そこに立っていたのは、我が”併性ヘノ路学園高等学校”通称”へ高”の校長代理でありながら、実質校長の”へ校長”であった。

誰の視界の邪魔にもならない大きさでこじんまりと立っているところがおくゆかしい。

「千逗さんも凄い人気者になったものです。たった一回のビデオ出演で・・・。

まあ、彼女は元々人気があったのですが、それにしても、こんな大騒ぎは私がこの学校を預かる様になって初めてのことです」

校長代理は目を細めて嬉しそうに里緒を見ている。でも、一回のビデオ撮影で人気者になったとは、どう言うことなのだろうか？

”お願いしますで”相方を見つけ、ＡＶ撮影にまでコマを進めただけでも人気者になるのだろうか？

そうであれば、俺の肩の荷も少し降りるのだが・・・。

そう思っていると、その謎も校長代理の話の続きで明らかとなった。

「ところで、昨日の千逗さんの相方、え～何て言ったですかな、確か”コロンボ様”さんでしたか・・・？」

当然と言えば当然だが一応観てくれてはいた様だ。しかし、俺のことは演者名も覚えていてくれていない様だ。

「いえ、”エロン棒”です」

俺が不服そうに名前を訂正すると、

「あー、そうそうエロン棒様でした、いや～歳を取ると物忘れが激しくて・・・いい名前です」

「それは、どうも」

名前忘れていい名前もないものだ。と思いながら校長代理の顔を見ると、俺の顔を見上げながらニタッと笑って見せた。

あっ！

その顔を見て、俺はワザと名前を間違ってみせたのだということに、遅蒔きながら気付いた。

「やはりあの御人（ごじん）は、千乃（ちの）さんでしたか」

相変わらず腰は低いが、中々の曲者である。

どうやら、里緒の相方が俺であることを確認する為にワザと間違えた様である。

「えっ、ま、まあそうなんですが・・・」

さすが、代理とは言え名門の校長。侮れない。

俺はこの学校の代表で出場したのでは無いにせよ、この学校の生徒である以上、大会出場の報告をするのが筋であるとは思う。その認識は俺にもある。

それに、元々校長代理は俺が異世界からスカウトされて来たことを知った上で俺を積極的に入学させ、騒ぎにならない様にと、他の生徒に知られない様にして欲しいと頼ん出来たのも校長代理だから、里緒の相方が俺であることを話すことは何ら問題はない。

しかし、ビデオの出来がすこぶる悪いのだ。俺は出来れば今回は

隠しておきたかったのである。
それに、話の流れから行くと、俺が隠して置きたいという意図も見破られたに違いない。それだけに気まずい。

決して悪いことをした訳ではないが、ここは一度詫びを入れとく方が今後の展開の為には無難であろう。それに、学校代表の里緒を支えることが出来なかったことも俺の力不足と腸の弱さであることも間違いない。

「いい結果を出せなくてすみません」

俺は周りの生徒に聞かれないように小声で詫びを入れ頭を少しだけ下げた。すると、

「何を言ってるんですか。あれで出来が悪いとは、一体どんなビデオなら千乃さん満足なのでしょうか？
凄い反響ですよ。きっと、他校でも騒ぎになっているはずですよ。千乃さんは、まだ自分のビデオのアクセス数を確認してない様ですね、ハハハ」

そんなことを言ってくる。

「はっ？
・・・凄い反響って、昨日撮影したビデオがですか？」

「もちろんですよ。まあ、後で子機でアクセス数を確認するといいですよ。きっと感想も来ていることでしょう」

ウソだろう、見つめるだけで始まり、トイレに駆け込んだ結末。
その間は、ただの俺の性癖と言うか、恐らく俺の世界の男の性癖

を披露しただけである。

男と言う生き物の性癖ははＡＶ界でも一緒と言うことなのか？

あんな演技と言うか、俺の性癖で良かったのだろうか・・・。

俺は早くカバンの中の子機でアクセス数を確認したかったのだが、子機を持っていることは、ＡＶ撮影大会に出場資格があることを示すのだ。生徒で持っているのは現時点で俺と里緒だけである。

次の休み時間にひと気のないであろう部室にでも行って確認するしかない。

取り敢えず今は里緒に確認に確認してみよう。そう思い、俺は里緒の元に近づこうとしたのだが、偶然目が合った瞬間に手を挙げて挨拶をするに止まってしまい、近づくことが出来ない。

今の里緒の周りにはアイド並みの人だかりだ。

もう少し人が減ってからにしよう。等と、俺がもたもたと躊躇(ためら)っている内に、教室のドアから相変わらずのヨレヨレのスーツを着こなした担任の塩南先生がフラフラとやって来てしまった。

「おっはよ～ん」

相変わらず、元気が無駄に良い。

まあ、後でもいいか・・・。

別に急ぐ必要はないのだ。全く何が何だか、本当に良かったのかどうなのか、半信半疑ではあるのだが、確かめるのは後でもいいのだ。

逃げはしないのだから。

それに、里緒に近付けないのは、里緒を取り巻く人だかりが邪魔なだけではない。昨日が昨日だっただけに気まずくて近付けないのが正直なところだ。

頭の中には里緒の服を脱がせた自分の姿が、パンティーを下そうとした時に拒まれた姿、それに、キスの途中でトイレに駆け込む姿が客観的に思い浮かんでくるのだ。

それが、里緒に取ってどういう行為であったのか、里緒の意思を反していなかったのかが心配なのである。それに、撮影の後も上手く取り繕うことが出来なかった。

昨日、俺がトイレから出た後も・・・。

・・・こっ酷く怒られると覚悟をしていたのだが、いや、怒ってもらった方が気が楽であった。それが、俺のエチケットの無さに若干の不満を呟くに留まったのだ。それどころか逆に謝られてしまったのだ。

「もう、下品なんだから。音、気をつけてよね・・・。み、水くらい、流してよ・・・」

激しい下痢を長時間我慢していたのだ。俺の肛門が放った音は半端では無かったはずだ。それに、途中で気付いたのだが、今更と言ったところであった。

俯いて呟いた里緒は既に、俺が脱がせた服を着終わっていた。それを見て、裸に赤いマスクに赤いマント姿の俺も慌てて服を着る。マスクとマントを外すのは言うまでもない。

「ごめん、せっかくの初演だったのに、こんなことになってしまって」

下痢でごめんとは言えないので遠回しに謝ると、里緒は首を振って、

「私が悪いの、私が弱虫だから・・・ごめんなさい」

撮影を終えた、ハイテク自動撮影カメラの”カメムシくん”は、窓から撤収しようとしている。今は、撮影が終えた青い色の点灯に変わっている。

俺は何か気の利いた言葉を探すも、何も見つからない。自分の行った行為についての感想何て聞けるはずがない。

暫く沈黙が続くと、里緒は、

「帰る」

そう一言、言い立ち上がった。

「う、うん。明日、学校来るよな」

俺はそう聞くのが精一杯であった。すると、それに里緒は

「うん」

頷いて静かに俺の部屋を出て行ったのだった・・・。

里緒だって失意で過ごした一夜の後の今日のはずだ。この反響には驚いているし、この人気に戸惑っているだろう。しかし、この以外な状況に嬉しく思っていないはずがない。

俺だって、これが勘違いでないことを切に願っているし、ぬか喜びでなければ、どんなに嬉しいことか、いやホッとすることかとハラハラしている。

ただ、共演をして同じ気持ちを共有している筈なのに、里緒が遠い存在になった気がして、寂しく感じられるのはなぜだろうか。

里緒の姿が遠く感じられる・・・。

撮影とは言え、昨日の接近は何だったのだろうか？

返って遠くなってしまった。そう思ってしまう。

だが、そんな感傷も相変わらずの塩南先生のノー天気なホームルームが、それを吹き飛ばしてくれた。

塩南先生開口一番に、三つの大技を語りだしたのだ。

「み～なさ～ん、昨日は里緒ちゃんの作品見ましたかしらン？

う～～ん、先生は凄～んごく感動しちゃったのよねネ。みんなも、何箇所もグッハーっと響いて来たところがあったでしょ～ネン。

先生も初めて見る大技が三つもあって大興奮オロロ・・・」

その三つとは、「女優の服を脱がす」、「口を合わせる」、「即席Tバック」だと言うのだが、それって、そんなに大技なのだろうか・・・。

＜つづく＞

三つの大技（後書き）

第2章、お読み頂き有難うございます。
今回から第3章になります。相変わらず誤字が多いですが宜しくお願い致します。ただ今、かなり構想のおかしなところを発見してしまい、考え中なのですが上手く繋がりません。

困った・・・。

捕まえたれす（前書き）

工口（くぐち）の前に現れた少女は・・・。

捕まえたれす

”第27部　ら地区　辰(たつ)役場”入り口前の階段の影で、左手に持つあんパンに噛り付く少女が一人。右手には既に飲み干した牛乳瓶を持ち静かに壁に持たれている。

「なあ、まだあの子役場の前で立ってるよ」
「ホントだ。何かやつれて来てるなぁ、何やってるのか聞いてみようか？」
「よせよ、薄気味悪い。関わらな方がいいぜ」

通り過ぎる人達からは、そんな声が聞こえて来る。

堪り兼ねた役場の職員が、少女を役場の中へと入れようとするが、少女はその場を頑として離れようとはしない。彼女はここのところ、毎日早朝から夜遅くまでの殆どんの時間をその場所から離れないのである。

少女は時折うなされた様に呟く。

「今日で9日目れすよ。やっぱり、工口(くぐち)お家(うち)に帰っちゃったのれすか？
ちゃんと約束したのにれすか・・・」

どうやら人を待っている様である。

そんなある時、役場にやって来た若い母親と小学校低学年位の少年の親子が少女の前を通り掛かると、二人の会話が少女の耳に届いたのであった。

「母さん、昨日の”ＬＩＶＥ”は凄かったね。僕、大きくなったらエロン棒様見たくなるんだ」
「そうねぇ、マーくんがあんな凄い演技が出来る俳優さんになったら母さん嬉しいわ」
「僕、頑張るよ」
「そう、楽しみね」

その言葉に聞き耳を立てていた少女が反応する。

「何れすか、エロン棒様っれ。昨日は工口（くぐち）が出るはずらった大会のはずれす。そんな、凄い高校生が工口（くぐち）以外に現れたれのれすか」

少女はしおれかかった目を急に鋭く開くと、役場の正面玄関の階段を全速力で上り始め、そのままの勢いで役場の中に飛び込んだ。

息を切らして向かう場所は、どの役場内でも必ずある施設”レンタルビデオルーム”。
そのままの勢いで貸ビデオ機の前に座ると、慌てて”エロン棒様”の俳優名で検索し、真剣な顔でビデオ鑑賞を始めるのであった。

およそ、１５秒後である。

少女は叫んだ！

「うぅ～ぅっ、い、居たれす！！！」

潤う少女の目は、鋭く輝くのであった・・・。

★☆　第２話　★☆
☆★　捕まえた♂　☆★
★☆　♀れす　★☆

朝のホームルームで、”第２７部　第一回　サラ１８歳新人大会”のビデオの話をする塩南先生の口調はいつもの様に飄々《ひょうひょう》としてはいるのであるが、俺にはどことなく熱いものを感じる。

G２戦士の塩南先生の眼から見ても俺と里緒のビデオには、クラスの皆が騒ぐような何かを感じ取れたのだろうか？

当の本人の俺には全く分らないのだが、先生が感じているのであれば、きっと俺と里緒の間に何らかの奇跡が起こったのではないか思う。

結果オーライとしか言い様がない・・・。

ホームルームが終わると、１時間目の授業は”ＡＶ史”ＡＶ界９５年の歴史の授業だ。

この歴史の授業、何故か９５年より先は古代の話をするようにアバウトなのである。まあ、この事は追々触れるとして、今重要なのは、昨日撮影したＡＶビデオの出来の数値的な評判の確認である。

授業は右の耳から左へ耳へとさらっと流し、終わりのチャイムが鳴るのを待つとする。

授業の合間の休憩時間は１５分と、俺の世界よりもやや長い。よって、陸上部で３年間鍛えたダッシュで柔軟体操部の練習場に行けば、自分の持っている子機ではなく、練習場２階にある部室の端末でより詳細な情報を確認することが出来るのだ。

やがて、”ＡＶ史”の授業が終わると、俺は素早く席を立つ。そして、部室へと急いで向かおうとしたのだが、その前に無意識的に里緒の方に目が流れていた。
昨日の今日である。里緒が俺のことをどう思っているのかが常に頭の中から離れないのだ。

里緒の周りは朝よりも落ち着いてる様に見える。
声を掛けるならばここがチャンスである。思い切って、「一緒にアクセス数の確認に行こうか」と声を掛けようか等と思ったのだが、そんな状況は授業が終わった直後の一瞬であった。躊躇っている内に、あっと言う間に里緒の周りは人だかりとなてしまった。
呆気なく俺の思惑は崩れてしまったのである。

この状況では予定通り一人確認に行くしかなさそうだ・・・。

校舎の１階の設備の殆どが部活動の為のものである。
丘の斜面に建っている校舎の玄関は２階にある為、地下とも言える一階の午前中には人影は見当たらない。

１階に下りた俺は、グランドであるかのようなダッシュで、校内１位の部活にだけ与えられている離れの”柔軟体操部練習場”に駆け込んだ。そして、練習場の奥にある更衣室の２階へと進む。
柔軟体操部の部室はそこにある。

部室の入り口のドアを開け、端末の前へと目を向けると・・・おや？
そこには先客がいた。女性である。

だれだ・・・？と、考えるまでもない。

「あれっ、先生・・・」

我が柔軟体操部の顧問であり、アルパカ組担任の塩南先生である。
先生は部室に飛び込んだ俺には目もくれず、モニタを見ながら手だけを俺に向けておいでおいでと手招きをする。

ここで俺を手招くと言う意味、思いつくのは一つだけである。
彼女の満面の笑顔にはどう見ても演技はなさそうである。本当に、昨日の撮影が大反響と言うことである。

俺は慌てて先生に近づき、視線の先を先生に合わせた。すると、

「くぐっちゃん、来ると思ってたわよん。ほら、うわ～ぉ！もん、凄いアクセス数よ～ン」

そういい、先生は俺の手を引き寄せ、さらにもモニタに近づけようとする。

「ほ～んら、見て！一番上よん」

先生の開いていたページは、作品別ランキングの”新人部門”である。
そこの一番上、トップにあるのは・・・。間違いない、

「”初めての柔軟”・・・、ホントに・・・」

全く柔軟らしきことを行っていない、俺と里緒の作品である。

「くぐっちゃん、ほんら、ほんら。凄い凄い」

先生は俺の手を取り、キャッキャ、キャッキャとはしゃぎ出す。

良く見るとこのランキング、２７部だけではない、ＡＶ界全体のランキングである。

昨日からのアクセス数は、１０，０００アクセスに手が届きそうである。因みに２位は、一足早く先週大会が行われた第１５部のコンビで、半分の３，０００アクセスを僅かに超えたに過ぎない。

「ホントに？まさか・・・」

唖然とする俺に、

「まだまだ、これから増えるにょんよ～、何せ”ウルトラＥ感度”と言ってもいい大技が３つも入ってるから、これから噂が広がって、恐らく新人記録の一週間で１０万アクセス何てケチな数字じゃすまないわよん。

い～んや、もしかしたら、あの技で特許だって取れるかもしれないわん。

見てみて、ほ～ら、お気に入り数も既に１２０件を超えてるワン」

先生が大騒ぎをしている中、俺には気になる言葉が一つ出来てしまい、それが気になってならない。

その言葉。

”特許”とは一体何のことなのだろうか？

ジャジャン（効果音）

なんて、思ったら聞けばいい。

「先生、その”特許”と言うのは何なのですか？」

「あ～ら、くぐっっちゃんは特許を知らないのねん」

「あっ、はい、聞いた事ないのですけど」

「そうなのん。それは・・・」

やっぱり聞くに限る。

「・・・特許とはね、技を編み出したコンビの”家号”を持つ人しか出来ない”技”のことよん。

つ～まり～、もしくぐっちゃんのビデオ内の”口をくっつける”と言う技が特許を取れるとしたとするわねん、すると、里緒ちゃんのところの家号と、くぐっちゃんが登録した家号を名乗る人しか使用が許されない技となるのよん。つまり、一族専用の技となるので～すん。

因みに、”特許”は特別許可の略で、今現在、特許を取れた”技”は2つだけとなってま～すです、ハイ」

なるほど、特許とは著作権みたいなものということになる。

俺は既存する2つの特許のことが大いに気になったのであるが、その前に聞かなければならないことに気付いてしまった。

「先生、あの～先生は僕が千逗さんの相方と決めつけてるようなのですが・・・」

塩南先生は何故、俺が”エロン棒様”であることを知っているのだろうか？

先生は俺が異世界からのスカウトであることを知っている。だか

ら、俺が”エロン棒様”であることを隠す必要はないのであるが、正直言って、ビデオには映っているものが、俺の”もの”だけに見られていることが恥ずかしい。

「あら～ン、違ったかしらン？
どう見てもくぐっちゃんでしょん。自分の受け持つ生徒のもっこり具合は、服を着てても判るわよ～ん」

お見事である。

それだけではない、ここに来る事までも読まれているのだ。
考えてみれば、この学校に来てからそんなことが何度かある。心も体も全てお見通しということなのだろうか？
きっと塩南先生は俺のケツの穴のしわの数だって知っているに違いない。
コワイかもしれない・・・。

「す、凄いですね・・・（汗）」
この先生に隠し事は何一つ出来ない様だ。取り敢えず、讃えるしかない。

「そんなことより、感想も沢山来ているだろうから、後で必ず、返信しておいてね。この世界のエチケットよん」

そこは俺の世界と変わらない様だ。
因みに感想を見るには、俳優コードとパスワードが必要となるので、例え相方の里緒であっても、俺に来た感想を見ることは出来ない。

「そんなに来るんですか？」

「くぐっちゃんのエロン棒様は特別よん。
さあ、これから大変よ。でも、その前にもう休憩時間も終わりだから、戻りましょうか、だわよん。
あン、そうそう。それと部活の時にあの”大技”の名前教えてねン」

先生は、そう言うとマイペースにフワフワと先に部室を出て行ってしまった。出て行く時に何故か、昨日のＡＶ祭委員会の時の様にお尻を2回程振った。

その行動の意味するところは一体何なのだろうか・・・？

そう思いながら見とれ終わると俺も部室を出ようと扉に向かい、開けた瞬間、

「びっくりした～」

そこに顔を少し赤らめて、もじもじとした里緒が立っていたのだ。

「ご、ごめん。脅かすつもりはなかったの。ごめんなさい」

「いやいや、ちょっと驚いただけだから・・・」

俺は突然のことで何を言っていいか分らなく戸惑うだけであるが、里緒は何か理由があって此処に来たみたいだ。そんな顔をしている。

「多分、ここに来るんじゃないかと思って、直ぐに追い掛けようと思ったんだけど、中々教室を出れなくて、その～」

里緒の顔はらしくなく、しおらしい。

「正直、何がどうなってるんだか解んないけど、凄い人気みたいだね」

こんな時は何でもいいから俺が先に話を振らなければならないだろう。

急遽(きゅうきょ)振り絞って出てきた言葉がこんな言葉であったが、それでも話のきっかけには充分であった。里緒の顔に少し余裕が出来てきた。

「うん、何かそうみたい・・・。
全部、工口君のお陰。昨日は、昨日は本当に有難う」

里緒が恥ずかしそうに改まって頭を下げた。

「えっ？」

ちゃんと聞こえているのだが、昨日の別れ方が良くなかっただけに聞き間違いかと思い、聞き直してしまった。

「もう、昨日は有り難う！」

今度は顔を真っ赤にして、ちょっと口調を荒げて言って来た。

恥ずかしいだろうと言う事に直ぐに気付かずに、聞き直した俺の脳みその瞬発力のなさに腹が立つ。

しかし、里緒も直ぐに自重して口調を戻し続けた。本当に感謝している証拠だ。

「私、何にも出来なくて迷惑ばかりかけちゃって。
それで、助けてもらった、お礼が言いたかったの・・・」

可愛過ぎる・・・。

「そんな、俺も何にもしてないし・・・」

そう応えはしたたがウソになる。少なくても、パンティーを脱がせようとしたり、即席Tバックを作ったり、それにキスもした。

しかし、それはビデオ撮影的な演技ではなく、ほぼ俺の煩悩の三割を披露しただけである。

俺も事実何もしていないに変わりはない。

「ううん、やっぱり凄いと思う。スカウトされた実力なんだと思った」

改めて里緒の口からスカウトと言う言葉が飛び出して俺も改めて気付かされた。

そうなのだ、俺はスカウトをされた人なのである。

ラミアこと”まほまほ”のスカウトは、満更何かの間違いではなく、本当に見る目があったのかもしれない。

そう思うと、あの”まほまほ”のキャラが懐かしく思えるのだが、一体彼女は今何処にいるのやら。

今、自分的にはこの世界に落ち着いてはいるのだが、何れは元の世界に帰らなければならないのだ。

きっと俺がいなくなったことで、偉い騒ぎになっているに違いない。オヤジやオフクロだけでない。多分妹や友人、親戚だって心配しているに違いない。

俺が帰る為には、彼女を早く見つけなければならないのだ。

結局、短い休憩時間では、里緒とは他愛もないそんな会話しか出来なかったのだが、俺の気は凄く楽になった。
少なくても里緒との間は良好な状態を保っていることが分ったのだ。それだけで充分だ。

教室に戻ると、間もなく二時間目の”生活と法律”の授業となった。
今日は朝から騒がしい一日ではあるが、いい一日になりそうである。俺の気分は絶好調である・・・。

――そんなこんなで、午前の四時間の授業もあっという間に終わり、午後の部活の時間となる――

俺は再び柔軟体操部の練習場に向かう。すると、想像通りの大賑わいである。
里緒は後輩達に囲まれ、あれこれ質問攻めに合っていのだが、もちろんエロン棒様のことは秘密にしてくれているようだ。

俺はと言えば、塩南先生には三つの技の名前を聞かれたので、里緒の服を脱がせたのは”脱衣プレー”、口を合せたのは”キス”、パンティーで、即席Tバックを作ったのはそのまま”Tバック”と何のひねりもなしに応えただけで、俺の周りは里緒とは正反対に静かなものである。
だが、俺の正体を知っている塩南先生は偉く感動をしてくれた。

因みに、この世界にはキスと言う行為がなければ、Tバックも存在しないとのことである。

そんな状態の中、部活はあっという間に終わり、もちろん里緒と

話す機会もなく、俺は必然的にモテモテの里緒をおいて先に帰ることになってしまった。

里緒を待って一緒に帰ると言う手もあったのだが、今や里緒は校内の大スターである。一緒に歩くこともはばかられてしまう。気がする。

「まあ、それでもいいさ」俺はそう思う。俺の目的はそこにあったのだから。それに、今日の晩飯は里緒の家である”G3食堂”にすれば、里緒に会えるかもしれないのだ。

いや、会えるだろう。今の関係はすこぶる良好なのだから。

そして、そんなことを思いながら、帰宅する途中である・・・。

バスを降りて間もなくである。俺が考え事をしていて気付かなかっただけなのかもしれないが、俺の数メートル先に突如人影が現れたのである。

シルエットからは女性であることは間違いない、それもよっぽどのことが無い限り少女である。実は四十歳過ぎだったなんて事があれば、凄い化けっぷりである。

シルエットだけでの事ではあるが・・・。

逆光で彼女の顔ははっきりと見えないのだが、どうもズルズルと鼻をすすっている様だ。体も小刻みに震わせている。

と、言うことは泣いているのか?

俺は、知らない内にこの子を泣かす様な事を何かしたのだろうか?

いや、そんな事は無い。この世界に来て悪戯をする様な余裕は全くっかたはずだ。
んっ？待て。それ以前に、何処の世界に居ようが、俺にそんな勇気がある訳がない。
だとすると、厄介なことに何かの間違いと言うことになるのだが・・・。
泣いている理由を確認せねば・・・。
そう思い俺が立ち止ると、その影は泣きじゃくった声を上げて、至近距離であるのにも関わらず猛スピードで俺に迫って来た。そして、体当たり。
「痛(あ)たた・・・」
だが、俺の言葉を無視して。
「くぐぢ～！！」
と叫びながら俺にしがみ付く。
その行動に驚きながらも、その声と抱きつかれた感触から、ある記憶が蘇って来る。
覚えがある。
絶対に覚えがあるぞ！
この感じ。まさか・・・。
「捕まえた・・・、捕まえたれす・・・」

俺の胸に顔を押し付けて来る。

俺の中では９９％確信していたのだが、慎重派の俺はこんな時でも確認を怠らない。

驚くのはそれからでも遅くは無い。

俺は少女の両肩に手を当て、無理やり少しだけ隙間をつくり、少女の顎に手を当て上を向かせた。

やっぱり、間違いない・・・。

今度は俺が叫ぶ番だ！

「あっ～、ま、まほまほ！」

すると次は、

「いけませ～ん！！」

彼女の叫ぶ順番である。

まほまほは再び俺にしっかりと抱きつくと、俺と共に大空へと飛び立ったのだった。

高所に怯える俺の耳には世間の声が聞こえてくる。

「見て、と、飛んだ！」

「おい、うそだろう！」

「少年が、少女にさらわれたぞー」

「違う、羽よ。白い羽。ラミア様じゃないのかしら」
「そうだ！ラミア様だラミア様が、少年をスカウトしたぞ！！」
やばい、今度は幽体離脱みたいなものではない。本当に飛んでいる。
「お、降りろ、降ろしてく、くれ～！」
俺の叫びは”まほまほ”では無かった、ラミアには全く届く気配が感じられない・・・。
＜つづく＞

捕まえたれす（後書き）

ちょっと、長くなり過ぎました。

家号は血よりも濃い（前書き）

ラミア（まほまほ）何者？
ＡＶ界での家号とは？

家号は血よりも濃い

このＡＶ界の住民登録には”氏名”の他に”家号（かごう）”と言う名称の登録が必須となっている。

では、この家号（かごう）が何者であるかと言えば、簡単に言うと”姓”以外に受け継がれる呼び名で、一族の総称のようなものと言うことになる。

因みに、ＡＶ撮影並びにその配信を一手に取り仕切っているＡＶ界直営（界営）の団体”ＪＲＡＶ会”への登録には、”俳優名（ユーザー名）”と、作品毎に変更可能な”演者名”の登録が必要となっている。

ただ、この二つが同じ世界での個人を特定する為の登録だからと言っても連動性がある訳でなく、全くの別システムになっている。その為、この二つ登録において全く関連性の無い名称で登録すれば、俳優名から個人名を特定することは出来ないそうである。

だが、名誉と実権とが直接ＪＲＡＶ会での業績と結びつくＡＶ界において、ＪＲＡＶ会での実績が高位であればある程、その実名と俳優名を結びつけることが必然的に必要になってしまう。誰の業績なのかを知らせる為には当然のことであると思う。

また、地位や業績が優れていれば、それを世間に知って欲しいと思うのも人間としては当然のことであろう。それは、自分自身の事ではなくても、親類や知人等の自分に近い存在であればある程然りではないだろうか。

そうなるとその延長線上で、自分の属する一族全体の優秀さを広

く世間に知らせ群れて力を持ちたくなるのも人間として否定するものではない。
そこで利用されたのがこの”家号”と言う呼び名であるのではないかと推測する。

元々、これはＡＶ撮影業（ＪＲＡＶ会）に対して使用されたものではなく、同じ家業を営んでいることを示すと言う、広く職業全般に使われていたものであったらしいのだが、今ではＪＲＡＶ会での俳優名に対して同じ一族と言うことを示すのに使用される様に変化したと言うのである。

それ故に、逆に言えば本人が望めば変更（一族を抜けること）も可能な名称なのである。よって、一門と言う言い方の方が適しているのかもしれない。

この家号と言うのは、同じ一門の総称なだけあって、同じ家号を名乗るには血縁関係（直近で名乗る者と二親等以内）が必要となる。だが、決して血縁関係にあるからと言って同じ家号を名乗れる訳ではないのだそうだ。その家号の長である”家長”の承認を得た者だけが名乗れるのである。血よりも濃い関係と言えるかもしれない。

ただ、家長の継承者を設けていない一族も多い。その場合はその限りでは無く、自由に名乗ることが出来るのだそうだ。

スカウトされてこの世界に来てしまった俺には、血縁関係に当たる人は誰一人としていないからであろう、新たな適当な家号を登録することを役場から求められたのである。
そこで、俺が選んだ家号は”得路（エロ）”である。
初め、家号（かごう）をお袋側祖父の姓”萬（よろず）にしようとしたのだが、この名

は既に登録済みであったのだ。同じ家号名を名乗ることは、登録上問題ないのではあるが、家号の右に何番目の登録であるかの数字が着くとのことなのだ。この場合”萬2”（よろずにと読む）となる。

そんな、オリジナリティーの無いものが性分には合わない俺はその名を諦め、この世界に存在しない言葉でウケそうな名を考えたところ、思いついたのが”エロ”であったのだ。

何せこの”エロ”と言う単語、不思議なことにこのエロいＡＶ界において、それに類したものも含め現存しない言葉であり、俺が我がへ高の柔軟体操部で初めてこの言葉を使用した時には、大きな反響を巻き起こすことになり、俺の認知度が急上昇させた非常に縁起の良い言葉なのだ。

そんなことで俺は迷わず家号を”エロ”に決め、適当な漢字を当てはめ”得路”と決めたのである。

先日、里緒と撮影に挑んだＡＶ作品に作品毎自由に付けることが出来る演者名に、当初”萬（よろづ）”という姓を付けようとしたのは、この時の記憶があったからなのかもしれない。

このＡＶ界での俳優名（ビデオを観る側ではこれをユーザー名として使うのだが）、少し前までは”家号”＋”名前”を俳優名（ユーザー名）とするのが当然であったのだと言う。もちろん、住民登録とＪＲＡＶ会の登録は連動性を持たないので、そんな義務はないのであるのだが、先に述べた様な理由であろうと思うのだが今でも根強く残っている。

それは置いとくとして、仮にこの法則に従うと俺の俳優名は”得路工口（エロくぐち）”少し安易に余読むと”エロエロ”になってしまい、これは

ちょっとはばかられる。
それに、”お願いします”と言う撮影の相方探しの時には俳優名の書かれた名札を首からぶら下げるので、俺の正体を隠す為には全ての名前に関連性を持たせない方が無難である。

その判断から、俺の俳優名には”エロ”と言うを文字を使うことは避けることにし、全く関係のない”福山回春（ふくやままわはる）”と言う俳優名を登録をしたのである。

因みに、この名前は俺のお袋である”千乃顔出（ちのかおで）”が、愛してやまない芸能人の名前を元にしている・・・親子孝行な俺なのである。

★☆　第３話　★☆
☆★　♂家号は☆★
★☆血よりも濃い♀★☆

「おろせー、急に下ろすなよ静にだぞ、静に下ろせ～」

何て、いくら叫んでも真っ直ぐに舞い上がった”まほまほ”では無かった、ラミアは俺を抱いたたまま颯爽（さっそう）と空（くう）を切ってさらに上昇していく。

しかし、今度はこの世界に連れて来られたあの時とはちょっと違っている。体感速度と実際の飛び上がる距離が上手くマッチしているのだ。

この世界に連れて来られた時は、体感的には緩やかな上昇に感じたのだが、実際に目の前で移り行く景色は飛行機のそれを遥かに超えていた。

だが、今回は風圧で息苦しさも感じ、現実感がある。それに、今

度は幽体離脱ではない。俺の体が元の位置に置き去りにされてはいないのだ。
もちろん一度離れているのだから、二度離れることは無いだろうとも考えられる。

あれ、ちょっと待てよ？

そこで俺の頭を根本的な疑念が賑わしたのである。

実体を抜けた？という事はもしかすると・・・

この”ＡＶ界”とは死後の世界なのだろうか？
俺の性行為への無念さがこの世界に転生させたと言うのだろうか？

まさか、このラミアは天使か死神の類なのか？

よく見ると、白い羽が背中にあるではないか・・・。

でも、確か？あの時は羽など無かった気もするのだが・・・。

とは言っても、俺もあの時は心神共に正常な状態では無かったのだから、そんな余裕が無かっただけなのかもしれない。
と言う事は・・・、まさか俺は本当に”変体スケベ病”か何かの類で前世から死神ラミアに連れられてしまったのだろうか・・・。

もう、あの病的に下ネタ好きお袋や、お袋とアンバランスに真面目一方の親父、それに、おませに俺の先を進む妹に、数少ない友人達とは再び会うことはもう二度とないのだろうか。

それに何と言っても元の世界での俺の目の保養（毎日帰宅時のバ

ス中で一方的にお会いしていた視覚だけでそそられてしまう超ミニスカのお姉様）をこの目にすることも、もう出来ないのだろか？

そう思うと、懐かしさと寂しさで少し熱いものが体の中を流れるのを感じる・・・。のだが、

いや、ちょっと待て。冷静に思い出せ。

そう考えるのは早計ではないのか？

あの時、確かにラミアは俺をスカウトに来たと言ったのだ。それに、この世界では”スカウター、ラミア様”として名が通っている。スカウトと言う言葉で俺の世界とこのＡＶ界が繋がっている。それに役場では、異世界から来た住人としての移転届も出したではないか。

やはり、俺はこの異世界にスカウトされたと言うことで間違いないのではないか？

それとも、長くリアルっぽい夢でも見続けているとか・・・そんな訳がない。

これだけは絶対に確かめなければならない。

確かめたいのだが、それよりも今はこの高所から少しでも高度を下げてもらう事が大切だ。恐怖で色々と縮み上がってしまっている。

出来れば地面に足を付け、心神共に余裕を持たせたい・・・。

と、つい今しがたまでは、そう切に願っていたのであったが、いつの間にかこんなに冷静に考えることが出来ている・・・。

確かに最初は相当な恐怖であったのだが、いつのまにか空中を飛んでいると言う感覚が無くなり、そうこう思っている内に、小さな

丘の林の中に二本の足で地面を踏みしめていた。
途中から空を飛んでいると言うより、ふんわ～りと、無重力空間を移動したと言う表現をしたい感覚であった気もする。

一体、俺に何が起こったのだろうか？
それよりも、此処は何処だ？

そう思っていると、俺の頭に記憶が蘇ってくる。ここの雰囲気には見覚えがあるのだ。

そうだ、恐らくここは一昨日”お願いします”を行った千々木公園（ちぢぎこうえん）内の人工の丘に間違いないであろう。

辺りは雑木林に、芝生と家も無ければ人影も無いが、見覚えのある休憩場所がある。あれは間違いなく”お願いします”と言う相方決め大会で使用した”拠点”の一つである。

それには俺もちょっと安心だ。
せっかく慣れて来たＡＶ界だ。幾ら適応能力に優れた俺でも、さらに違う世界に連れられては堪ったものじゃない。それにＡＶ界は、若干美味しい。

そうと分れば、俺も強気だ。
目の前には、「ぜいぜい」言っている”まほまほ”で無かったラミアが居る。

積もり積もった言いたいことは、この人工の丘よりも遥かに高く積もっている。が、まずはいきなり高所を飛ばれたことへの文句からだ。幸い、ここならば少々大きな声で怒鳴っても問題はない。
よし！

「おい、何でいきなり飛ぶんだ、危ないだろ！」
ここぞとばかりに荒げた俺の声。いいぞ、俺。今日はこいつの中途半端な色香に惑わされてはいない。
しかし、それに

「危なくないレスよ」
ラミアは、ハアハアと息を上げながら口を尖らせて平然と言い放つ。
俺は負けてなるものかと、

「危ない！」
と言い放つ。

「危なくないレスよ」
平然とラミアが言う。
こいつ、なかなか撃たれ強い。

「・・・」
「・・・」

「危ない！」
「危なくないレス」

繰り返す問答は、俺の口調に合わせてこいつの口調も次第に荒くなる。
可愛い顔して以外に頑固である。

疲れてくる・・・。

「危な・・・」
まあ、そんなこともういいか・・・。百歩譲れば、あれだけ言うまいと決めていた”まほまほ”と言う言葉を言ってしまった俺も迂闊であったことには間違いない。
そんなことよりも、”まほまほ”と言う言葉には一体何の意味があるのだろうか？
その意味が気になってしょうがない。
まさか、隣で満足そうな顔をしているこいつに聞く訳にもいくまい。今度は何をされるか分かったものではない。
それよりも、彼女には聞かなければならない事は沢山あるのだ。
そうそう、まずは俺が生きているかどうか確認しなければ。
「ところで、お前・・・」
と言ったところで、またこいつの口が尖がり出す。
「お前じゃなくて、”ミラミ”れす」
ミラミって、こいつ”まほまほ”おっと、”ラミア”ではなかったのか？
「お前、いや、ミラミはラミアじゃないのか？」
「ラミアれすよ」
訳が分らん？
「いや、そうじゃなくて・・・」
「・・・・・」

何、言ってんだと思ったが、説明を聞いてみると俺がすっかり忘れていただけで、こう言うことらしい。

彼女の名前は”ララカー・ミラミ・アポストロ”それぞれの最初の文字を全て取り、”ラ・ミ・ア”と呼ぶのが”愛称”なのだそうだ。

実際、愛されて呼ばれているかどうかは分からないが、そうらしい。どういう呼び方かと思うのだが、こいつに突っ込むのは面倒なので止めることにする。

こいつ的には仕事中以外はラミアと言う名前は使わないとのことなのである。つまり、彼女の意識の中ではスカウトは仕事なのである。

そして、名前の最後の”アポストロ”と言うのは４人（人と言うのが正確な表現かは不明だが）居るスカウターに付けられる称号みたいなものらしいのだ。

「ぽっよ～んな（そんな）ことより、ろうして（どうして）待ち合わせ場所に来なかったのれすか！ず～～～っと待ってたれす！よ」

と怒りながら、彼女の目に大きな滴の元が溜まっていく。良く見ると顔もヤツレ気味で、俺をスカウトした時のままの黒色の制服は結構汚ならしい。

本当に、ずっと俺を待ち続けていたと言わんばかりの様相である。

その憐れさに流石に怯みそうになるが、ここは俺にも言い分がある。零れ落ちる手前の涙なんかに負ける訳にはいかない。俺だって、勝手の分らないこの世界でそれなりに大変だったのだ。

「そ、そんな話、聞いてないぞ」

と、控えめな対抗になってしまったのは、俺が気絶した時に説明していた可能性が高いことに気付いてしまったのだ。

そうなると、聞き直さなかった俺にも非があるといえばある。しかし、俺の首を絞めた”こいつ”が、ではなくミラミが悪いのだから訂正をするつもりまではない。

「言ったれす！待ち合わせ場所に来るなら真ん中のＡＶの扉、元の世界に戻るのならＲＴの扉、ＮＶの扉には行くと物凄〜く苦労するから行っちゃいけませんろ〜って、言ったれす。

そうれす。

ＡＶの扉を開けたら、すごいスピードで引き込まれるれすから、この団扇（うちわ）を進行方向に向かって扇いでスピードを緩めてくらはい。でないと曲がり角を行き過ぎて怪我しますれす。とも言ったれす」

団扇を腰からぶら下げたベージュの巾着袋の中から取り出して、納得した様にウンウンと頷いている。　その自信満々な言い方は気に入らないのだが、それよりも、ちょっと待て。

この話、言い分だけと聞き流せない要点が幾つかある。まず、

「俺は団扇をもらってないぞ」

信じがたいが俺はその団扇を貰っていなかった為、物凄いスピードでこの世界に落下（体感的に）し、危険な目にあったと言うことになる。

「あげたレスよ」

そう言いながらラミアは熱くなった顔を団扇で仰いでいるのだ。

「待て、何故お前が団扇を持っている」

「お前でなくてミラミです」

「ああ、分かった。ミラミが何故、団扇を持っている」

「んっ？」

と言い、ミラミは自分が手にしている団扇を大きな目で見ている。

「へんれすね～、渡し忘れたのれすかね～」

いや、そんな悠長なことを言っているが、もはやそんな胡散臭いことは、どうでもよい、取り敢えず怪我なくこの世界にこれた訳だからそれは許すとしよう。次だ。

問題はＲＴの扉を開ければ戻れたと言う事実である。

「いや、その前にＲＴの扉を進めば俺は元の世界に戻れたってことか」

「それは、絶対言ったれす！よ、きっと。団扇は渡さなかったかもしれないれすけど・・・」

と、言う事は俺は生きていると言うことであり、飛ぶのは怖いが、また、あの洞窟に連れて行ってもらいＲＴの扉を開ければ、俺は元の世界に戻れるのである。いや、それより直接戻してもらった方が手っ取り早い。

「分かった、団扇を渡さなかったことは許す。だから、俺を今すぐ元の世界に戻せ。ミラミは自由に行き来出来るんだろ」
どうだ、今度は名前を間違えなかったぞ。さあ、答えろ！

「んっ？」

「んっ？じゃなくて、連れてけ」
さあ、連れてけ！

「無理れす。移動出来(いろう れき)るのは自分一人だけれす」

なんだと、と思うが手はもう一つある。

「だったら、俺を今すぐあの洞窟へ連れて行ってくれ」

「無理れす」

「なんで！？」

「洞窟(ろうくつ)はいつもあるわけじゃないれすよ」

「なんで！」
「なんでもレス」

「じゃあ、いつ洞窟は現れるんだ！」

「不明なのれす。
ミラミも実物の洞窟(ろうくつ)を見たのは初めてれすし、何処(ろこ)に現れるかも分からないれすよ」

自信満々にそう言う。

結局、終始こんなやりとりで分かったことは、こいつも洞窟の場所は急に閃(ひらめ)いて分っただけで、ラミア様と呼ばれている割にはあまりこの世界のことを知らないと言うことである。それと、俺はこいつが閃きでもしない限り戻れないと言う事実であった。

ただし、全く元の世界に戻れる可能性が無い訳ではないと言うのである。

このＡＶ界の９割以上の人が信仰している”自然教”の”自然神”と言う神様に認められるＡＶ俳優になれば、望む異世界に行けると言うのだ。まだ、一人もそんな人間はいないらしいが、”教えの本”にそう記述されているというのである。

だが、このスカウターのミラミでさえも、自然神と言う神か人物か分からない存在には、一度だけ会ったことがある”気がする”と言うだけなのである。

「神様はそんなものですよ」

なんて他人事に言うのだ。

仮に自然神が実在したとし、且つ”教えの本”に書かれていることが事実だったとして俺がそんな無茶苦茶エロい人材である訳がない。結局、待望の”まほまほ”では無かった、”ミラミ”に会うことは出来たのだが、会えず終いと結果は一緒だったことになる。

それに俺は失望をするが、それは理屈的に考えてのことだ。何故か俺の心は結構明るい。大儀的には元の世界に帰らなければならないのだが、開き直るとこの世界の方が元の世界よりも”生きている”と言う実感がある様な気もするのだ。

だから、こいつでなかった”ミラミ”も許せてしまうのかもしれない。いや、こいつの憎めない可愛いキャラと、口調に似合わない色香に惑っているだけかもしれないのだが、どっちにしろ戻れないのならば色香に惑いっ放でもいいような気もする。

そして、暫く続けた取り留めの無い問答も止め、千々木公園（ちぢぎこうえん）からアパートへ帰る途中であった。もちろん飛んで帰るのは怖いので歩いて帰る途中である。

今度は今まで俺に起こったことを順序立てて話してやった。すると、ミラミは少し申し訳なさそうな顔になって俯いていた。

こいつも満更ノー天気な訳でもないと見える。何かスカウトをしなければならない理由がありそうなのだ。そこで、今度は雑談としてミラミのことについて聞いてみた。ちょっと気を使ってみたのだ。

「お前は、ずっと俺を待っていてくれた様だけど、次のスカウトをしなくても大丈夫だったのか」

すると、

「お前でなくてミラミれす。いいのれすよ。工口（くぐち）が凄（すんろ）～く偉い俳優さんになって、あの塔に昇り詰められればミラミの役目は完了なのれす」

白く雲よりも高くそびえる”ミンジュ塔”を見上げながら胸を張ってそう言う”ラミア”改め”ミラミ”の顔は、夕陽よりも眩しく希望の光に輝いて見えた。

それを見ていると、気を使ってやったのに細かく名前に拘（こだわ）ってい

ることに対し、文句を言う気が失せてしまった。
ミラミが、その日をどんなに心待ちにしているかが俺にも伝わって来たからだ。

こいつの人生は俺に掛かっているようなのだ・・・。

「それって、俺が自然神様に認められるＡＶ俳優になればって言うことなのか？」

「そうれす」

「お前、役目が完了したら、どうなるんだ」

「お前でなくてミラミれす。分からないれす。分からないれすけど、良いことが待っているのれすよ、きっと・・・ミラミがずっと待っていたことが起こるのれす」

「何を待っているんだ」
「分からないれす」

「そうか・・・」

分からないれすってかぁ～、そうなのか・・・。
もう、深く聞くのは止めた。物事に意味を求めるのは人間の概念であって、この世界のスカウターの概念ではないのかもしれない。
そんな気がして来たからだ。

であれば、俺は無理と決め付けずに目指すしかないではないか。
俺は、希望に満ちたこいつの輝いた顔を見ている内に、もっと輝かせたい、何故かそんな気がしてきたのだ。それに、俺の両親を安

心させる為にも・・・。

そう思い、ミラミの顔を横目で覗くと、不思議そうな顔をしている。

「どうしたんだ」

そう聞くと、

「だけど、おっかしいれすね～、工口（くぐち）の家号は”萬（よろず）”のはずれすけどね～。何で新規登録しか出来なかったのれすかね～」

そんなことを呟き、首を捻っている。

少し前に話した、一持握（いちもつにぎる）と言う恩人に出会い、“第27部　そ地区羊　役場”で移転届けを行った話をしたことが気になっていたようなのだ。

流石、スカウター俺の祖父さんの名字も知っているのは関心するのだが、なぜ、母方の姓なのだろうか？スカウトされた人は、母方の姓を家号にするのが通常なのだろうか？

まあ、そんなことは小さなことなので、どうでも良いが・・・。

しかし、何でこいつといると、何も緊張をしないのだろうか。こんなに可愛い顔で、里緒以上にスタイルもいいのにだ。腹の調子はすこぶる良い。快腸（かいちょう）だ。

何故だろうか？　やっぱ、

「キャラかな・・・」

つい、呟いてしまった。

「何れすか？」
ミラミが小首を傾げる。
「何れもないレス」
おっと、口調が写ってしまった。
それよりも、こいつはいつまで俺の後を付いて来るのだろうか？
そろそろ聞いて見るとするか・・・。
＜つづく＞

家号は血よりも濃い（後書き）

４０００文字以内で納めるつもりが倍以上になってしまいました。
飽きずに読んで頂けたでしょうか・・・。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6771p/

萬のエロはしその香り

2011年10月12日11時18分発行